黎明館企画特別展

海上の道

―鹿児島の文化の源流をさぐる―

鹿児島県歴史資料センター黎明館

黎明館企画特別展

海上の道

―鹿児島の文化の源流をさぐる―

鹿児島県歴史資料センター黎明館

ミャンマー

タ イ

ラオス

カンボジア

マ レ ー シ ア

ベトナム

インドネシア

海南島

南 中 国 海

フィリピン

インド

ネパール

バングラデシュ

ブータン

ロシア

モンゴル

中華人民共和国

台湾

東中国海

朝鮮民主主義人民共和国

大韓民国

鹿児島

沖縄

奄美

日本

ごあいさつ

日本民俗学の父といわれる柳田國男は，大正９年末大隅半島の先端の佐多岬に立ち，日本人の先祖が黒潮の流れに乗り，南から続く島々を伝って北上したことを構想しました。柳田は晩年その道筋を「海上の道」と名付け，宝貝を求め，稲種子を携え，稲作の適地を求めて渡ってきたという日本民族の起源論を展開しました。佐多岬に限らず，鹿児島は南方から日本列島への人及び文化の流れを実感できる場所だったのです。

この企画特別展は，鹿児島と東南アジアの山岳地帯や黒潮流域の島々に生きる少数民族との基本的な生活道具の比較展示をとおして，鹿児島の民俗文化の基層を「南とつながる文化」として位置付けてみようとする試みです。柳田國男が「や、奇矯に失した私の民族起源論」と卑下しながらも，「比較の学問の夜明け」と自負した「海上の道」を，鹿児島からの新たなまなざしでご案内いたします。

この度の特別展のために，貴重な資料の出品を快くご承諾くださいました関係各位，並びにご指導・ご協力をいただきました方々に心よりお礼を申し上げます。

平成10月２月６日

鹿児島県歴史資料センター黎明館

館　長　今　吉　　弘

凡　例

1　本書は，平成10年２月６日㈮から３月８日㈰まで開催する黎明館企画特別展「海上の道――鹿児島の文化の源流をさぐる――」の展示解説書として作成した。
2　本書の掲載順序と展示の構成とは，会場の都合などにより一致しないこともある。また，掲載写真は展示品のすべてではない。縮尺も同一ではなく，法量は巻末の出品目録で示した。なお，資料写真の番号は，巻末の出品目録の資料の番号を示す。写真の撮影は，記載のない限り，調査史料課学芸専門員川野和昭が行った。
3　出品予定の資料でも，都合により一部変更されることもある。
4　資料名については，原則として，各博物館等の標本名に基づいて処理した。
5　資料の所蔵者については，掲載写真の下及び巻末の出品目録に示した。特に記載のないものは鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵である。
6　本書の執筆・編集は，調査史料課学芸専門員川野和昭が担当し，編集作業には，資料調査編集員の池田悦子も加わった。

表紙解説

ーミャンマー・シャン州ワンサー村・シャン族ー

麦の脱穀作業風景である。簀の子状の斜に傾いたムギウチ台に叩き付けて落とした麦の穂を，バラに入れて頭上にかかげ，揺り落としながら風の力を利用して精選する。この方法は，鹿児島や奄美の稲籾や麦などの精選にもみられるもので，主に女性の仕事である。女性たちは，ウソ（口笛）を吹いたり，「ホー，ホー」という声をあげたりして，風を呼び起こしながら作業をするものであった。表紙の写真からその声が聞こえてきそうである。

（撮影　民族写真家　山崎久勇氏）

目　　次

■ ごあいさつ
■ 凡　例
■ 目　次
■ カラー図版
　東南アジアの山岳少数民族の暮らし
■ 本　文

1　耕す・採る
　(1) 鍬 …… 16
　(2) 掘り棒 …… 19
　(3) 穂摘み具 …… 20
　(4) 穂刈り具 …… 23
　(5) 巻棒 …… 24
　(6) タタキダイ …… 25
　(7) タタキ棒 …… 26
　(8) バラ …… 27
　(9) トオシ …… 27
　(10) ウチワ …… 27
　(11) 草かき …… 28

2　伐る・捕る
　(1) 斧 …… 29
　(2) 山刀 …… 30
　(3) 鋸 …… 31
　(4) デッキュ …… 32
　(5) ワナ …… 32

3　漁る
　(1) ウケ …… 33
　(2) 釣り …… 35
　(3) 突き刺し具 …… 36
　(4) 網針 …… 37
　(5) ビク …… 37

4　運　ぶ
　(1) 背負い籠 …… 40
　(2) カリコ …… 43
　(3) 天秤棒 …… 44
　(4) カタゲマタ …… 45
　(5) 水筒 …… 45
　(6) オモゲ …… 47

5　住　む
　(1) 一本ハシゴ …… 48
　(2) 枕 …… 49
　(3) 椅子 …… 49
　(4) ゴザ …… 50
　(5) 明かり台 …… 50

6　食べる
　(1) 蒸し器 …… 51
　(2) 焼酎造り …… 53
　(3) 臼 …… 56
　(4) 小臼 …… 58
　(5) 笊 …… 60
　(6) 飯切り台 …… 61
　(7) めしげ …… 61
　(8) キッタテ …… 62
　(9) 二重口縁壺 …… 62

7　着　る
　(1) 紡織 …… 63
　(2) 絣見本帳 …… 65
　(3) 絣 …… 66
　(4) 花織 …… 70
　(5) 民族衣裳 …… 73
　(6) 衣服籠 …… 74

8　祈　る
　(1) 神衣 …… 75
　(2) 背守り …… 77
　(3) 耳輪 …… 79
　(4) 首輪 …… 80
　(5) 魔除け具 …… 80

9　奏でる
　(1) 太鼓 …… 81
　(2) 笛 …… 82
　(3) 三味線 …… 83

■ ラオスの少数民族の暮らしと文化
　－南九州との比較から－　川野和昭 … 84
■ 出品目録 …… 101
■ 参考文献 …… 114
■ 協力機関・関係者一覧 …… 115

東南アジアの山岳少数民族の暮らし

ここでは，ラオスやタイ，ミャンマーなどの北部山岳地帯に住む少数民族の暮らしを紹介する。これらの中には，鹿児島から奄美や沖縄などの南西諸島にかけての暮らしと共通するものがみられる。

竹の焼畑

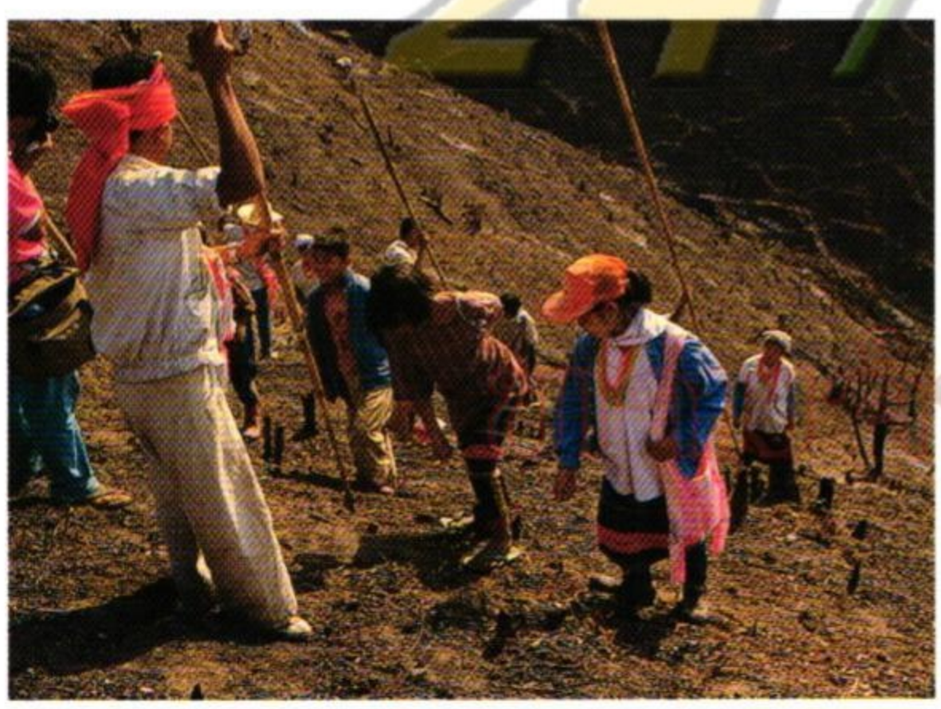
－ラオス・ビエンチャン県ホワイコン村－

竹の山を薙ぎ払った火入れ直前の焼畑である。ラオスでは，竹の山を焼畑の適地とする伝承がある。こうした竹の焼畑は，トカラ列島から大隅半島を経て，五木村や椎葉村などの九州山地でも行われている。

山の斜面を焼く焼畑

－ラオス・シェイクワン県ポンサワン市内－

火入れは，まず上側の横の線の中央から左右につけ，次に両側の縦の線の中程までつけて行う。上側が燃え終わると，縦の線をたどって下の横の線までつけ回して下側を焼き尽くす。



陸稲の種まき

－タイ・メーサリアン県ラオップ村・ラワ族－

男が掘り棒で地面に穴を空け，女性たちがその穴に種籾をまいている。この日に，鶏や豚を殺し，その血を種籾に混ぜたり，村の入口と出口に鳥居を立てて，外からの侵入を禁じる祭をする。

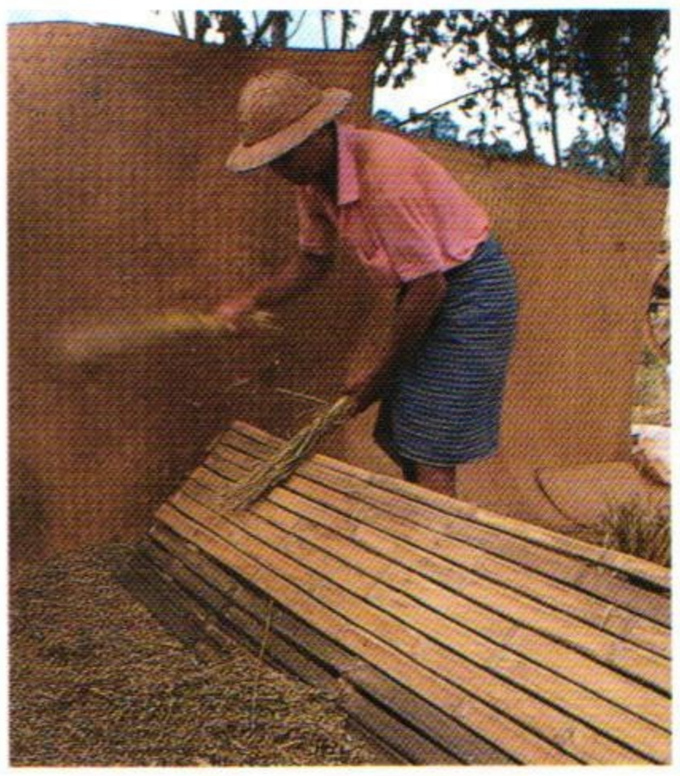
（写真撮影　山崎久勇氏）

穂摘み

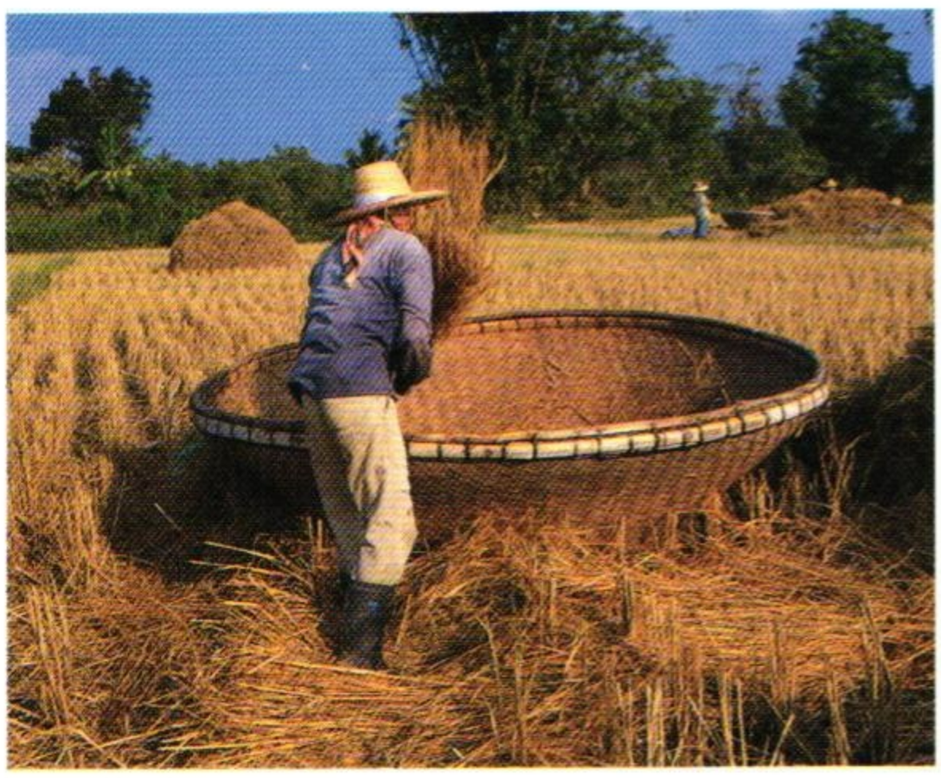
－タイ・チェンライ県クンボン村・ヤオ族－

手にジップという穂摘み具を持ち，穂先だけを摘み取っていく。現在では鎌に変化している。

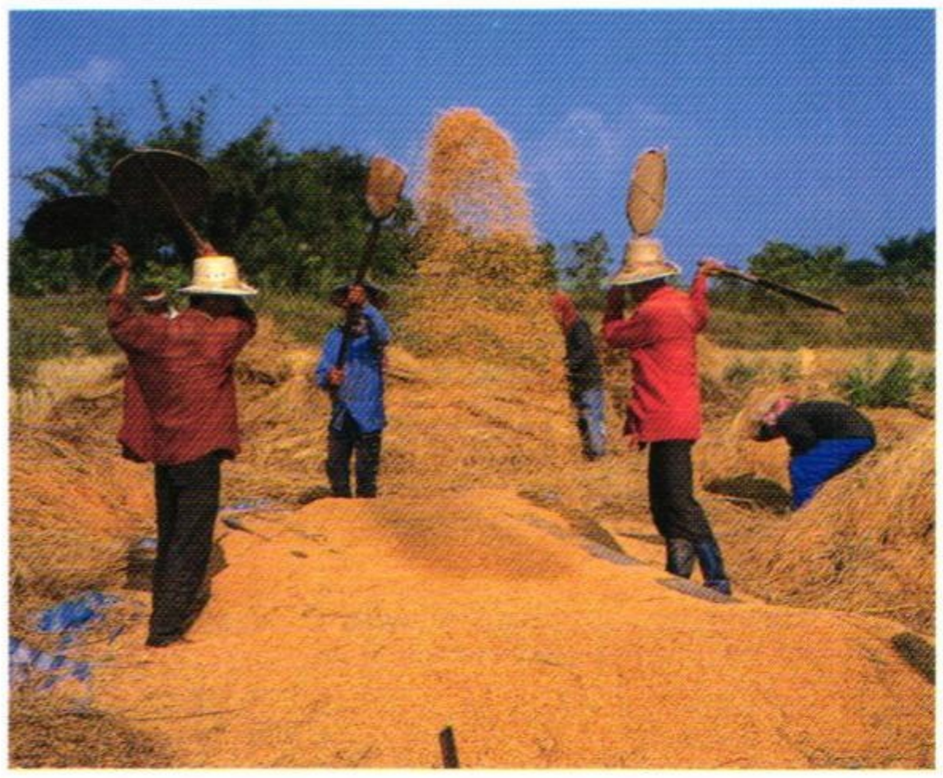
タタキ台による稲の脱穀
ーラオス・ポンサリー県ボンタイ村・タイルー族ー
　稲積みしていた稲を取り出し，マイディンカオ（稲束挟み）に挟み，ケッ（タタキ台）に叩きつけて脱穀する。女性たちは，コンティア（叩き棒）で，さらに入念に穂先を叩き落としている。これは，鹿児島の巻棒とタタキ台による麦の脱穀と全く同じ風景である。



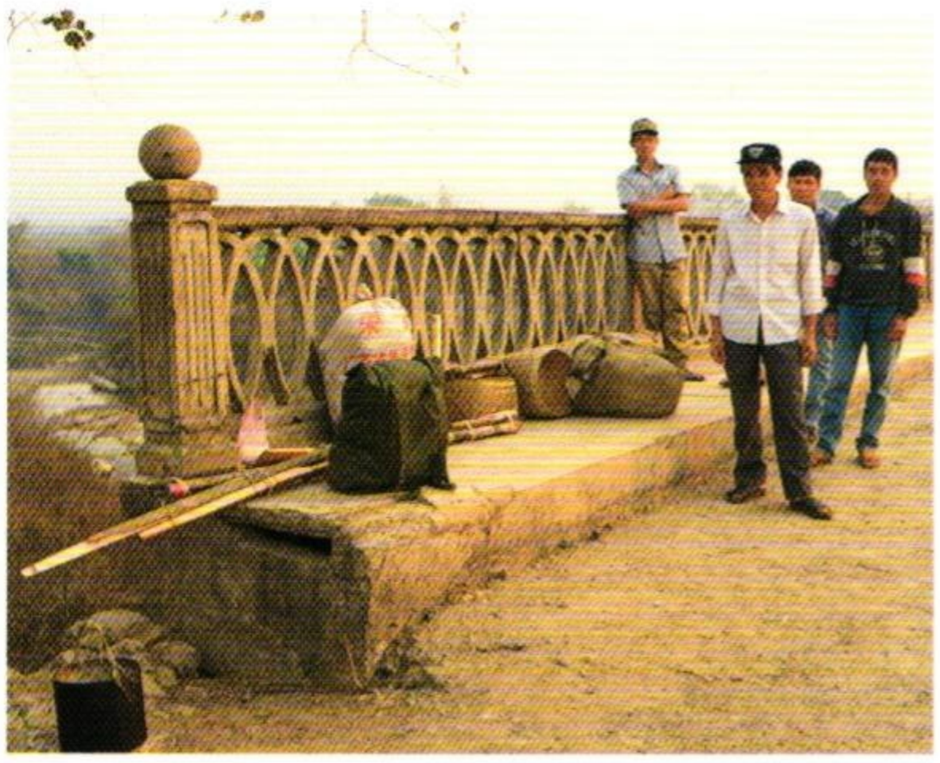
タタキ台（簀の子）による脱穀
ーミャンマー・シャン州ワンサー村・シャン族ー
　割り竹を簀の子状に打ち付けたタタキ台である。周囲に竹マットを立て回し，麦の穂をタタキ台に叩き付けて脱穀している。昭和30年代までの鹿児島の麦の脱穀風景そのものである。
（写真撮影　山崎久勇氏）



大型籠による脱穀
ータイ・ノーアイ県カイ村・コンムアン族ー
　大型の網代編みの竹籠の内側に稲穂を叩き付ける脱穀作業である。稲束挟みを用いている。
（写真撮影　山崎久勇氏）



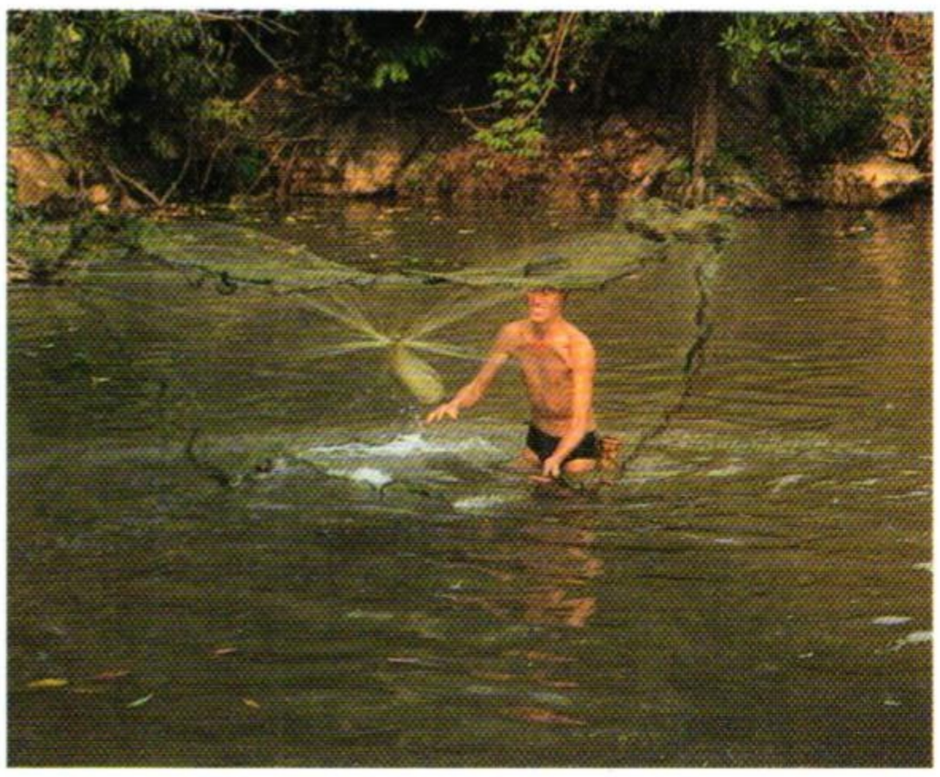
ビーン（団扇）による風選
ータイ・メーアイ県カイ村・コンムアン族ー
　スコップ状の道具を使って，脱穀した籾を高くほうり上げ，網代編みの団扇で風を送って藁くずを飛ばして籾だけを精選する作業である。
（写真撮影　山崎久勇氏）



山の出稼ぎから家に帰るコビキたち
ーラオス・シェイクアン県ナンパー村ー
　山の中で木材を柱や板にする作業をしていた男たちが，仕事を終えて山からおりてきて，道端で帰りのバスを待っている様子である。

筌（うけ）を仕掛ける男
ーラオス・ルアンナムタ県ナムマツ村・カム族ー
　リヤップという石積みのV字型の堰（せき）を作り，その先端部に無舌のサイ（筌）を仕掛ける。サイの後の川底を深く掘り下げ，落差が大きくなるように仕掛けている。夕刻仕掛けて翌早朝に上げる。川内川中流域のアバ漁と共通する漁法である。パーパンというナマズに似た魚を捕るという。

四つ手網で魚を捕る女性たち
ーラオス・ビエンチャン市・メコン川ー
　網を沈めては引き上げて魚を捕っている。かつて鹿児島の水田の溜池を干すイケホシのときに見られた風景である。



投網を打つ男性
ーラオス・シェイクアン県ナソッ村・タイプーン族ー
　投網は，筌（うけ）漁と並んで川漁の代表的な漁法である。腰には，コーンと呼ばれるビクが結いつけられている。鹿児島のカタギイテゴと同じ作りの籠である。

水を汲む少年たち

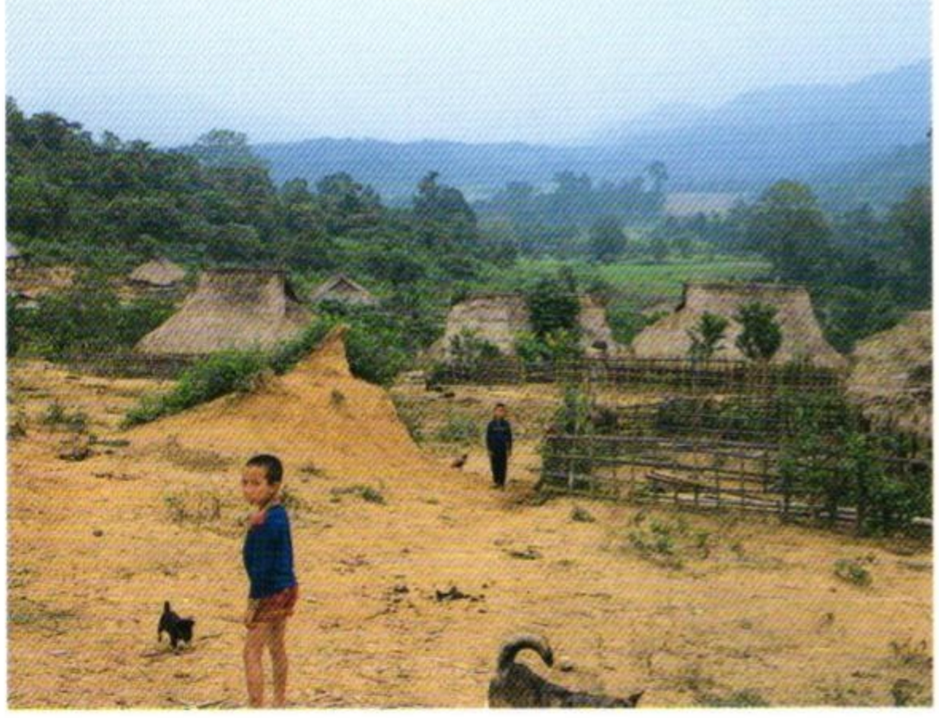
ーラオス・ポンサリー県モッチャラー村・カム族ー

村の下の水汲み場から水を汲み上げる少年たちである。竹筒やポリタンクをヘッドバンドを用いて額に掛けて背負っている。

馬喰(ばくろう)たちの一行

ーラオス・ウドムサイ県ナートン村付近ー

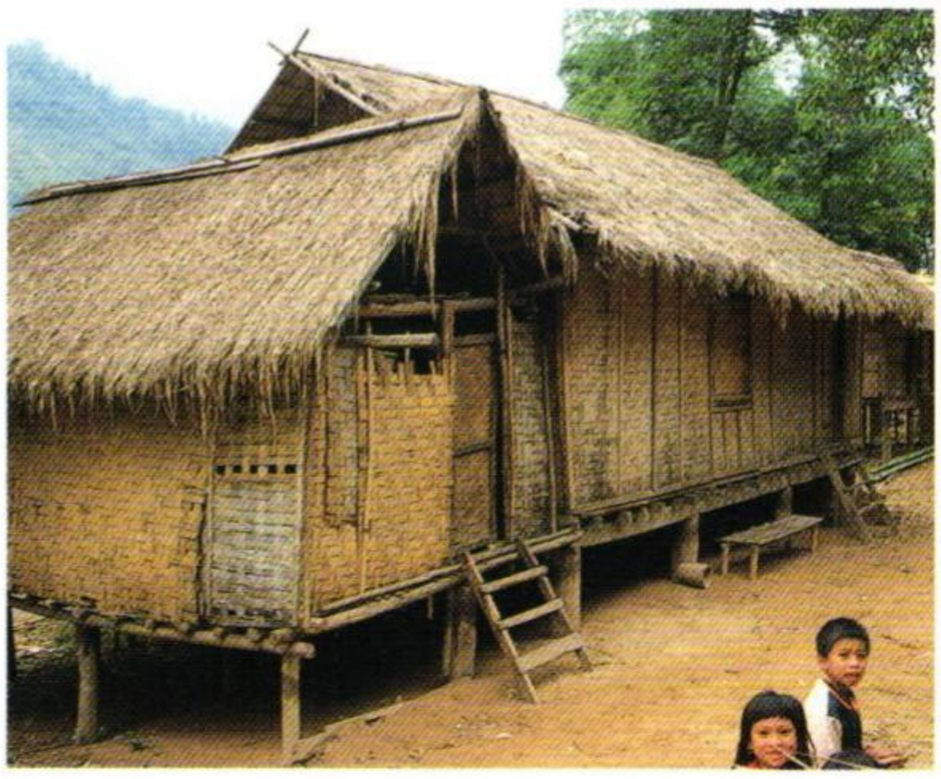
ポンサリー県ロンナイ村からウドムサイ県に馬を買いに来た帰りで，年に1回，片道3日をかけて馬を買いに来る。この日は，次の次の村で泊まるのだということだった。



アカ族の村

ーラオス・ルアンナムタ県タホム村・アカ族ー

村の一番高い所からの眺め。山の斜面に高床の一つ家を建てて暮らしている。屋根は茅葺きで，床は竹を叩きつぶした竹床である。各家々をつなぐように，前庭を道が通っている。



二つ家

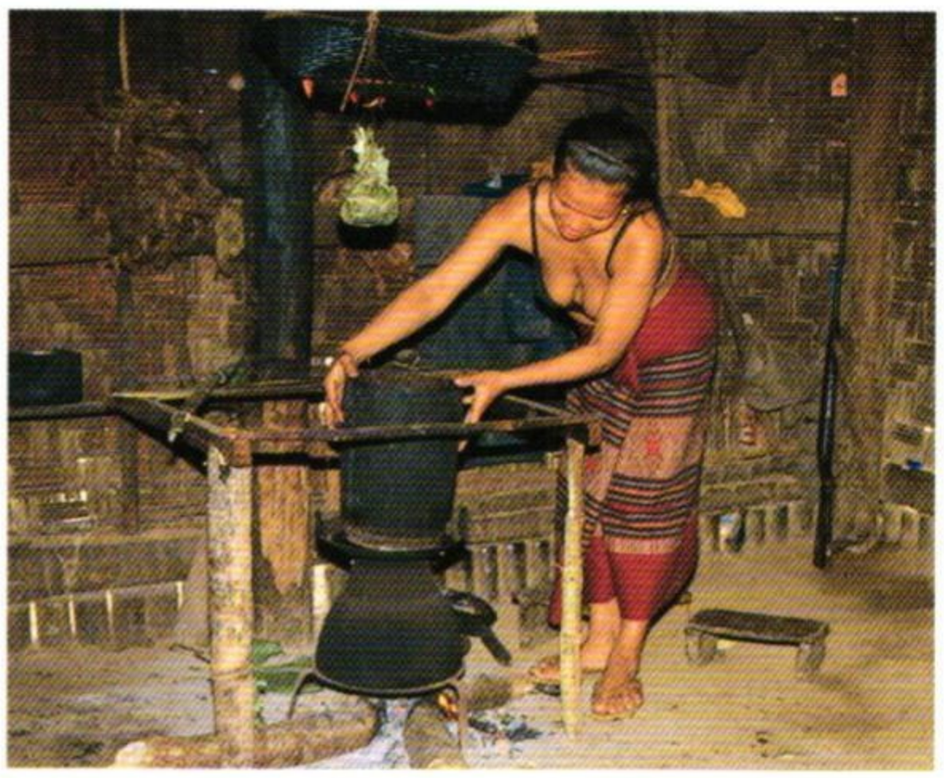
ーラオス・ウドムサイ県ルントン村・ラオ族ー

家全体をフォアーと呼び，大きな方の家をフェノワンといい，手前の小さい方をフンクオワーと呼んでいる。両者を樋で連結し雨降りを防いでいる。大きい方は寝室や客間，小さい方は炊事場や食堂として利用している。鹿児島の二つ家そのものである。

アカシを売る女性

ーラオス・ホーパァン県・サムヌア市場ー

　枯松の根や芯の部分を割ったマイペアを売っている。焚きつけや灯明に使用するのだという。鹿児島でも同様に利用され，九州山地では，里の人たちとの物々交換にも使っていた。



糯米（もちごめ）を蒸す様子

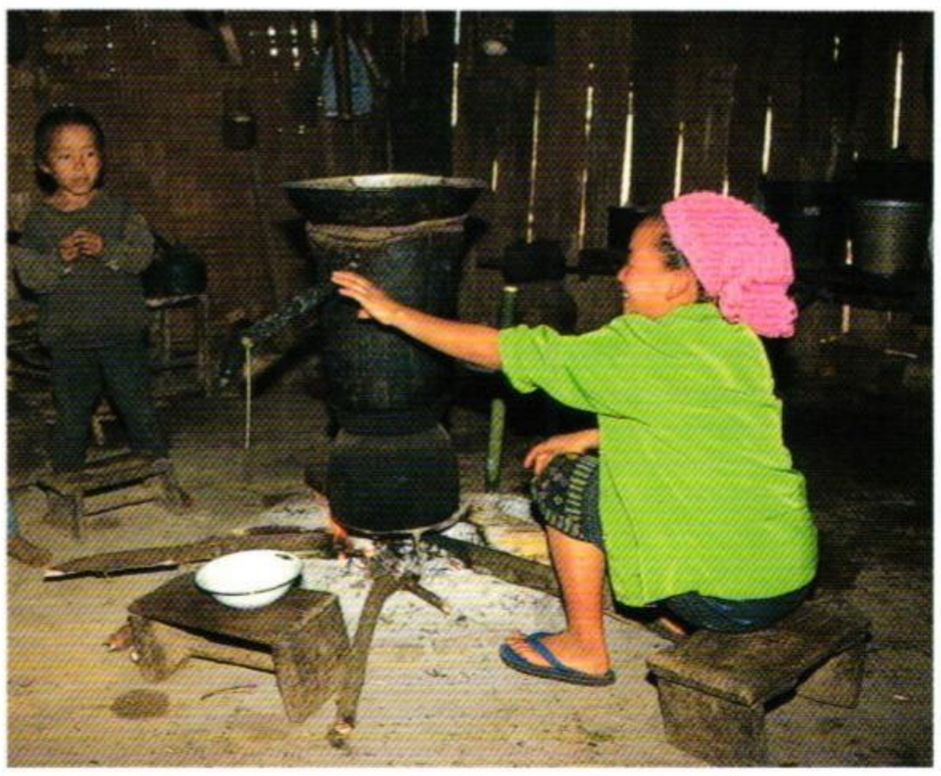
ーラオス・ポンサリー県クンルック村・カム族ー

　陸稲の糯米は，二度蒸しにして食べる。１度目は籾のまま蒸し，天日に干して，臼で搗（つ）いて精白し，再度蒸して食べる。大隅半島の鹿屋でも，陸稲のトボシ（赤米）は同様の食べ方をしていた。

焼米（カオマオ）作り

ーラオス・ポンサリー県ナムカム村・タイダム族ー

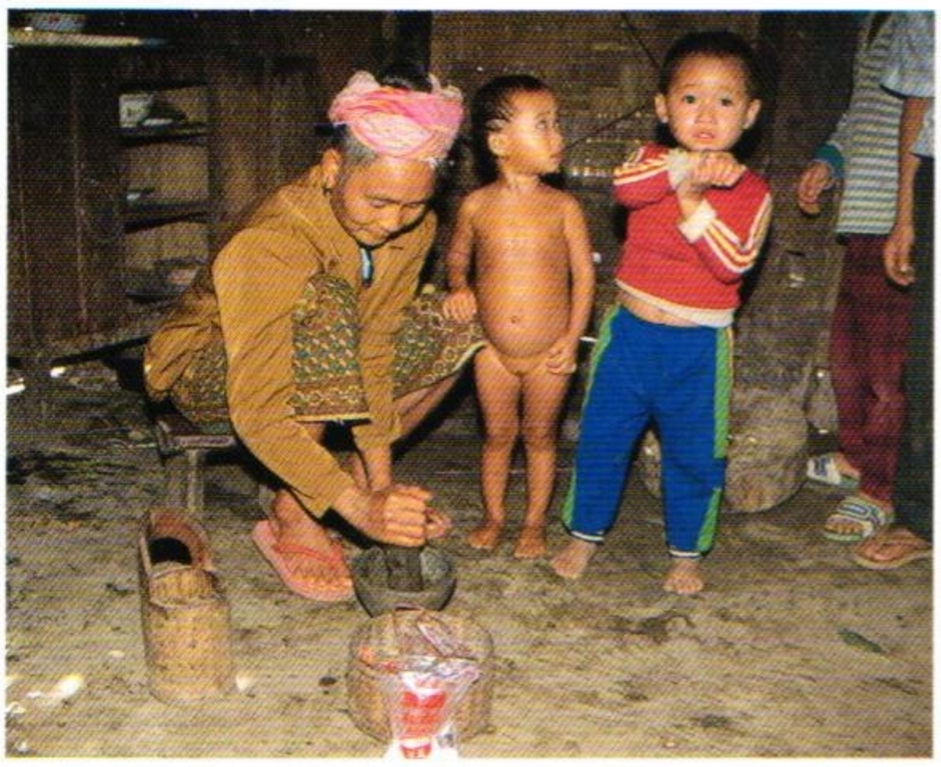
　完熟前の青米を食べるのには二つの方法がある。カオハーンという二度蒸しと，カオマオという炒って食べる方法がある。鹿児島のイデボシとヤッゴメと同じである。



焼酎造り

ーラオス・ホーパァン県フウサイ村・モン族ー

　焼酎の原料は米である。籾にコウジを加えモロミを作り，木を刳（く）り抜いた蒸し器で蒸して冷却し，焼酎を取り出す。使用されている道具は，鹿児島のものと深いつながりがあると思われる。



小臼を用いた調味料作り

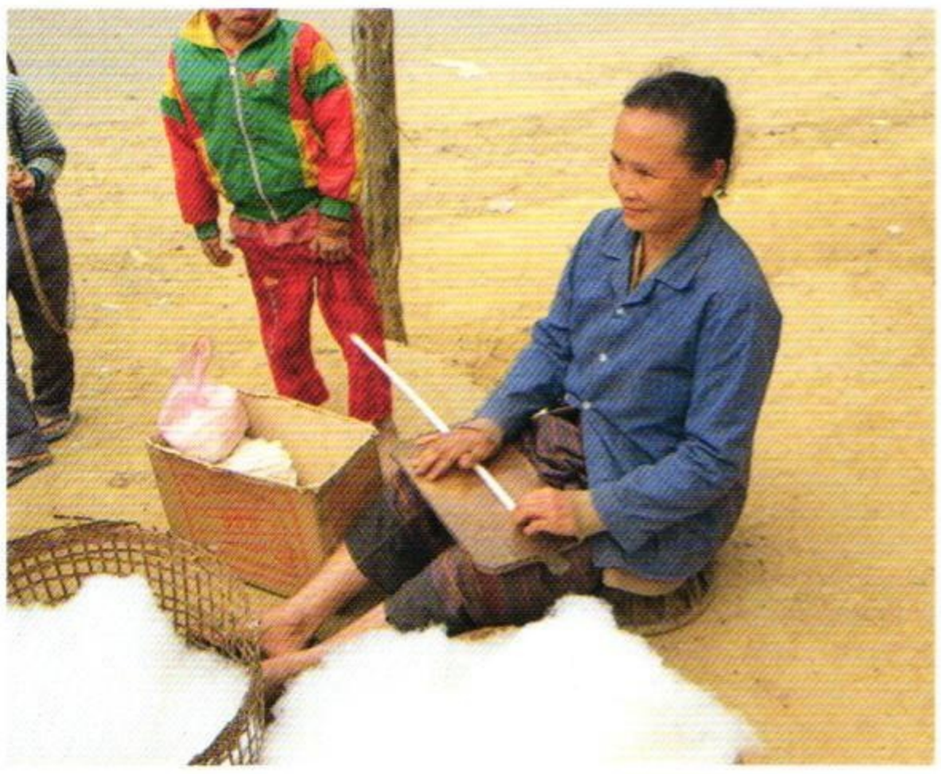
－ラオス・ポンサリー県モンマイ村・タイデン族－

　小臼を用いて香辛料を突きつぶして，香草などをまぜて調味料を作っている。この調味料に蒸した糯米（もちごめ）やおかずをつけて食べたり，パパイヤなどを千切りにしてソンタム（サラダ）にしたりして食べる。

綿の実を繰り出す作業

－ラオス・ウドムサイ県ティアー村・カム族－

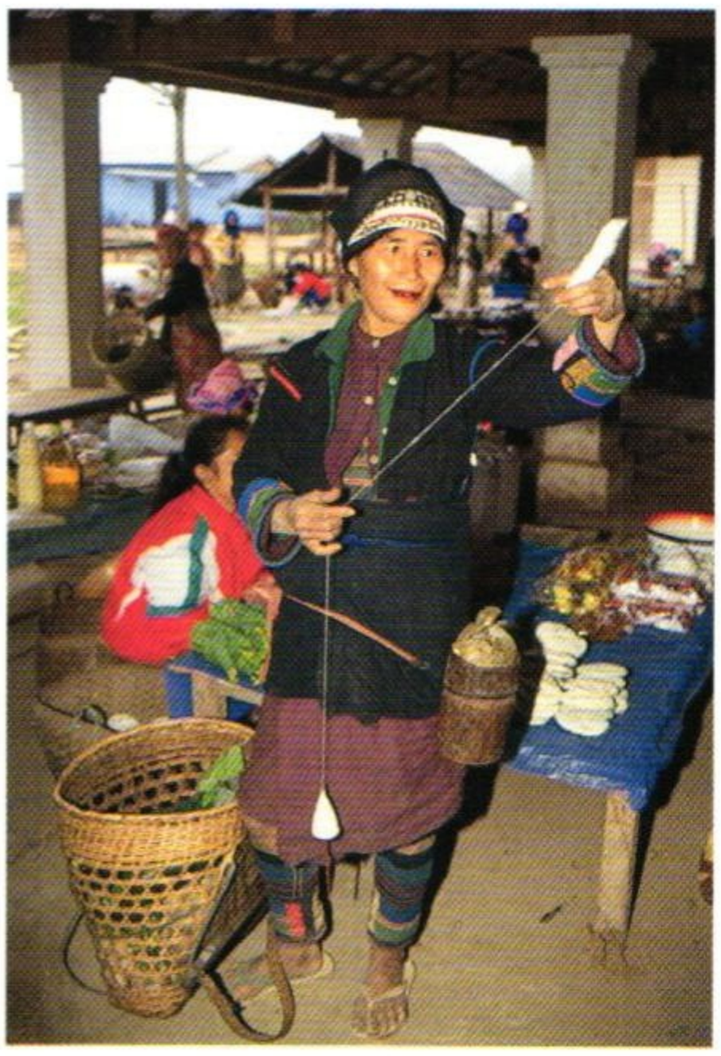
　イーウー（実繰り）を使ってトンファイ（綿の種）を繰り出している。手前に綿の種が残り，先の方に綿だけが押し出されてくる。



綿をまるめる作業

－ラオス・ウドムサイ県ナワン村・ラオルーン族－

　種を取り除いた綿を，綿弓や綿打ちで打ってほぐした後，ペンフォンファイという板の上で円筒状にまるめている。まるめた綿から紡垂車や糸車を使って糸に紡いでいく。



糸を紡ぐ女性

－ラオス・ルアンナムタ県ムアンシン市場・アカ族－

　まるめられた綿から紡垂車を使い木綿糸を紡ぎ出している。女性たちは，腰に竹筒をつけ，それに綿を入れておき，歩きながらも糸を紡いでいる。

藍(あい)染めをする女性

ーラオス・ボケオ県ナムチャン村・ランテン族ー

　ほとんどの少数民族に藍染めがみられる。川岸に大きな木の刳(くり)舟の中に藍がたてられているのを見ることができる。それをドラムカンなどに移して，家の隅において糸や布を染めている。

浮織を織る女性

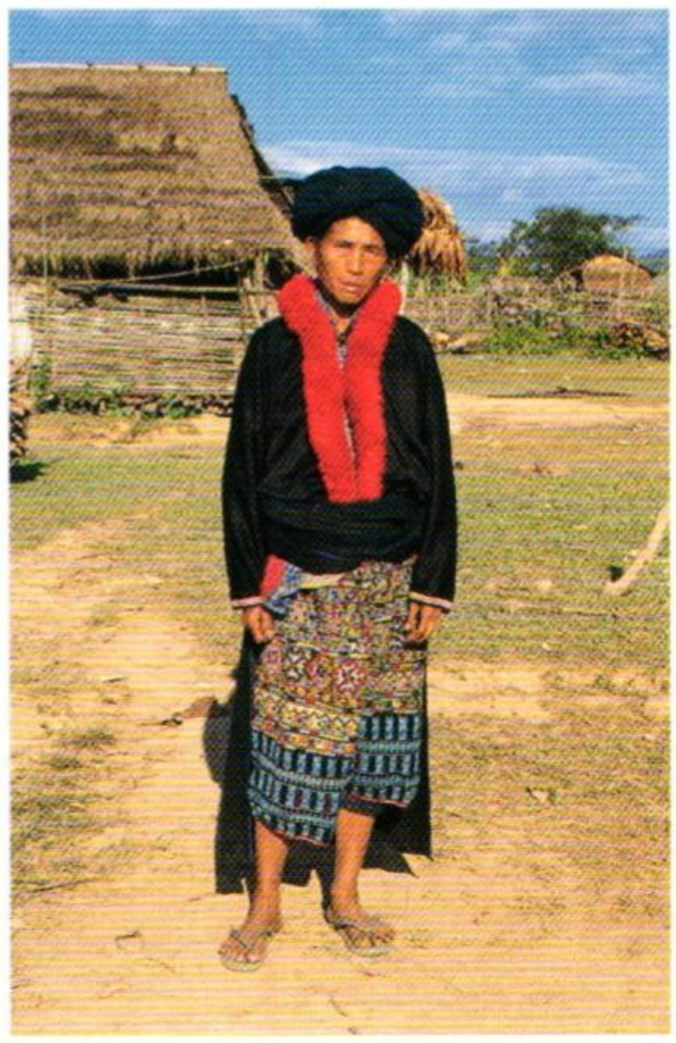
ーラオス・ウドムサイ県パクベン村・ラオルーン族ー

　浮織は，模様となる部分の経(たて)糸を浮かせ，緯(よこ)糸と組み合わせず，緯糸も浮かせて模様を織り出す技法である。経糸を浮かせる道具である花綜絖(はなそうこう)の多さが，織り出す模様の複雑さを物語る。

民族衣裳を着けたアカ族の少女

ーラオス・ボンサリー県ヌワンホワー村・アカ族ー

　毎月1，11，21日に開かれる一の市に，山の上の村から下りてきたアカ族の少女である。藍染めの上着，スカート，頭飾り，首輪，腕輪，前垂れ，脚絆などカラフルである。



民族衣裳を着けたヤオ族の女性

ーラオス・ルアンナムタ県ウドムシン村・ヤオ族ー

　ヤオ族の衣裳の特徴は，上っ張りの赤い襟の飾りである。また，ズボンの裾，ターバンや帯の刺繍(ししゅう)が見事である。

背負い布で子供を背負った姿
－ラオス・ホーパァン県サムヌア市場・モン族－

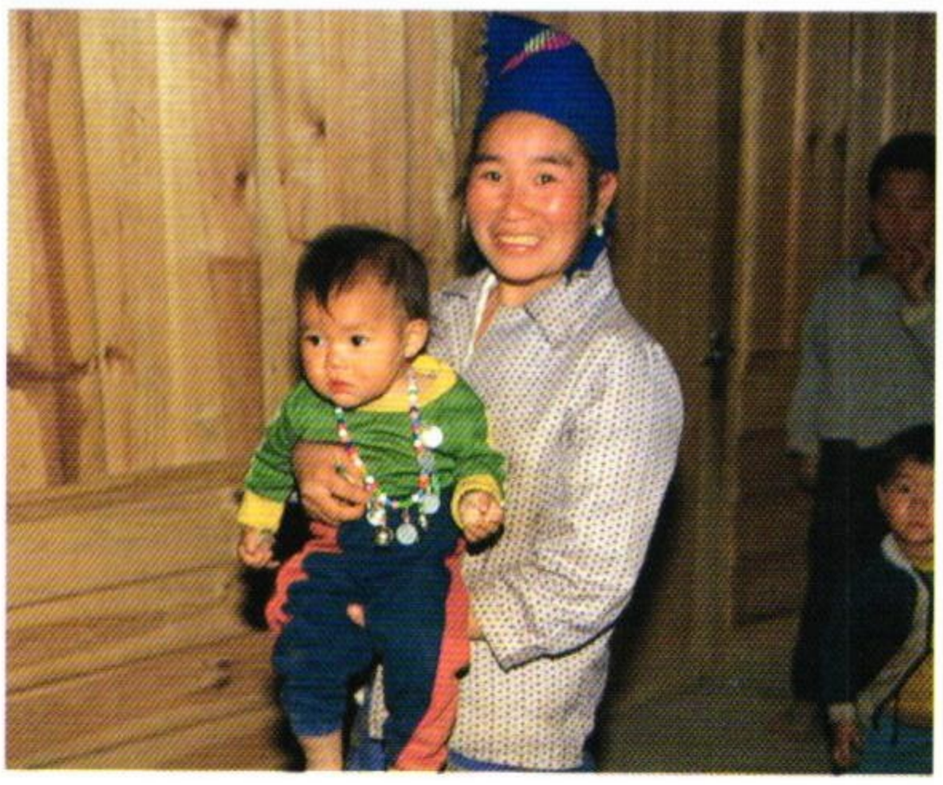
イミニュアーと呼ばれる背負い布である。渦巻紋が中央に縫い付けられ，周囲に鋸歯紋が配されている。紐の掛け方は，鹿児島の背負い帯と同じである。

アカ族のロッコーン
－ラオス・ルアンナムタ県ナムレツ村・アカ族－

焼畑が陸稲の種を蒔く日に，村の入口と出口に建てる鳥居である。横木には，ツバメを型どった雌雄一対の鳥がとまっている。悪霊が村に入れないようにさまざまな魔除けの飾りが付けられている。毎年建て継いでいくので村ができてからの年数がわかる。朽ちた木ぎれも触れることは厳しく禁じられている。

ニショロのモリ
－ラオス・ルアンナムタ県タホム村・アカ族－

ロッコーンの近くにあるニショロと呼ばれる聖なる森で，シャーマンが祈りをしたり，豚や犬や鶏を供犠する場で，立っている木を伐ってはならず，また，女性や子供は立ち入ってはならないという。鹿児島の「モイドン」と共通した信仰がうかがえる。



首輪・腕輪をした子供
－ラオス・ホーパァン県ナノンブワ村・モン族－

子供の首輪や腕輪は，病気が子供の体の中に入らないようにするものである。これをすると熱が出ないという。

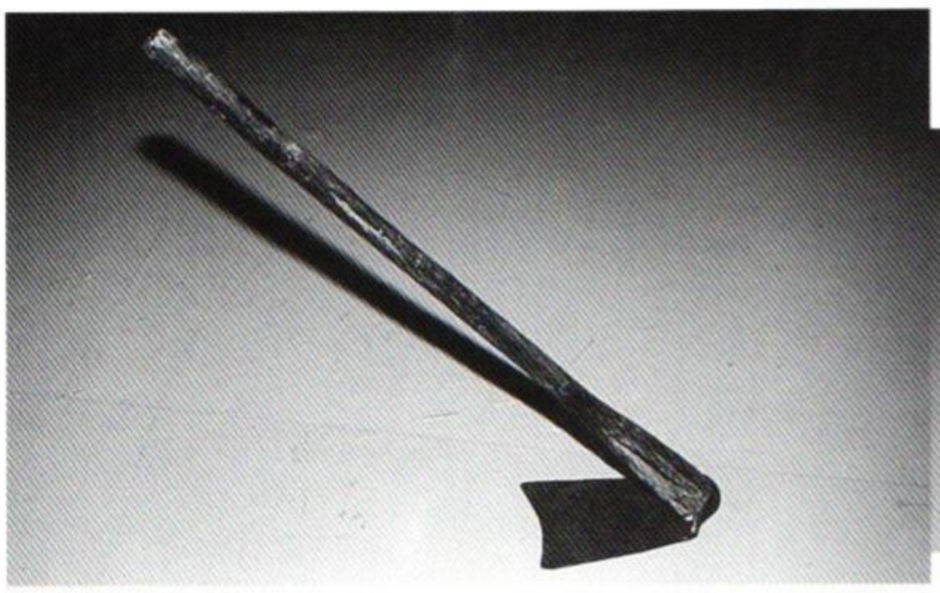
1　耕す・採る

南九州から南西諸島の地域に住む人々は，周囲の照葉樹林や竹林を焼いて作物を作る焼畑農業をはじめ，畑作中心の農業を営んできた。

そこで用いられた基本的な農具は，中国南部や東南アジアの少数民族が用いているものと，極めて強い類似性がみられる。ここでは，両地域の農具の比較を通して，農業に関する文化的なつながりの深さを紹介する。

(1)　鍬

奄美や沖縄の鍬は，柄の取り付け方法が中国南部のものと一致する。また，草取りなどに用いる小型の鍬もタイやラオスの焼畑民の間で広く用いられているものである。

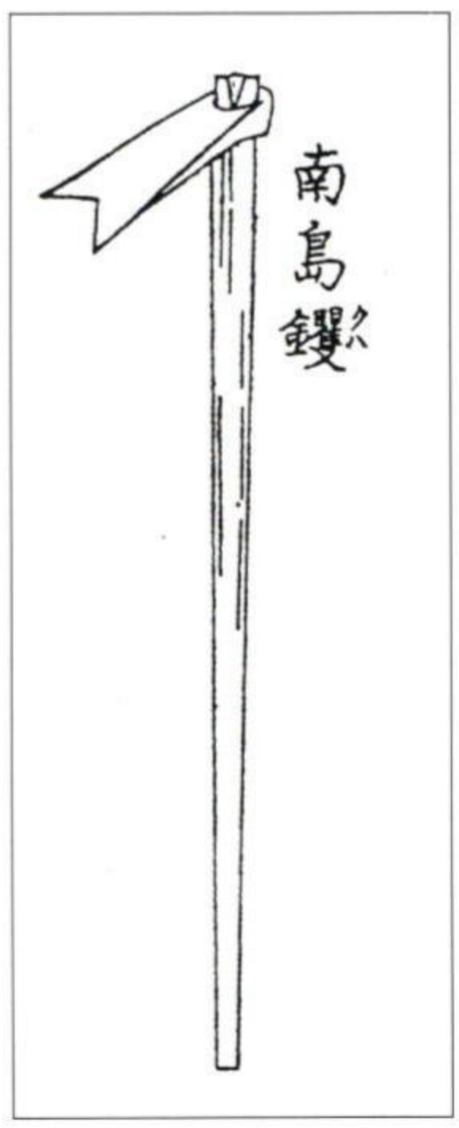


1　鍬　　－中国雲南省元陽県・ハニ族－
国立民族学博物館蔵

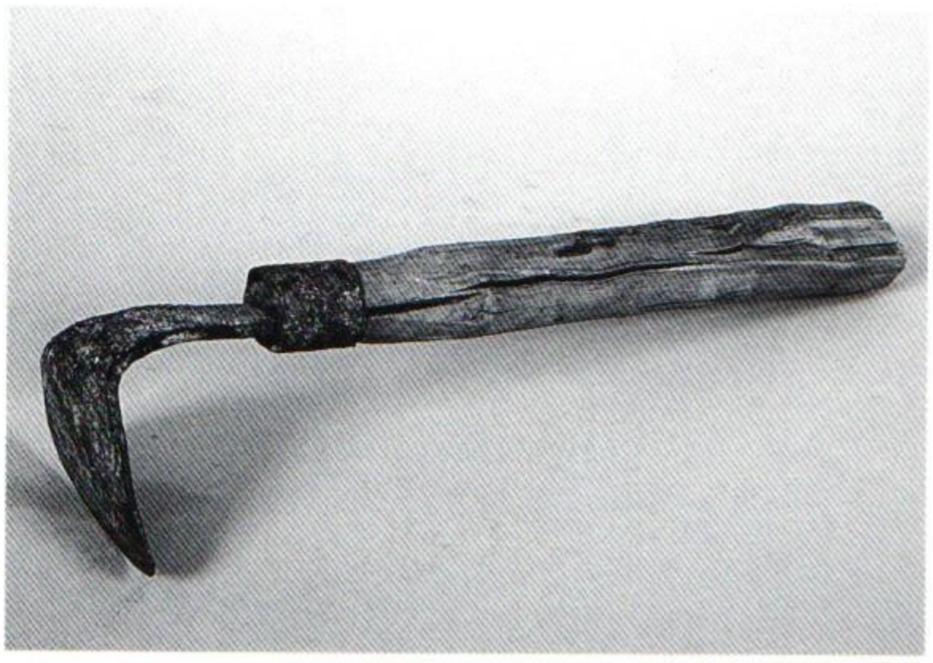
柄を差し込む部分の輪は，刃部の板の肩の部分を挟む形で取り付けられ，柄は楔(くさび)を打ち込んで固定されている。柄と刃の取付角度は60～70度と大きく，典型的な打ち鍬である。また，刃先は矢筈形になっており，こうした形態的な特徴は，奄美や沖縄の鍬にもみられ，すでに「南島钁(クハ)」の名称で，薩摩藩の農業全書である『成形図説』（1804年）に記されている。

2　土切グワ
－鹿児島県喜界町－

3　トングェ
－鹿児島県徳之島町－



南島钁
（『成形図説』）



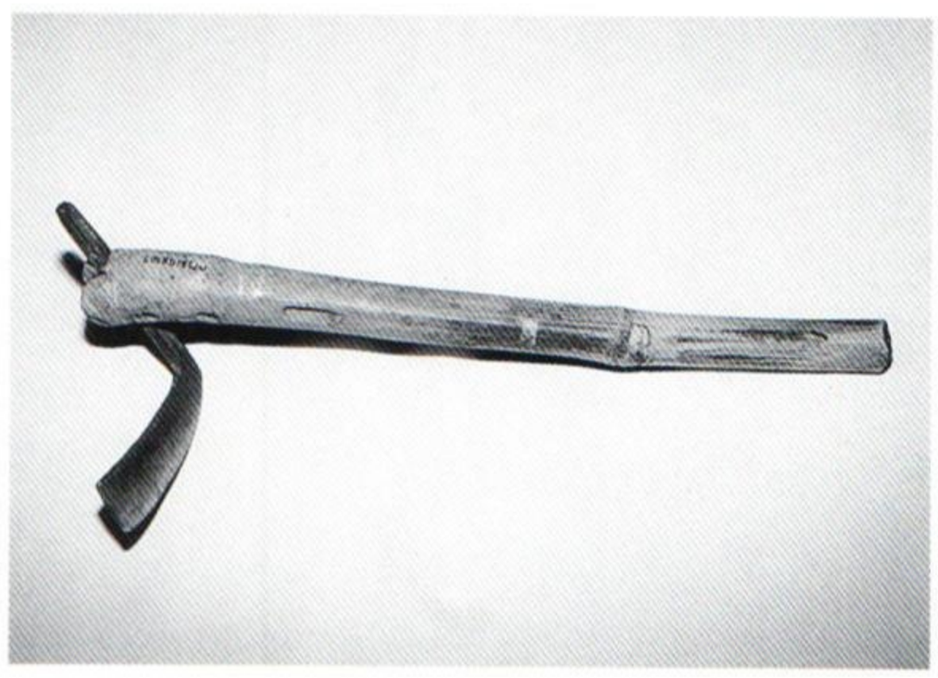
4　ヴェク　－ラオス・ホーパァン県パンサイ村・タイデン族－

焼畑の除草に用いる手鍬である。柄を持って手前に打ち込んで引き起こすようにして使う。

5　ワンコー　－ラオス・ルアンナムタ県・ラッハーシェッ村・プノイ族－

焼畑の除草に用いる手鍬で，柄は実竹を利用している。

6　ニャオサット　－ラオス・ルアンナムタ県ナムルー村・ランテン族－



7　草刈用ナイフ　－ラオス・シェイクアン県ナムノイ村・タリアン族－

国立民族学博物館蔵

刃の取り付け方に特徴がある。柄は竹を用いている。

8　草刈用ナイフ　－ラオス・シェイクアン県チャランマイ村・ゲー族－

国立民族学博物館蔵

9　草とり鎌　－タイ・スノーマイ・アカ族

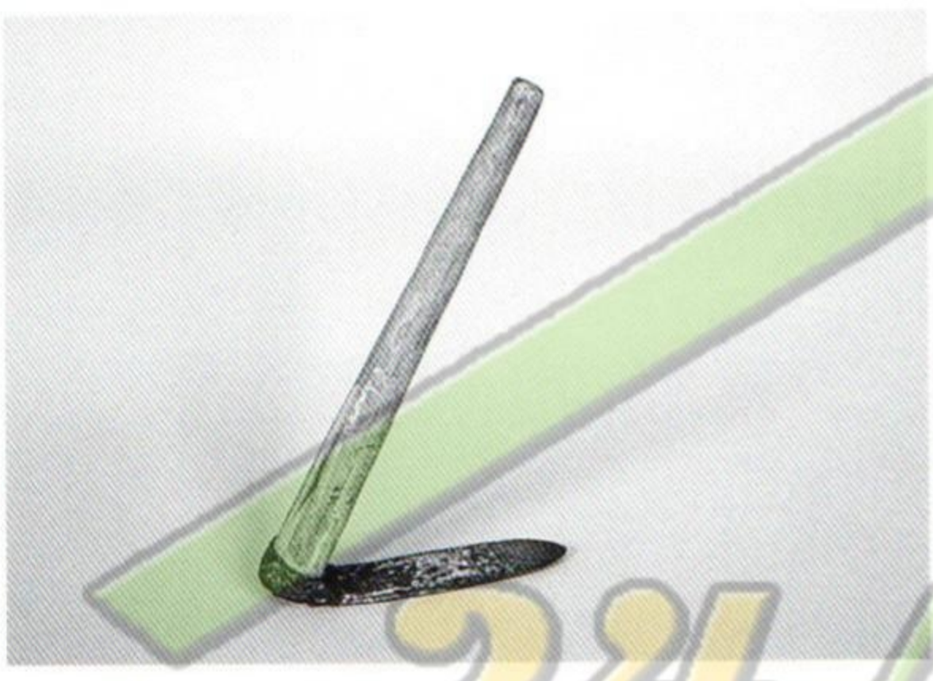
原野農芸博物館蔵

10　小鍬　－台湾・高雄州・マンタウラン社・ルカイ族－

国立民族学博物館蔵

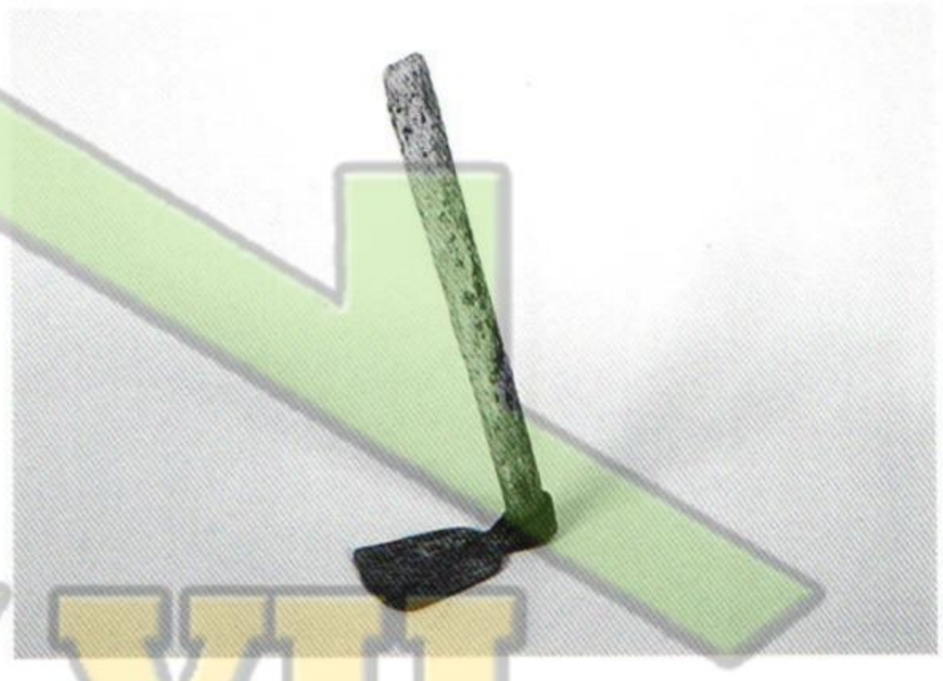
11　フェラ　－鹿児島県大和村－

柄は，刃部の板で巻き挟む形で取り付けられている。柄を握り押し出すようにして使用する。芋植え，除草，芋の収穫に用いる。



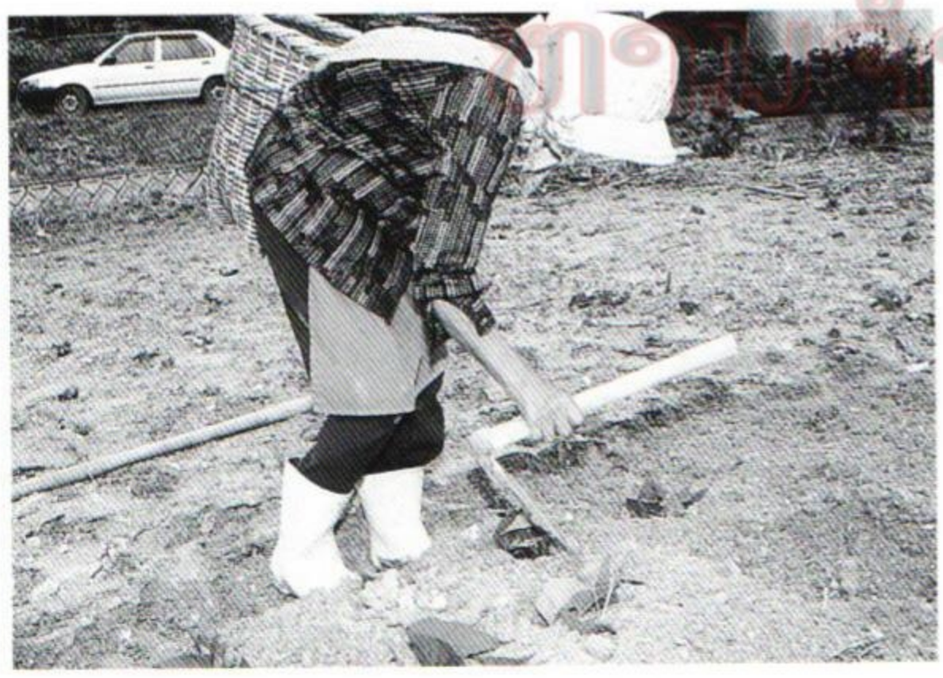
12　トゲベラ　－鹿児島県住用村－

手鍬とフェラとの中間形の小鍬である。柄を握り打ち込んで使う鍬としての機能と，柄を握って前に押し出して使うフェラの機能とがある。



13　テグワ　－鹿児島県十島村－

アワヤマ（粟作りの竹山の焼畑）で除草などに用いられる。片手で持って使うことから，テグワと呼ばれ，三島村，甑島などにもみられる。



トゲベラを使う様子　－鹿児島県瀬戸内町－

芋のツルを植えているところ。トゲベラで穴をあけ，そこに苗である芋ヅルを差し込み，トゲベラで押さえて植える。

14　テグワ　－鹿児島県東町－

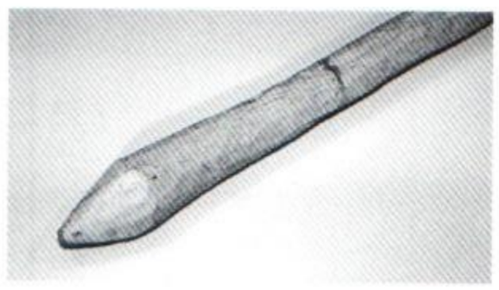
昭和30年代までミカン畑の除草に用いていた。先端で草の根を掘り起こし，刃の部分で引っかいて除草する。

(2) 掘り棒

種まきの穴を掘ったり，芋を掘り出したりするのに用いられるものである。刃の先端が尖ったものと平たいものとがある。主に焼畑を中心に畑作業に用いられる。沖縄から九州山地にかけて分布するものは，東南アジアにも分布している。

16　掘り棒　－ラオス・ボケオ県ホイサイ村－
原野農芸博物館蔵

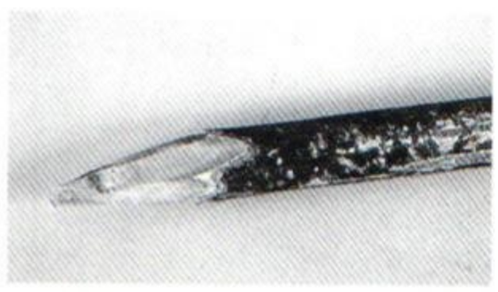
焼畑にトウモロコシの種をまく穴をあける棒である。



（拡大）

18　田イモ掘棒　－鹿児島県知名町－

水田に植えられている田芋を掘り起こす棒で先端を尖らせてある。



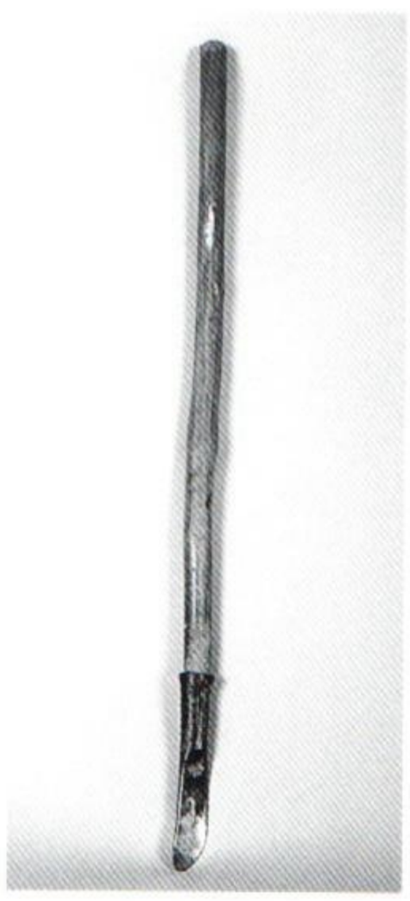
（拡大）

24　キンツッ　－鹿児島県志布志町－

山芋掘りに用いる。柄取付部も左のものと同一である。

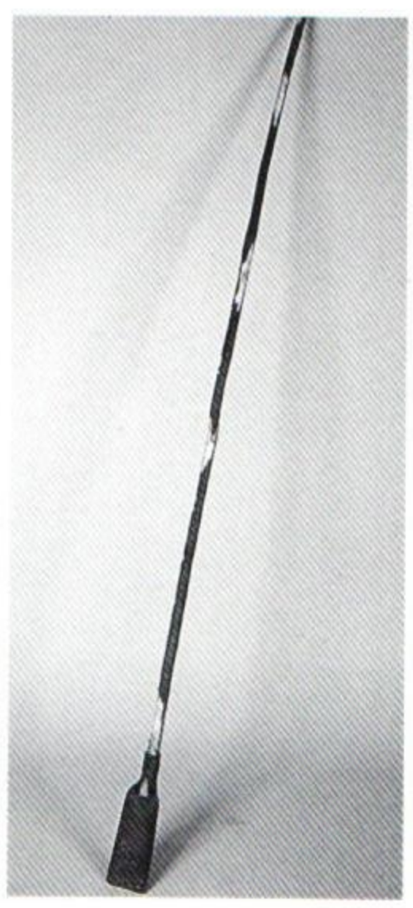
21
土ほり具
－カンボジア－
国立民族学博物館蔵

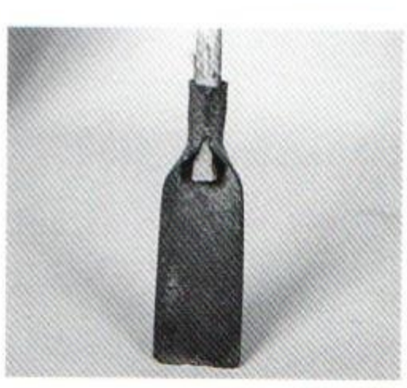
（拡大）



23
シーアン
－ラオス・ホーパァン県パンサイ村・タイデン族－

（拡大）

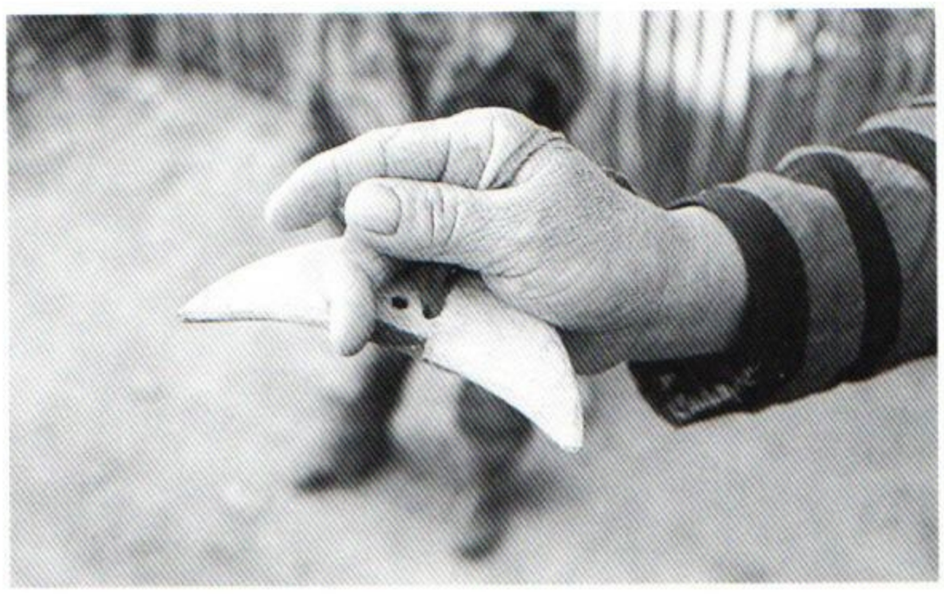




（拡大）

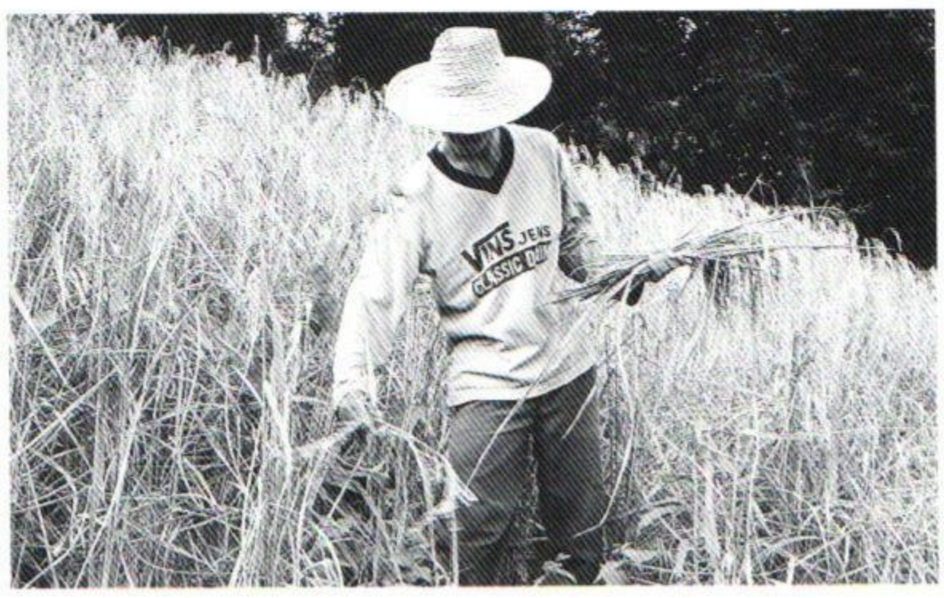
(3) 穂摘み具

この地域では，粟や稗などを穂摘みする習俗がみられる。鉄製の包丁や竹製の道具が用いられる。一方，東南アジアでは，弥生時代の石庖丁を思わせる穂摘み具がみられ，その把手（とって）の竹管はトカラのものに酷似している。



穂摘み具の握り方　－ラオス・ホーパァン県ナノンブワ村・モン族－

板を指の間に挟み，中指と薬指，小指で稲穂を引いて摘み取る。

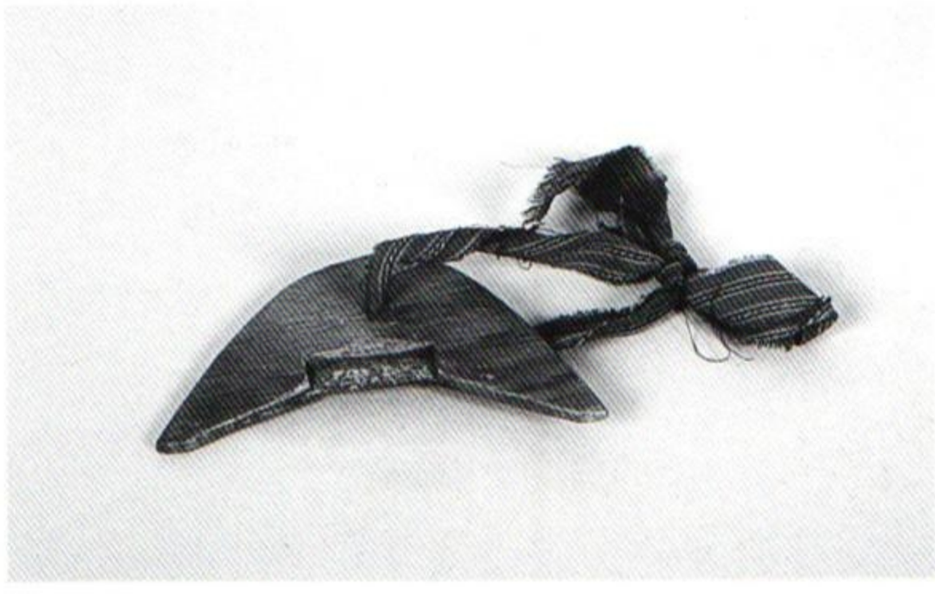


穂摘みの様子　－タイ・チェンライ県クンボン村・ヤオ族－

刈り取った稲穂を左手に持ち，一握りになると束ねて籠に移す。

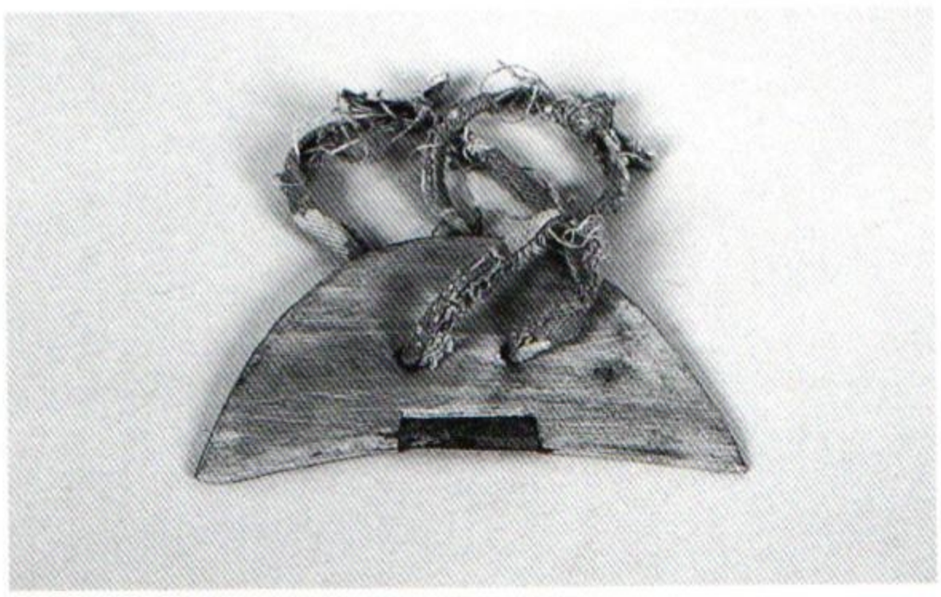
25　ヴォー　－ラオス・ホーパァン県ナノンブワ村・モン族－

一つ穴に紐を通して，手の甲に紐を掛ける。



26　ヴォー　－ラオス・ルアンパバーン県ロンラオ村・モン族－

縦二つ穴の下の方に紐を通している形である。



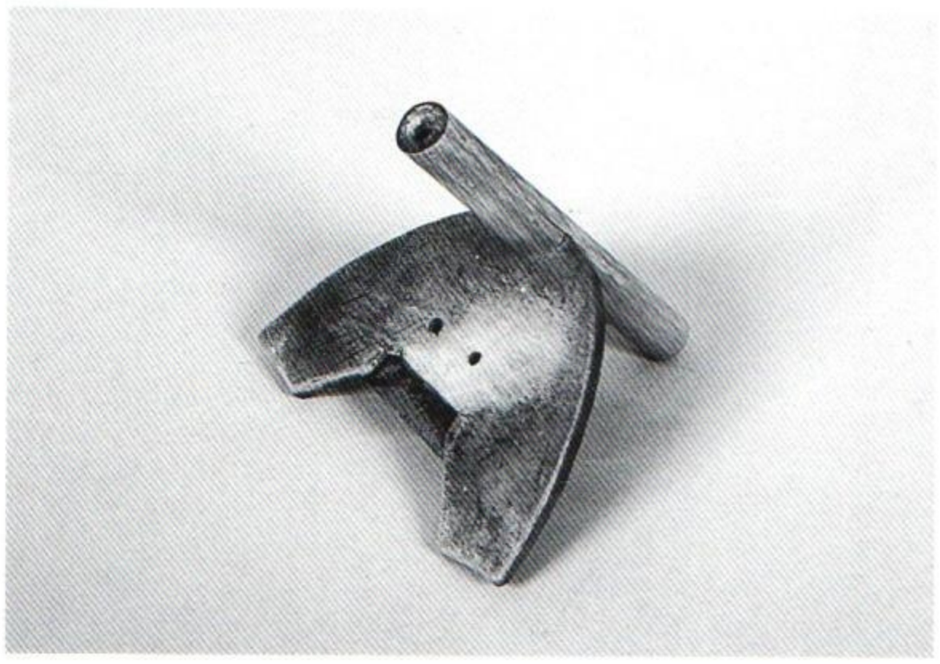
27　タープ　－ラオス・ポンサリー県ホック村・モン族－

横二つ穴に紐を通している形である。

28　穂摘み具　－タイ－

原野農芸博物館蔵

横１列に三つの穴があり，その外側二つの穴に紐が通してある。両脇の突端と刃との深さは，穂首を引き込み易くするためである。

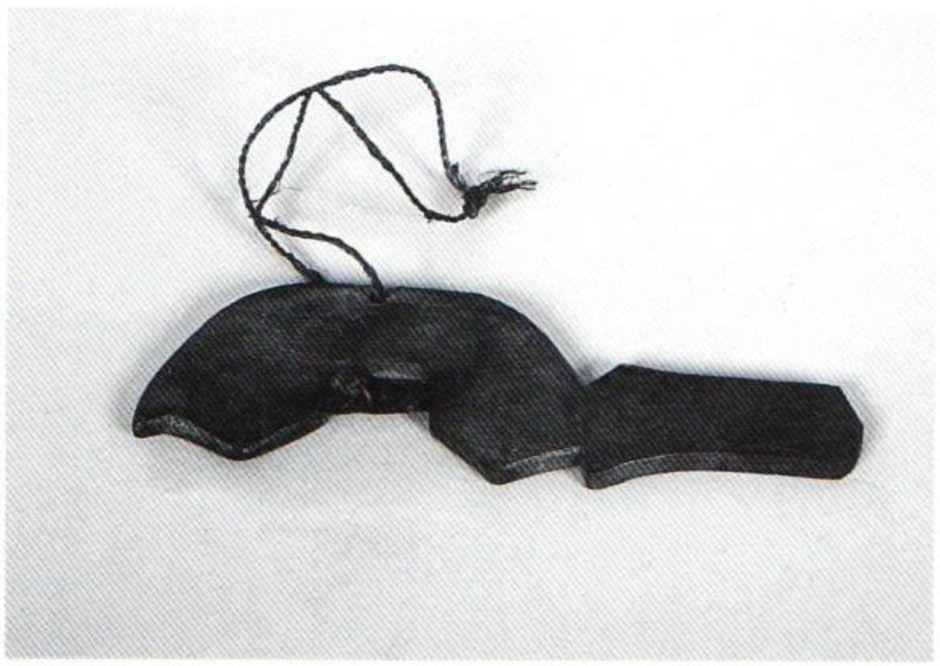


29　ヴゥー　－ラオス・ルアンパバーン県ロンラオ村・モン族－

尖りのない竹管の把手を付けた形である。管の経の半分位の深さに切り込みを入れ，板の穴に被せ，それに細い竹の棒を刺している。

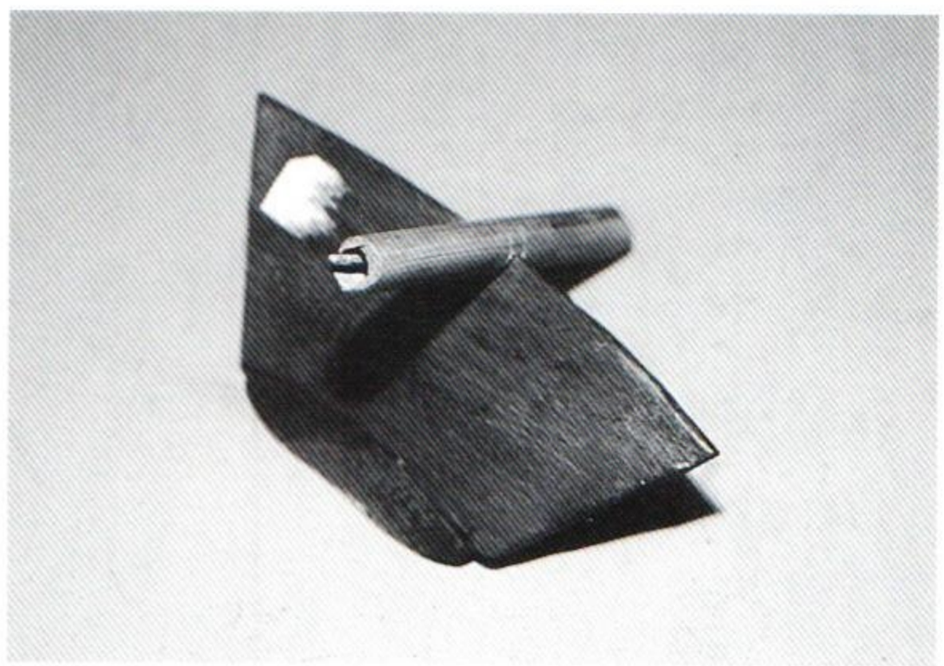
30　ヴゥー　－ラオス・ルアンパバーン県ロンラオ村・モン族－

全体が鉄の板で作られている。把手は，左の竹管を取り除いた形で，細い竹の棒を刺しただけである。



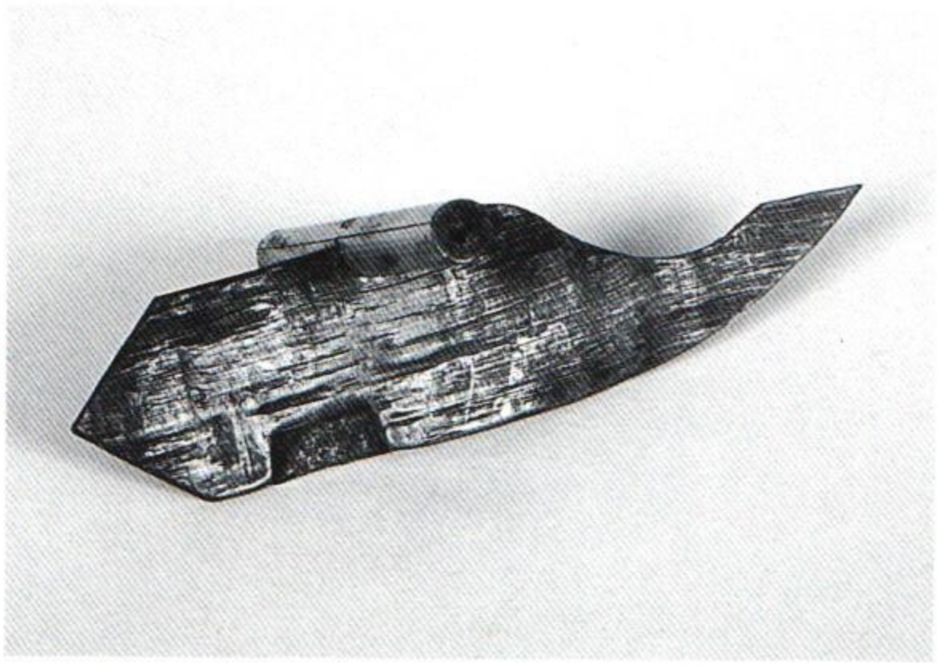
31　ブーブロンレン　－ラオス・ポンサリー県アルヤ村・モン族－

一つ穴に紐を通した形で，上側につけられたカーブは，指で挟んだとき掌や手首にぴったり合うようになっている。



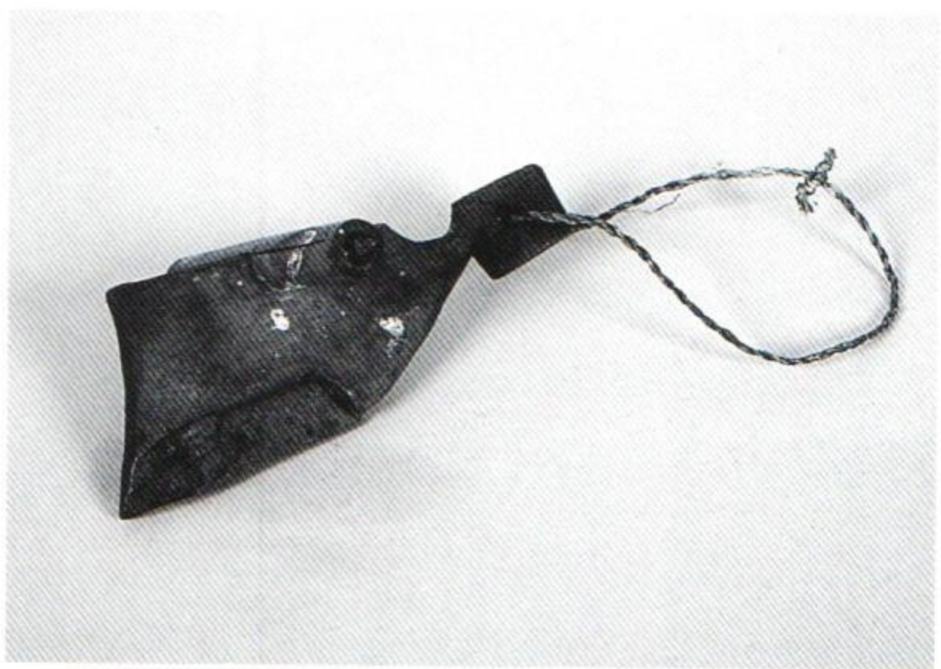
32　爪鎌　－タイ・バンサパイヤイ村・タイ族－
国立民族学博物館蔵

一つ穴に竹管の形であるが，板が刃の側の両端で尖っていないのが特徴である。



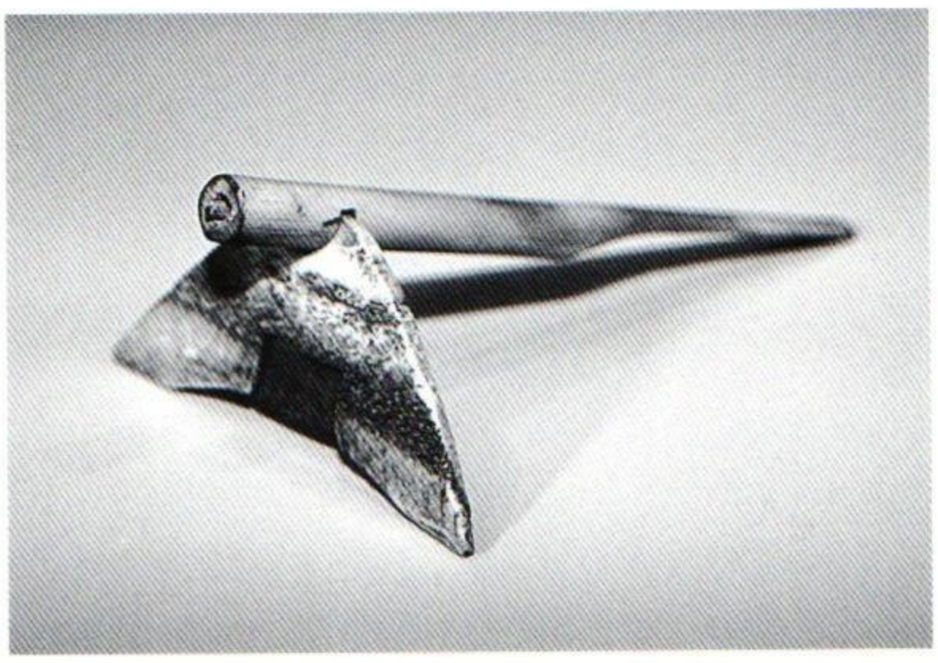
33　ウー　－ラオス・ホーパァン県フウサイ村・モン族－

一つ穴に竹管を付けた形で，魚に似た形をしている。後の切り込みは，手首の部分にぴったり合うようにしたものである。



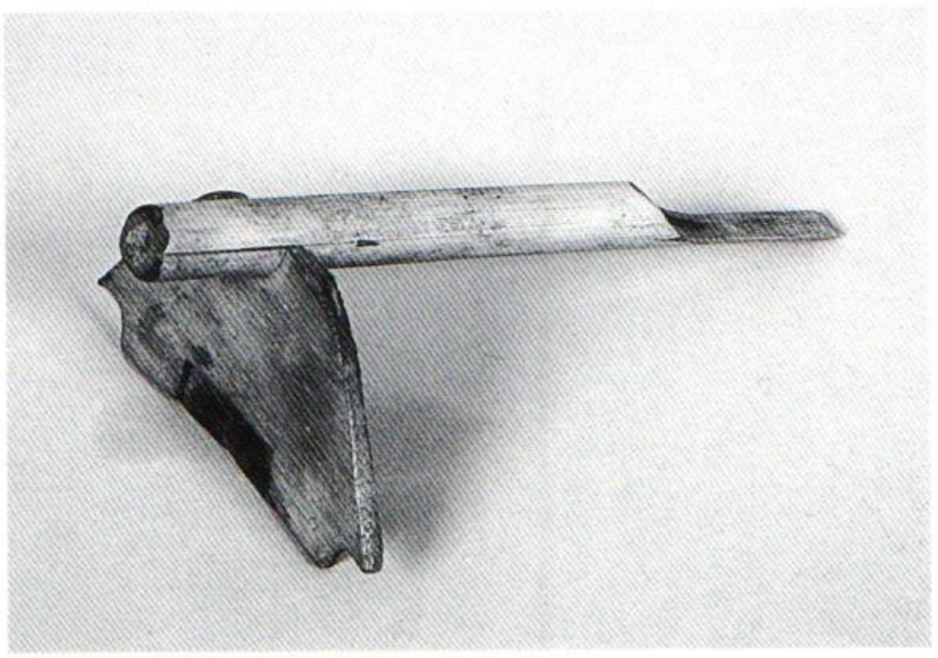
34　ウー　－ラオス・ホーパァン県ナティアン村・タイデン族－

左と同様の形である。後に付けられた紐は使わない時にひっかけておくためのものである。



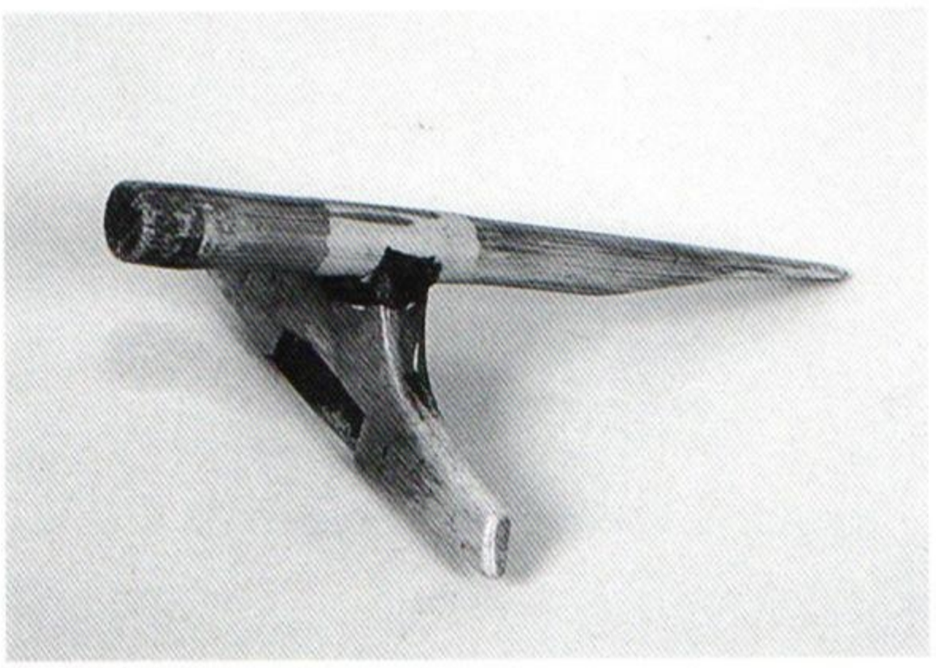
35　穂摘み具　－タイ・チェンライ県・ヤオ族－
原野農芸博物館蔵

一つ穴に尖った竹管を付けた形である。板は獣骨で作られている。



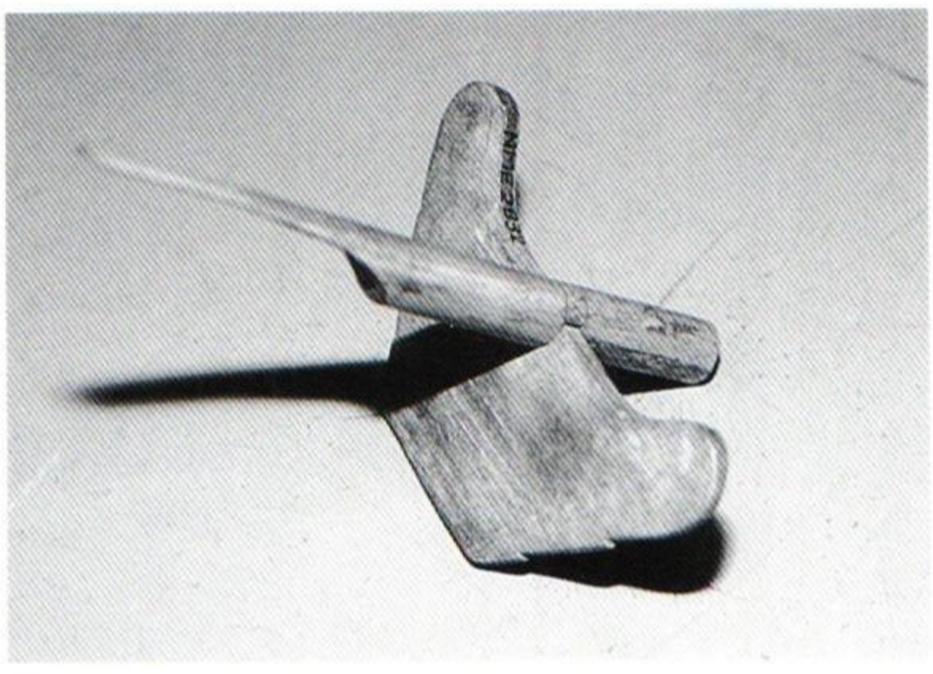
36　テッカオ　－ラオス・ルアンナムタ県ウドムシン村・ヤオ族－

一つ穴に尖った竹管を付けた形である。刃の側の板の両端に切り込みがあり，穂首を指で取り込み易く工夫されている。



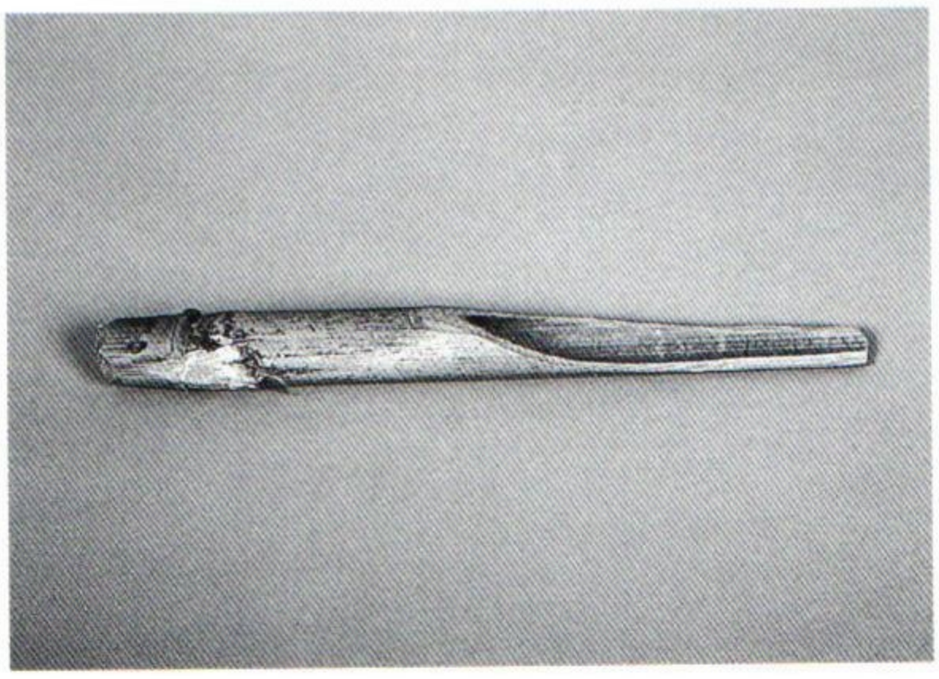
37　デップ　－ラオス・ルアンナムク県ナムルー村・ランテン族－

一つ穴に尖った竹管を付けた形である。尖らせた側は，穂首を束ねるとき髪に刺したり，口にくわえたりして，両手が使えるようにする工夫である。



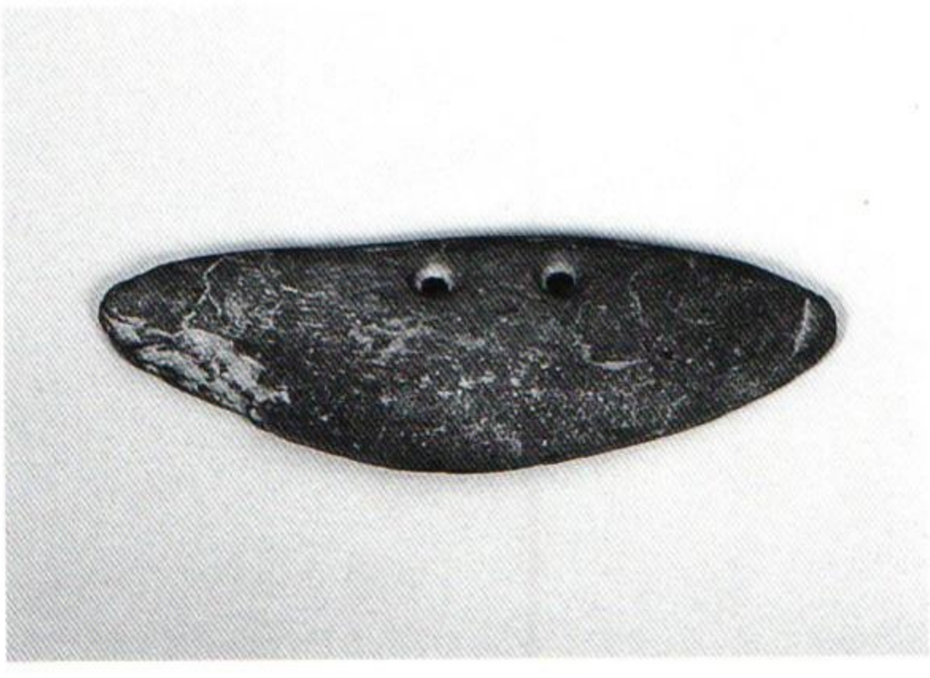
38　穂づみ具　－マレーシア・パハン川源流域－
国立民族学博物館蔵

一つ穴に尖った竹管を付けた形である。



39　ヘラ　－鹿児島県十島村－

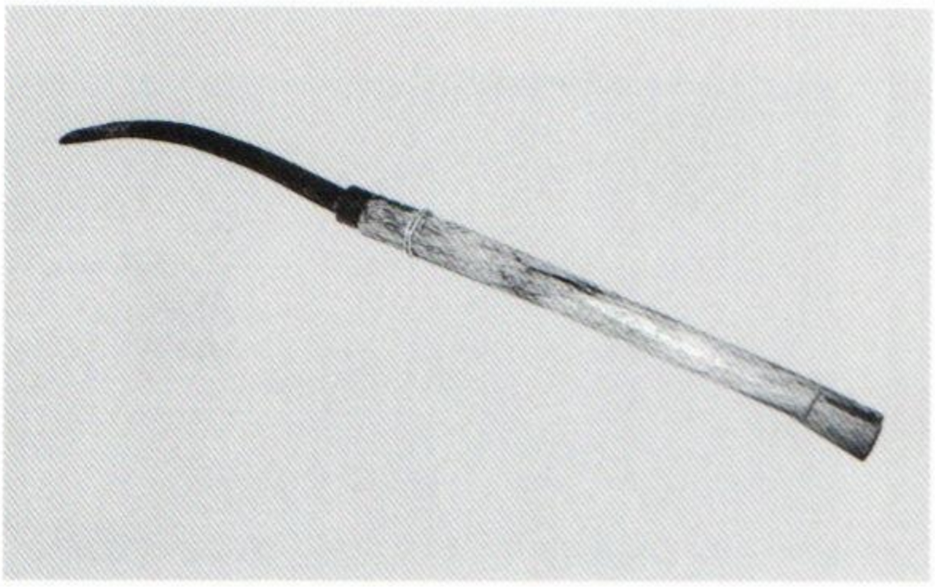
焼畑の粟の穂摘み具である。竹管の片方をナイフ状に削り，尖らせている。



40　石庖丁　－鹿児島県大口市・弥生時代－
寺師見国コレクション　　（個人蔵黎明館収蔵）

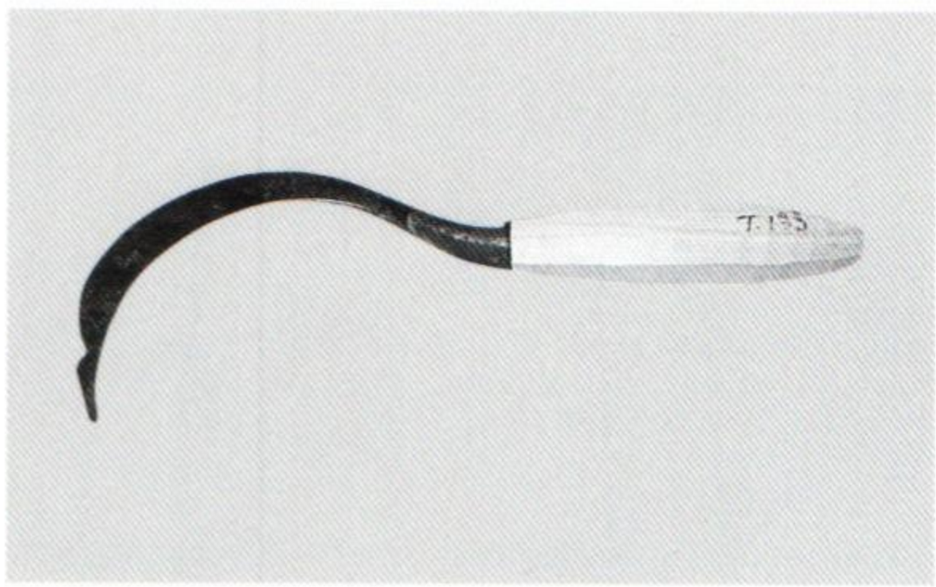
(4) 穂刈り具

鎌は，一株ごと穂をまとめて刈り取るのに用いられ，一穂ずつ刈り取る穂摘み具に比べて作業能率が高い。鎌の刃部に刻まれた鋸目は広く東南アジアから日本まで共通するものである。



45　鎌　－フィリピン・ブラカン州サンミゲル村・タガログ族－

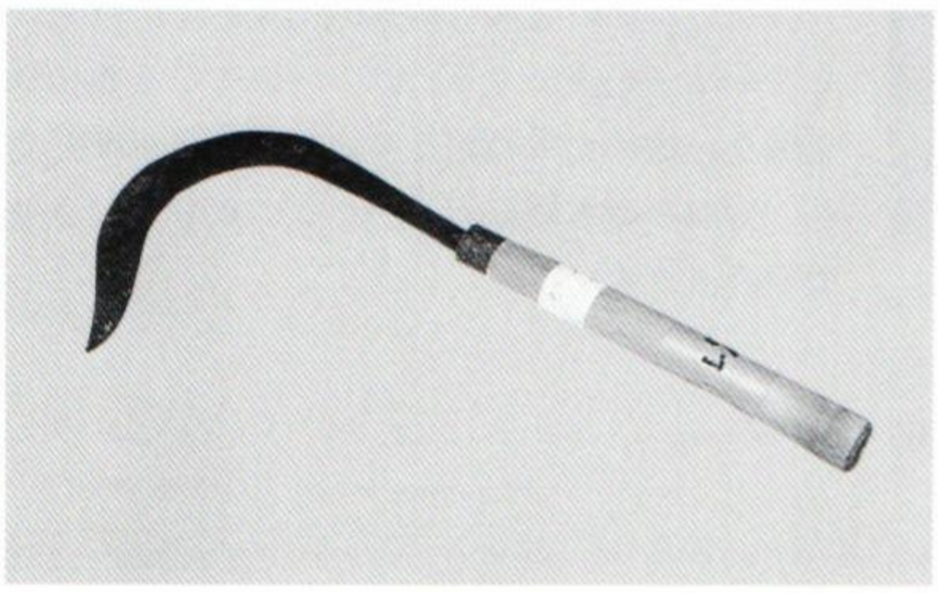
国立民族学博物館蔵



46　刈鎌　－タイ・ペットブリ・タイ族－

国立民族学博物館蔵

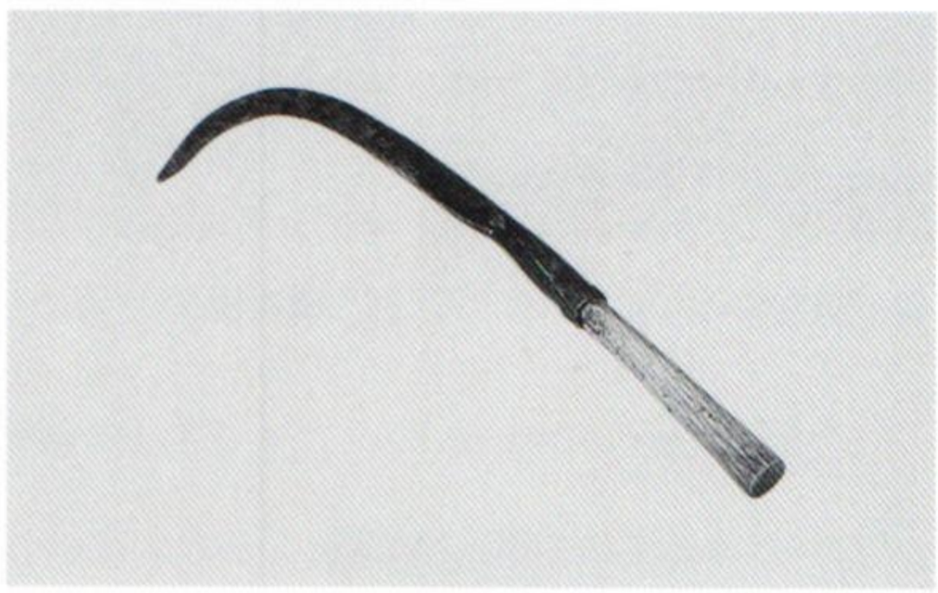
鋸歯状の刃が刻まれている。



47　稲刈り用鎌　－ラオス・ルアンパバーン県パクホム村・ラオ族－

国立民族学博物館蔵

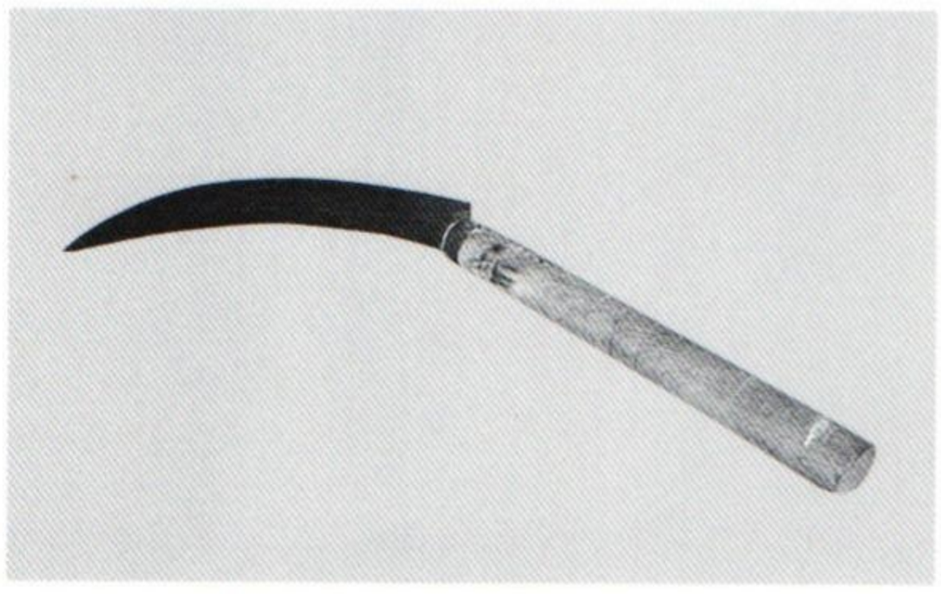
柄は竹である。菜園の草を刈る際にも用いる。



48　稲刈り用鎌　－ラオス・ルアンパバーン県ロンラオ村・モン族－

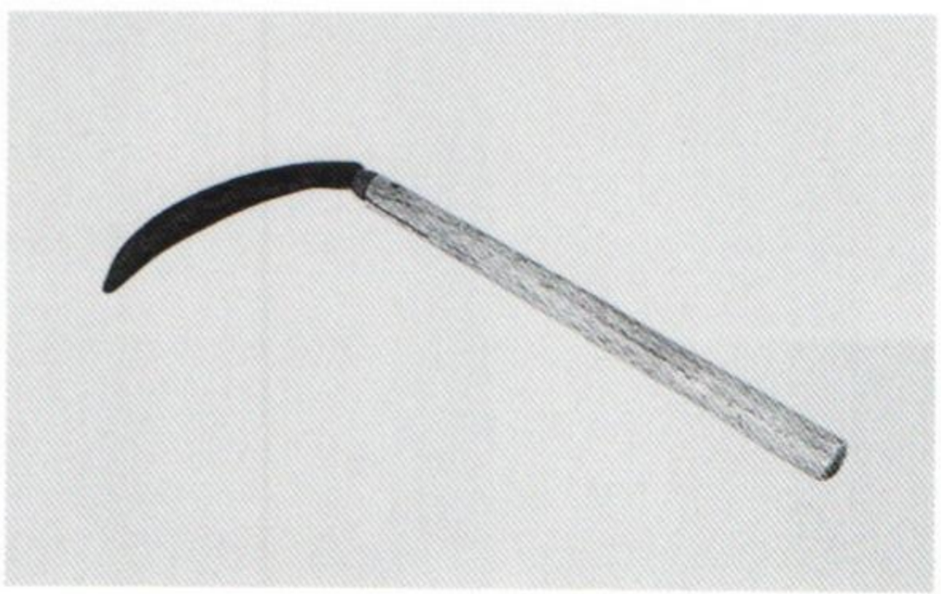
原野農芸博物館蔵

柄の取り付け方は，ヘラやキンツなどと同じく巻き締めの方法である。



50　カマ　－鹿児島県住用村－

刃が鋸歯状に刻まれているのが特徴で，稲の茎がよくひっかかり，切れがよくなるようにしたものである。

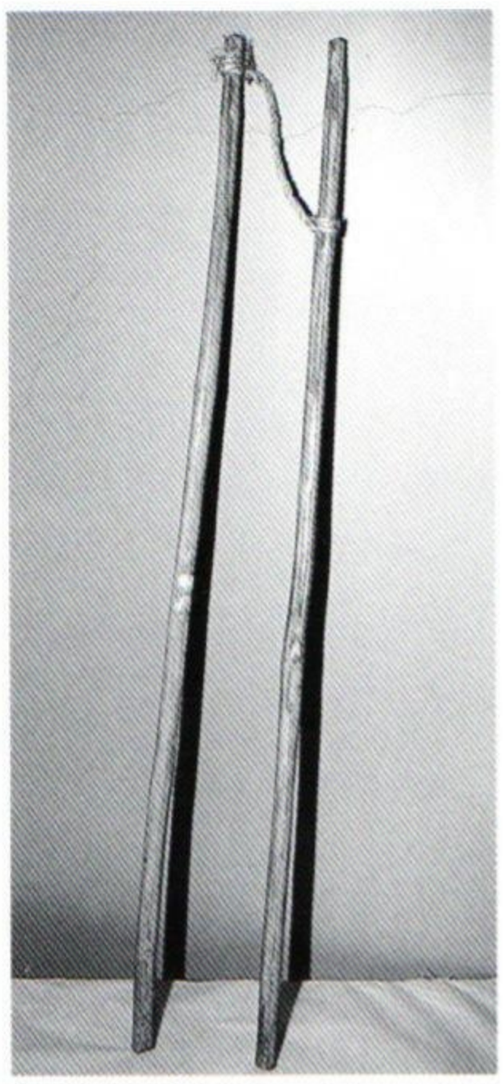


51　カマ　－鹿児島県西之表市－

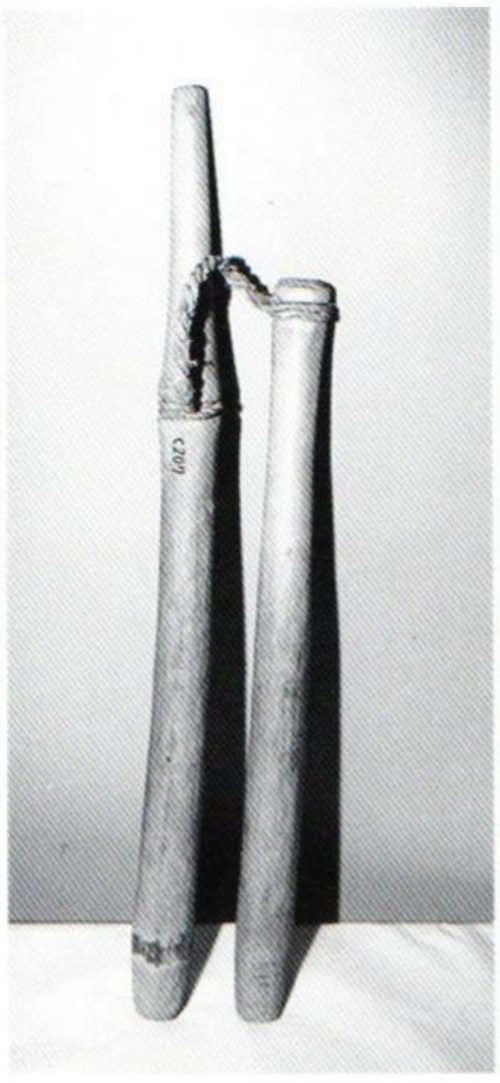
刃と柄の角度が直角に近くなっているのが特徴である。

(5) 巻棒

刈り取った稲の束や麦の束を巻き締めて，台に打ちつけて，脱穀させるのに用いられる道具である。先端と先端より20cmぐらい下とを結んだものは鹿児島と東南アジアに分布し，先端部同士を結んだものは鹿児島，熊本，宮崎，高知に分布する。



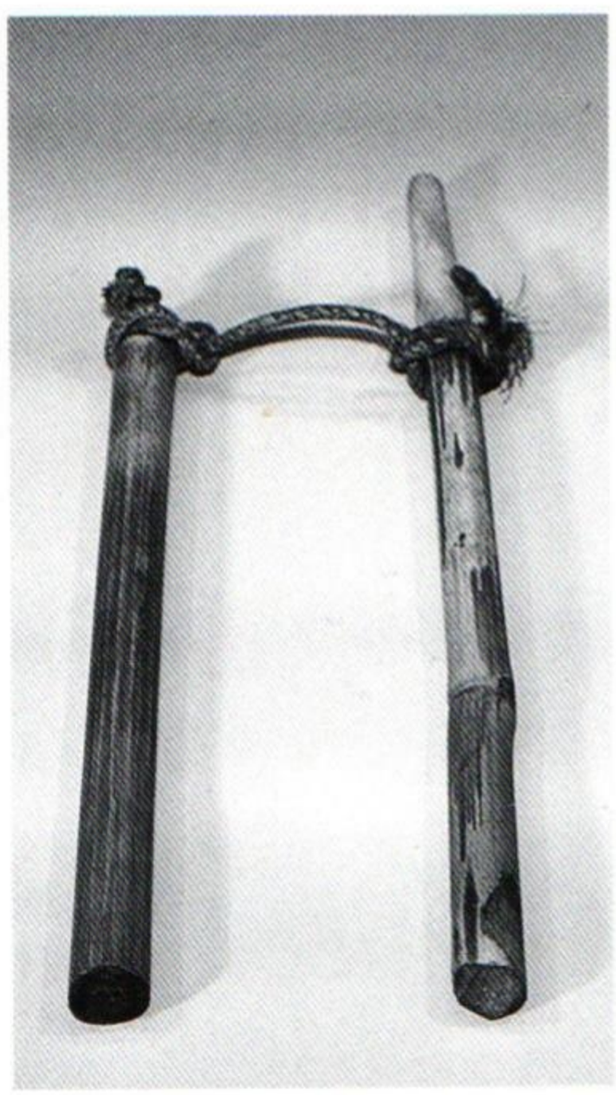
52　稲束挟み　－タイ・ボンタレー・タイ族－
国立民族学博物館蔵



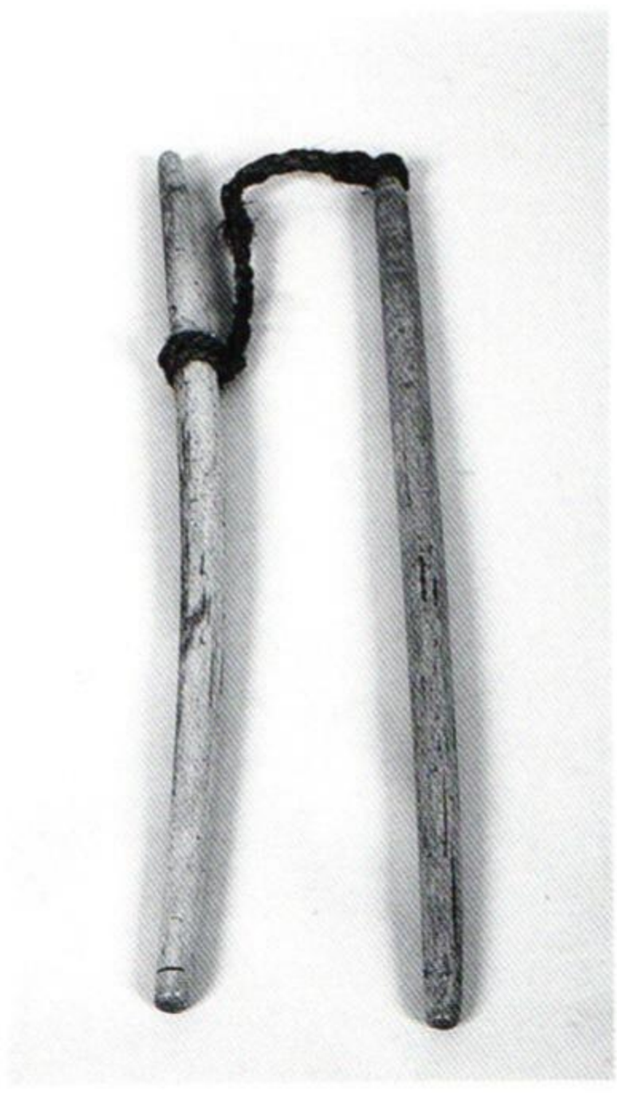
53　稲束挟み　－カンボジア・ビエット村－
国立民族学博物館蔵

巻棒で稲束を締めた様子　－ラオス・ポンサリー県ボンタイ村・タイルー族－

紐をいっぱい延ばして地面に置き，稲を束にして乗せ，先端より下に紐の付いている棒の柄を握り，他の１本の握り手の方に先端を押し出し，他の１本も柄を握り，２本の棒を交叉させて締め上げる。



54　マイカン　－ラオス・ビエンチャン県ノンカン村－
原野農芸博物館蔵
竹製の巻棒である。

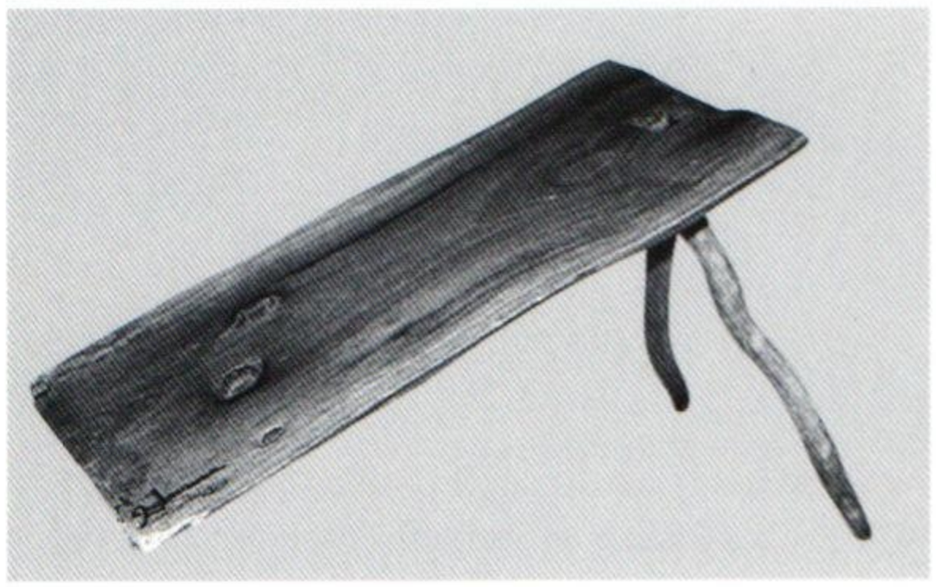


58　マッボ　－鹿児島県隼人町－
紐が先端から18cm下に結ばれた形である。

60　マッボ　－鹿児島県－
２本の棒の先端同士を結んだ形である。

(6) タタキダイ

巻棒で巻き締めた稲束や麦束を，頭上高く振り上げ，叩き付けて脱穀させる台である。東南アジアの少数民族の間では，稲や麦の脱穀に用いられ，鹿児島でも麦を中心に，トボシといわれる東南アジア系の赤米の脱穀に用いられていた。

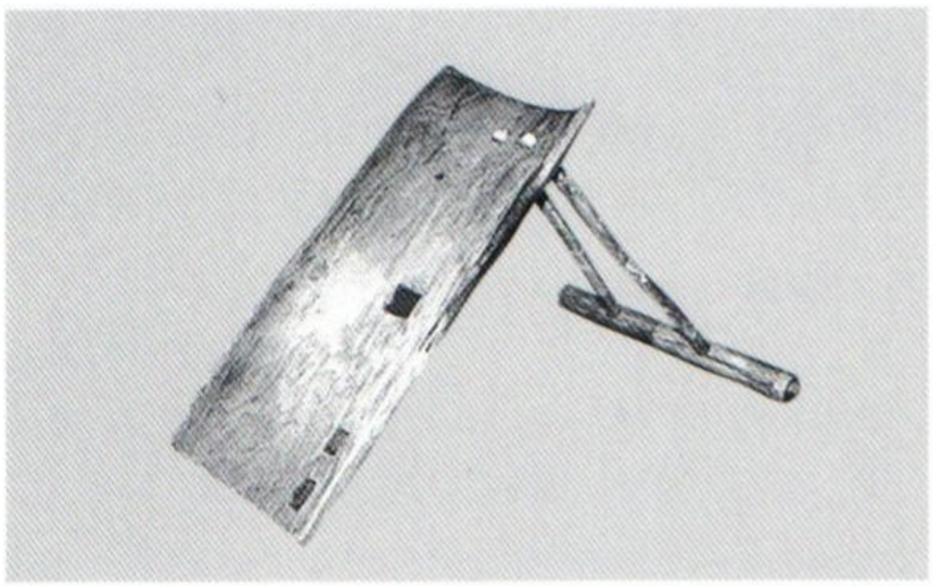


65　タタキ台　－ラオス北部－

原野農芸博物館蔵

平たい板を斜めに立てた形である。足は股木。

稲たたきの様子　－ラオス・ポンサリー県ボンタイ村・タイルー族－



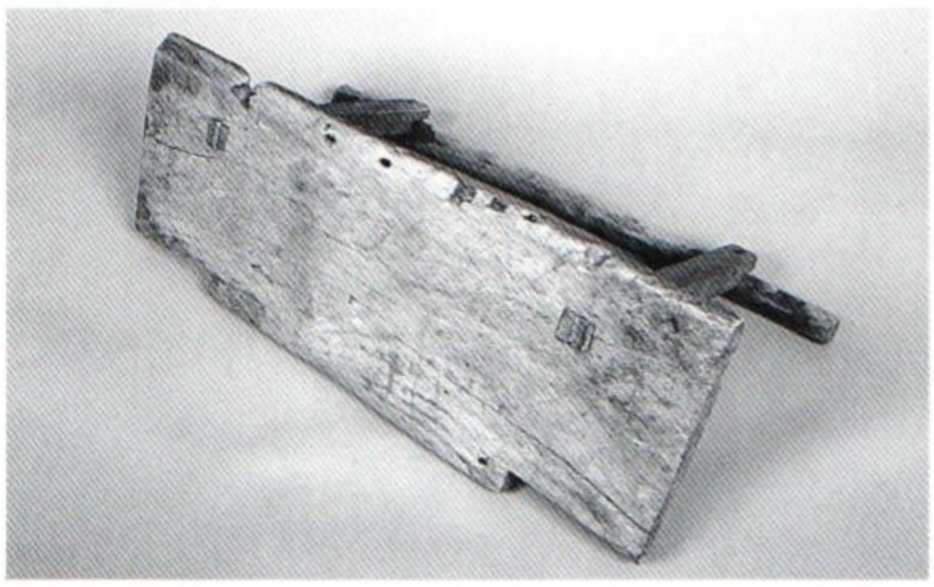
67　タタキ台　－ラオス北部－

原野農芸博物館蔵

大きな丸木を刳り抜いた板を斜めに立てた形である。板面の穴は持ち運ぶ時に手をかける。

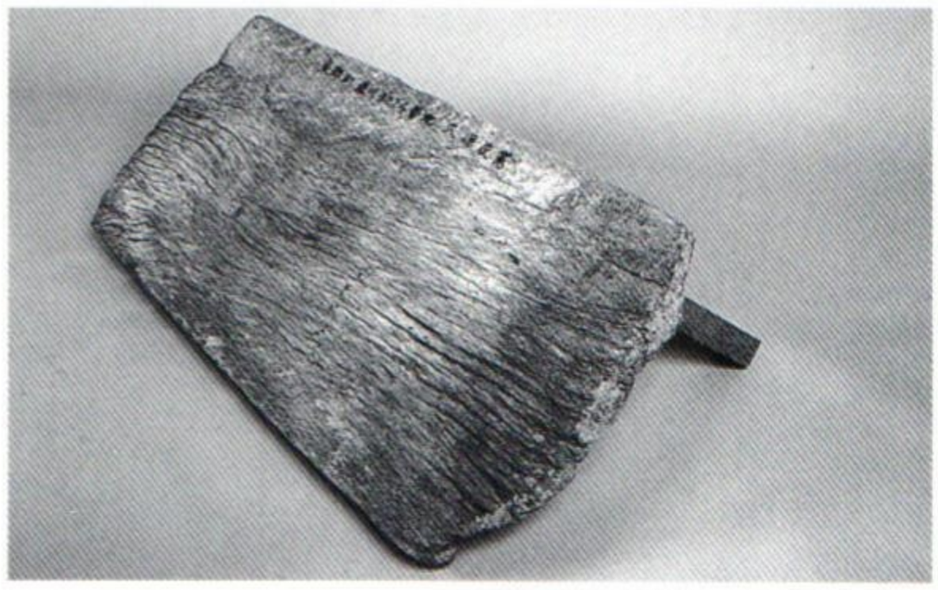
68　ムギウチダイ　－鹿児島県蒲生町－

台の上面を簀の子状にしたもので，杉の角材を使用している。鹿児島県外のものはすべてこの形である。



63　ペンティーカオ　－ラオス・ポーパァン県リヤク村・ラオロン族－

四角の板に足を付けて斜めにした形である。この形は，川内や薩摩郡地域にみられる。



70　タタキイタ　－鹿児島県東郷町－

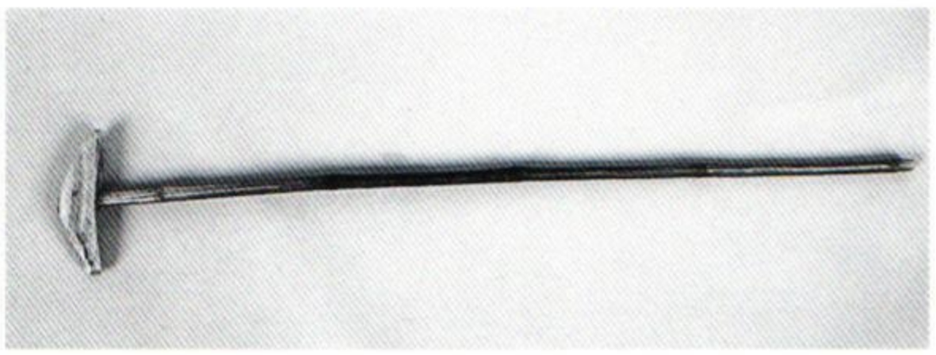
四角の板を斜めにした形である。板は堅木で重量がある。四角の平板な自然石も用いられた。

(7) タタキ棒

穀物の穂を叩き落とし脱穀させる棒である。鹿児島では，ドンヂ，マタボウなどと呼ばれ，叩く面が木口ではなく側面であるのが特徴である。同様の棒は，タイやラオスでもタタキダイで叩き落とした穂をさらに叩いて脱穀させるのに使われる。

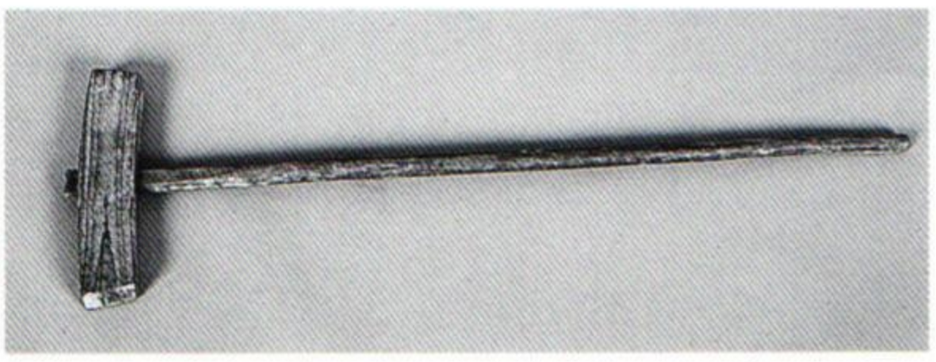
73　コンクーリー　－ラオス・ポンサリー県ボンタイ村・タイルー族－
原野農芸博物館蔵

タタキ棒を使っている様子　－ラオス・ポンサリー県ボンタイ村・タイルー族－

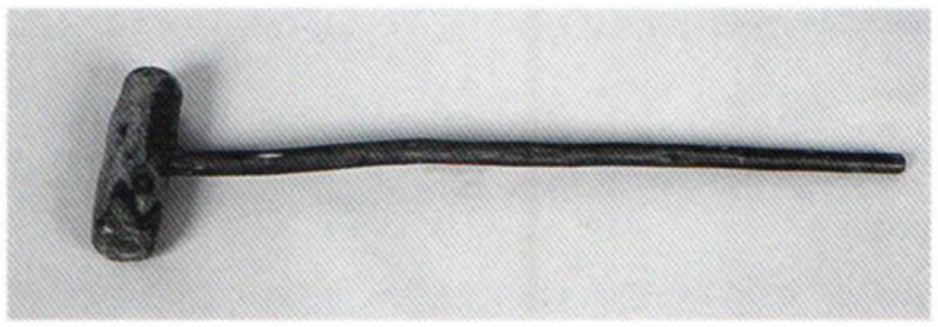


74　トウンノック　－ラオス・ルアンナムタ県ナムルー村・ランテン族－
両手に１本ずつ持ち，タタキ台で叩き落とした穂先を再度叩いて脱穀するのに用いる。

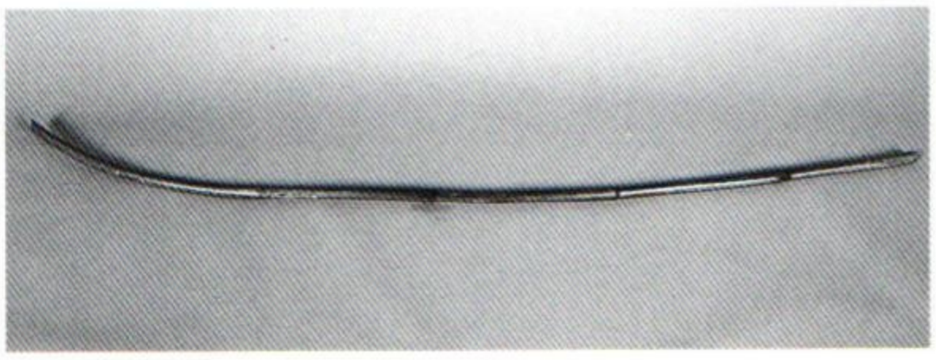
78　脱穀棒　－ラオス・ボケオ県ホイサイ村－
原野農芸博物館蔵
木の曲りを利用し，スティック状に削ったもので，平たい部分で穂を叩き落とす。



80　クアク　－ラオス・ポンサリー県パックカー村・アカ族－
木の角材に柄を付けたもので，平たい部分で籾を叩き落とす。



81　ドンヂ　－鹿児島県松山町－
杉の小丸太に柄を付けたもので，麦や大豆などを叩き落とすものである。側面に使用痕が残っている。

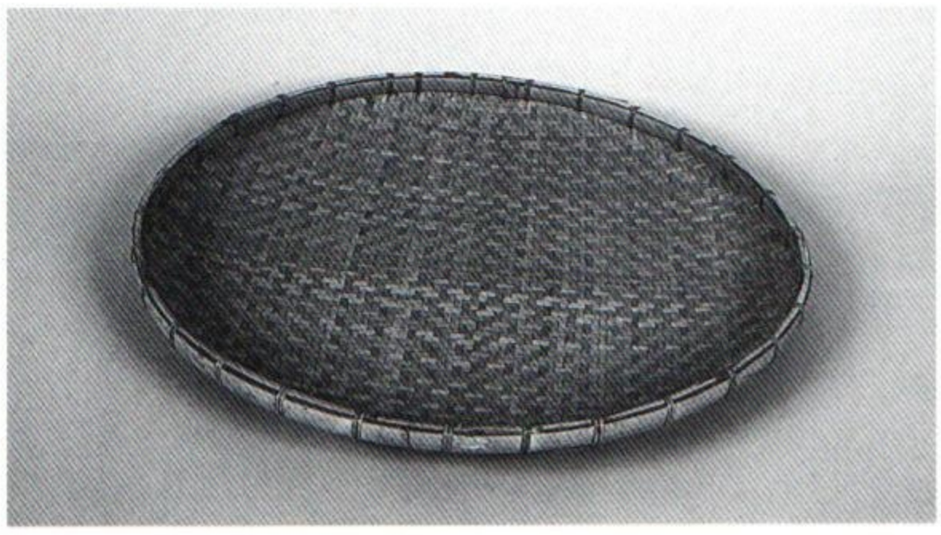


83　コアンティーカオ　－ラオス・ポーパァン県リヤク村・ラオロン族－
籐の曲がりを利用した叩き棒である。

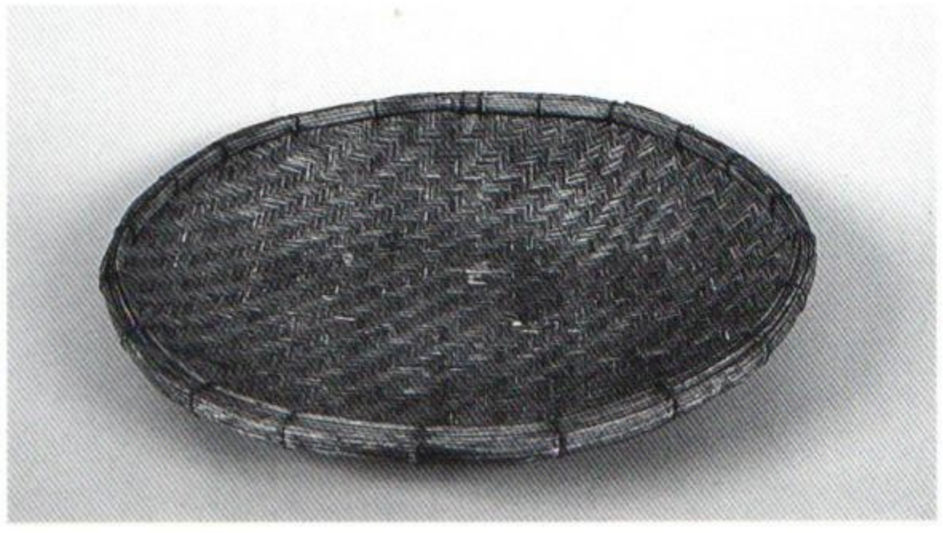
85　豆打棒　－鹿児島県東串良町－
杉の枝の曲がりを用いた叩き棒で，大豆や小豆などの豆を叩き落とすものである。

(8) バラ

二つ越しや三つ越しの網代編みの浅底の笊(ざる)である。奄美以南では，穀物の脱穀，食器，干し物入れなどの目的で使用され，鹿児島以北では脱穀の機能がなくなる。トオシとともに，東・南中国海をとり囲む地域に分布している。



89　ピアルー　－ラオス・ウドムサイ県ドンサーク村・カム族－
二つ越し，二つくぐりの網代編みで，鹿児島のバラと全く同じである。



90　バラ　－鹿児島県与論町－
三つ越し，三つくぐりの網代編みで，日本では奄美や沖縄に集中して分布する。

(9) トオシ

脱穀や精白した穀物の粒を精選する浅底の平笊である。鹿児島以南のものは，笊の中央部をバラの透かし編みにし，四方脇にはバラの密編みを残した形態で，バラとセットで分布し同じ系統のものと思われる。

92　クーン　－ラオス・ルアンナムタ県ホエダム村・カム族－
脇の密編み，中央の透かしともに二つ越し。

93　フミユイ　－鹿児島県知名町－
脇の密編み，中央の透かしともに二つ越し，二つくぐりで，左のものと全く同じである。

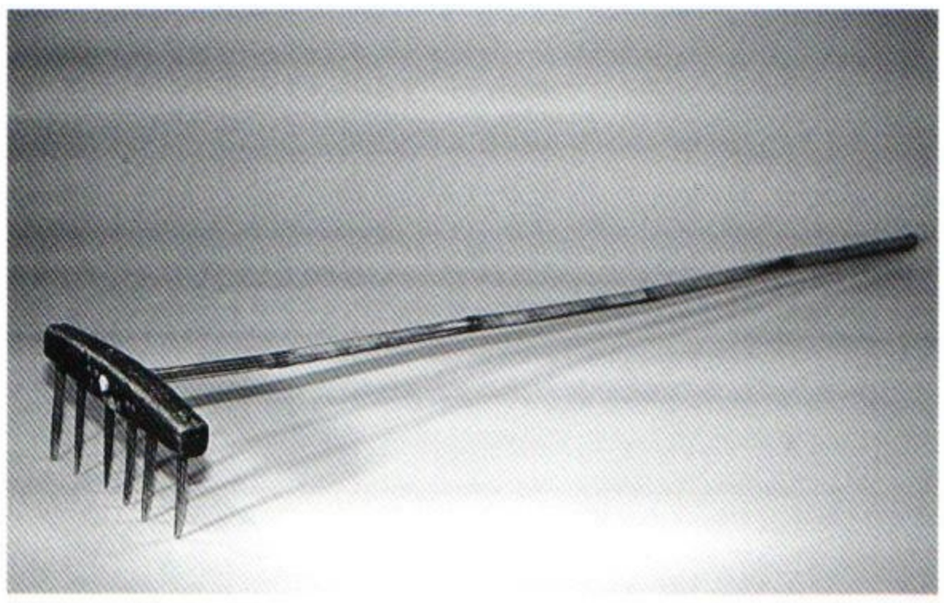
(10) ウチワ

タタキ台で打ち落とした穀物をあおいで，藁くずを飛ばして精選するものである。風を利用して精選する道具で，日本で用いられた手回し扇風機の古い形のものである。

96　ビーン　－ラオス・ルアンパバーン県ナディ村－
網代編みの平たい板を割り竹で挟んで作られている。

⑾　草かき

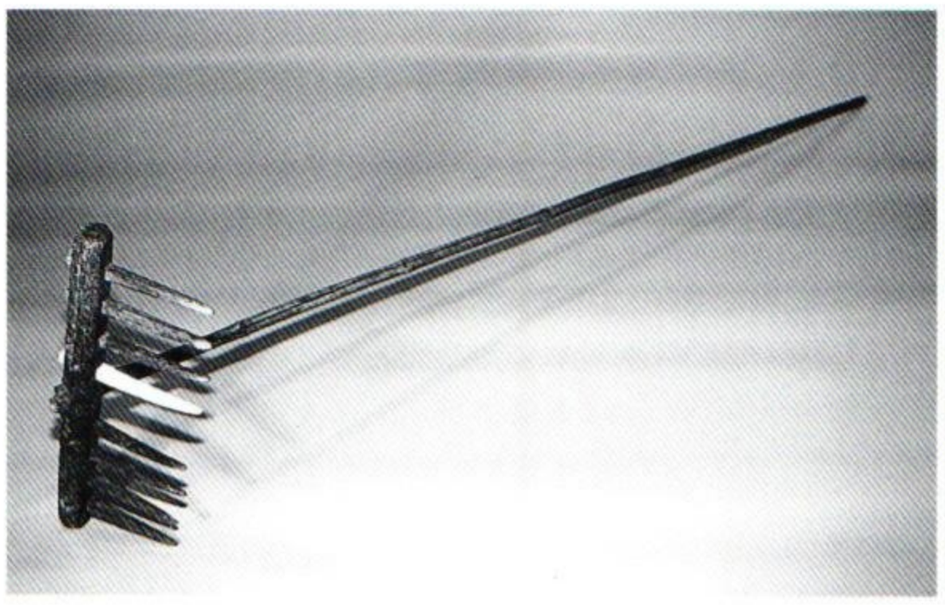
脱穀した穀物から藁くずを取り除いたり，焼畑の焼き残りや草などをかき集める道具である。鹿児島の草かきは，焼畑や常畑で用いられる基本的な農具の一つである。



97　ワアンサン　－ラオス北部パサック村・タイダム族－

原野農芸博物館蔵

歯は６本植え込まれており，竹串である。



98　草かき　－タイ北部・マイ村・カヤニ族－

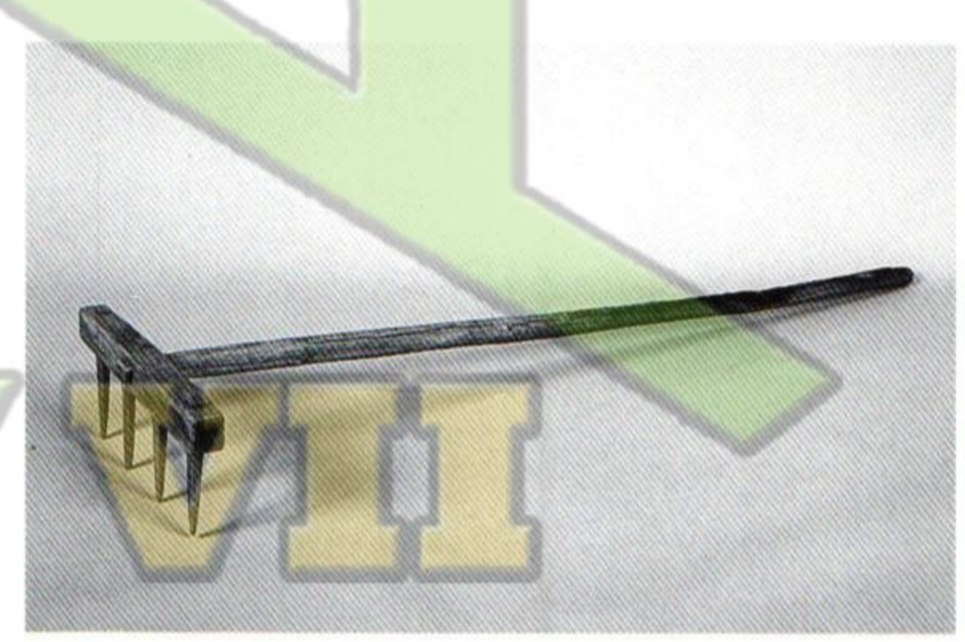
原野農芸博物館蔵

柄と歯の角度が60度になっており，草をかき集め易くなるように工夫されている。

99　マイサッター　－ラオス・ルアンパバーン県－

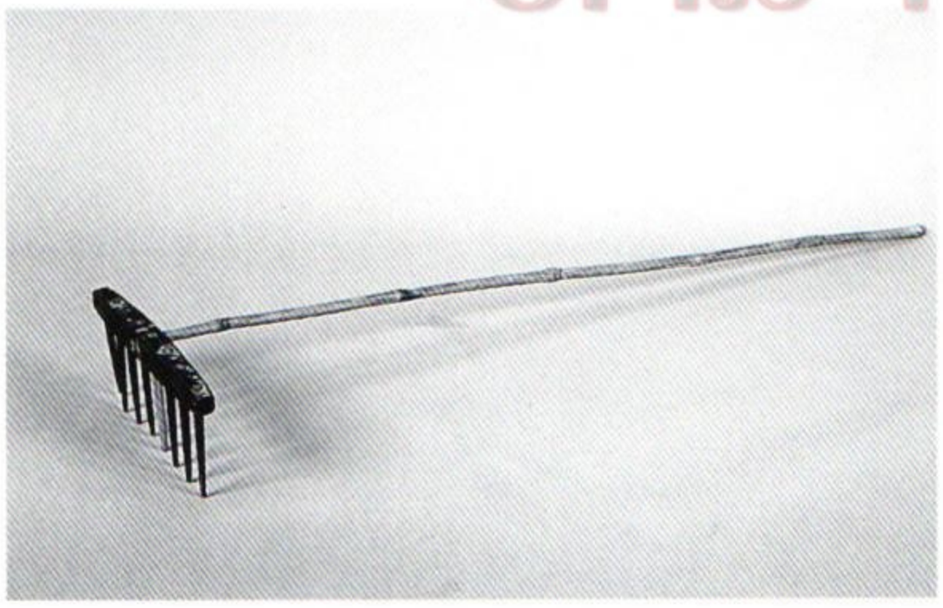
原野農芸博物館蔵

籾をかき集めるエブリの一種である。



100　マイサンカオ　－ラオス・ホーパァン県リヤク村・ラオロン族－

木製のもので藁かきに用いる。



101　ワンサン　－ラオス・ルアンナムタ県ラカンマ村・タイダム族－

柄と歯は竹製である。歯をとめる四角の横木の上面にはX状の刻みが連続して刻んである。

102　クサカッ　－鹿児島県有明町－

スイカ畑や荒れた畑地を除草したときに，藁くずや草を寄せ集めるのに用いる。

ห้ามจำหน่าย

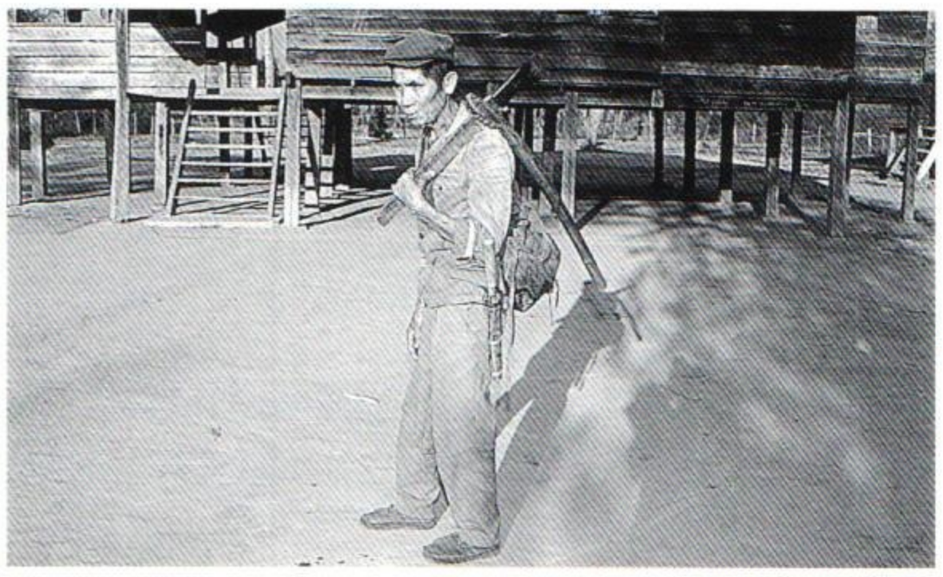
2　伐(き)る・捕る

山の木や竹を伐ることは，照葉樹の森に生きる人々の生活そのものであった。焼畑を開くこと，薪や材木を得るために人々は，さまざまな道具を作り出した。斧・山刀などがその代表的なものである。また，食糧としての鳥や獣を捕るために，罠(わな)や弓を作り出した。ここでは，山の生活に密着した道具の比較を通して，山の文化の共通性を紹介する。

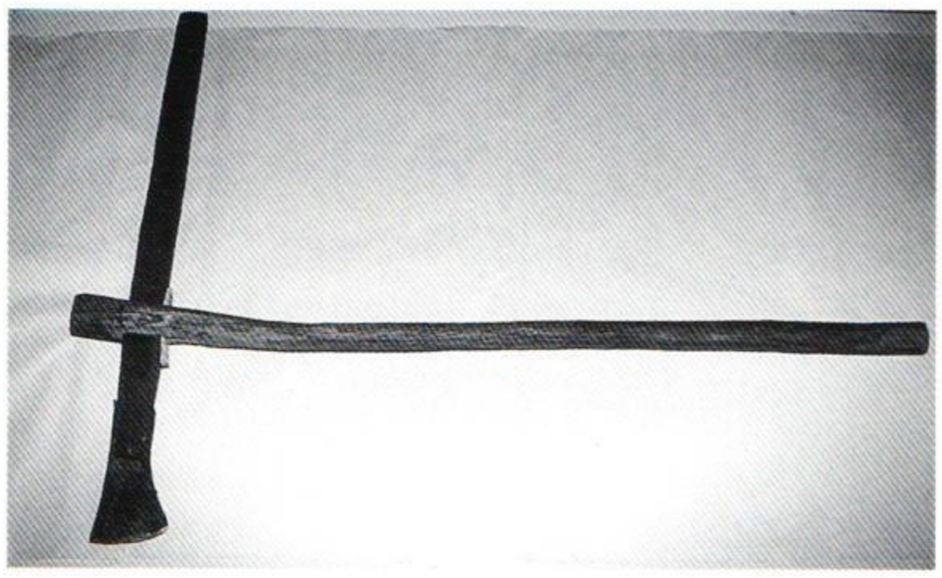
(1)　斧

木を伐採するのに用いる道具である。棒の先に巻き締める方法で刃部を取り付け，それと直角に柄となる棒を取り付けた斧は，沖縄県から南にかけて分布する。弥生時代の遺跡から発掘されたものと酷似している。

103　伐木用斧　－ラオス・シェイクアン県ナムノイ村・タリアン族－
国立民族学博物館蔵
木の枝の曲がりの部分に刃を取り付けてある。



斧を持って焼畑から帰ってきた男　－ラオス・シェイクアン県センリ村－



104　伐木用斧　－ラオス・サバンナケット県サクン村・ラオ族－
国立民族学博物館蔵
柄の先に穴をあけ刃の支木を差し込んである。

105　クワンターフン　－ラオス・ホーパァン県リヤク村・ラオロン族－
刃の取り付け方は，支木を巻き締める形で，奄美，沖縄のフェラや鹿児島のキンツと同じである。

108　手斧　－沖縄県八重山郡－
石垣市立八重山博物館蔵
刃の支木に穴をあけ柄を差し込んである。刃頭部に穴を加工し，支木を打ち込む形で刃を取り付けてある。

(2) 山刀

焼畑を伐り開く道具であるとともに，包丁としての機能をもっている道具である。東南アジアのものと比較すると，トカラで用いられるヤマキイ（山伐り）や鹿児島のナタガマと呼ばれるものの系譜関係がうかがえる。

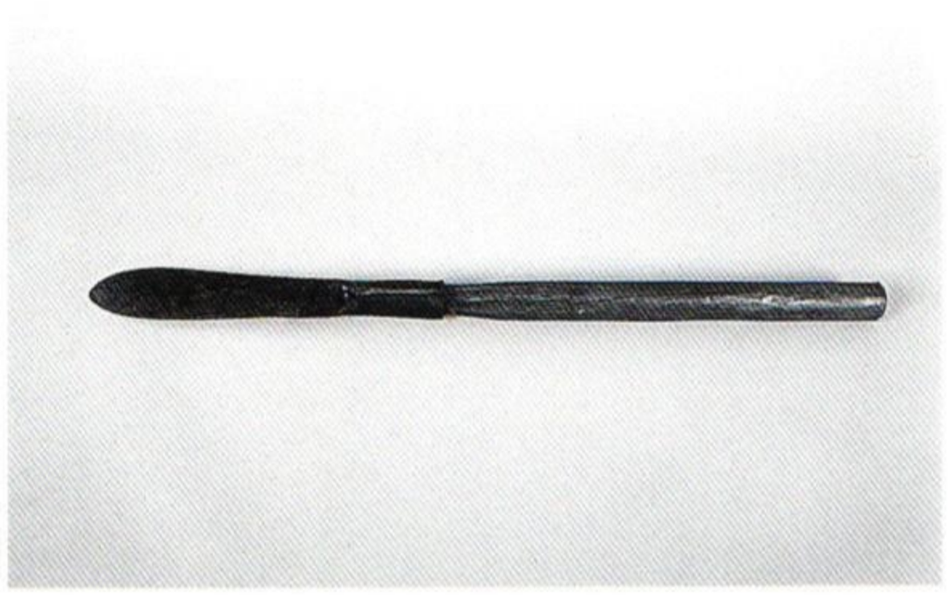
111　山刀　－ラオス・ルアンパバーン県パクホン村・ラオ族－

国立民族学博物館蔵

刃部が直線に整形されているのが特徴である。

山刀で焼畑を薙ぎ払う人々　－ラオス・ルアンパバーン県カム村・カム族－

トウモロコシを植えるための焼畑で，草原に近い状態である。

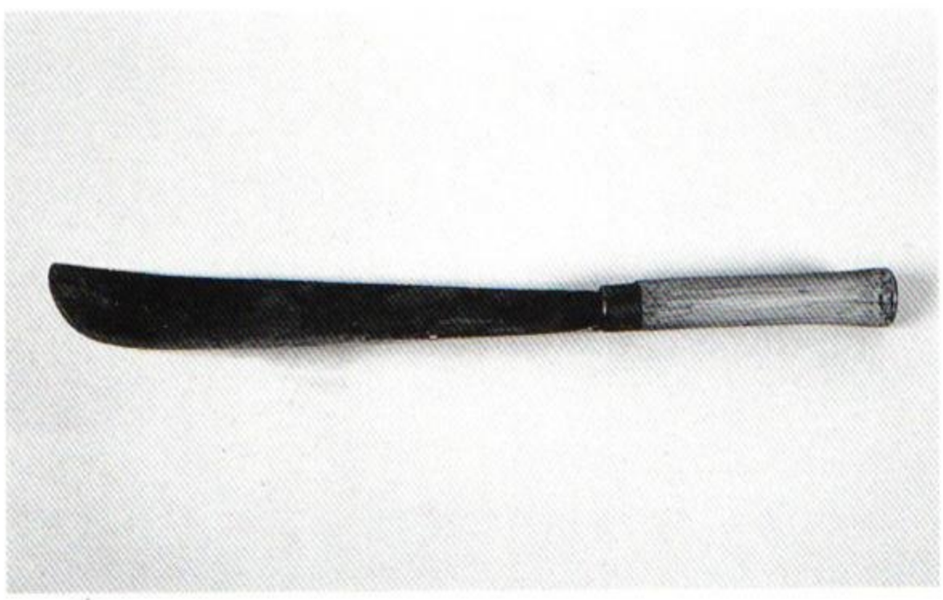


113　パー　－ラオス・ルアンナムタ県ラカンマ村・タイダム族－

焼畑を薙ぎ払うのに用いる山刀である。柄の取り付け方は，巻き締めの方法である。

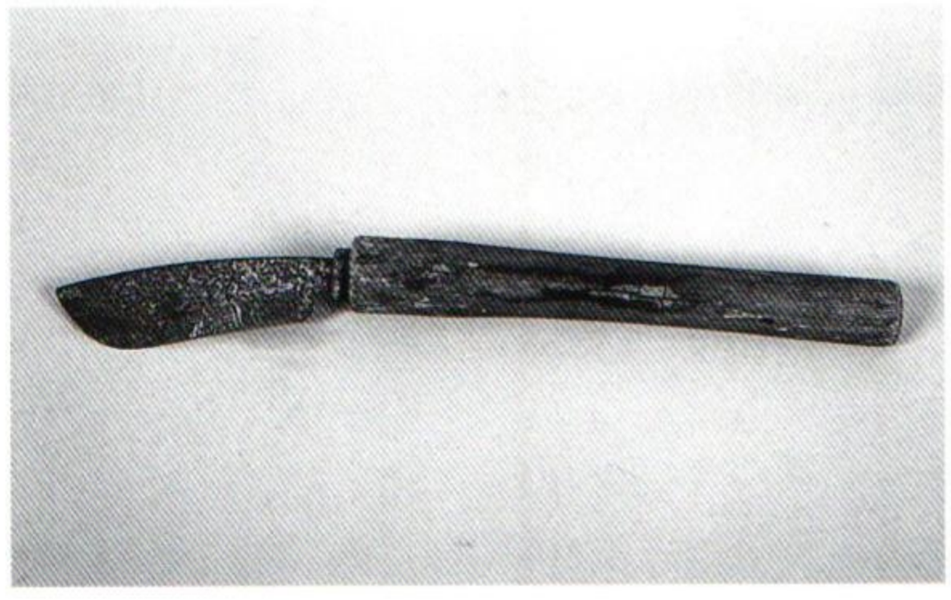
114　パー　－ラオス・ホーパァン県リヤク村・ラオロン族－

鎌の形をしており，南九州のナタガマに酷似する。



116　パー　－ラオス・ホーパァン県リヤク村・ラオロン族－

刃先が反り上がっており，トカラ列島のヤマキリに似ている。



117　ヤマキリ　－鹿児島十島村－

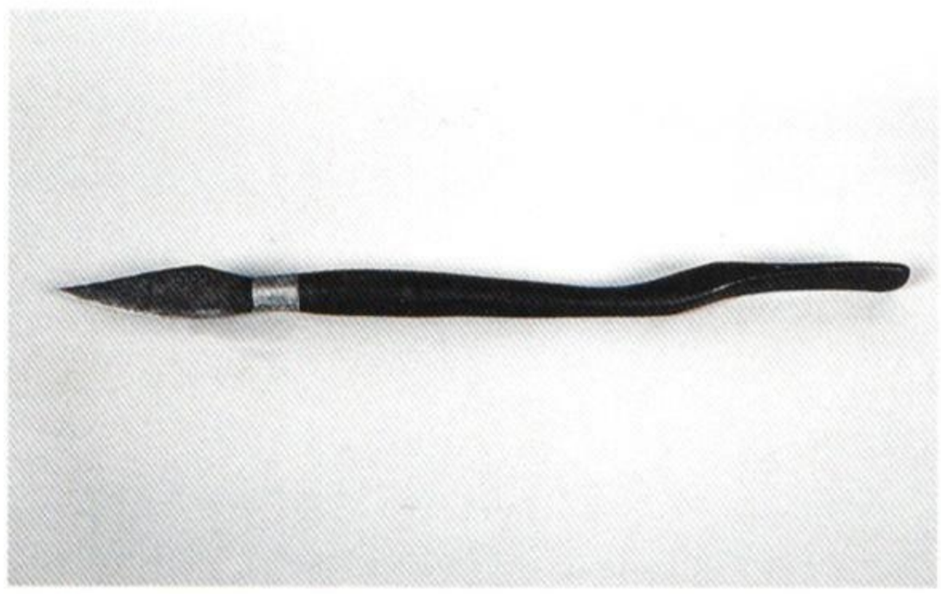
粟の焼畑（アワヤマ）を作るため，竹山を薙ぎ払う山刀である。播種後に生える竹や草を薙いだり，竹細工や料理にも用いる。

119　ヤンボウチョウ　－鹿児島県上屋久町－

焼畑を薙ぐのに用いたり，木の小枝を切るのにも用いる。ホウチョウの名称から魚の料理にも用いられたと思われる。

120　ナタ　－鹿児島県三島村－

鉈と鎌との両機能を持っているところから，「ナタガマ」とも呼ばれる。焼畑の竹山を薙いだり，竹細工にも用いる。



126　ミトホッ　－ラオス・ルアンパバーン県コーアン村・ラオルーン族－

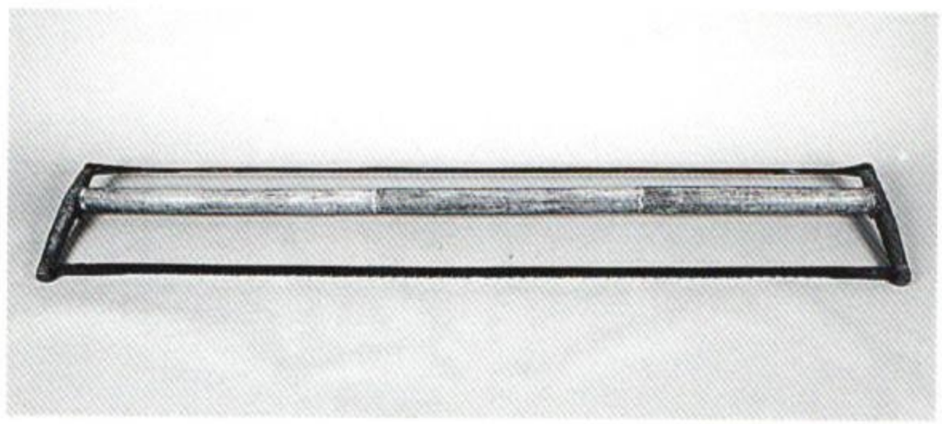
竹細工に用いられる刀である。中央の湾曲部には上腕部を当て，後部の湾曲部には大腿部を当てて，テコの原理を利用して竹を削る。

127　ミヤ　－ラオス・ルアンナムタ県ラッハーシエッ村・プノイ族－

竹細工に用いるナイフである。こうしたナイフ１本で竹細工をする技術は，トカラや鹿児島の竹細工にもみられる。

(3)　鋸

鋸には，木目を直角に切るヨコ挽きと木目に沿って板に割いていくタテ挽きとがある。ここでは，鋸の歯に張りをもたせる構造のヨコ挽き鋸を紹介する。この形は，沖縄県にも分布するが，東南アジアのものも沖縄のものも，引いて切る形になっている。



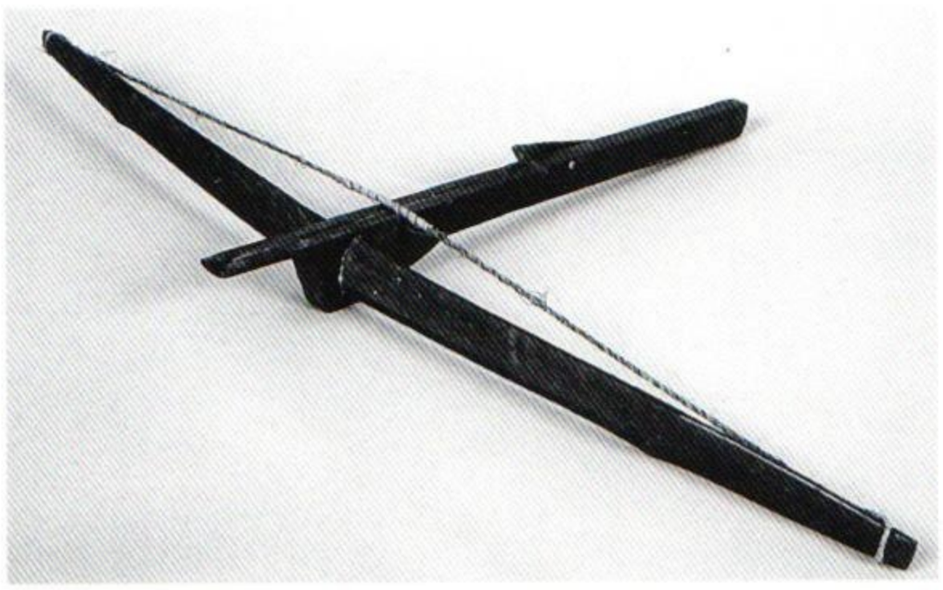
128　ルイ　－ラオス・ポンサリ県ソプアッド村・ラオ族－

上側の紐を巻いて両端の縦枠を引き締め，下側の歯の張り具合いを調整する。二人で引く鋸で，歯部の中央で歯が反対向きになる。

ルイで板を割く男たち
－ラオス・シェイクアン県ナムホン村近く－
材木に墨を打って，それに沿って引き割る。

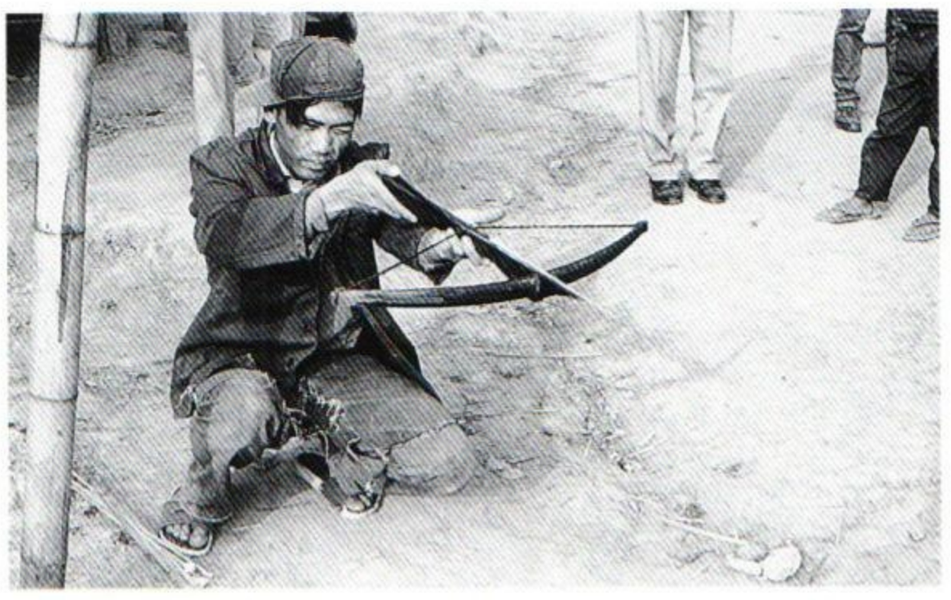
(4) デッキュ

竹や木のばねを利用して矢を飛ばし，鳥や獣を射る弓である。国内で民俗資料として分布するのは，鹿児島のみで，主に大隅半島を中心にみられるものである。東南アジアの山岳部では猟銃とともに現在も使われている。

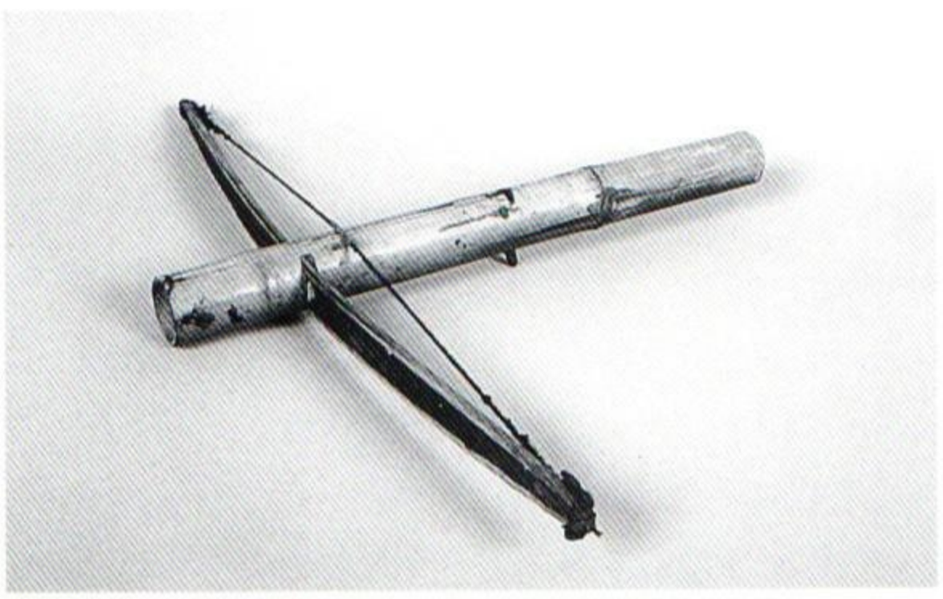


133　ナアー　ーラオス・ホーパァン県パンサイ村・モン族ー

割竹のバネを利用した弓である。台木の中央の溝に矢を乗せて，絞った弦を外して射る。

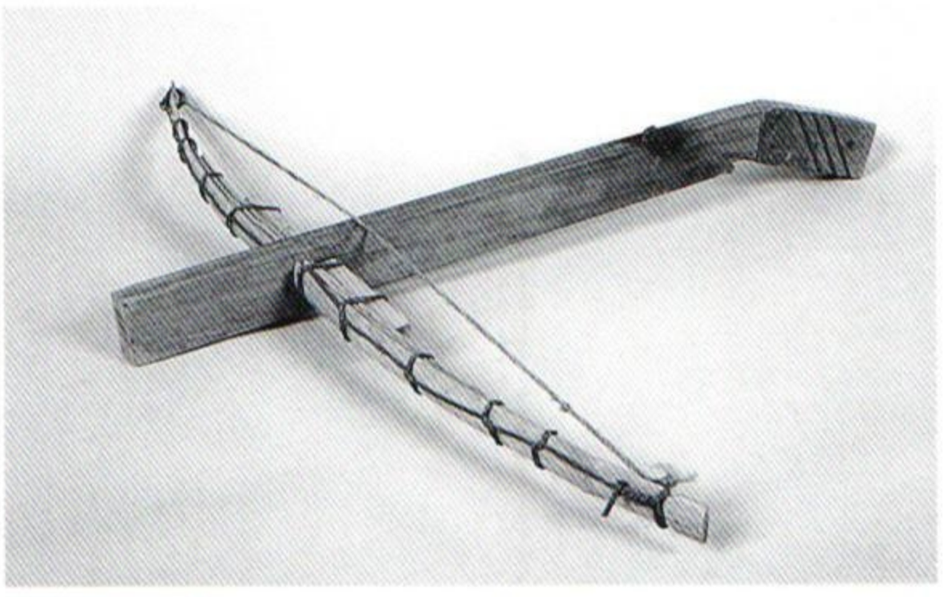


ナアーを構える青年　ーラオス・ホーパァン県ナティアン村・タイデン族ー



134　カ　ーラオス・ルアンナムタ県チャラ村・クイ族ー

円筒の竹筒を台にした弓である。

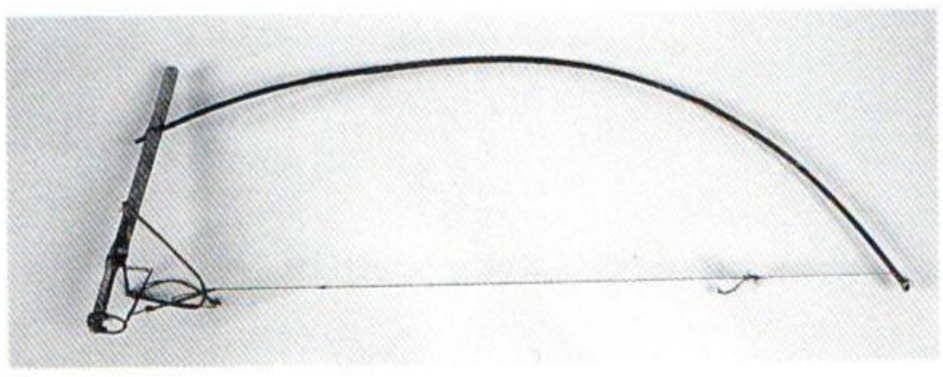


135　デッキュ　ー鹿児島県志布志町ー

割竹を重ね合わせてバネにした弓である。庭に放し飼いにした鶏や野鳥を射止めるのに用いられたものである。

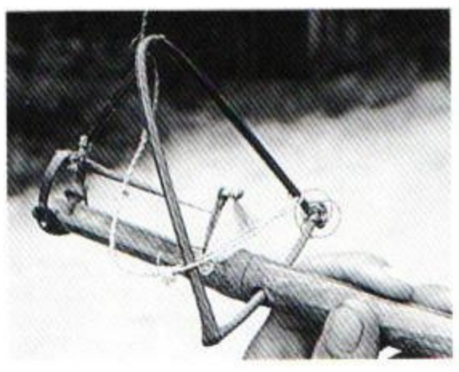
(5) ワナ

ワナの名称は，輪穴，輪縄という語からきているといわれる。ワナは，ばねの力をたくわえるチンチロを外すとばねが弾ねて，獲物を締めあげるものである。



142　小鳥のワナ　ーラオス・ルアンナムク県ナムレツ村・アカ族ー

一人で数十本のワナを持って山に仕掛けに入る。



仕掛けの仕組み

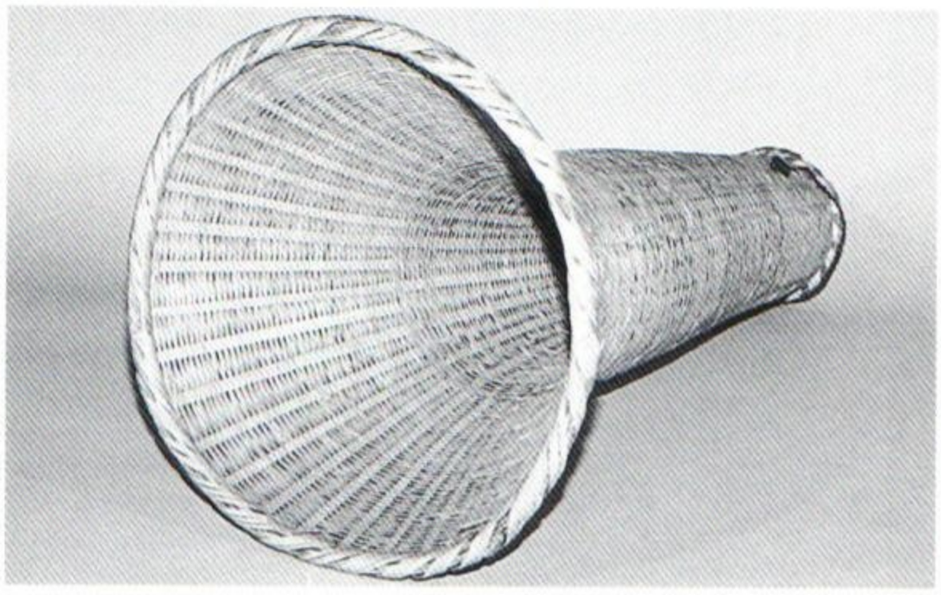
小鳥がかかった様子

3　漁る（すなど）

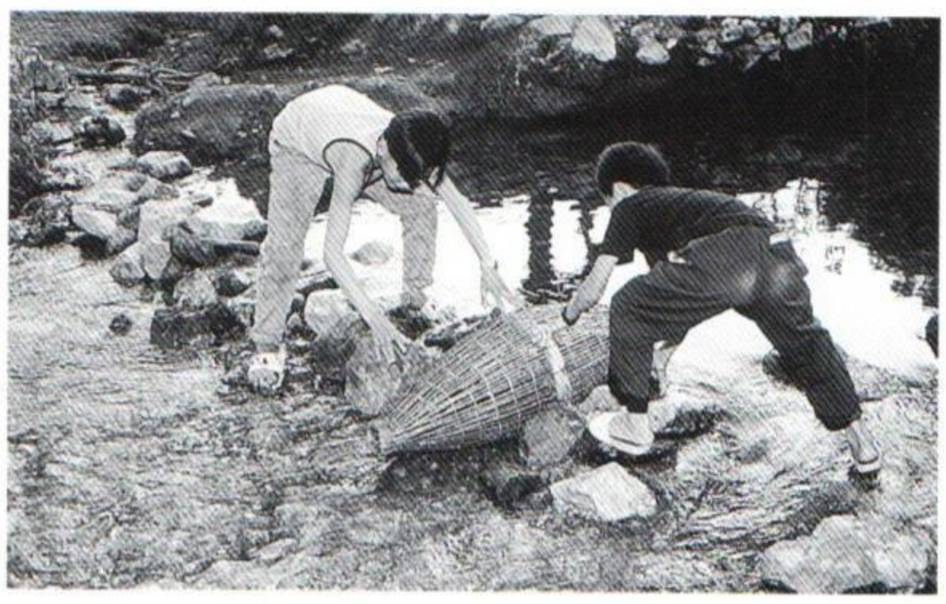
東南アジアでは，大河メコンをはじめ大小の河川や沼，水田でさまざまな淡水漁の漁業が行われている。そこで用いられている竹製の筌（ウケ）やビクなどの漁具や漁法は，川内川をはじめとする鹿児島の多くの河川のものと酷似している。特に，川エビやウナギ，ナマズを捕るための筌に工夫がみられ，海の漁法や漁具とともに，南九州から南西諸島にかけての文化の源流をさぐるための，重要な手がかりを示している。

(1)　ウケ

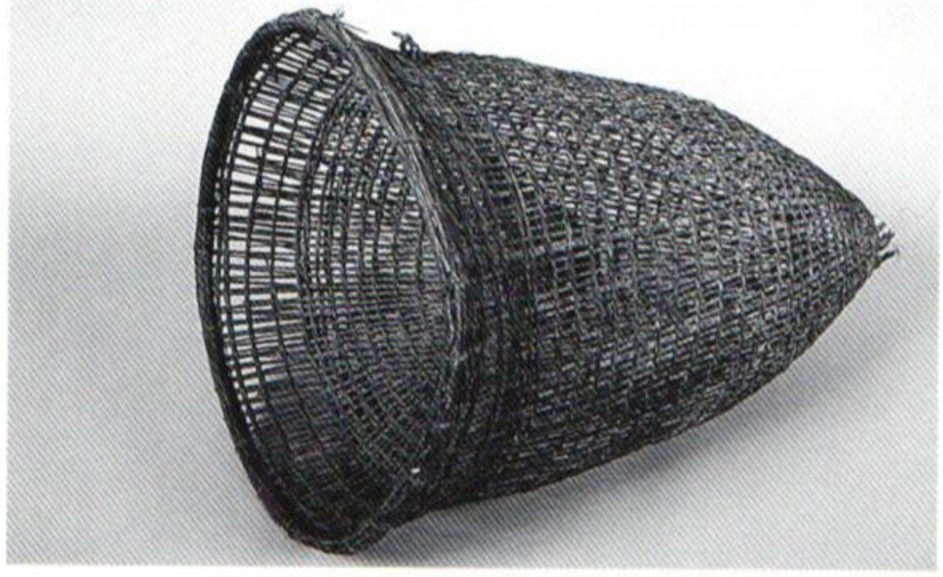
ウケには，横に寝せて仕掛ける横置きと，竪に仕掛ける竪置きとがある。また，川をＶ字型にせき止めた先端部に仕掛ける型や筌の中に餌を入れて誘い込む型，さらに水の落差を利用して落とし込むカエシのないものがみられるなど，ほとんど共通する。



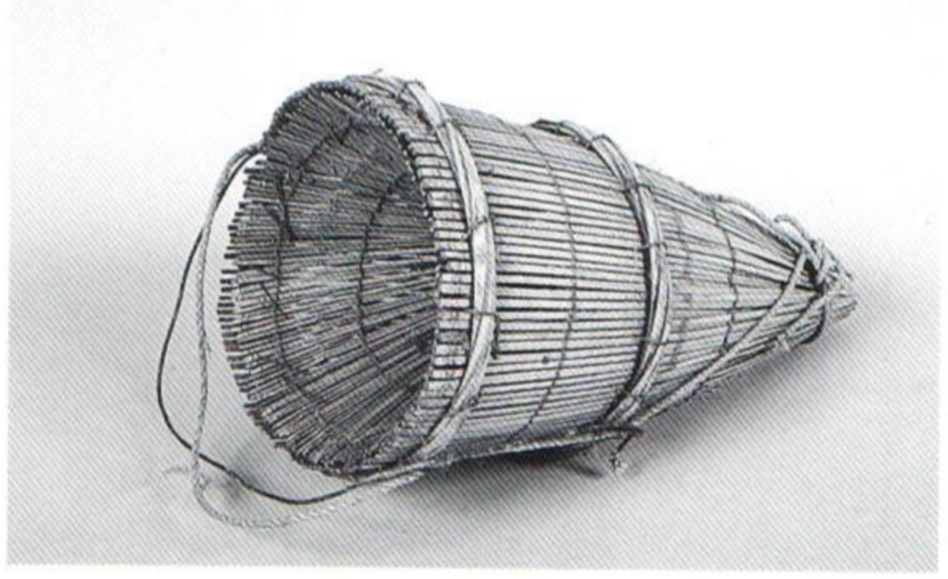
145　サカテゴ　－鹿児島県宮之城町－
広口の縦ヘギを１本越しにゴザ目編みしてシタを作り，残りのヘギで胴部を編む。口を下流向けにし，５～６月川を上るエビを捕る。



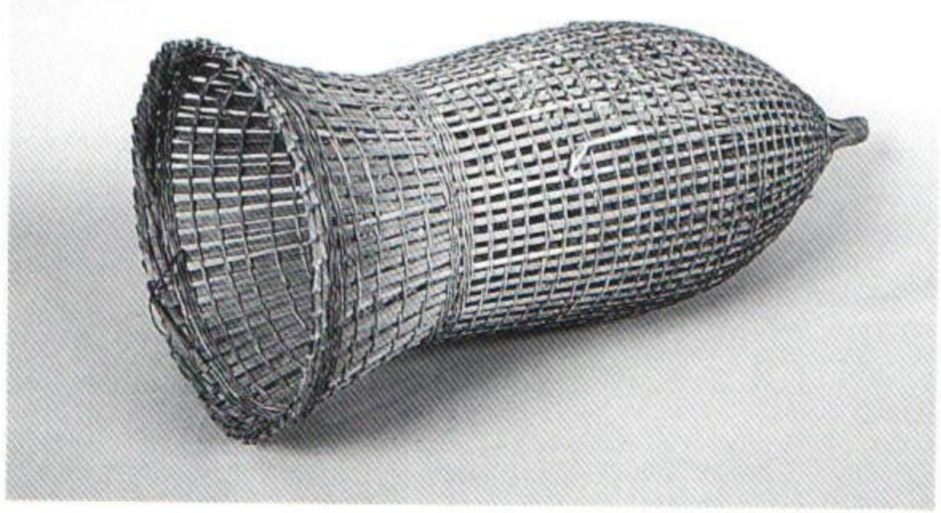
ウケを仕掛ける子供たち　－ラオス・ホーパァン県リヤク村・ラオロン族－



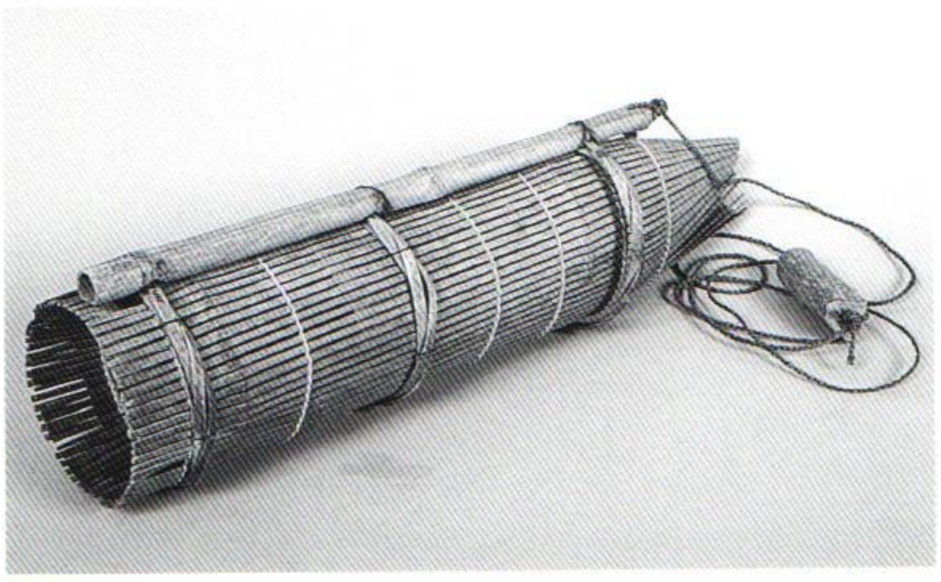
146　サイ　－ラオス・ホーパァン県リヤク村・ラオロン族－
中に２段にカエシが付けられている。



147　アネク　－鹿児島県奄美大島－
川を竹の簀の子でＶ字に堰き止め，下流の突端部に仕掛ける。秋に川を下るモクズガニを捕る。

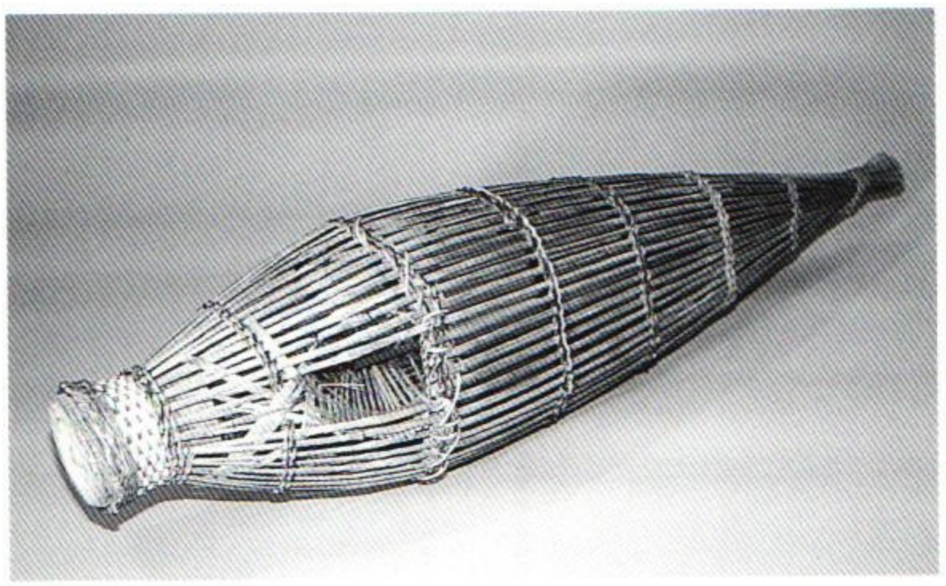


148　スーン　－ラオス・シェイクアン県サン村・ラオ族－
首くびれ広口の筌である。節の部分を残して，１本の竹を割って縦ヘギとして編んでいる。中に白蟻を入れて，口を下流に向けて仕掛ける。



149　エビテゴ　－鹿児島県宮之城町－

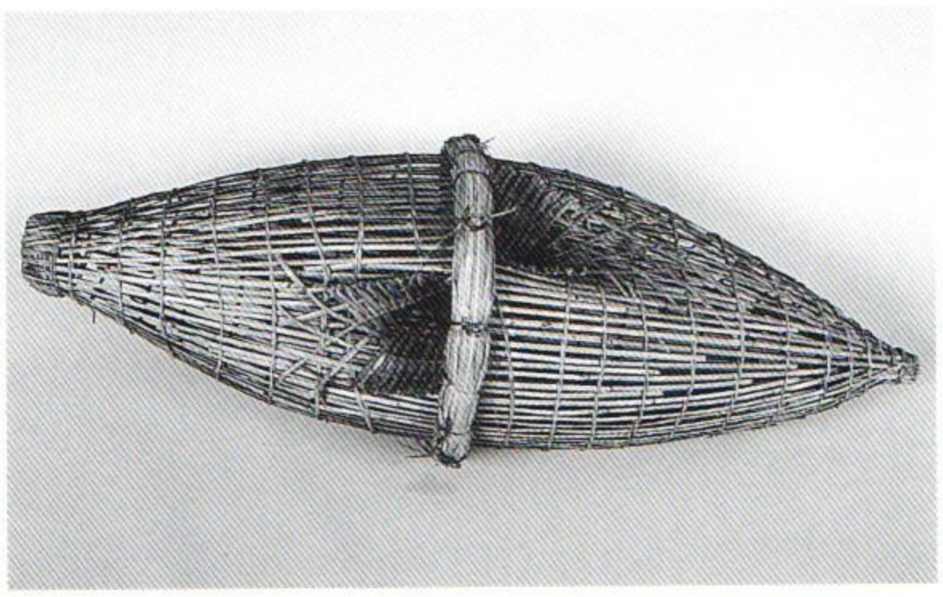
細割り竹を簀の子状に編んで作られている。中に餌を入れ，口を下流に向けて仕掛け，手長エビや瀬エビを捕る。



156　トン　－タイ・スコタイ－

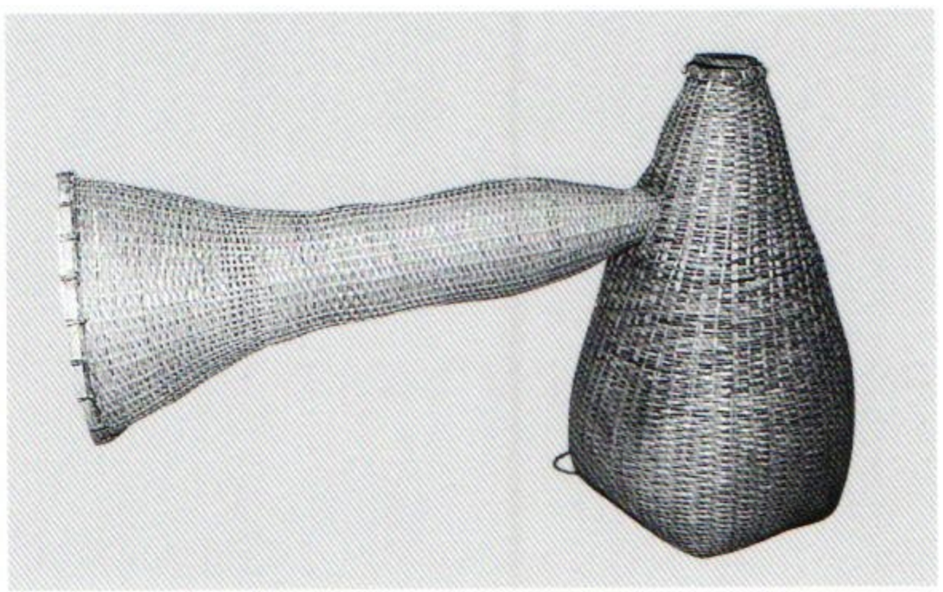
原野農芸博物館蔵

内側に輪を入れて割り竹を結い付けて作り，肩口にシタが付けられている。ナマズを捕る。



157　サイリンガー　－ラオス・ホーパァン県リヤク村・ラオロン族－

川の流れに対し縦に仕掛ける。中に餌は入れないが，上流からも下流からも魚が入る。



161　ソンスンパー　－ラオス・パサク村タイダム族－

原野農芸博物館蔵

横置き型と縦置き型の筌が組み合わされたものである。田の水の落ち口に仕掛け，縦型のものは穴を掘って埋め，魚を生かして捕る。

165　トン　－ラオス・ホーパァン県サン村・ラオ族－

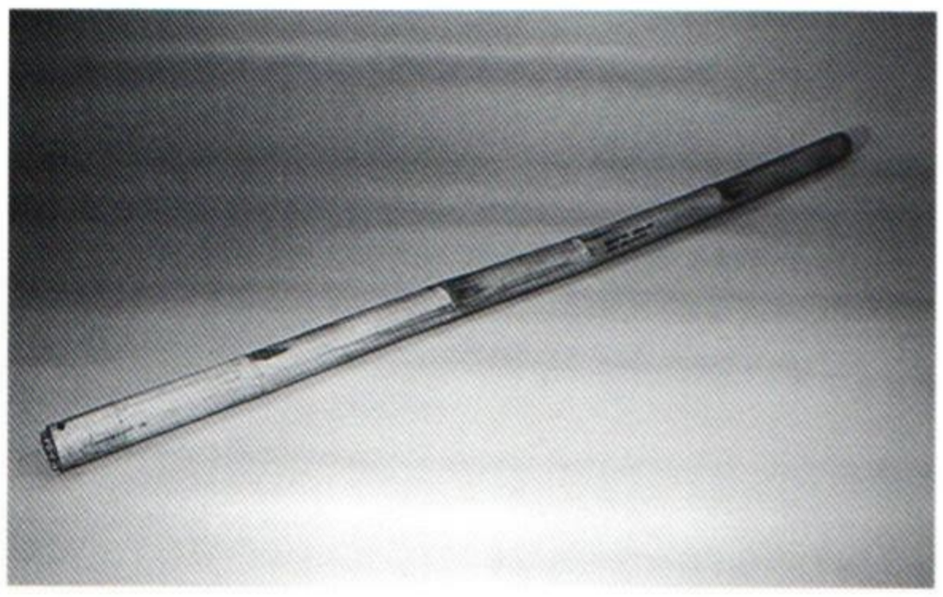
縦置き型の筌で，中に白蟻を入れて蓋の上に石を乗せ，口を下側に向け夕刻仕掛け，早朝あげる。ナマズを捕る筌である。

166　サエ　－ラオス・ルアンナムタ県ホエダム村・カム族－

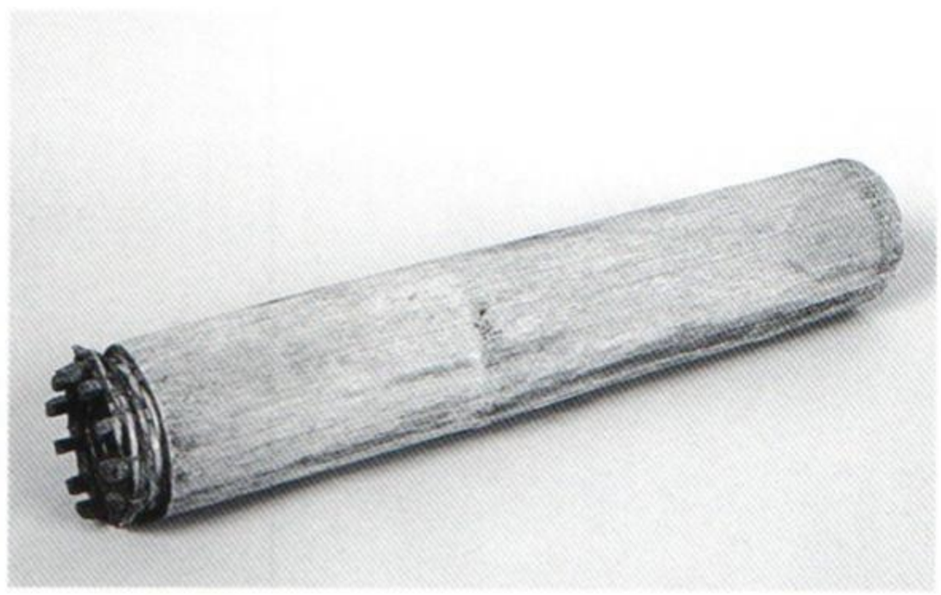
縦置きの筌で胴部にシタがある。中にミミズを入れて夕刻池に仕掛けてウナギを捕る。

171　エビカゴ　－鹿児島県串木野市－
籠の胴部にシタを付けて，笊の蓋をかぶせるものである。中にタニシやカワニナのつぶしたものを入れ，口を下流に向けて仕掛ける。6～11月頃手長エビを捕る。

172　カニテゴ　－鹿児島市－
丸胴のビクの胴部に口を付けた縦置きの筌である。中に餌を入れ，蓋の上に石を乗せて川に仕掛けて，モクズガニを捕る。



175　バンラン　－東北タイ・アエラワン村－
原野農芸博物館蔵
竹筒の表皮をはぎ，途中の節を抜いて，後の方に水抜きの穴をあけてある。入口にシタを付け，中に餌を入れ口を下流に向けて仕掛け，ウナギを捕る。

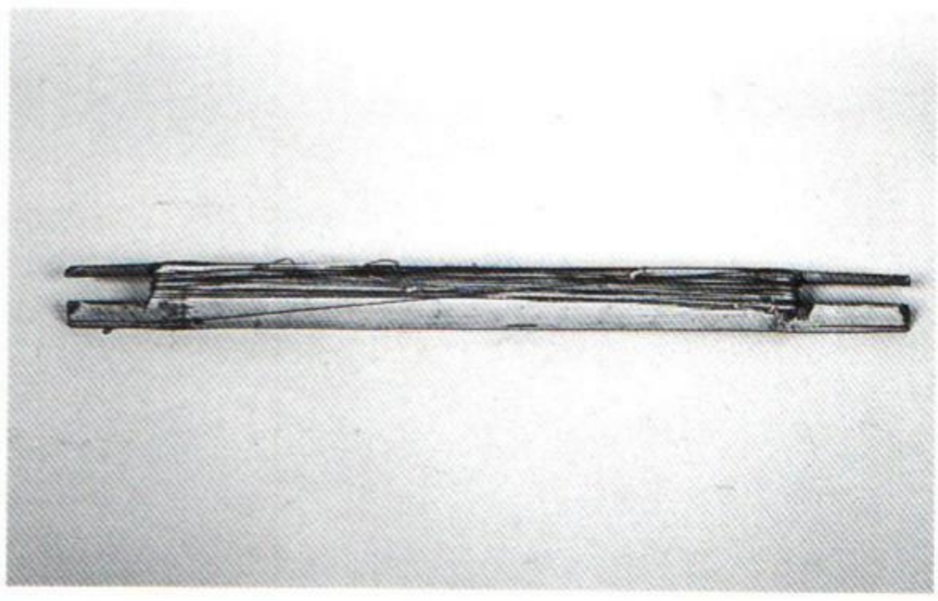


176　ウナギカゴ　－鹿児島県西之表市－
ウナギスボ，ウナギツボとも呼ぶ。軽くするため，また，割れを防ぐために表皮をはいである。左のタイのバンランとほとんど同じである。

(2)　釣り

釣りの漁法で共通するのは，コイ科の魚やウナギを対象にした延縄（はえなわ）や夕方仕掛けて早朝に引きあげる置き針などである。また，支柱に弾力性のある木の細枝や竹を利用するところなどに，類似点がみられる。

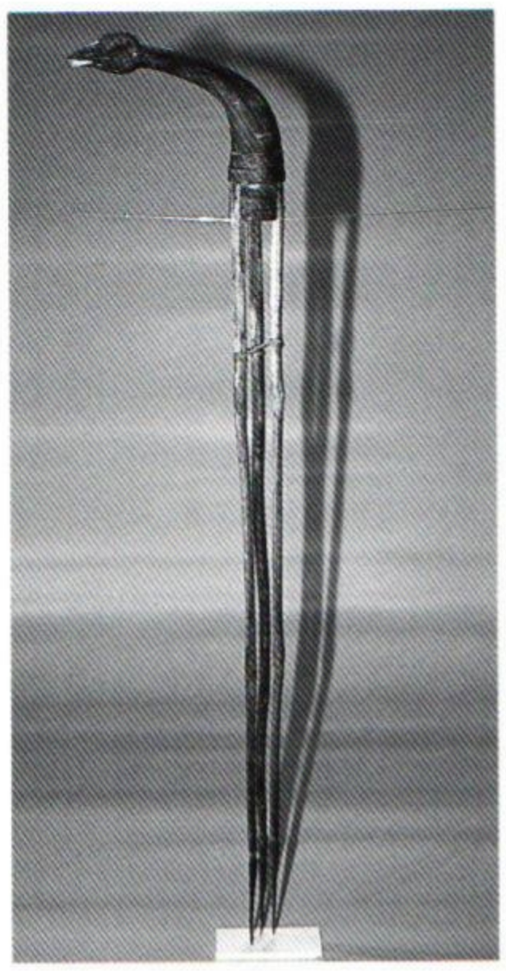
180　ベッ　－ラオス・ルアンナムタ県・ラカンマ村・タイダム族－
夕方，針に餌を付け，川岸に突き立てて川に流し，翌朝あげる。



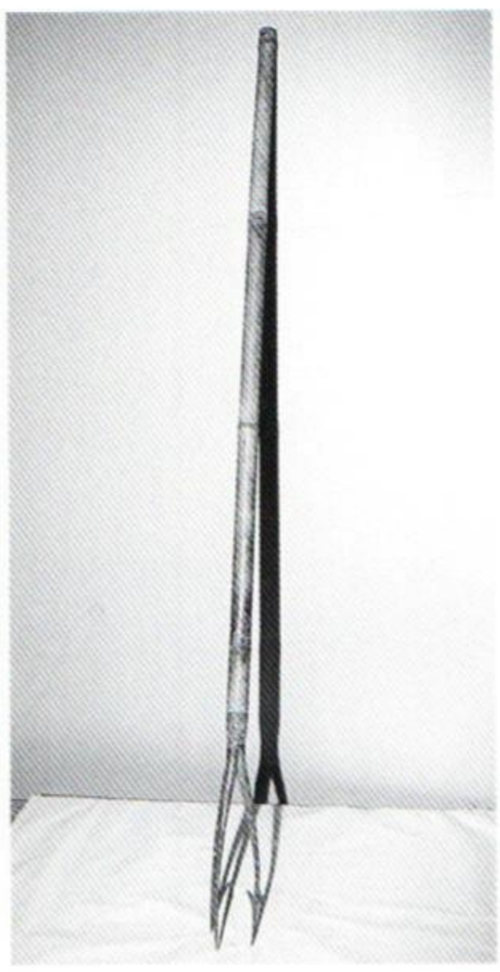
181　ベッチャパー　－ラオス・ポンサリー県・ソプアッ村・ラオ族－
ウー川で魚を釣る延縄である。竹を二つ割りにし，両端をえぐり取ってある。

(3) 突き刺し具

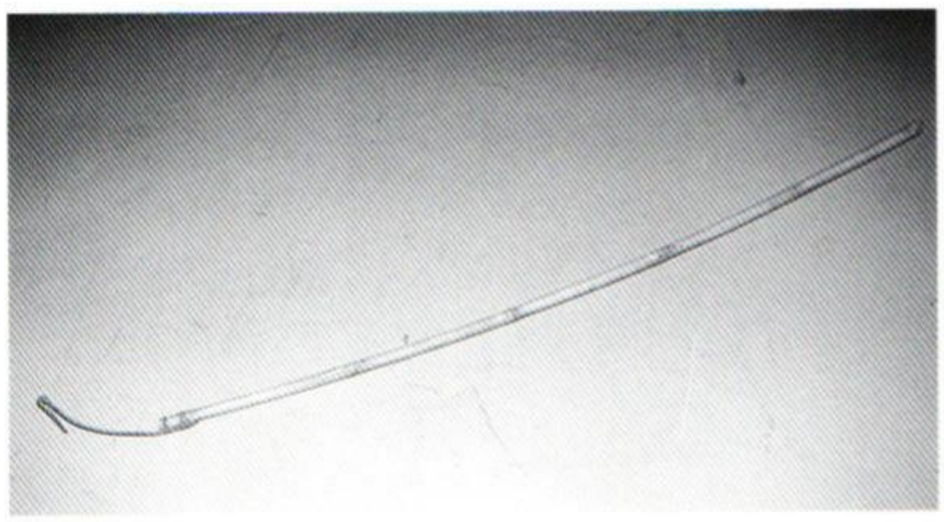
魚を突き刺して捕る道具には，ヤス系統のものがみられ，特に三つ又のヤスは，三島村の硫黄島の海の漁具として用いられるものと共通する。また，鹿児島で子供たちが持つ水中銃と同類のものが分布している。



184　レムタンプラー
－タイ中部－
原野農芸博物館蔵
3本組のヤスで大型の魚を突き刺すものである。把手の鳥の彫刻がおもしろい。

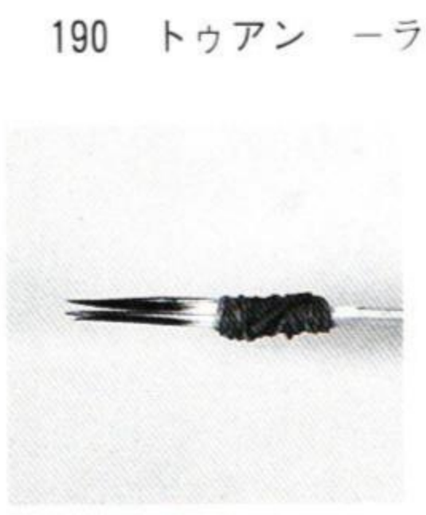


186　ヤス
－カンボジア・バッタンバンノントム村－
国立民族学博物館蔵
3本の先端にはカエシが付けられている。



187　特殊漁具
－カンボジア・バッタンバン－
国立民族学博物館蔵
沼でウナギを引っかけるカギである。柄は弾力をもたせるために竹を用いている。

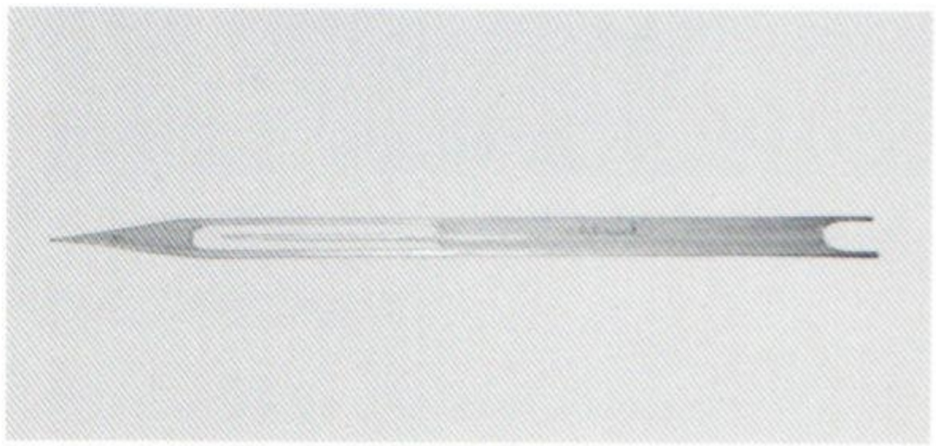
188　ウナギカギ
－鹿児島県里村－
沼底をひっかいて，ウナギを捕るカギである。柄は弾力性のあるグミの木を用いている。



190　トゥアン　－ラオス・ルアンナムタ県ホンルアイ村・ラオテン族－
川に潜って魚を突く銃である。ゴムのバネで矢を飛ばして突く。矢の先端はヤマアラシの毛である。

(4) 網針

メコン川をはじめ大小の河川では，建て網や投網の漁が盛んに行われている。男たちが軒先で網を編んでいる姿をよく見かける。イオゴを用いて網目の大きさを計りながら網針で編み進む技術は，南九州と一致するものである。

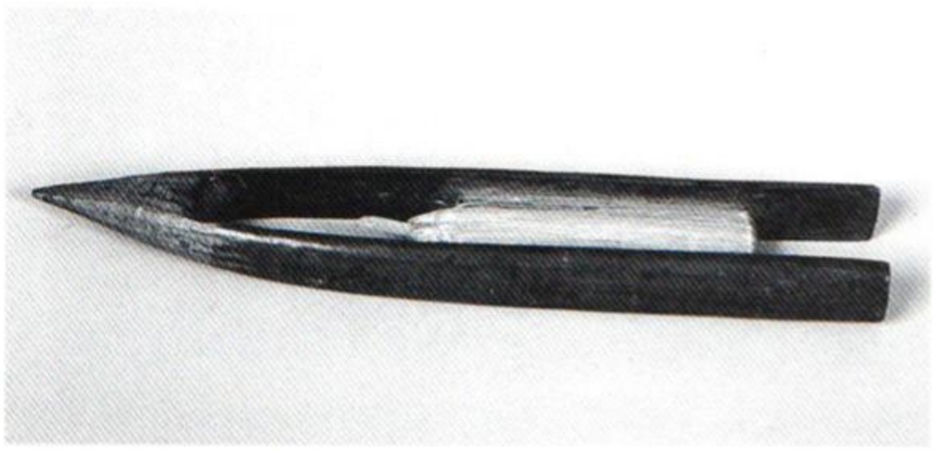


193　網針　－カンボジア　バッタンバン　ノントム－

国立民族学博物館蔵

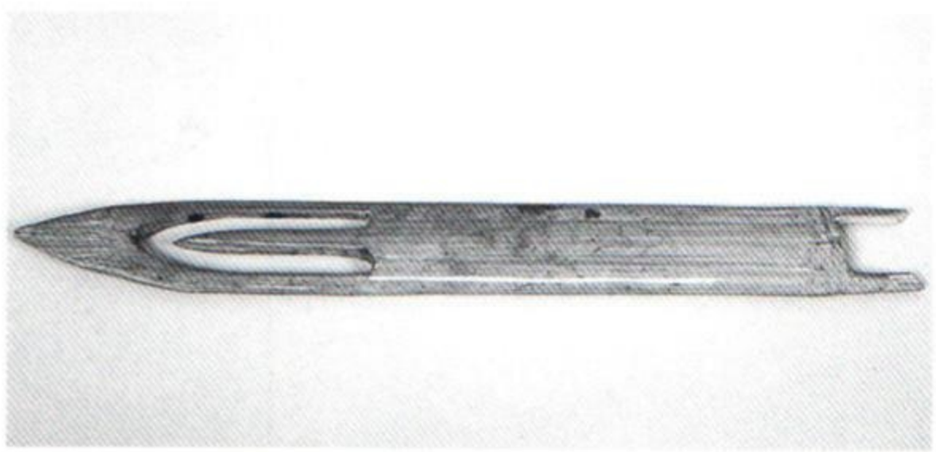
投網を編む男性　－ラオス・ルアンナムク県ムンロン村・タイル一族－

南九州のイオゴという網の目の大きさを計る道具も併用している。



194　チンム　－ラオス・ポンサリー県・ソプアッド村・ラオ族－

木を刳り抜いた網針である。編みかけのテグスが巻いてある。



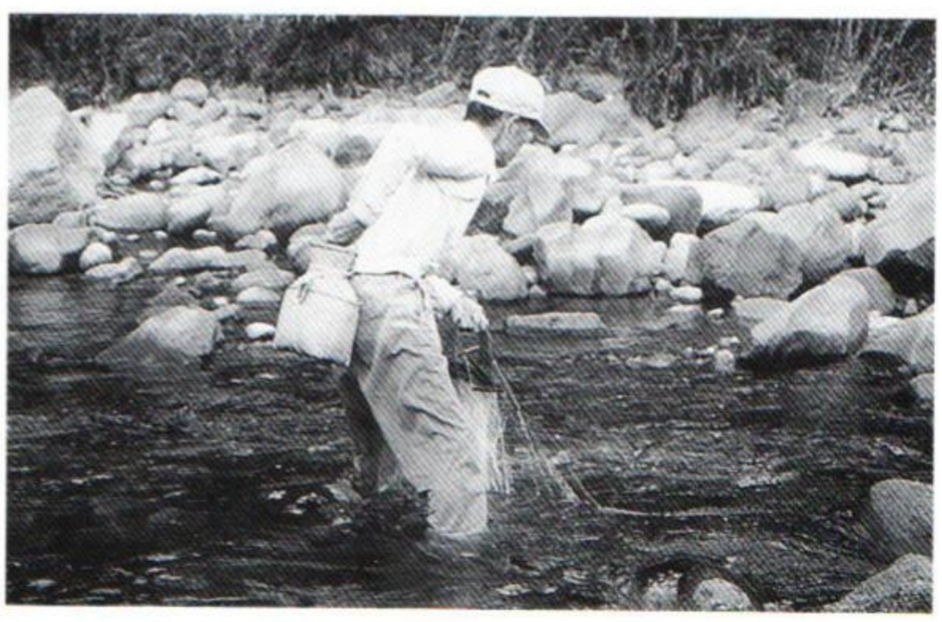
195　アグリ　－鹿児島県里村－

マダケ製である。網の仕立て，修理に用いる。

(5) ビク

捕獲した魚を入れる籠で，首部を絞り込み，口部をラッパ状に広げて編み上げたものがみられる。特に，胴部が方形で，肩部で一度編み方が変化したカタギイテゴと呼ばれるビクは，ネパールや東南アジアから鹿児島及び九州山地に広く分布している。

ビクを腰に投網漁の真似をしてみせる男性
－ラオス・ルアンナムタ県ムンロン村・タイル一族－



ビクを腰に鮎漁をする男性
－鹿児島県蒲生町－

200　魚籠　－インドネシア・ジャワバラト・ボゴール・スンダ族－

国立民族学博物館蔵

肩の所で両端５本の縦ヘギを横に回して編んである。首部はくびれ広口になっている。

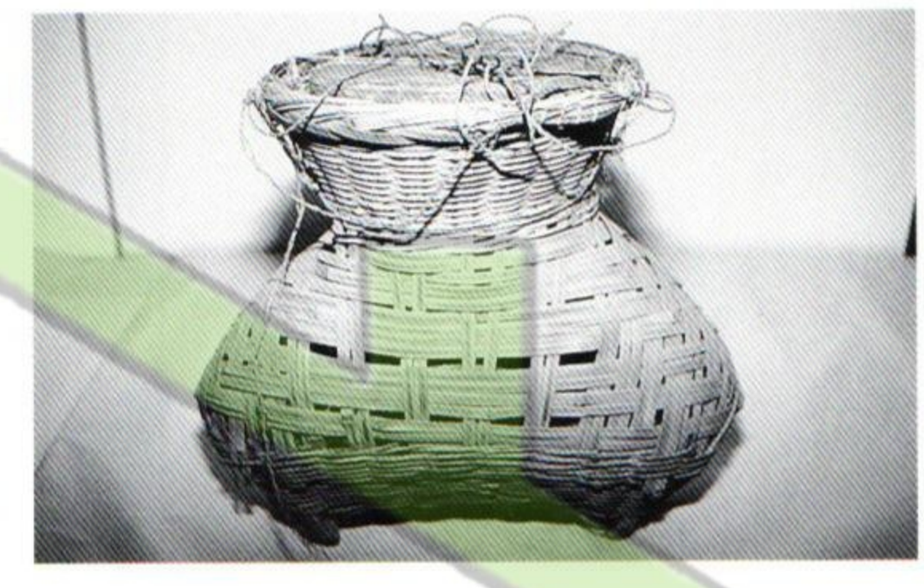
201　魚籠　－中国　海南省・リー族－

国立民族学博物館蔵

202　竹製かご　－台湾・花蓮県・アタヤル族－

国立民族学博物館蔵

二つ越し，二つくぐりの網代編みで肩部まで編み，首部はゴザ目編みになっている。肩の部分で両端５本の縦ヘギが横に回してある。



203　魚籠　－中国・湖北省当陽県・漢族－

国立民族学博物館蔵

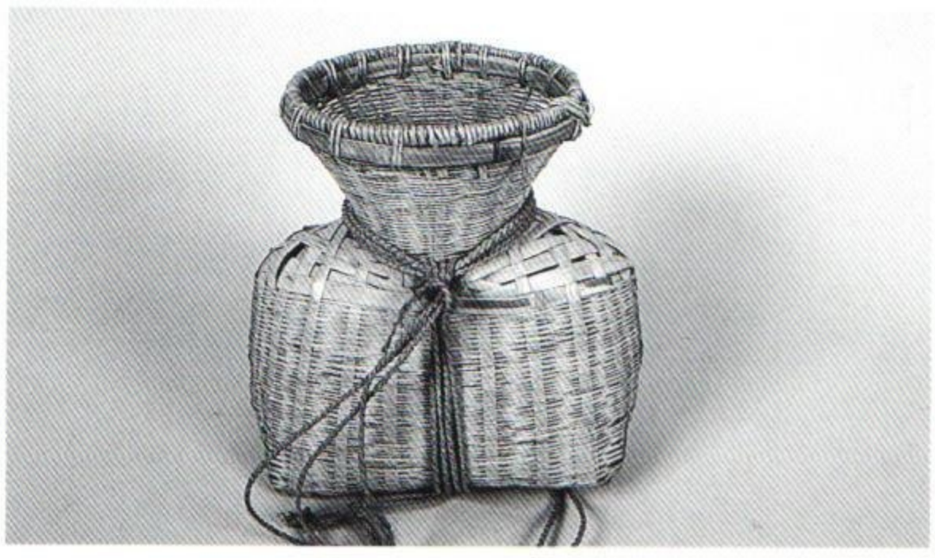
浙江，江赤，湖北の一部にのみ残るが，非常に少ない。鵜飼い漁に用いられる。

204　モアン　－ラオス・シェイクアン県ラオ村・タイダム族－

両脇の５本の縦ヘギを肩部で横に回している。

205　モン　－ラオス・ルアンナムタ県ムアンシン村・タイル一族

両脇の４本の縦ヘギを肩部で横に回している。三角網で捕った魚を入れる。筌のシタと同じ蓋が付いている。



206　ビク　－鹿児島県吉田町－

吉田町から始良町を流れる思川で鮎漁に使われたものである。広口は魚を入れ易く，肩の部分は魚が外に飛び出ないための工夫という。

208　ビク　－タイ・チェンマイ県－

原野農芸博物館蔵

丸胴首くびれ広口型のビクで，奄美大島住用村にみられるものとほとんど同じである。手に提げるビクである。

209　魚籠　－タイ・パクナム・タイ族－

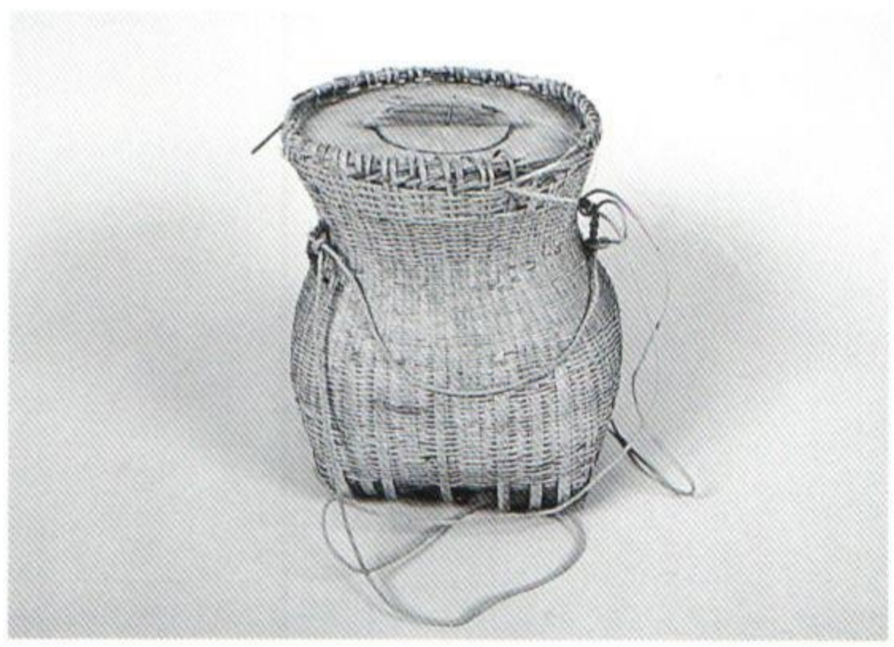
国立民族学博物館蔵

211　コーン　－ラオス・ボケオ県ラオ村・ラオ族－

丸胴首くびれ広口型のビクである。手に提げて持っているのをよく見かける。方形が腰につけられているのと大きく異なる。

214　ティル　－鹿児島県和泊町－

捕った魚を入れるビクである。丸胴首くびれ広口型のビクである。



215　アマメカゴ　－鹿児島県三島村－

魚釣りの餌にするイソアマメを入れる籠である。作りは，丸胴首くびれ広口型のビクと同じである。

4　運ぶ

人力による運搬や蓄力による運搬の道具にも共通性が強くみられる。その中でも，背負い籠は「つながる文化」として注目されるものである。ヘッドバンドを用いた籠や肩で負う縄をつけた籠が，鹿児島から南西諸島では地域差としてとらえられるのに対して，東南アジアでは民族文化の差として存在している。また，このことは，無爪のカリコについてもいえる。これらのことは，鹿児島から西南諸島にかけての地域の文化の成り立ちを考えるうえで重要なことを提示していると思われる。

(1)　背負い籠

背負い籠は，背負う縄の取り付け方とその背負い方の違いで分けられる。1本の縄を籠の胴部に巻いて額で担ぐ型，1本縄を胴部に巻き肩で負う型，2本の縄を籠の底を通して肩で担ぐ型とがあり，奄美から鹿児島にかけて分布するものとぴったり対応している。ヘッドバンドだけで物を担ぐのがみられるのも，奄美と対応している。

216　背負い籠　ータイ・チェンマイ県ー
原野農芸博物館蔵

籠の底部から胴部に回したヘッドバンドを額に当てて背負う籠である。蓋は二重編みになっている。

額と肩で籠を背負う女性　ーラオス・ポンサリー県・ソプファン村・タイダム族ー

胴部を巻いた帯を額に掛け，胴部を巻いて前面の下部に結んだ帯を肩に掛けて背負っている。
奄美や沖縄のテルとトカラ列島のシタミとを，合体させた背負い方である。

217　テー　ーラオス・ウドムサイ県ドンサーク村・カム族ー

額で担ぐ籠である。下部の外側はゴザ目編みで二重に編んである。ラッパ状の広口である。

218　ベム　ーラオス・ポンサリー県・ナムリー村・カム族ー

額で担ぐ籠で，稲を運ぶのに用いる。下部は二重編みである。ラッパ状の広口が特徴である。

219　テー　ーラオス・ルアンナムタ県ドゥムン村・カム族ー

底が四角で広口の形は奄美のテルに似ている。

221　カヤン　ーラオス・ルアンナムタ県ホンルア村・ラオテン族ー

ヘッドバンドが胴部を巻かずに，前面上部の二つの耳を通しているのが特徴である。竹編みに竹の曲げ物を付け，容量を増している。

222　カーカー　ーラオス・ルアンナムタ村・ファバッ村・アカ族ー

ヘッドバンドと肩板を併用した籠である。荷が軽いときは，ヘッドバンドを胸の前に垂らし手を掛けて，肩板だけで背負う。

223　テル　ー鹿児島県奄美大島ー

テルは奄美，沖縄本島北部に見られる背負い籠である。テルノオを籠の胴部に巻いて額で背負う。底から口にかけてラッパ状の広口になっているのが特徴である。

224　カチャ　ーラオス・ルアンナムタ県チャラ村・クイ族ー

額で背負う四角な籠である。下部は二重編みになっている。また，上の方になるに従って口が広がっている。

225　カコ　ーラオス・ルアンナムタ県チャラ村・クイ族ー

左の籠と同じ形であるが，中央部分が透かし編みになっているのが特徴である。

228　ペー　－ラオス・シェイクアン県サン村・ラオ族－

額で背負う奄美・沖縄のテル型と，１本縄を胴に巻き肩担ぎするトカラ型とを合体させた形である。

229　シタミ　－鹿児島県十島村－

１本縄で胴を巻き籠の前面の中央よりやや下で結び，肩で担ぐ籠である。奄美のティルにより近い肩担ぎ籠である。

231　背負い籠　－北部タイ・ラワ族－

原野農芸博物館蔵

１本の縄で胴を巻き，底を通して背で結び，肩で担ぐ。鹿児島の金山テゴとほとんど同じである。籠の編みは，高千穂の籠に類似する。

233　金山テゴ　－鹿児島県薩摩町－

１本の縄で胴を巻き，籠の底を通して肩で担ぐ籠である。こうした負い縄の掛け方は鹿児島だけのものである。

234　ペー　－ラオス・シェイクアン県・ターチョッ村・モン族－

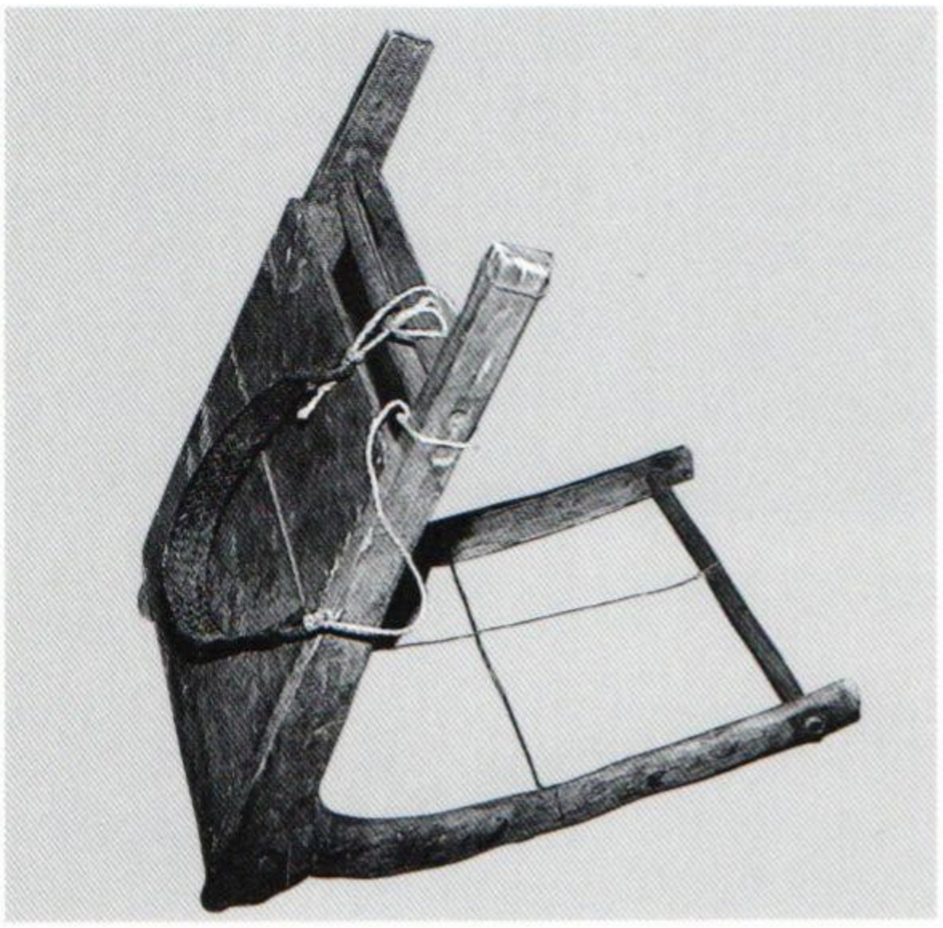
２本の縄を籠の前面の２箇所に結び，籠の底をくぐらせ，背面で結び，肩で背負う。この背負い方の籠はモン族にだけにしかみられない。

235　ヤマカゴ　－鹿児島県出水市－

１本縄を前面の上方２箇所に止めて，底をくぐらせ，背面で結んで，肩で担ぐ籠である。

(2) カリコ

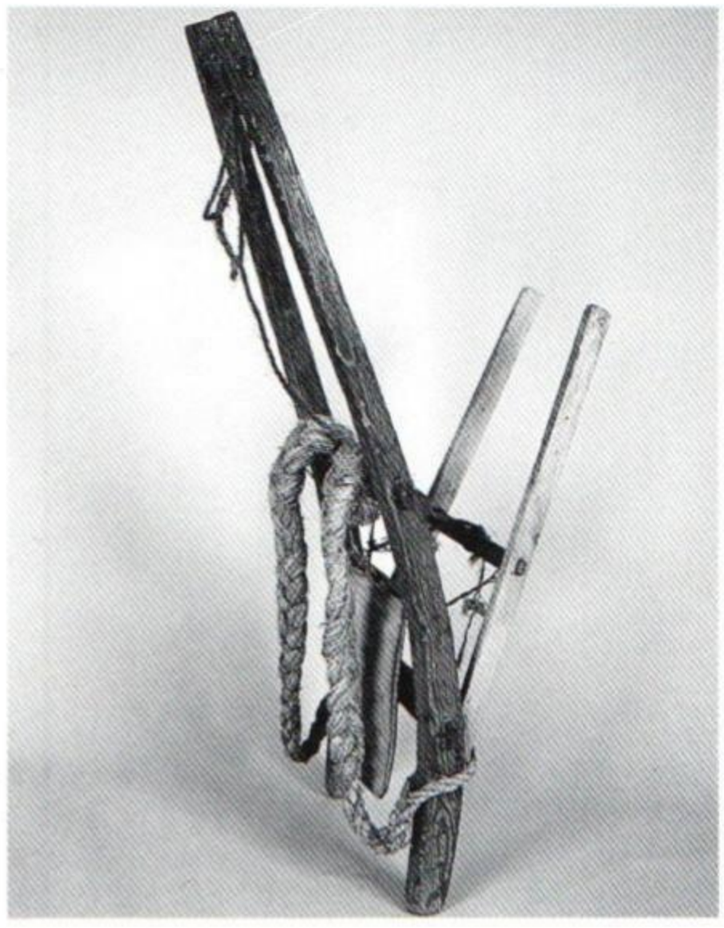
カリコには，荷を載せる爪の有るものと無いものとがある。有爪のものは，豊後や紀州からきた炭焼などの山仕事をする人々が持ち込んだものである。無爪のものは，半島部や島々で古くから使われたものである。ラオスやタイでは，モン族，ヤオ族が使用している。



236　背負梯子　－台湾・花蓮県・上梅園村・アミ族－

国立民族学博物館蔵

有爪のカリコで，ヘッドバンドと組み合わせたものである。

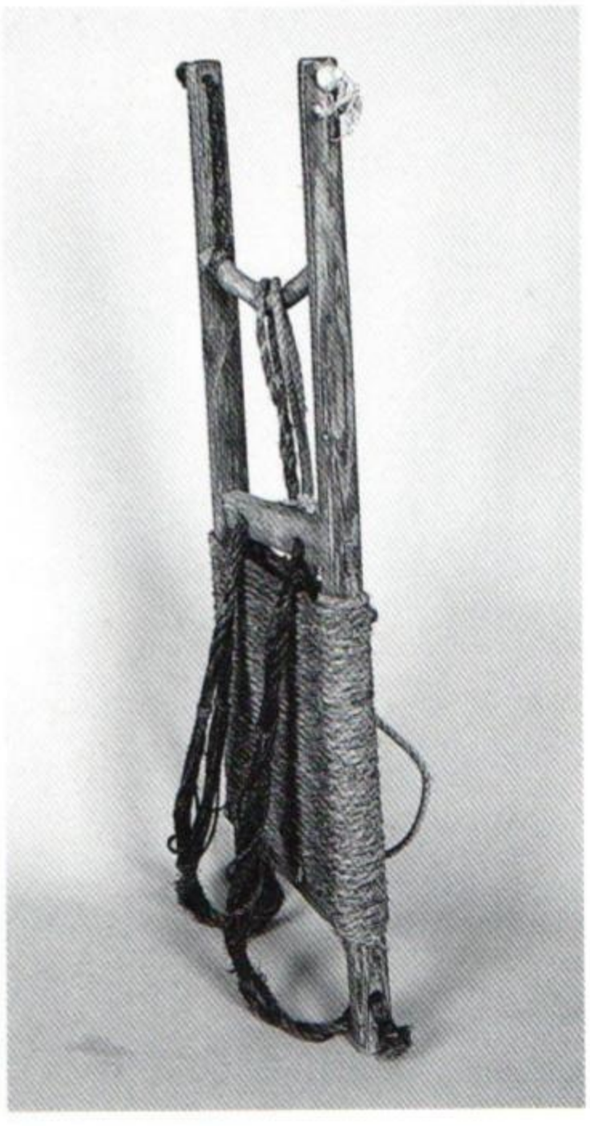


237　カイコ　－鹿児島県上屋久町－

典型的な有爪のカリコである。

238　ヂーキ　－ラオス・ホーパァン県・フウサイ村・モン族－

無爪のカリコで，背板は竹で編んである。荷物を結いつける木の股の利用も鹿児島と同一である。

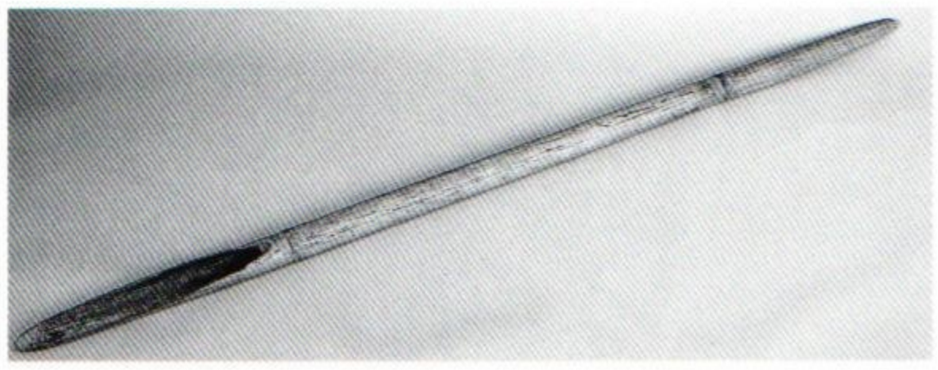


239　カリコ　－鹿児島県中種子町－

左と同じ無爪のカリコで，シマガレとも称し，有爪のものより古くからあったと認識されている。

(3) 天秤棒

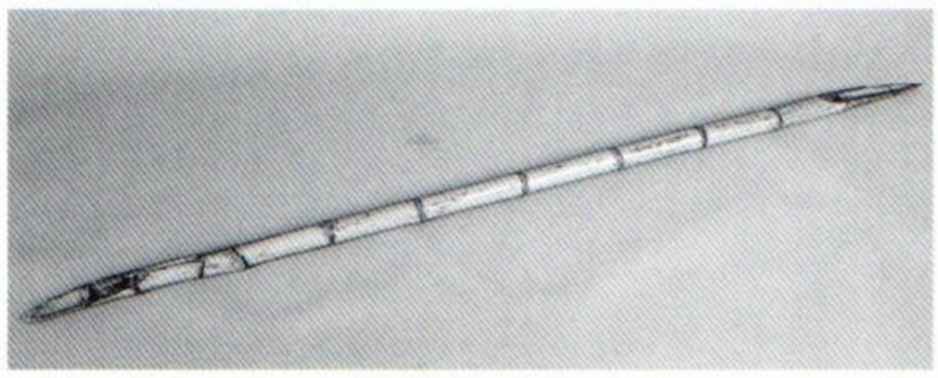
棒の両端に荷物を突き刺したり，吊り提げたりして肩で担ぐ運搬具である。両端を尖らせたもの，くぼみをつけたもの，カギを吊り提げたものなど共通したものがみられる。



241　カーンハップカー　－ラオス・ホーパァン県リヤク村・ラオロン族－

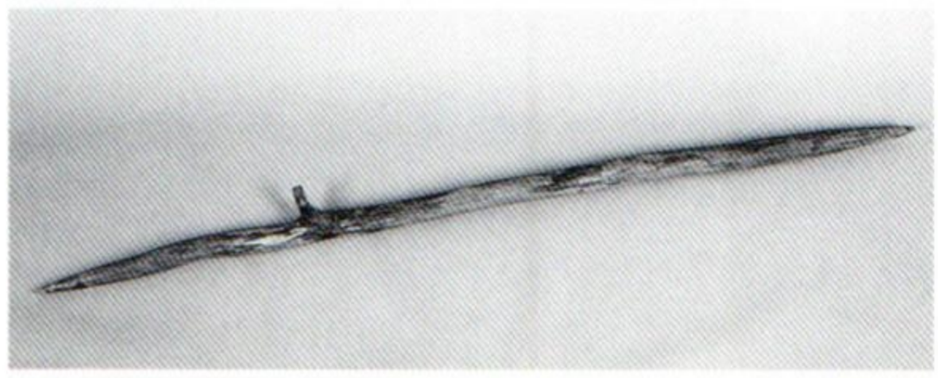
１本の竹の両端を尖らせ，そこに稲束や茅束などを刺して，肩で担ぐものである。鹿児島のタケヤマオコと同じである。

竹のオコで椿の皮を担ぐ男性　－ラオス・ルアンパバーン市メコン川の岸辺－



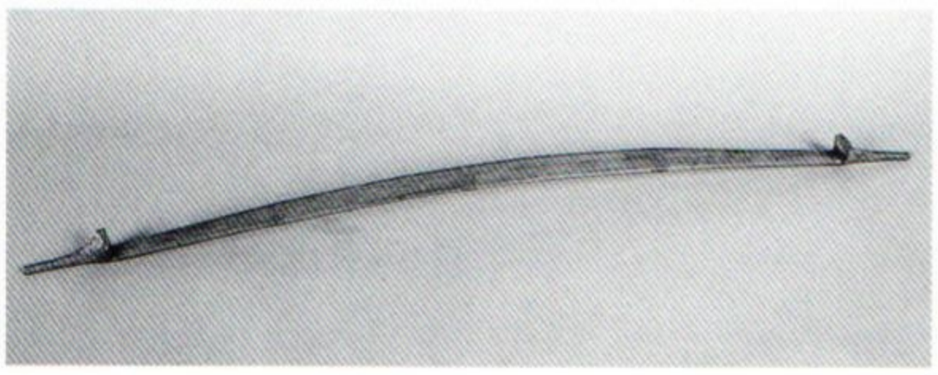
242　オコ　－鹿児島県大隅町－

竹製のオコで，イネサシとも呼ぶ。稲束や茅束にオコを突き刺して肩に担ぐ。突き刺して立てたとき滑り落ちないように，片側に枝の一部を残したものもある。



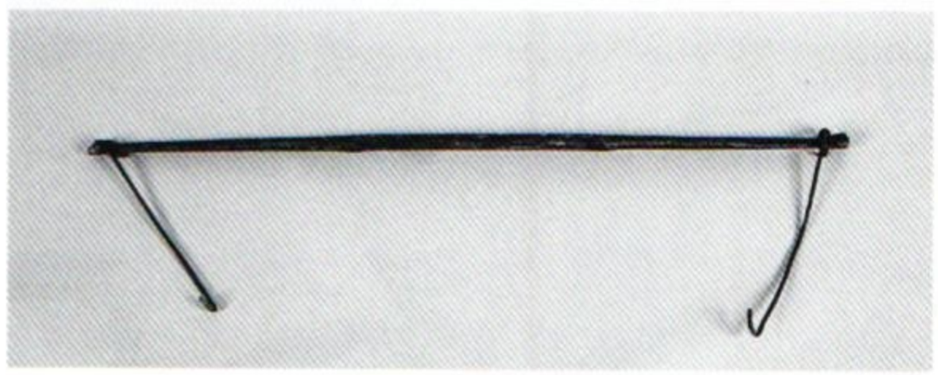
243　ヤマオコ　－鹿児島県輝北町－

木製のもので，片側に枝が少し残してある。稲束，茅束，薪束などを両端に突き刺し，肩で担ぐ。



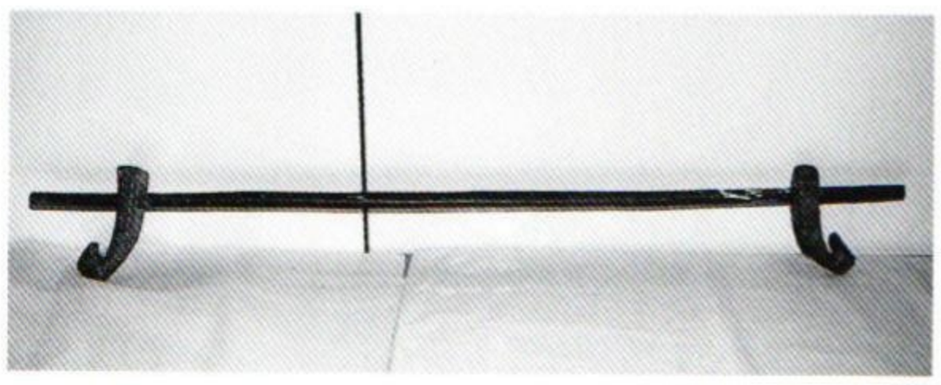
245　メーカーン　－ラオス・ルアンパバーン県・サンハイ村・ラオ族－

割り竹を利用した天秤棒である。両端は節の部分を残してある。両端に籠を提げて担ぐ。



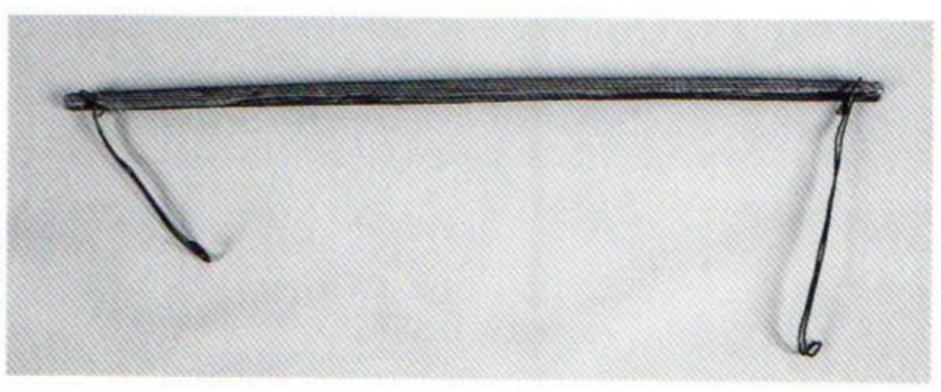
248　ダクデェー　－ラオス・ポンサリー県・ホック村・モン族－

両端に針金のカギを付けた天秤棒で，桶を吊るして水汲みに用いるものである。鹿児島のミズサシと全く同じである。



249　天秤棒　－中国・海南省通什市・リー族－　国立民族学博物館蔵

両端に物を掛けるためのカギが付けられている。

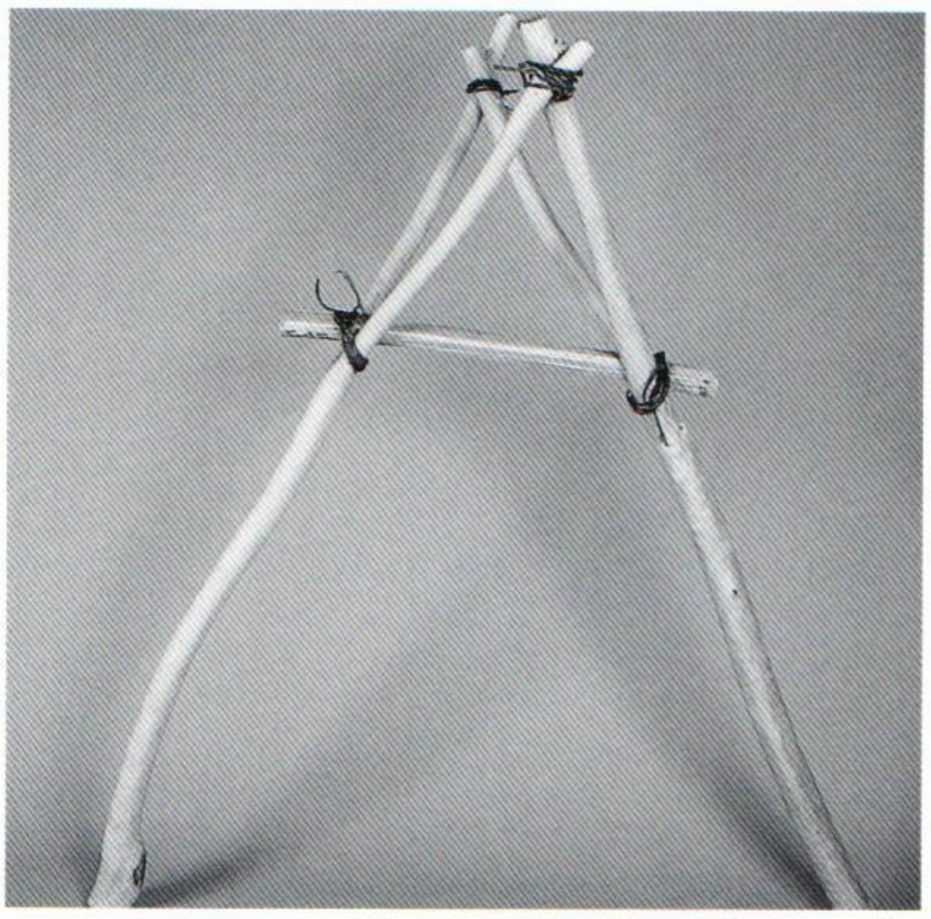


250　ニノゲ　－鹿児島県屋久町－

水道施設のない時代に，水桶（タンゴ）を両端のカギに掛けて担いだものである。

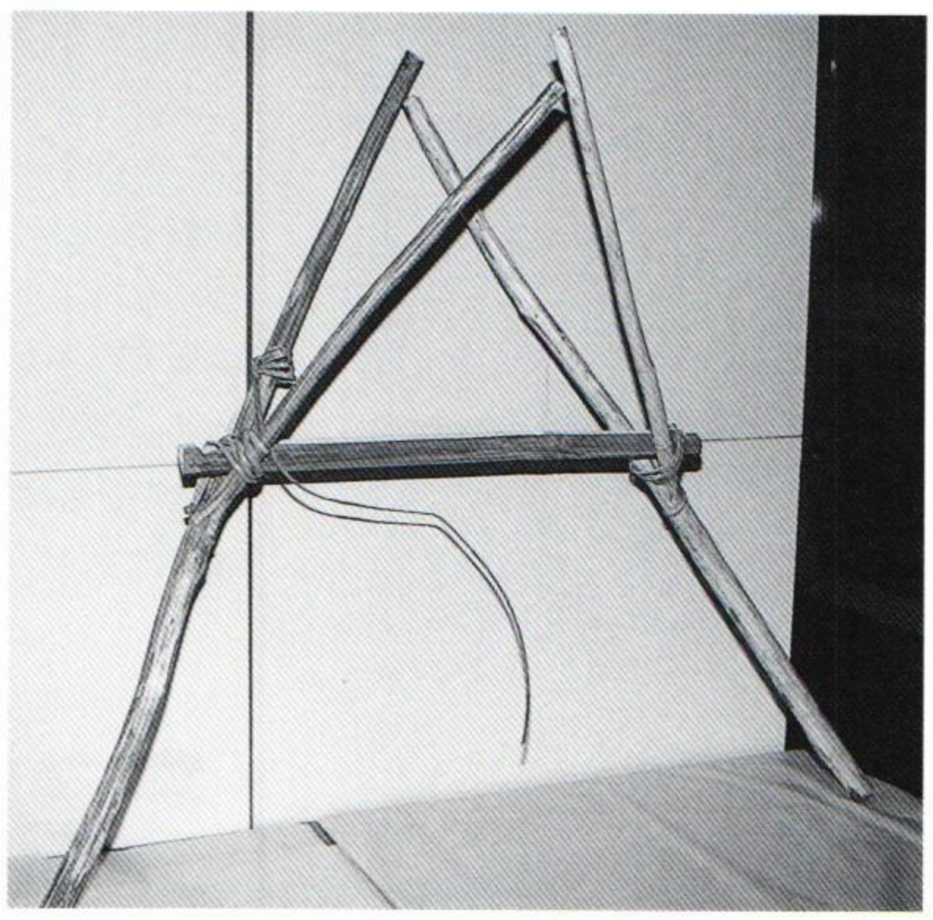
(4) カタゲマタ

Y 字形に枝分かれしたネムノキなどの材を二つに割り，それと 1 本の両端に取りつけた肩担ぎの運搬具である。日本では，三重，和歌山，高知，宮崎，熊本，鹿児島，沖縄に分布するが，海南島や中国南西部の少数民族の間でも使用されており，海上の道沿いに分布する道具である。



251　柴運搬用具　－中国・海南省白沙県・リー族－
国立民族学博物館蔵

両側の Y 字の部分に柴や薪を渡して乗せ，中央の横木を肩で担ぎ，両手でそれぞれ足の棒の部分をつかんで運ぶ。

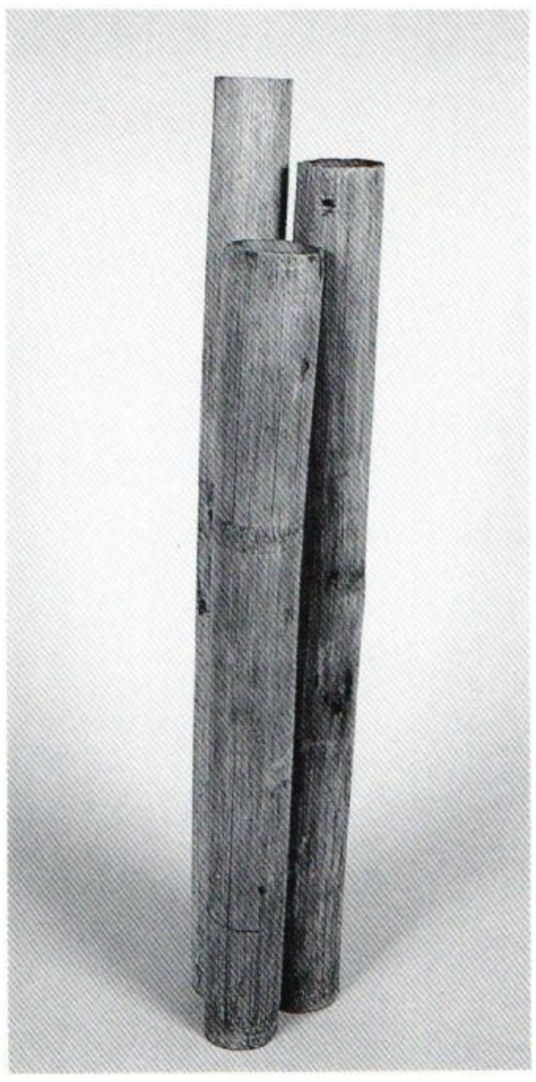


252　カタゲマタ　－鹿児島県市来町－

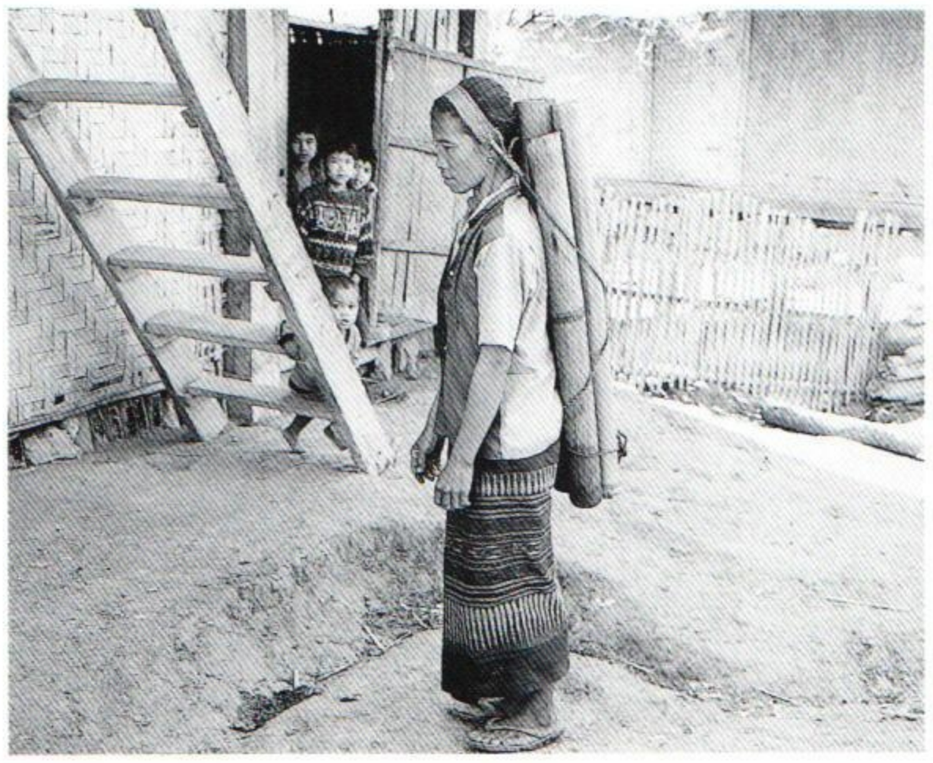
製炭用の木材を炭焼き窯の所まで運んだり，薪を家まで運んだりするのに用いる。紀州の炭焼きが持ってきたといわれるが，南の地域の分布を考えると，黒潮沿いに伝わってきたものと考えた方が良い。

(5) 水筒

水を運ぶための竹筒である。鹿児島では，二節か三節に竹を切り表皮をはいで作る。一番上の節が蓋になり，大小の孔があけられ，大きい孔の側の上部を長めに残し，水受けにしてある。東南アジアで使われている水筒も，全く同じ作りである。

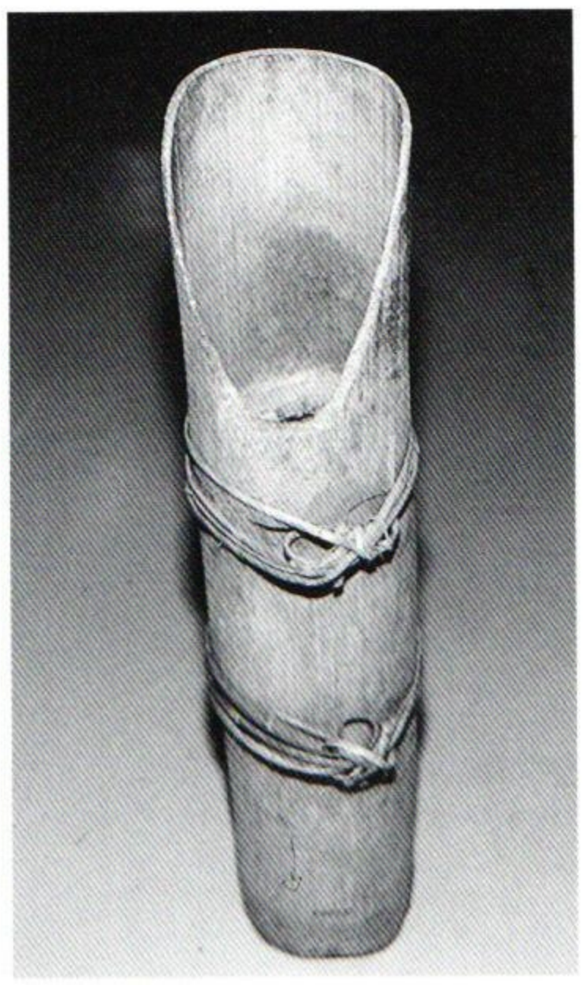


253　オムディーン　－ラオス・ポンサリー県クンルック村・カム族－



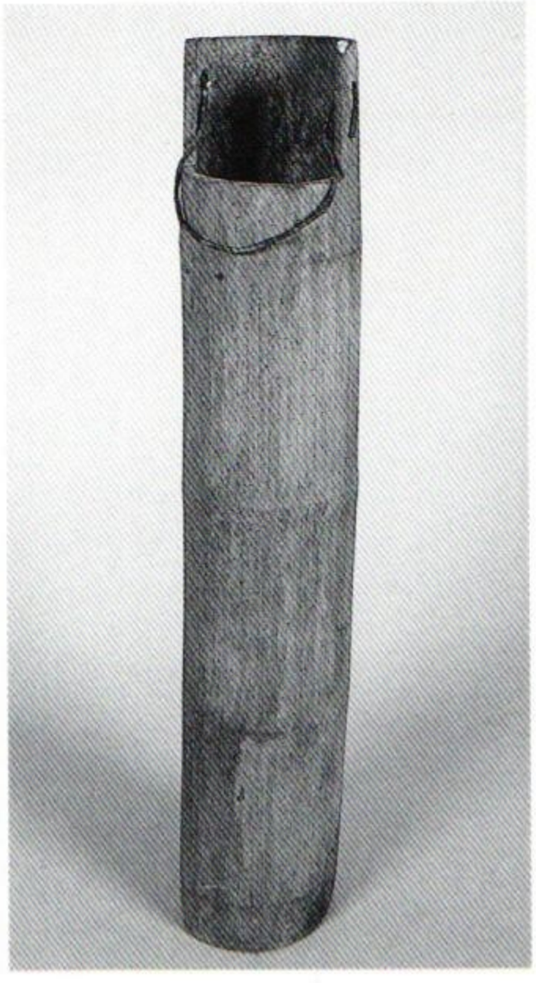
水を汲む女性　－ラオス・ポンサリー県・ピイア村・カム族－

タラーンという 1 本の背負い縄で 3 本の竹筒で水を汲んで，集落まで上ってきた女性である。



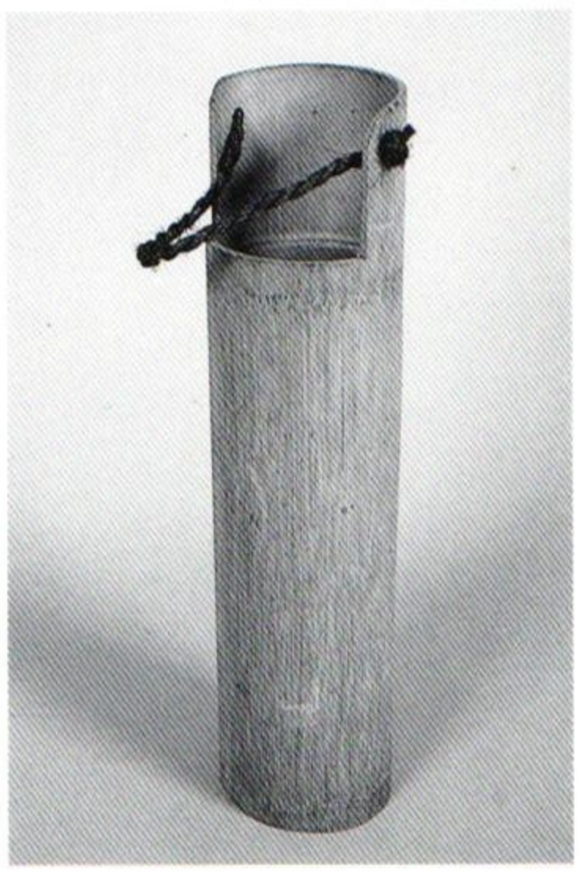
254　筒（水汲み用）－台湾・台中州－
国立民族学博物館蔵

水受けとなるよう上部の片側半分が残されている。把手とするためか，胴部に2箇所，籐が巻いてある。



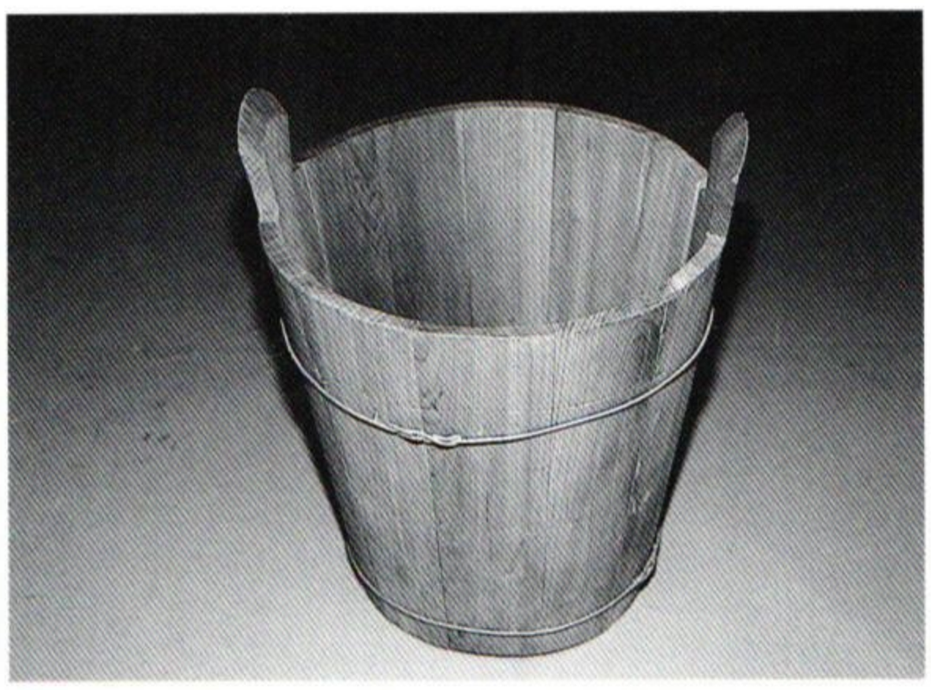
255　スイヅツ
－鹿児島県指宿市－

畑や山に飲み水を汲んでいく竹製の水筒である。



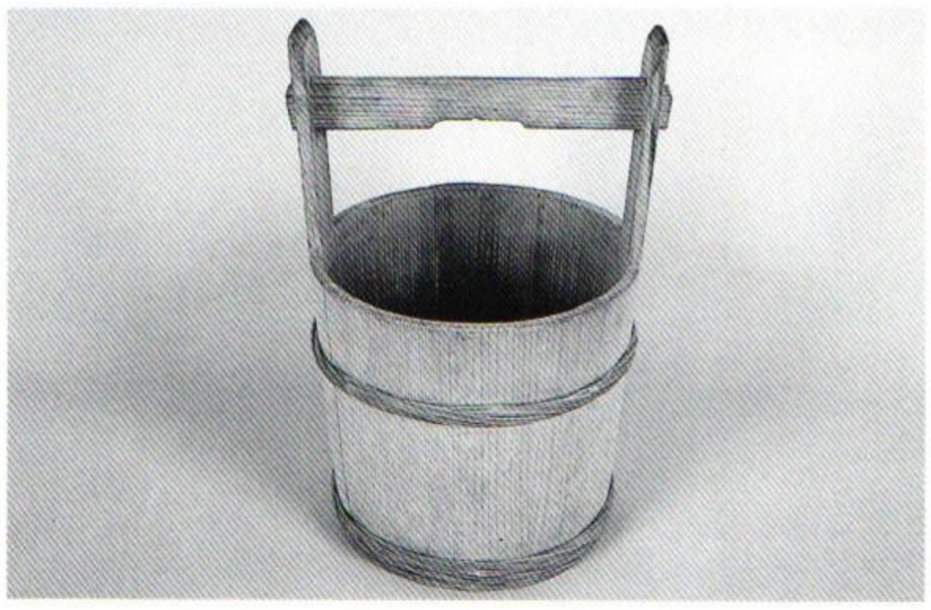
256　タカヅッ
－鹿児島県東郷町－

畑作・焼畑文化としての鹿児島の文化を考えるときの基本的な民具である。



257　水桶　－中国・貴州省雷山県・ミャオ族－
国立民族学博物館蔵

杉材と思われるクレ板12枚で作られており，針金のタガで締められている。桶作りの文化のつながりを示すものである。

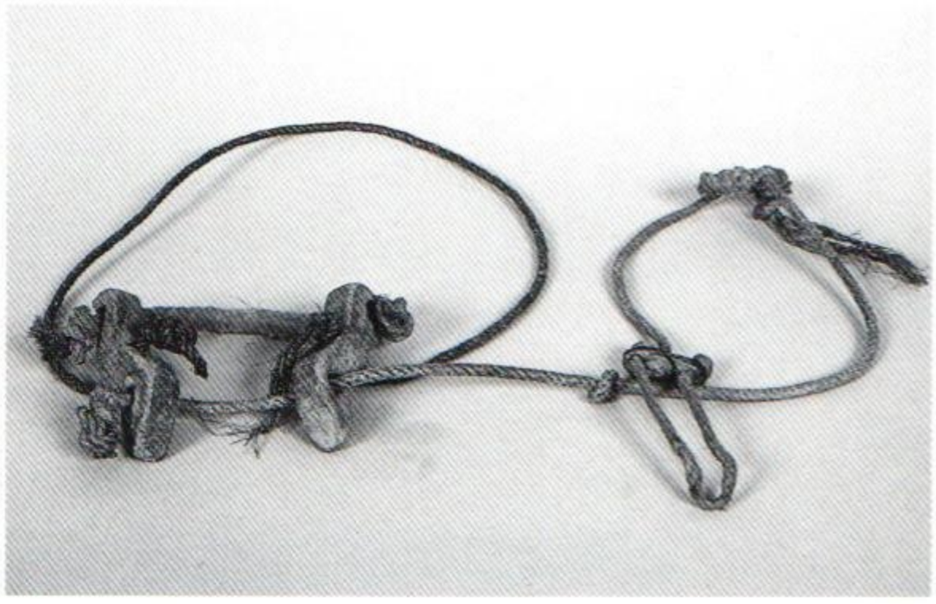


259　ミズタンゴ　－鹿児島県鶴田町－

杉板で作られた水汲み用の桶である。ミズサシ（天秤棒）のカギを掛けたり，手で持ったりするように横に把手が渡してある。竹のタガで締められており，典型的なタンゴである。

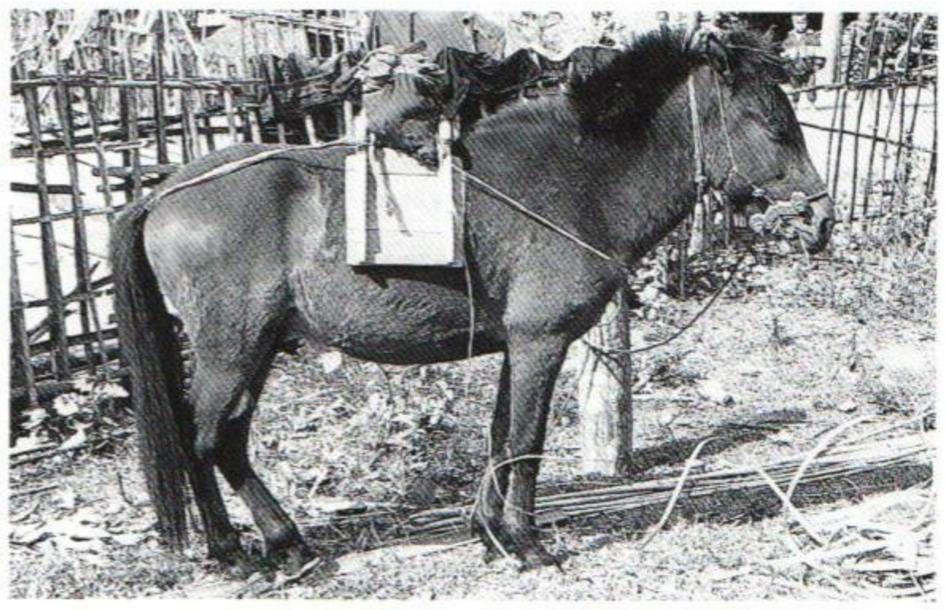
(6) オモゲ

牛馬の顔に着けて，手綱を引くことでほほ骨を締めつけ制御する道具である。東南アジアと鹿児島のものは，板を使用し小型で牛馬に用いるのに対し，南西諸島のものは，突起部を作り締めたときの効果をあげる工夫をし，大型化していて，馬のみに用いられている。



260　ケーンムアー　－チオス・ボケオ県ホアナー村・タイル一族－

牛用のオモゲで，四角の板を用いている。右側の綱を引き絞り，板を締めて牛を制御する。



オモゲを付けた小型馬　－ラオス・ウドムサイ県・ヨーム村・ランテン族－

ラオスの馬はほとんどがトカラ馬や与那国馬のような小型の馬で，オモゲを付けている。

263　ムウケー　－沖縄県与那国町－

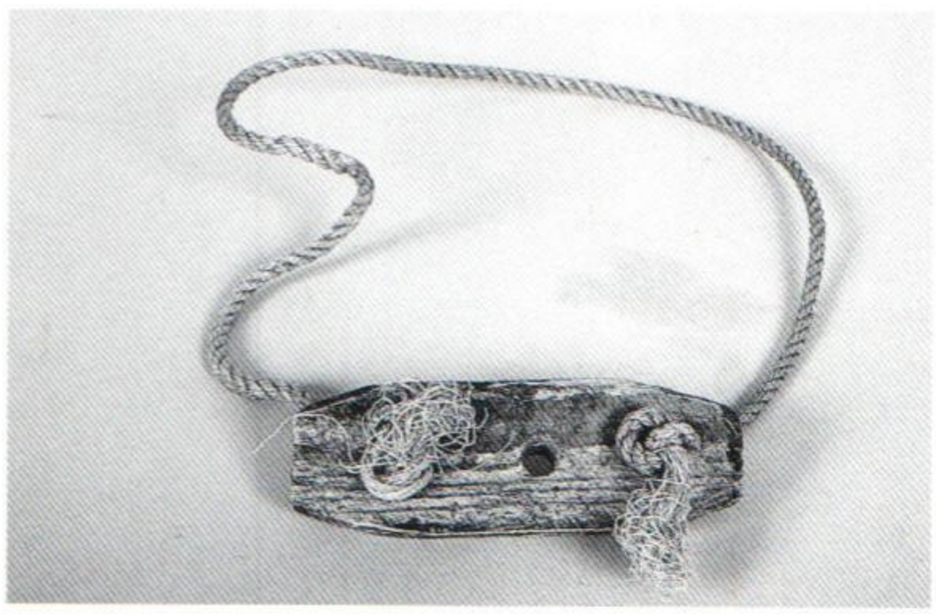
2本の棒の上下に横に穴があけられ，中央部に縦方向にあけられて，各穴に綱が通され馬の首や顔に掛けられる。下の綱が手綱である。

264　ウムゲー　－鹿児島県徳之島町－

作りは右のものと同じ。中央に突起が設けてあり，手綱を絞ると馬のほほ骨に刺激を与える。

267　イタオモテ　－鹿児島県栗野町－

ラオスのものと同じく四角の板を用いている。穴の向き，綱の掛け方もほぼ同じである。



269　ビバ　－鹿児島県名瀬市－

山羊を綱でつないで飼育するとき，つなぎ綱が回転してよじれないように，山羊の首綱につける。260のラオスのものにも付いている。

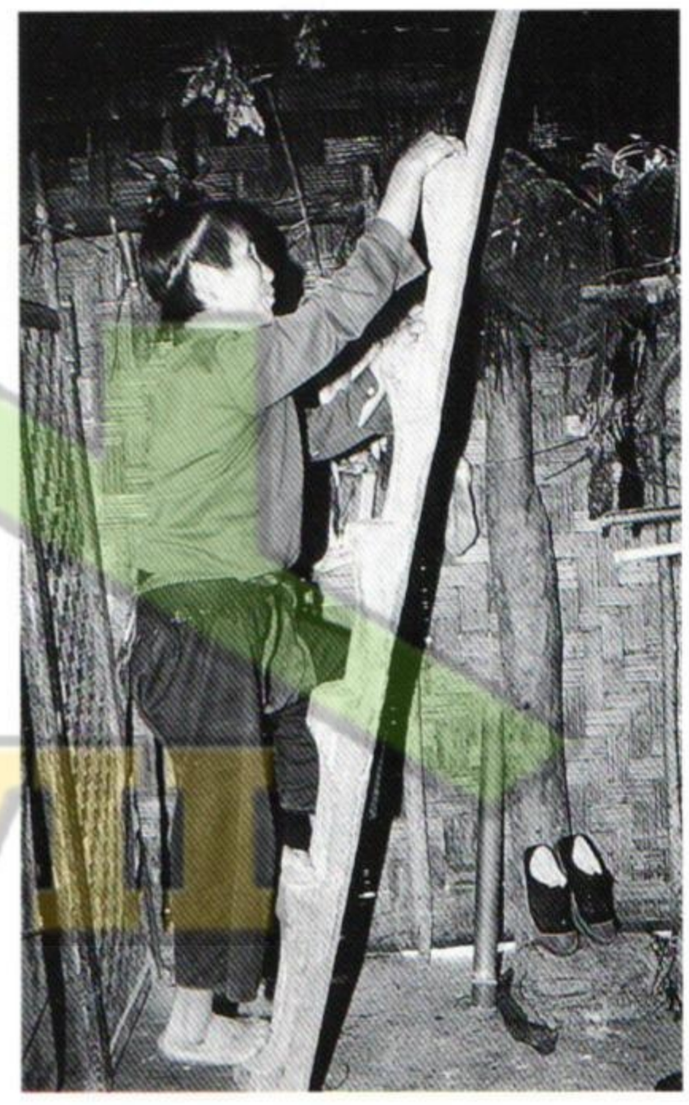
5　住む

住居は，高床の二つ家が共通する。炊事棟と居住棟の棟が直角に接し，二つ家の間に樋を渡して連結している形はラオ族などにみられ，鹿児島の二つ家と形態，機能ともに一致する。これに対して，モン族やアカ族などは，土間式の一つ家に住んでいる。また，家の壁や床はほとんど竹で作られているのが特徴である。家具としては，一本梯子や二つ石のかまど，囲炉裏の上の火棚など共通のものがみられる。しかし，自在カギは用いられておらず，三つ石や五徳だけが使われており，鹿児島では自在カギは北から入ってきたものではないかと思われる。

(1)　一本バシゴ

１本の木に切り込みを入れて階段をつけた梯子（ハシゴ）は，弥生の遺跡からも出土していますが，東南アジアから奄美大島にかけては現在でも使用されている。階段数は７段あるのが一番多くみられ，その他のものでも５段，９段と奇数の階段になっている。

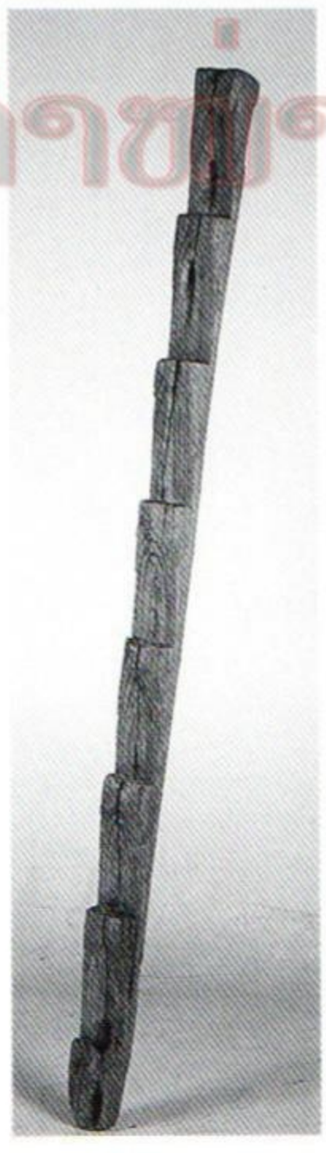
271　ハチ　－沖縄県与那国町－
与那国民俗資料館蔵
竹製７段の梯子である。竹製の梯子はラオスのメコン川沿いのラオ族の村でも使っている。



▲
一本バシゴを上る女性
－ラオス・ホーファン県・フウサイ村・モン族－

270　ダーイ　－ラオス・ポンサリー県ホック村・モン族－
木製７段の梯子である。天井に上るのに用いる。

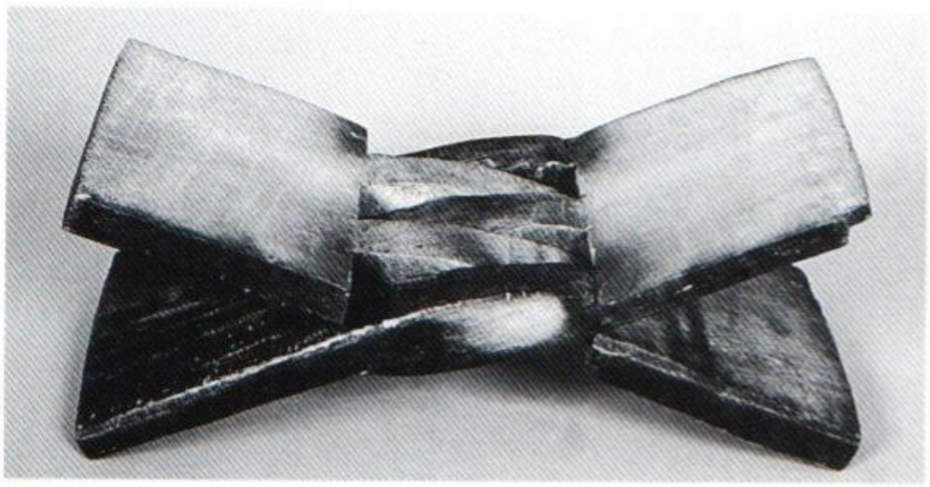
272　クラハシ　▶　－鹿児島県与論町－
与論民俗村蔵
木製５段の梯子で，穀物倉庫である高倉に上るためのものである。



275　クラハシゴ　－鹿児島県喜界町－
木製７段の一本バシゴである。高倉に上る梯子である。

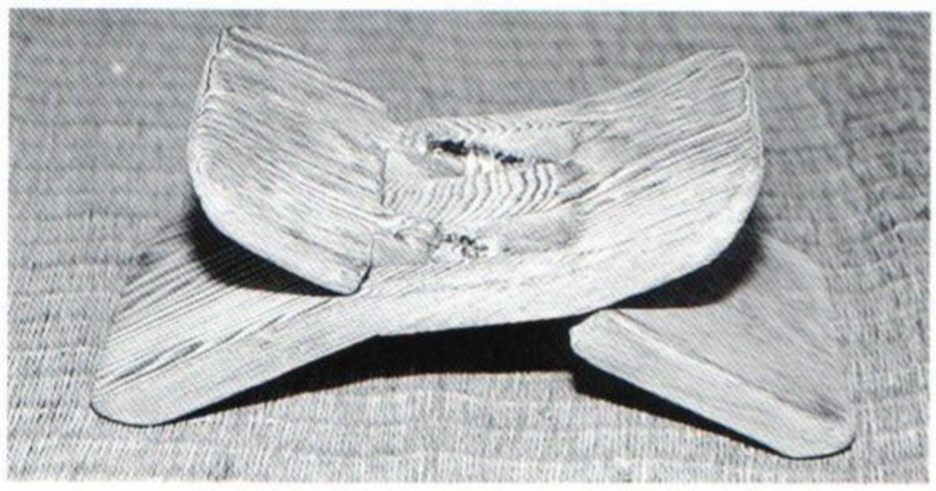
(2) 枕

1枚の板の両端から3分の1ぐらいの所まで鋸で割いて，残った中央部分に均等に鋸を入れて，2枚の板がX状に交叉するようにした枕は，東南アジアから沖縄・奄美全域にかけてみられる。以前は鹿児島でも使用されていた。

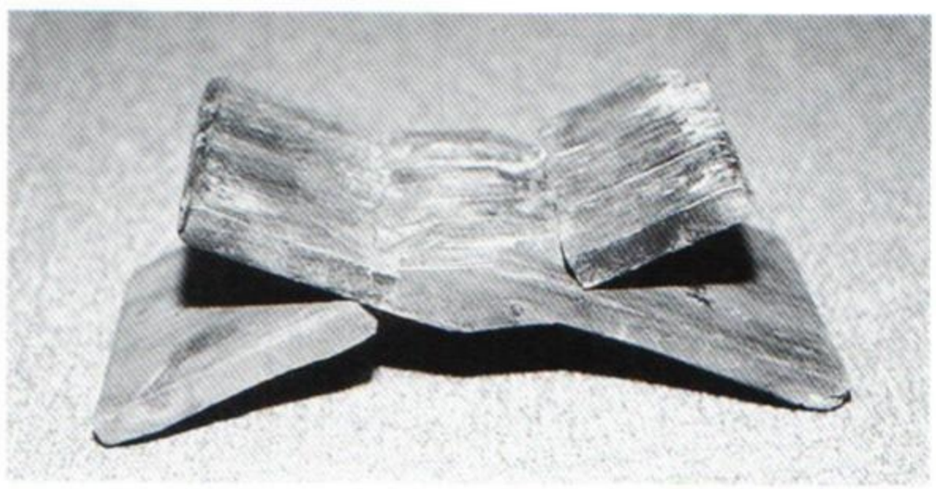


276　モーン　－ラオス・ルアンパバーン県・モン族－

277　枕　－中国・内蒙古自治区・ダフール族－
国立民族学博物館蔵



279　マクラ　－鹿児島県与論町－
与論民俗村蔵

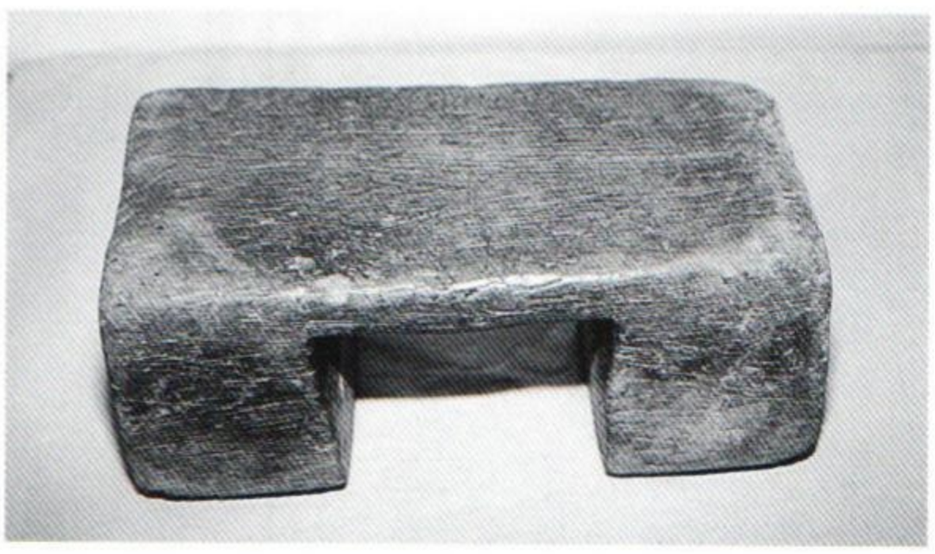


280　マクラ　－鹿児島県瀬戸内町－
瀬戸内町立郷土館蔵

(3) 椅子

東南アジアでは，高床式の家でも，土間住みの家でも椅子に座る生活が一般的にみられる。この文化は鹿児島にも南西諸島にもみられないものである。同様の住居に住みながらなぜ椅子を使わないのか，持っていたものを捨てたのか，不思議なことである。

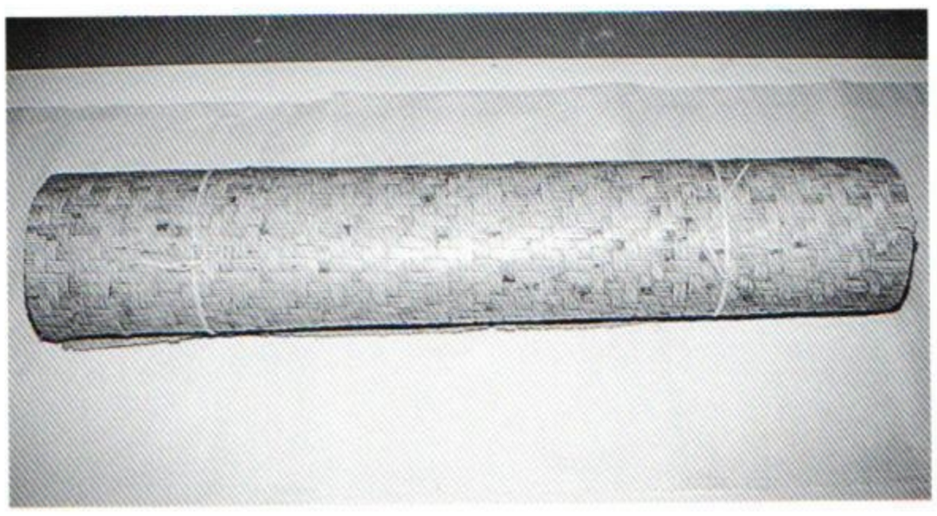
281　腰掛け　－タイ－
国立民族学博物館蔵
上面を籐で編んである。ラオスにも分布する。



283　腰掛け　－中国・海南省通什市・リー族－
国立民族学博物館蔵
木製の椅子で足の部分が削り抜いてある。

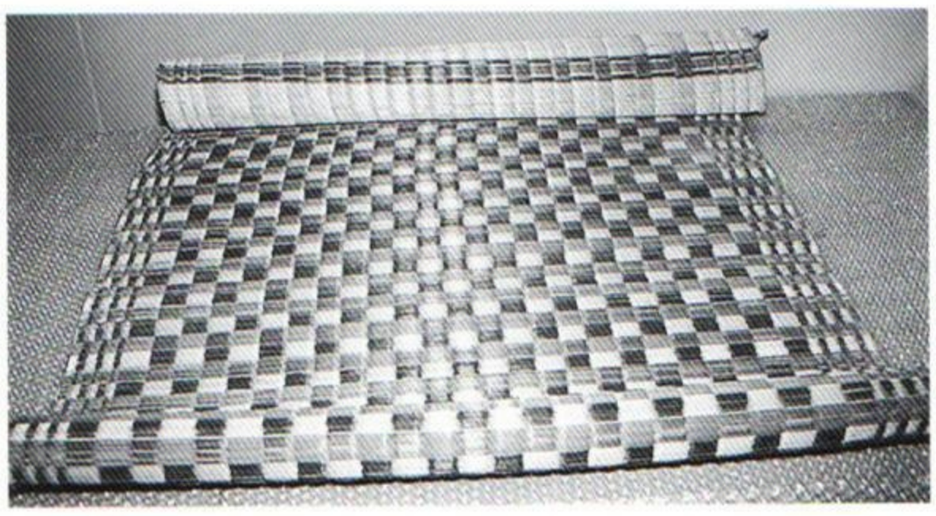
(4) ゴザ

高床の家を訪れると，竹床の上に竹のマットや花ゴザを敷いてもてなしてくれる。着色した藺草を織り合わせて模様を出している。まるで絣や浮織を思わせる。我々のゴザの文化はこうしたところにルーツがあると思われる。

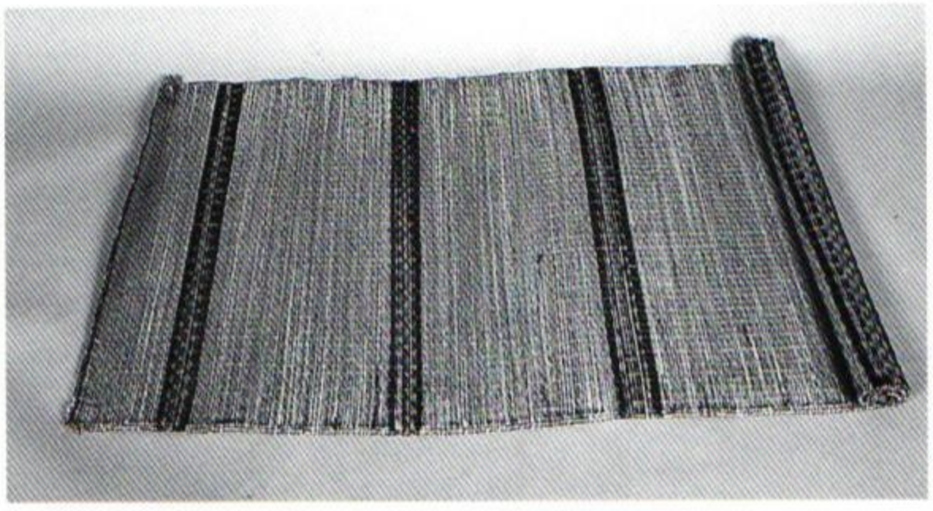


284　ござ　－ラオス・ルアンパバーン県・ラオ族－
国立民族学博物館蔵
ひしゃいだ竹を網代編みしたマットである。

床にゴザを敷いて客をもてなす主人
－ラオス・シェイクアン県・サン村・ラオ族－



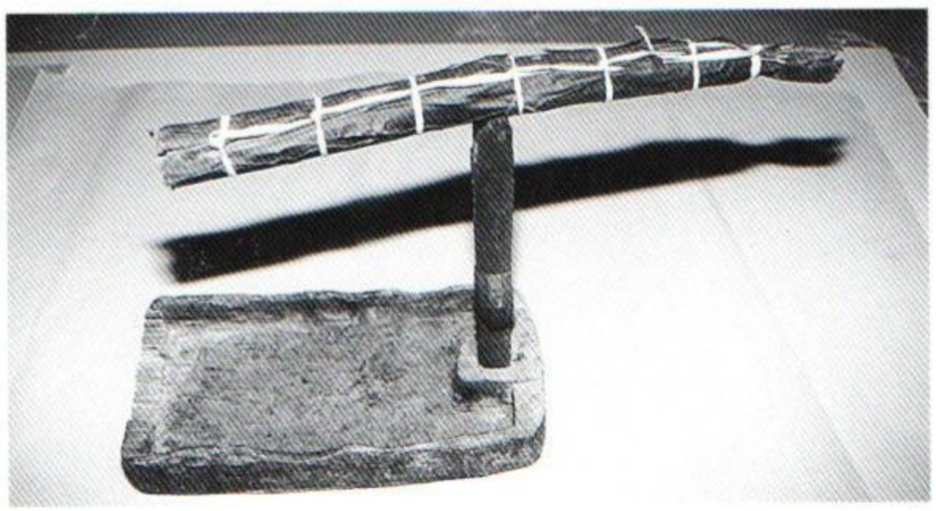
286　花莫蓙（ござ）　－カンボジア・クラテイエー－
国立民族学博物館蔵



289　花莫蓙　－ラオス・ルアンパバーン市内－

(5) 明かり台

ラオスでは，明かりの材料や焚きつけに松の芯を割ったものを用いる。市場では現在でも松が売られていた。かつては，鹿児島でも明かりをとるため，囲炉裏の脇に台などを置き，その上で松を焚いていた。



292　松明置き台　－ラオス・チャンパサク県・ナ村・ラウエー族－
台は，燃え落ちる火の受皿を兼ねている。

293　ヒゴラケ　－鹿児島県大根占町－
明り取りのアカシ（松の根の芯）を焚いた台である。大正の末頃まで使用されていた。

6　食べる

食の文化で共通するのは「蒸す」という調理技術である。御飯を蒸すためや，焼酎を蒸すために，竹や木や陶器を用いたさまざまな蒸し器が用いられる。特に，焼酎造りに用いられる蒸し器を中心とした道具は，その製作技術とともに，鹿児島から南西諸島にかけての焼酎造りのふるさとを思わせる。

また，奄美大島を北限とする調理用小臼も「つながる文化」の一つである。その他，ニガウリ，ヘチマ，里芋，カライモ，タケノコ，タカナなどの食材も南九州から南西諸島にかけて好んで食べられるものと同じである。

(1)　蒸し器

東南アジアの人々の間では，もち米を蒸して食べるのが一般的な御飯である。特に，二度蒸しして食べる食べ方は，鹿児島でイゼボシと呼ばれる，蒸し，干し，搗き，炊いて食べる食べ方とつながる。竹を編んだもの，竹を板にした曲げもの，木を刳り抜いたもの，陶器製のものがみられる。

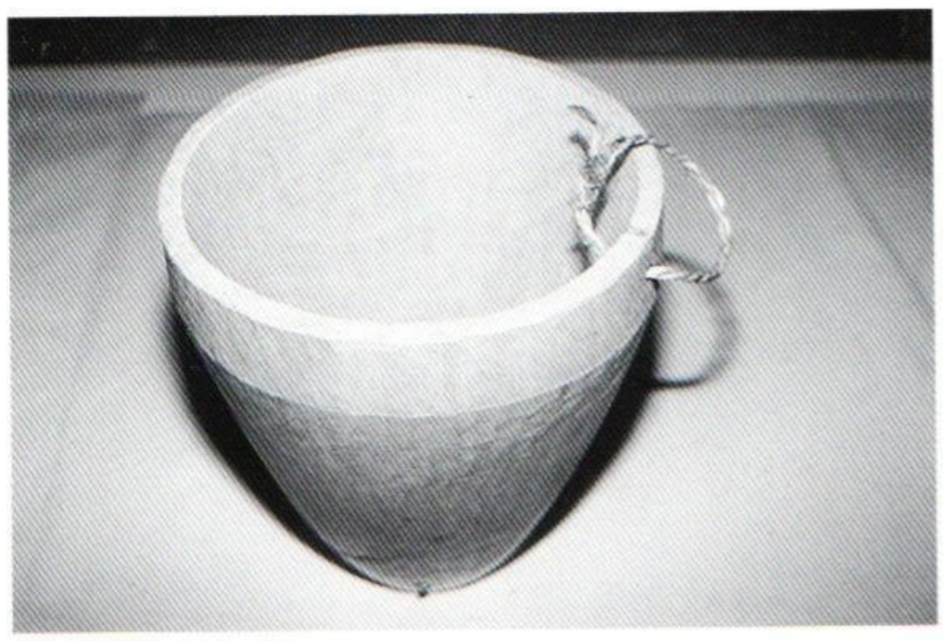
297　もち米蒸し籠　－ラオス・サバンナケット地方・ラオ族－
国立民族学博物館蔵
内側は広幅の網代編みで，外側は網代とゴザ目の二重編みである。底は四ツ目の敷である。

もち米を蒸している様子　－ラオス・ポンサリー県・キューカチャン村・アカ族－

298　チャベロ　－鹿児島県川内市－
カラタケ製の網代編みの蒸し器である。茶の生葉を入れて湯釜の上に乗せて蒸した。団子なども蒸した。蓋にはバラを用いる。

300　シャコ　－ラオス・ルアンナムタ県・チャラ村・クイ族－
竹を板にして，それを曲げ物にした蒸し器である。

301　カヤゴセイロ
－鹿児島県三島村－
茅をホウライチク（きんちく）の若竹の皮で巻き編みした蒸し器で，底に小穴があけてある。



302　もち米蒸し器　－ラオス・サバンナケット地方・ラオ族－

国立民族学博物館蔵

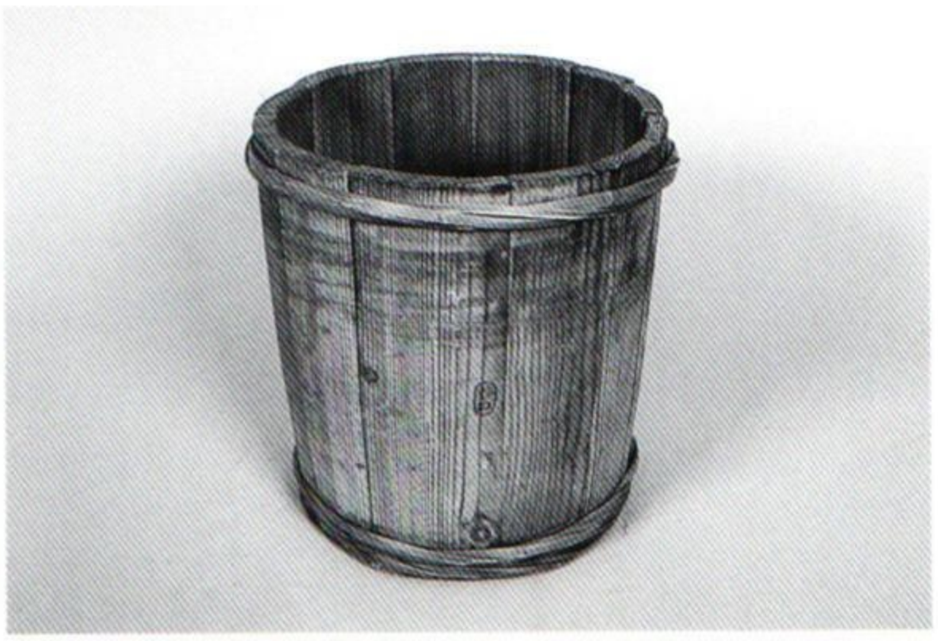
木を刳り抜いた蒸し器である。底には十字の竹串の上に，竹編みの敷が乗せてある。

304　カシキオケ　－鹿児島県大和村－

堅木を刳り抜いた蒸し器で，底には2本の木串が通してある。昭和5年に作られ昭和30年代まで使用された。

305　クシキ　－鹿児島県奄美大島－

クバの木を刳り抜いた蒸し器である。クバは，柔らかく刳り易かったとみえ，奄美や十島村には多くみられる。



306　セロ　－鹿児島県東串良町－

桶の底に小さな穴をあけた蒸し器である。

308　セイロ　－鹿児島県吹上町－

屋形式の蒸し器である。二段重ねで，それぞれに1㎝幅程度の割り竹を簀の子状に編んだ敷を底に敷く。

309　ティーヌン　－タイ・ランパーン－

アジア民族造形文化研究所蔵

陶器の蒸し器である。底には小さな穴が数個施されており，蒸気が上がるようにしてある。陶器の蒸し器は，苗代川でも作られていた。

（写真撮影　同研究所）

(2) 焼酎造り

ラオスの少数民族は，ラオラオという米の焼酎を造る。籾のままの固形のモロミを蒸して，蒸し器の上に乗せた冷却鍋で冷やし，木の受け皿で受けて外に引き出す。ラオスの冷却鍋と鹿児島のツブロとは逆さの形をしているが，住用村に木の受け皿があることや，蒸溜の桶をコシキと呼んでいることから考えると，かつてはラオスと同様の製造法をもっていたのではないかと思われる。

311　トムラオ　－ラオス・ポンサリー県・シンサイ村・ラオルーン族－

蒸し器を乗せる湯わかし鍋で，二重口縁になっている。蒸し器を乗せて外側に水を張ると蒸気が抜けないようになる。

焼酎を垂らしている様子　－ラオス・ホーパァン県・フウサイ村・モン族－

籾の状態のモロミを蒸して，蒸気を冷却して，滴り落ちる焼酎を木皿で受けて，蒸し器の胴部から外に引き出す。

312　トムラオ　311に同じ

一重の縁になっている。ラッパ状の所に蒸し器を乗せる。カマナベなどと呼ばれる大釜の縁もこうした機能を持つものと考えられる。

313　カイゴンブルッ　－ラオス・ポンサリー県・コックニュー村・カム族－

焼酎蒸溜用の蒸し器である。胴部に焼酎を引き出す穴があけてあるのが，普通の蒸し器と異なる点である。

314　ハイ　－ラオス・ポンサリー県・モンマイ村・タイデン族－

底の部分がやや細まっているのが共通した形で，桶式のものと異なる点である。

316　チュウーチャウ　ーラオス・ポンサリー県・ホック村・モン族ー

大型の蒸し器で，鹿児島でカマナベと呼ぶ浅底の大釜の上に乗せるものである。

317　焼酎蒸溜器　ー鹿児島県鹿屋市ー

桶の中に冷却器（ツブロ）がはめ込んである形である。ツブロの受け口から引き出された焼酎を垂らすパイプが胴部から出ている。一般的にはコシキと呼ばれる。

318　モトム　ーラオス・ポンサリー県・モンマイ村・タイデン族ー

円錐形の冷却鍋で，蒸し器の上に乗せて中に水を入れる。底の外側に結露し，滴る焼酎を受け皿で受けて外に引き出す。水は常に冷たく保つ。

319　モーセン　ーラオス・ポンサリー県・ソップナウ村・タイデン族ー

水を冷たくするため，温水を汲み出すとき底が磨滅しないように竹の敷が入れてある。

320　モーセントンヤイ　ーラオス・ポンサリー県・ソップナウ村・タイデン族ー

大型の冷却鍋である。冷却鍋はすべて青銅器である。

321　ツブロ　ー鹿児島県串良町ー

ラオスの冷却器を逆さに伏せた形をしている。底の縁を折り返して中央部の円筒の縁に向け少し高くなるようにして，滴る焼酎を受ける。これを桶にはめ込み，上に水を入れて冷却し，内側に結露させる。

322　ファムリン　－ラオス・ポンサリー県・モンマイ村・タイデン族－

冷却鍋から滴る焼酎を受ける皿である。木の葉の形をしており，中を少し刳り，葉脈のような溝を彫り，流れ易くしてある。

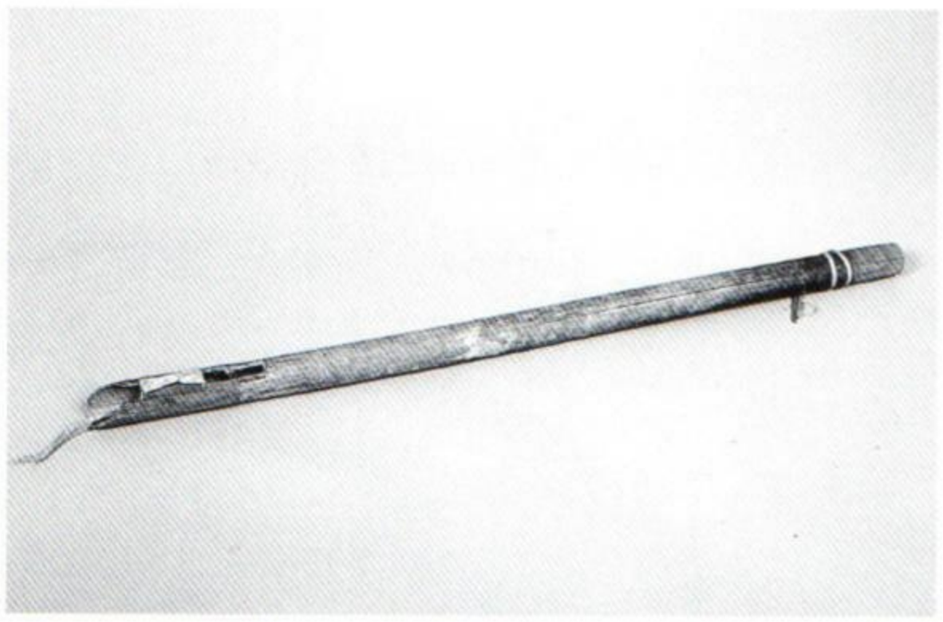
323　チィーチャウ　－ラオス・ポンサリー県・ホック村・モン族－

大型の受け皿で，中を刳っただけで溝は彫っていない。

324　パファ　－ラオス・ポンサリー県・ソップナウ村・タイデン族－

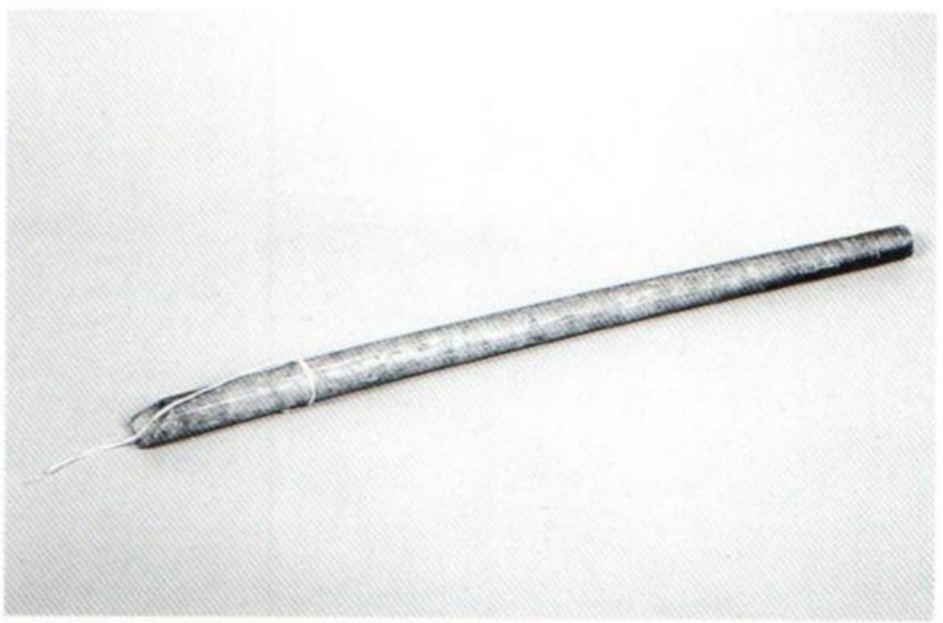
325　蒸溜皿　－鹿児島県住用村－

ラオスの受け皿とほとんど同じである。蒸溜の仕方もラオスと同じで，ツブロに水を入れて蒸し器に乗せ，外側に結露した焼酎を受けて外に引き出していたという。



326　コーン　－ラオス・ポンサリー県・モンマイ村・タイデン族－

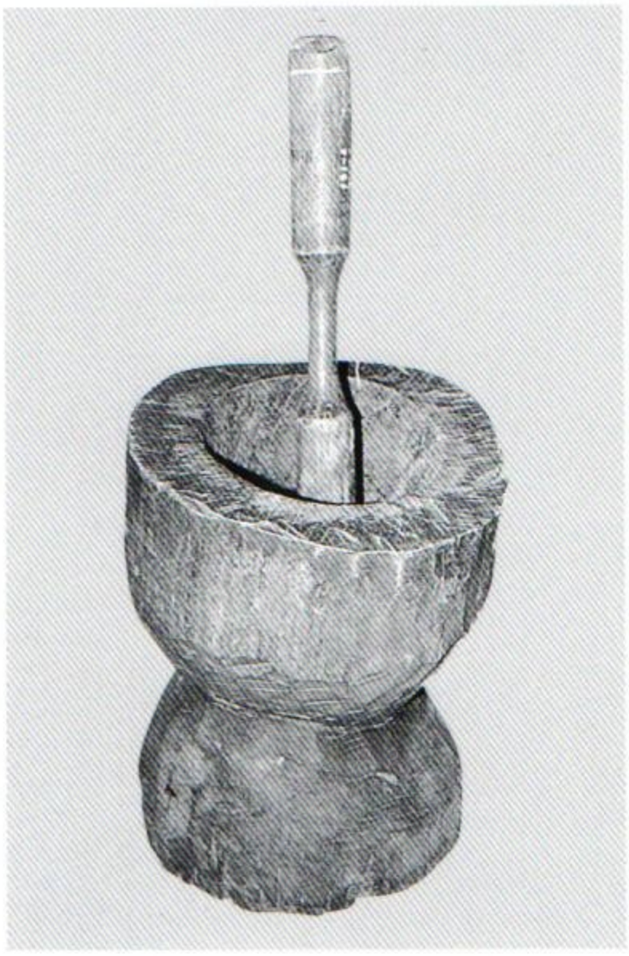
受け皿の先に取り付けて焼酎を垂らす竹管である。先端には木綿糸が付けてあり，細口のビンでも溜めることができる。



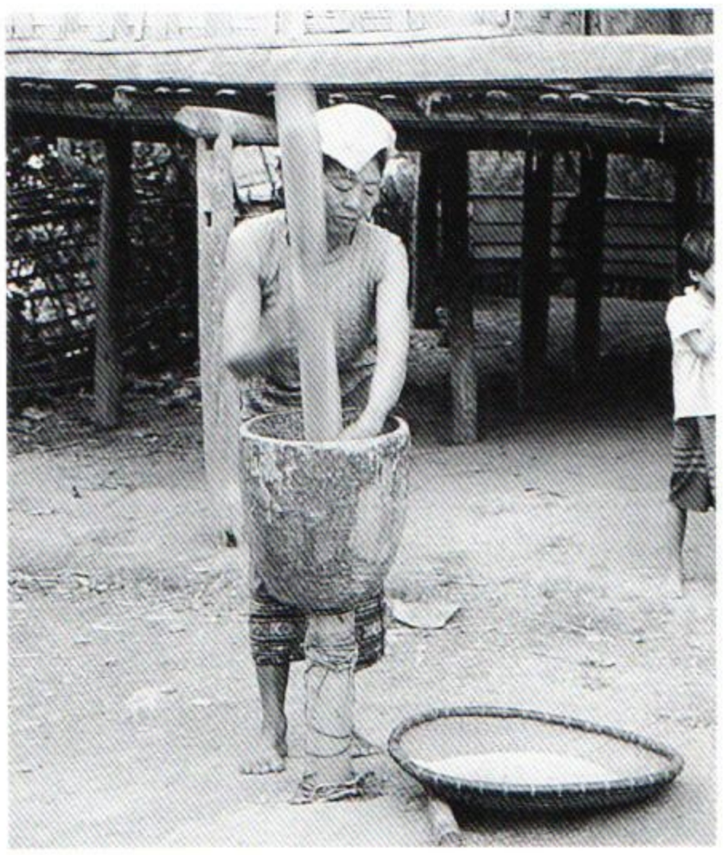
327　クイラオ　－ラオス・ポンサリー県・ソップナウ村・タイデン族－

(3) 臼

穀物を搗いて精白米や玄米にしたり，餅を搗いたり，製粉したりするのに用いる。形には，竪型のものと横型のものとがある。横型の臼は，豚の餌入れや牛馬の餌入れなどにも利用される。杵にも竪型と横型とがあり，臼とセットで使われている。



330　クンジュー　－タイ－
原野農芸博物館蔵
胴くびれ型の竪臼である。米を搗いたり，餅を搗いたりするのに用いる。



臼で精米をする女性
－ラオス・ポンサリー県・ピイア村・カム族－
臼の下側に棒状に足を削り出し，それを地面に突き立てて臼を保持しているのが珍しい。

332　チェコー　－ラオス・ルアンナムタ県・チャラ村・クイ族－
寸胴の竪臼であるが，全体を刳らずに周囲を浅く刳り，中央部だけを少し深く刳ってある。

331　クンジュー　－タイ・レークペエー村・カム族－
原野農芸博物館蔵
寸胴型の竪臼である。

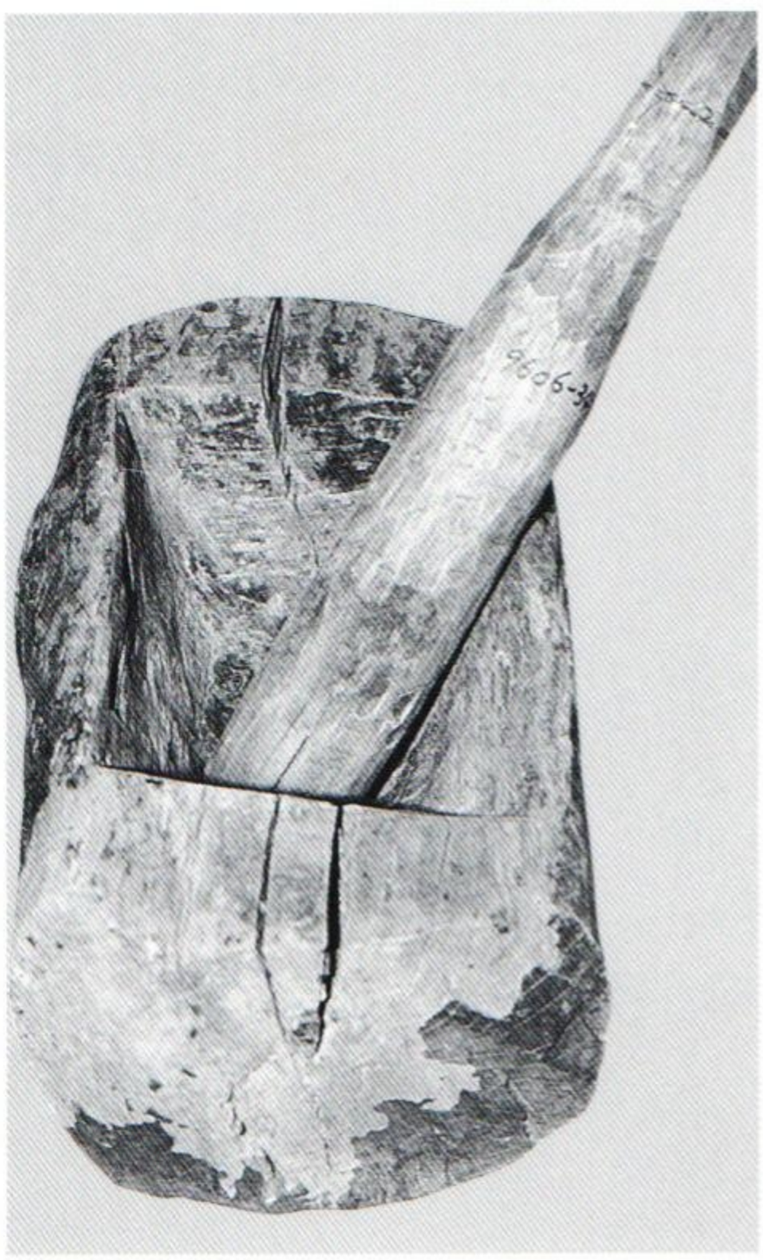
333　ウス　－鹿児島県十島村－
胴くびれの竪臼である。米，粟，麦などの精白，製粉，餅搗きに用いられたものである。

334　ウス　－鹿児島県里村－

胴部に切り込みが入れてある竪臼である。松材である。昭和20年ごろまで，餅，米，麦搗きや製粉に使用した。

335　木臼　－鹿児島県吉田町－

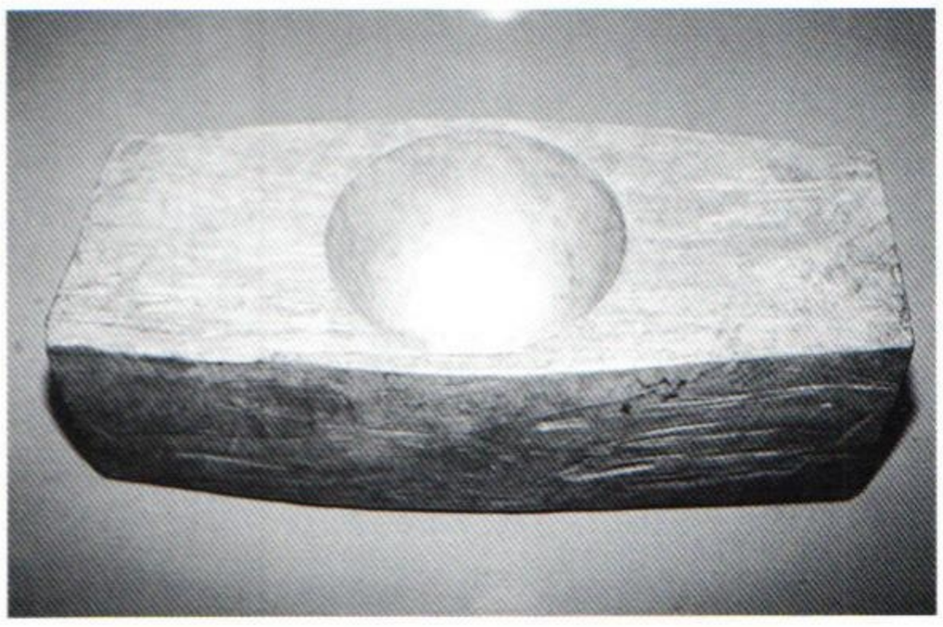
寸胴型の竪臼である。松材で作られている。



336　木臼と杵　－タイ－

原野農芸博物館蔵

横臼である。鹿児島では横臼は牛馬や豚の餌舟，あるいは，かけ樋の水舟などに使用されていた。



337　臼　－フィリピン・オリエンタルミンドロ州マンサライパナイタヤン村・ハヌノウマンギャン族－

国立民族学博物館蔵

米を搗いたり，乾燥させたトウモロコシをくだいたり，茹でたバナナをつぶしたりもする。

341　トーネ　－鹿児島県伊仙町－

伊仙町歴史民俗資料館蔵

湿田に苗を植えるとき，この舟に苗を積んで，底に木の枝を敷き込んだ田の中を歩きながら引き回る。タブネ（田舟）の意であろう。

(4) 小臼

調理用の小臼も東南アジアから奄美大島まで「つながる文化」である。小臼は，木や石，陶器，竹で作られ，竪型，横型がみられる。杵は，木や石の棒で，竪型のみがみられる。カニやエビ，香辛料を突きつぶし，サラダやカマボコを作ったり，豆やゴマなどを突きつぶして製粉したりするのに用いる。鹿児島にくるとスリバチに替わる。

348・349　ホック・サックヒン
ーラオス・ポンサリー県・モンマイ村・タイデン族ー
香辛料を突きつぶす木の小臼と石の杵である。

350　臼　ーネパール・ツアルカ村ー
国立民族学博物館蔵
注ぎ口が加工されている。くびれた胴の部分には皮が当ててある。

352・353　ホック・サーク　ーラオス・ポンサリー県・モンマイ村・タイデン族ー
胴くびれ型の小臼である。

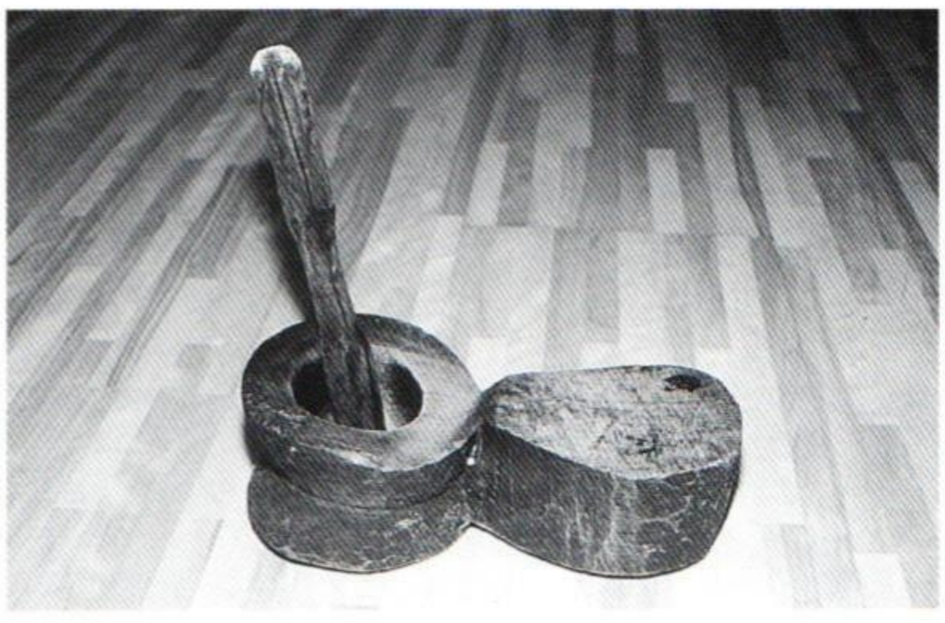
355・356　センデッチャウ・グランル
ーラオス・ポンサリー県クンルック村・カム族ー
コーヒーカップ型の小臼である。

357・358　センデッチャウ・グランル
ーラオス・ポンサリー県・コックニュー村・カム族ー

359　小臼　ー台湾・花蓮県・新白楊村・アタヤル族ー
国立民族学博物館蔵
臼の中には物をつぶした痕跡が残っている。

360　ウスとキネ　－鹿児島県知名町－

落花生やゴマなどを粉にするのに用いる。徳之島ではエビやカニなどをつぶすのに小臼を用いるという。沖縄県の八重山地方では，魚などをつぶしてカマボコの原料を作るという。



366　パロン　－ミャンマー・ビンダヤン族－

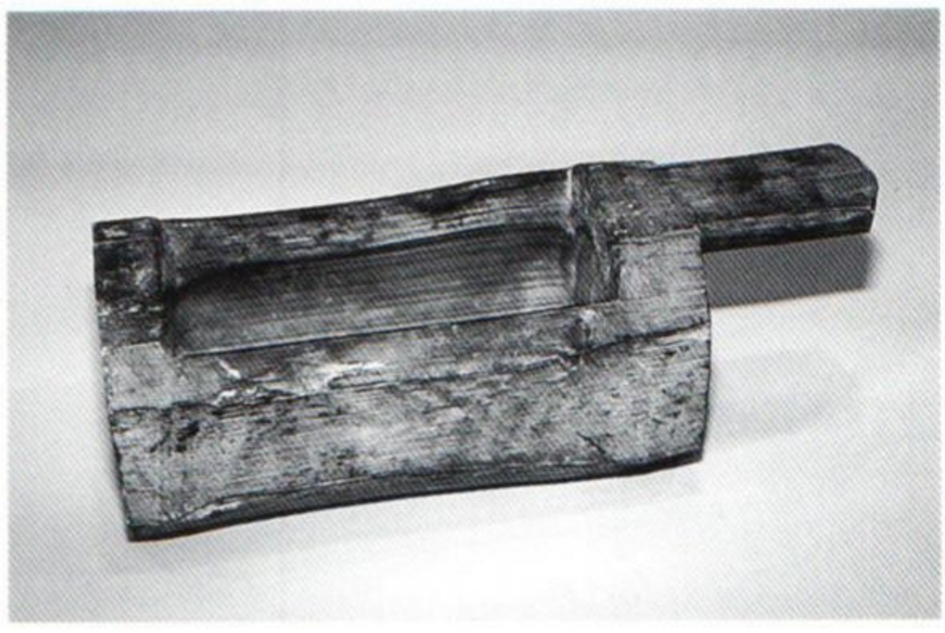
原野農芸博物館蔵

模型の小臼で，右側の台部はまな板にも使われる。

367・368　チョーク・サ

－ラオス・ポンサリー・ナムカム村・タイダム族－

横臼で左右二つとも臼になっている。調理用の小臼と小杵である。



371　ホロ　－タイ北部・パークェイ村・アカ族－

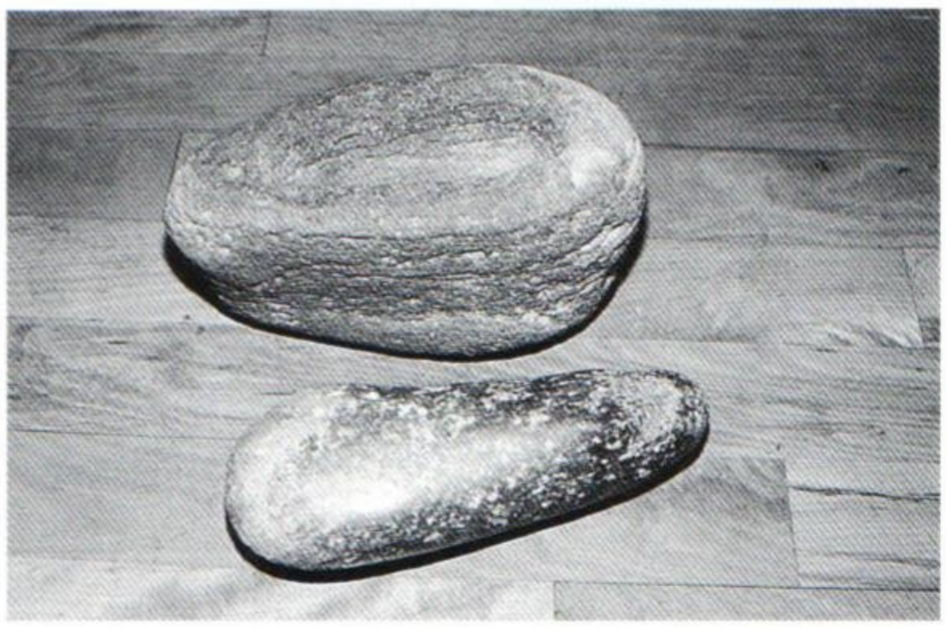
原野農芸博物館蔵

竹製の横型小臼である。

372・373　鉢と杵　－タイ・バンコック－

国立民族学博物館蔵

石製の小臼と小杵である。香辛料などを突きつぶすものと思われる。



374・375　石臼・石杵　－鹿児島県伊仙町－

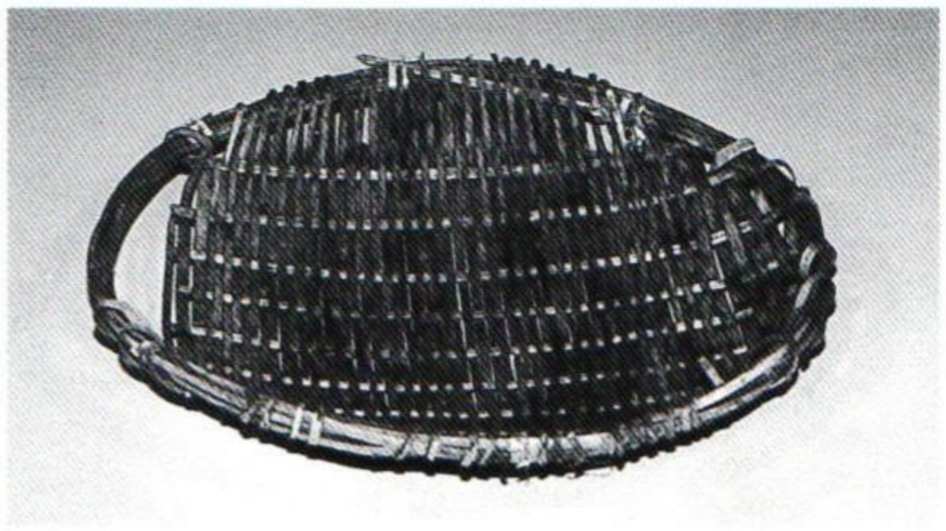
伊仙町歴史民俗資料館蔵

炒った落花生などを突きつぶすものである。木製のジマメワリウスもある。

(5) 笊（ざる）

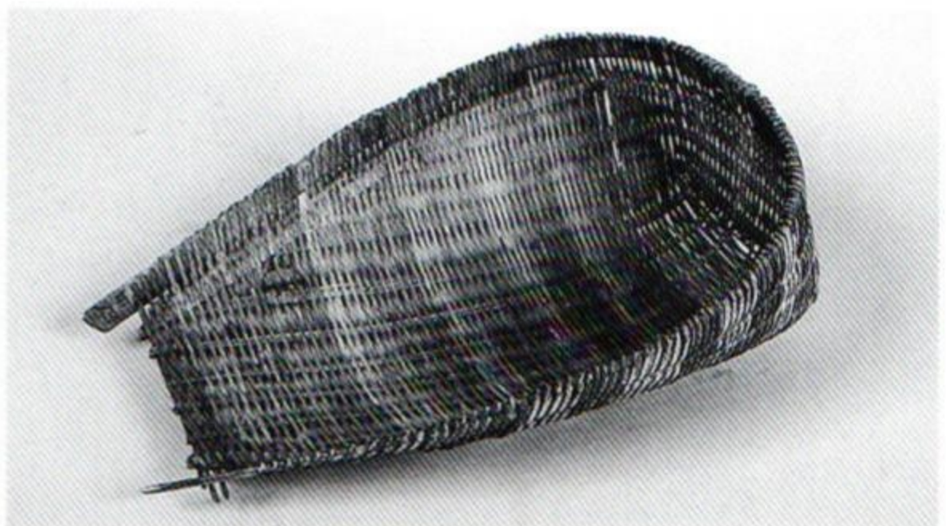
笊の中で最も注目されるのは，トカラ列島にみられるソウケという笊である。縁仕上げをせず，横ヘギを縁輪にかけて折り返して編み上げただけで，笊の古い形を示すものである。これとよく似た笊をモン族が使用している。

378　ポーチュ　－ラオス・ルアンパバーン県・ロンラオ村・モン族－
原野農芸博物館蔵
縦ヘギ５本は縁輪を通して切断してある。

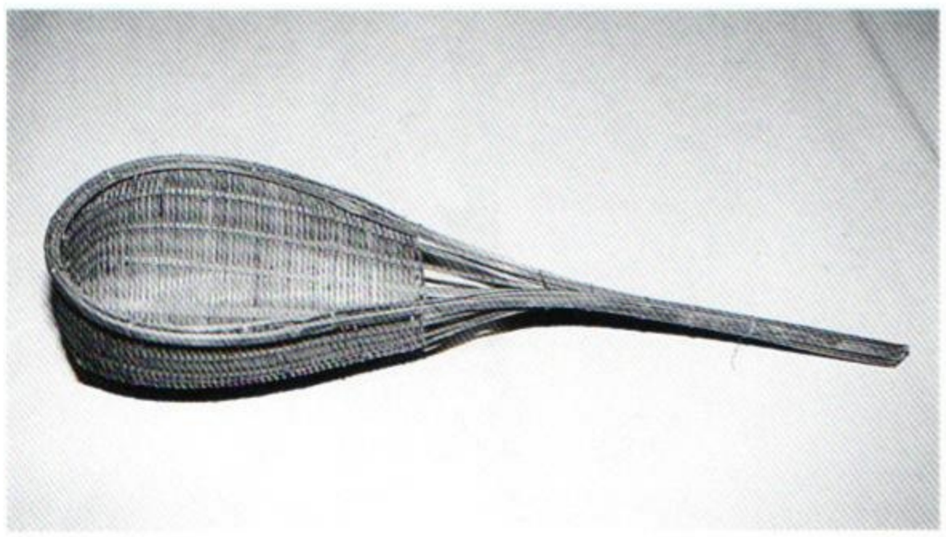


379　ソウケ　－鹿児島県十島村－
円形浅底笊の原初的なもので，縦ヘギは縁輪と交わる部分で横ヘギとして編まれる。この点がモン族のポーチュと異なる点である。

384　ケチ　－ラオス・ポンサリー県・パックカー村・アカ族－
片口笊で，横のヘギ数が多く，背の横ヘギも底部と断絶し，鹿児島のブイと酷似する。



385　ブンギイジョケ　－鹿児島県串木野市－
片口笊である点，縦ヘギより横ヘギが多い点，縁仕上げをしていない点などラオスのアカ族のケチに極めてよく似ている。



387　塩辛すくい用しゃもじ　－ラオス・チャンパサック県・パクソン村・ラオ族－
国立民族学博物館蔵

388　ダゴアゲ　－鹿児島県川辺町－
六ツ目編みの笊で，縁竹は野田口仕上げにし，それを延ばして柄にしている。ゴザ目編みのものもあり，左のラオスのものと同じである。

(6) 飯切り台

蒸したもち米の御飯を広げて冷ます木のお盆である。広げた御飯を細長いめしげで切るようにして，寿司飯を切るのと同じ要領で冷ます。この台の他に，バラや笊も使われており，鹿児島のスシオケやスシバラなどと関連を持つと思われる。

390　ボムヴィーカオ　－ラオス・ポンサリー県・ソプアッ村－

小形の円形飯切り台で，深さは3.5cmぐらいである。

蒸したもち米を冷ます女性　－ラオス・ウドムサイ県・ポンシィー村・モン族－

391　ルルムッ
－ラオス・ポンサリー県・クンルック村・カム族－

大型の円形飯切り台で，深さは5.3cmである。

392　プムヴィーカオ　－ラオス・ポンサリー県・モンマイ村・タイデン族－

大型の四角な飯切り台で，深さは3.0cmである。

(7) めしげ

ラオスの少数民族の間には，蒸した御飯を木の台やバラ，笊の上に広げて，それを切るようにして冷ますためのめしげがある。細長い形をしたもので，台湾から沖縄，奄美まで分布する。鹿児島でも，味噌造りの時に用いるものにその形がみられる。

393　マエダム　－ラオス・ナムラー村・ラオルン族－

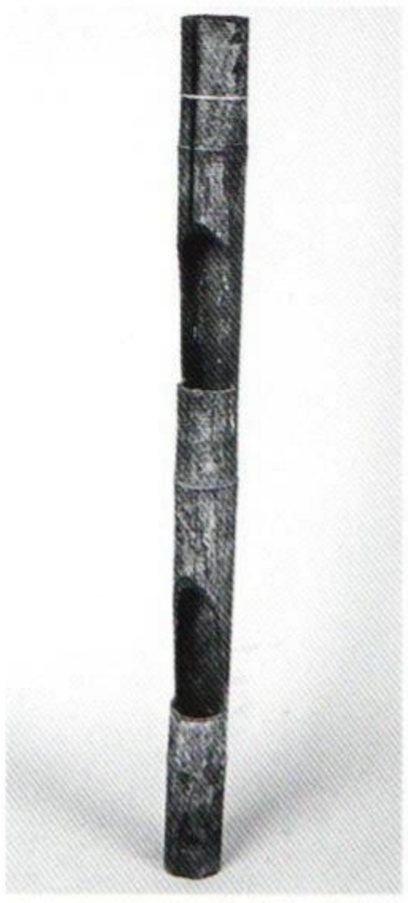
平たい板の手もとを少し細く作ってある。

397･398　ミシゲ　－鹿児島県笠利町－　笠利町歴史民俗資料館蔵

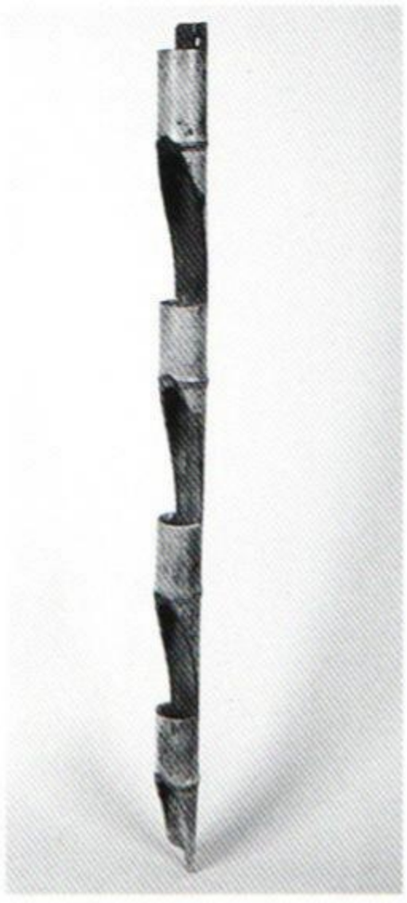
394のマエダムとほとんど同じ形をしている。同系統のものであろう。

(8) キッタテ

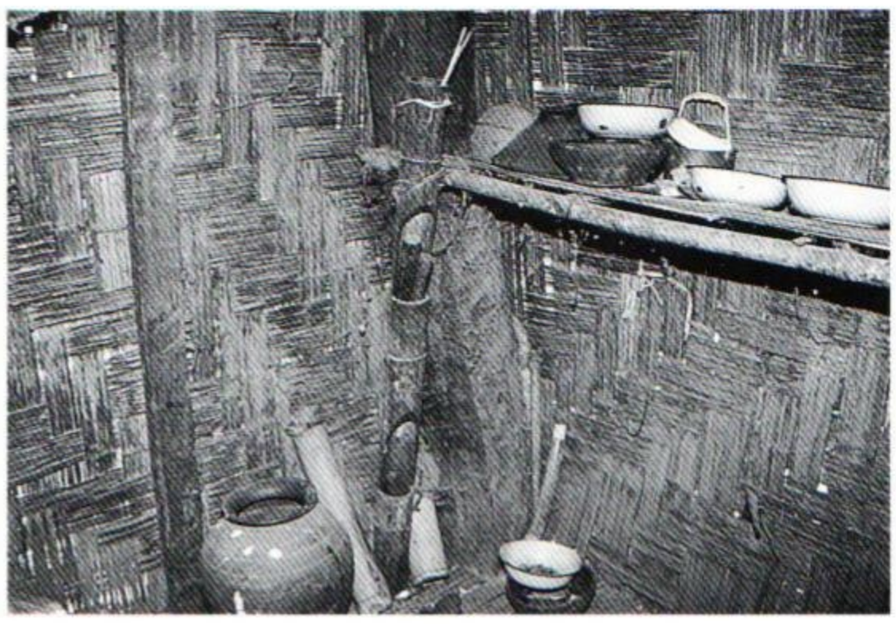
竹筒に切り込みを入れて，包丁，めしげ，箸，鍋の蓋を立てておくもので，台所には必ず立ててあるものであった。ラオスやタイでも形態，機能ともにほとんど同じものが使用されている。



402　ボクトゥ
－ラオス・ウドムサイ県・ナムナーツ村・タイルー族－



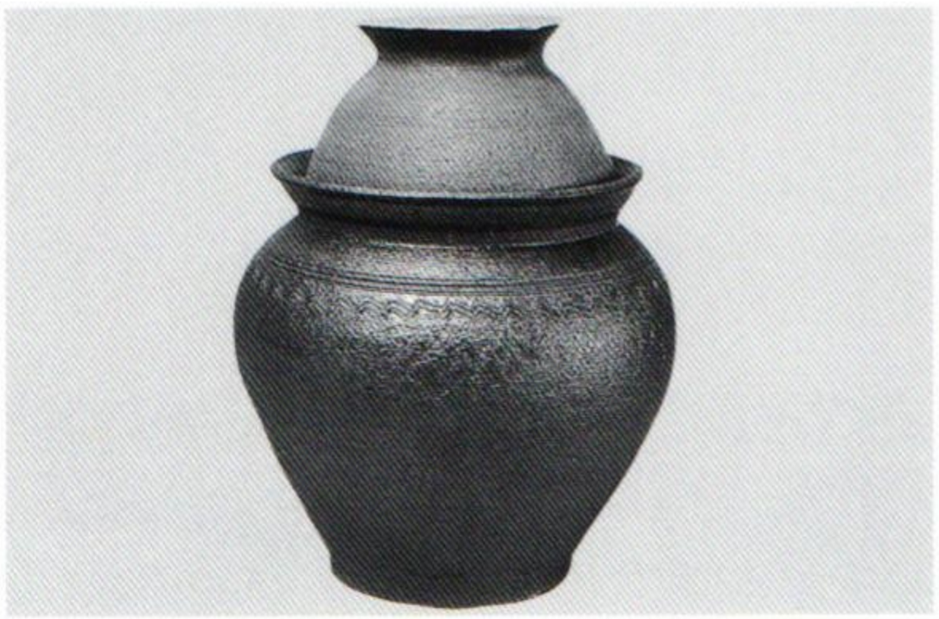
403　キイタテ
－鹿児島県枕崎市－
竹筒の一節に切り込みを入れ，節に穴をあけて水通しをしたものである。



ボクトゥの立っている様子　－ラオス・ウドムサイ県・ナムナーツ村・タイルー族－

(9) 二重口縁壷

中国南部からラオス，タイにかけて，口縁部がカルデラ状に二重になっている壷がみられる。酒，醤油，漬け物，お茶など発酵食品の入れものとして用いられ，内側の口に蓋のお碗をかぶせ，外側に水をはり，内側と外側とを遮断し，虫などの進入を防ぐ。



406　魚醤壷　－ラオス・ビエンチャン－
アジア民族造形文化研究所蔵
波状紋が施されているのが，ラオスの土器の特徴である。

407　オン　－ラオス・ルアンナムタ県・チェンチャイ村・タイルー族－
蓋がなくなった状態で，二重口縁になっているのがよくわかる。

（写真撮影　同研究所）

7　着る

染織の分野では，糸紡ぎの技術，藍染め，絣，浮織など，沖縄，奄美，日本とつながる要素がみられる。歩きながら紡錘車を使って木綿糸を紡ぎ出す女性たち，家屋の高床の下で機を織る女性たち，藍をたてて染めている女性たちの姿は，染織の文化が「女性の手わざ」であることを物語っている。また，奄美大島でとどまっている浮織，沖縄，奄美，鹿児島を経て東北まで広がった絣などは，南から文化が日本に流入する道筋を示していると思われる。

(1)　紡織

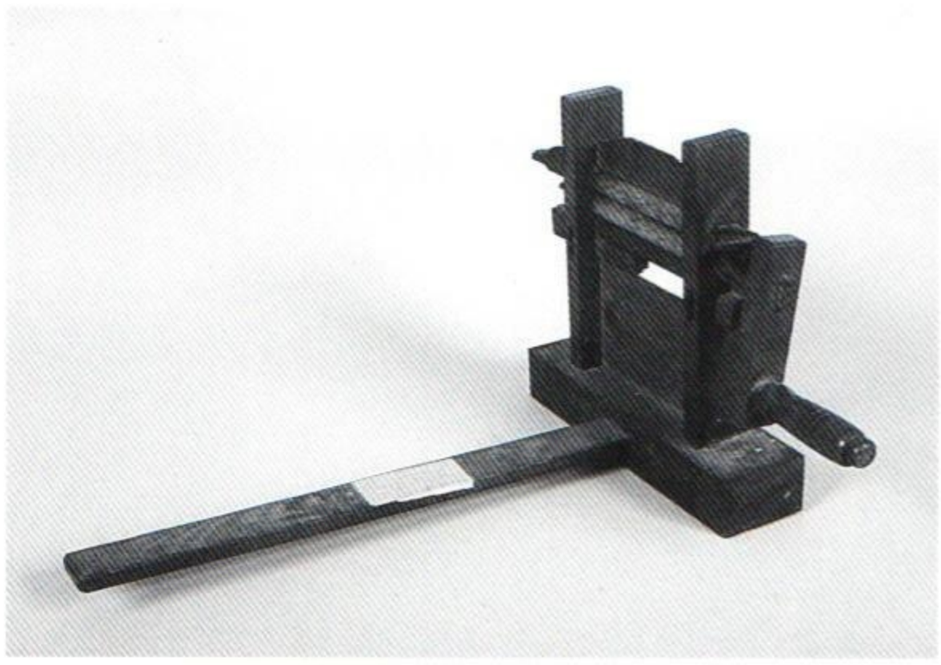
糸を紡ぎ出し，布を織るという仕事は，途方もない時間と根気を要する手作業である。そのために生み出された，紡錘車，糸車，地機などの道具は，ほとんど同じといってよいほどの共通性を示す。

綿の種を繰る女性　－ラオス・ルアンパバーン県・ウー村－

サネクリの前方に種のとれた綿が繰り出されている。

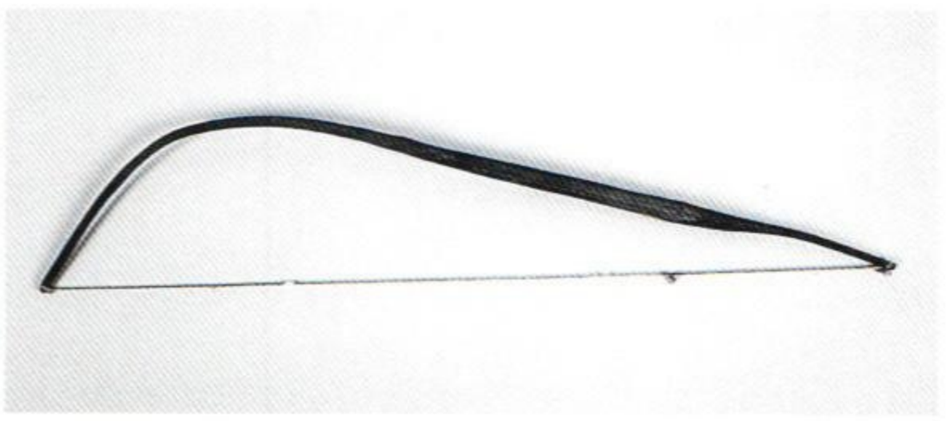
糸を紡ぎながら歩く女性たち　－ラオス・ルアンナムタ県・フォアラ村・アカ族－

女性たちは，市場の行き帰りに紡錘車を使って糸を紡いでいる。



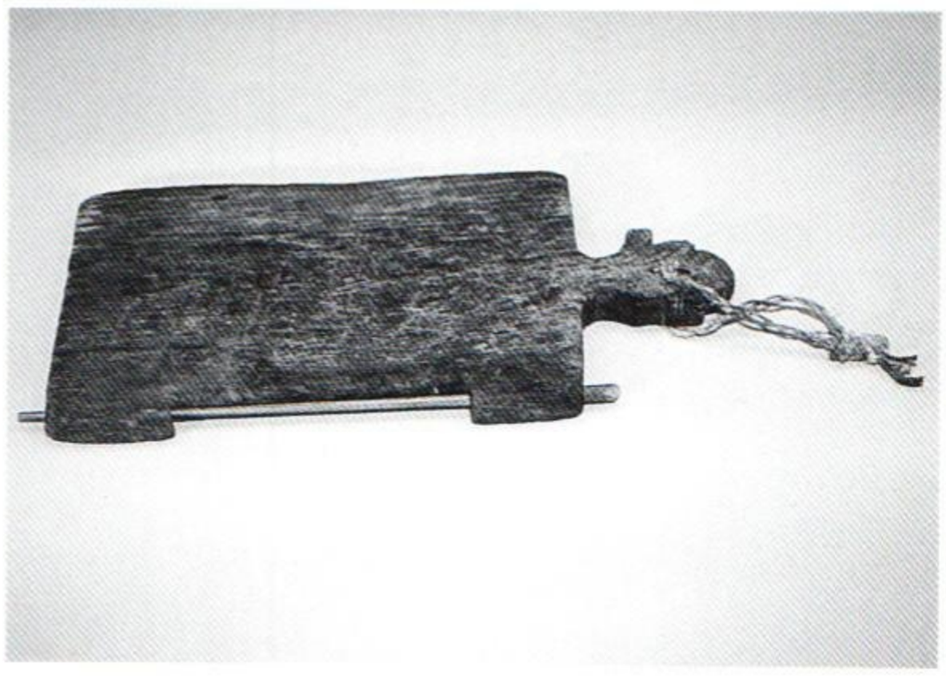
410　サネクリ　－鹿児島県吉田町－

2本の木ねじの切った横棒をハンドルで回して綿の種を取り出し，綿だけを向うに繰り出す道具である。



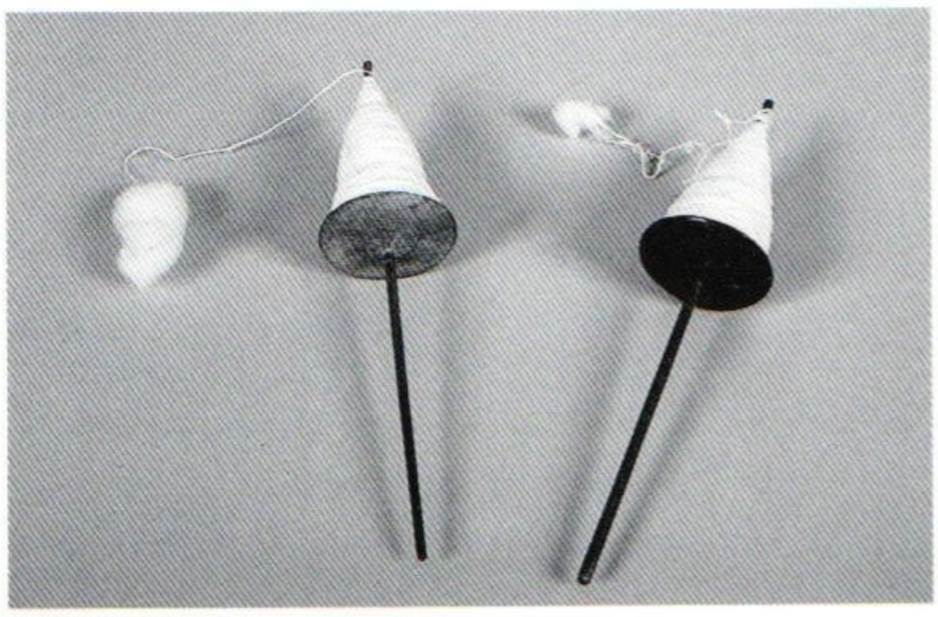
412　マインティーファー　－ラオス・ウドムサイ県・ナムナーツ村・タイルー族－

弦を弾いて種を取った綿をほぐす弓である。



413　綿うち　－ラオス・ルアンパバーン県－　原野農芸博物館蔵

弓でほぐした綿をこの板の上に置き，細い竹串を芯にして丸めて，糸を紡ぎ出す形にする。

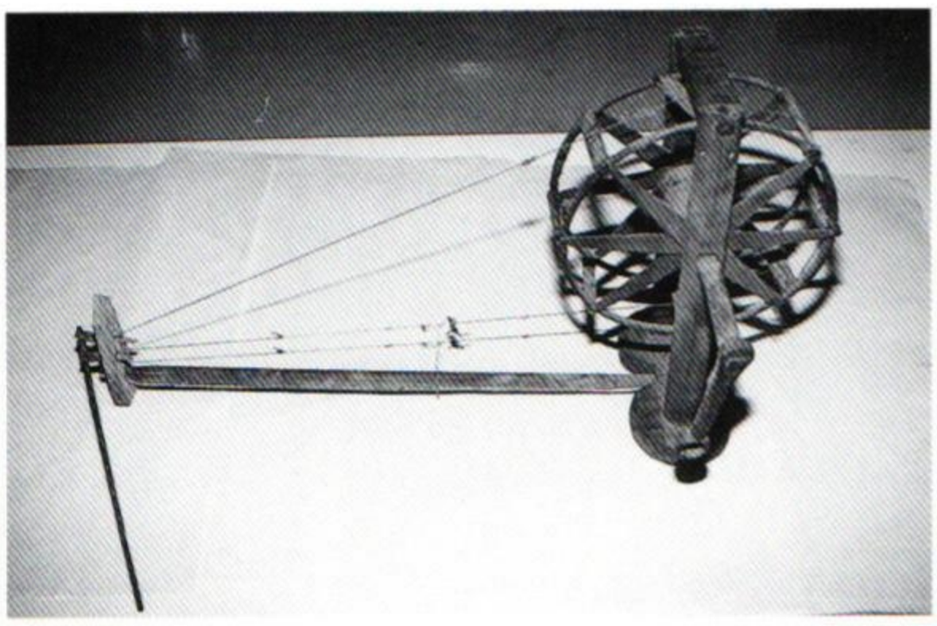


414　ヤアン　－ラオス・ルアンナムタ県・フォアラ村・アカ族－

糸を紡ぐ紡錘車である。平たい板に竹串を芯にしたもので，竹串の上側には糸を掛ける鉤が彫ってある。

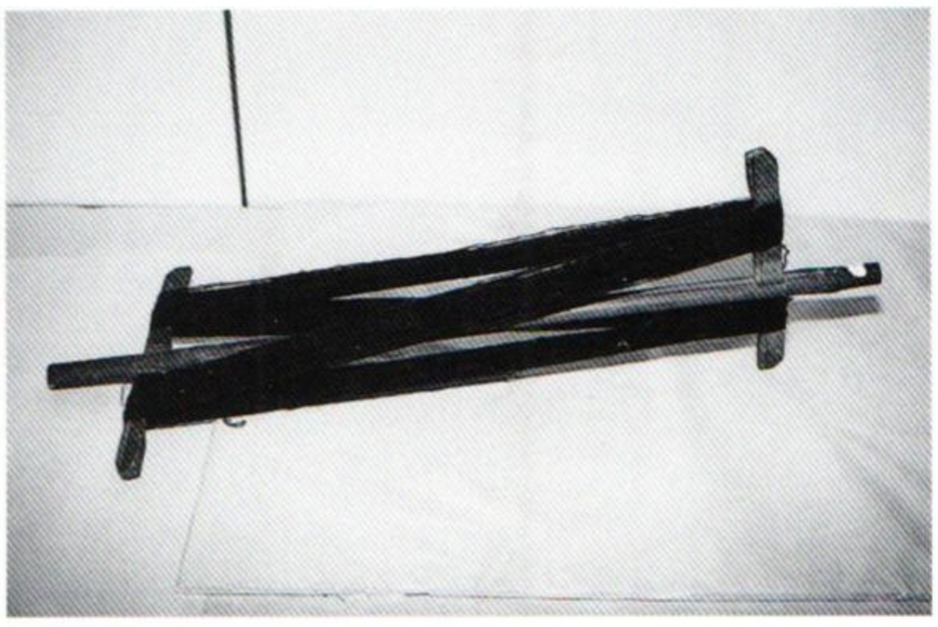
415　ヌサークボーン　－ラオス・ルアンナムタ県・フォアラ村・アカ族－

糸紡ぎの道具や紡いだ糸を入れておく竹筒で，腰につけておく。



419　糸車　－ラオス・シェイクアン県・サワイ村・カトウ族－

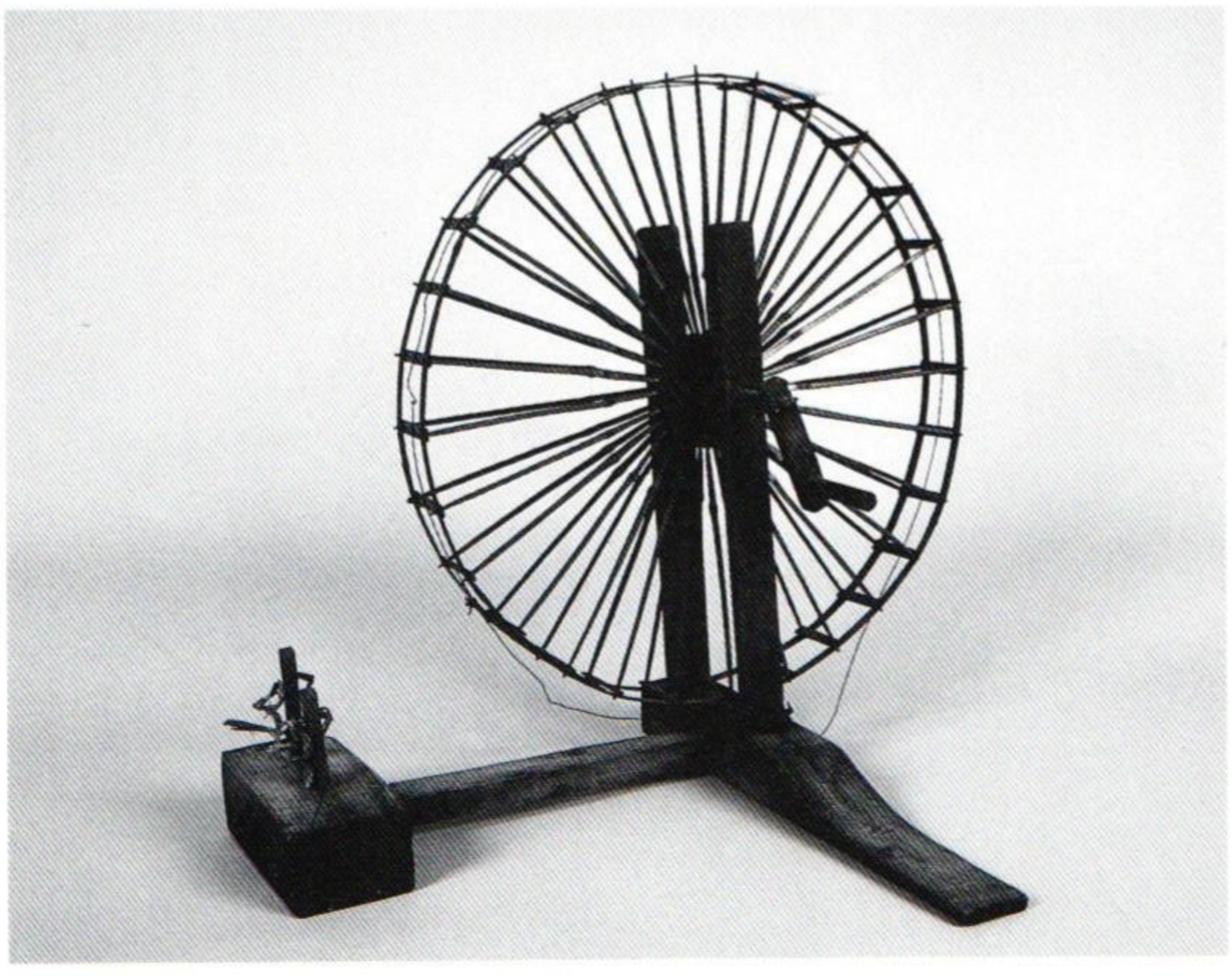
国立民族学博物館蔵



421　織機枠組み　－タイ－

国立民族学博物館蔵

経糸の本数を決めて，上下の経糸を分けるため交叉させて巻く枠である。

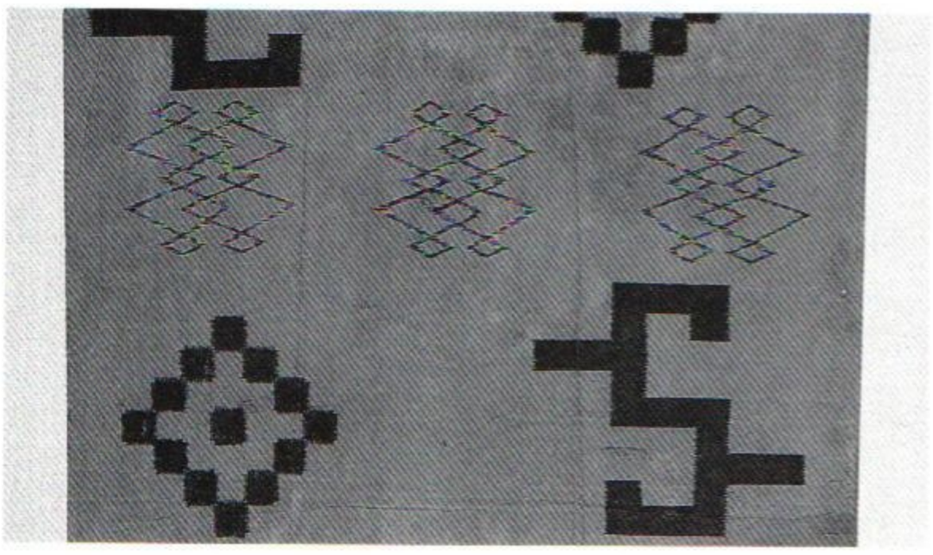


420　糸車　－鹿児島県輝北町－

紡いだ糸を竹管に巻き取ったり，撚りを入れたりするのに用いるものである。

(2) 絣見本帳

御絵図は，琉球王府が各島に絣を発注する柄見本で，琉球絣の基本的な柄が描かれている。こうした柄が，新潟県小千谷市に残されている「越後縮（上布）」の見本帳や，山形県長井市に残る「長井紬」の見本帳にみられる。18世紀後半にはすでに越後縮に琉球絣の技術が伝わっていたことを物語っている。



434　御絵図黄地ムルドウッチリ　－沖縄県－

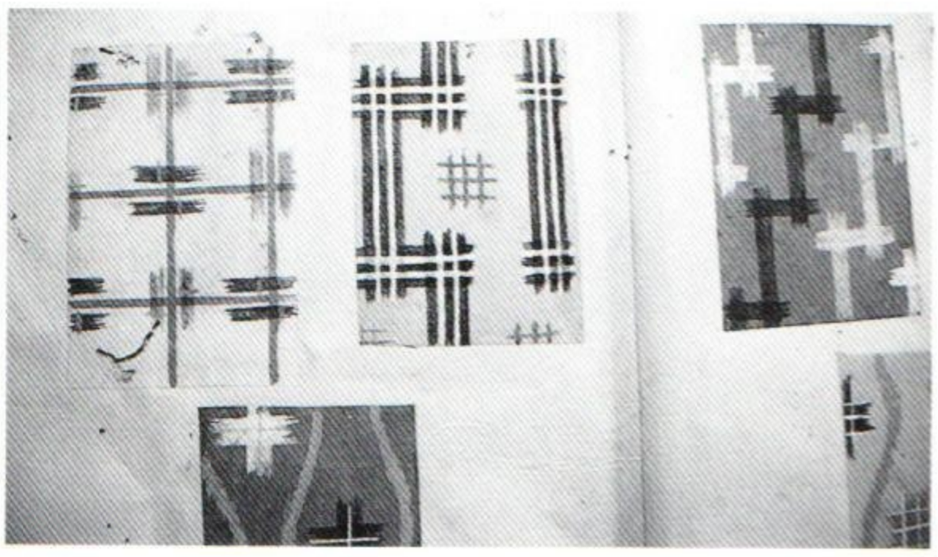
沖縄県立博物館蔵

（写真撮影　同博物館）

438　御絵図紺地ムルドウッチリ　－沖縄県－

沖縄県立博物館蔵

（写真撮影　同博物館）

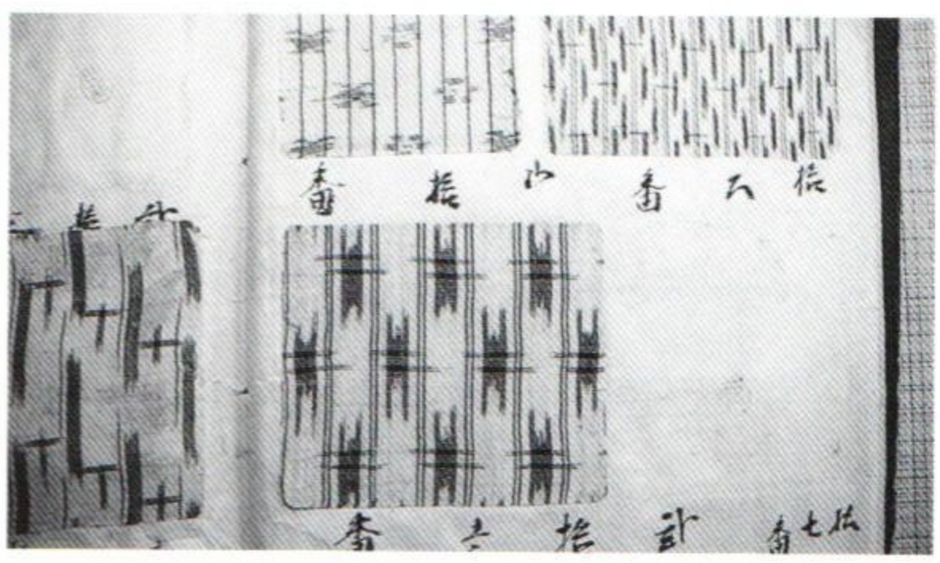


440　新潟県指定有形民俗文化財　縮坊本扣

－新潟県小千谷市－

小千谷市教育委員会蔵

「壬寅月二年正月吉日」の銘があり，1782年の製である。裏書きから奥州向けとわかる。

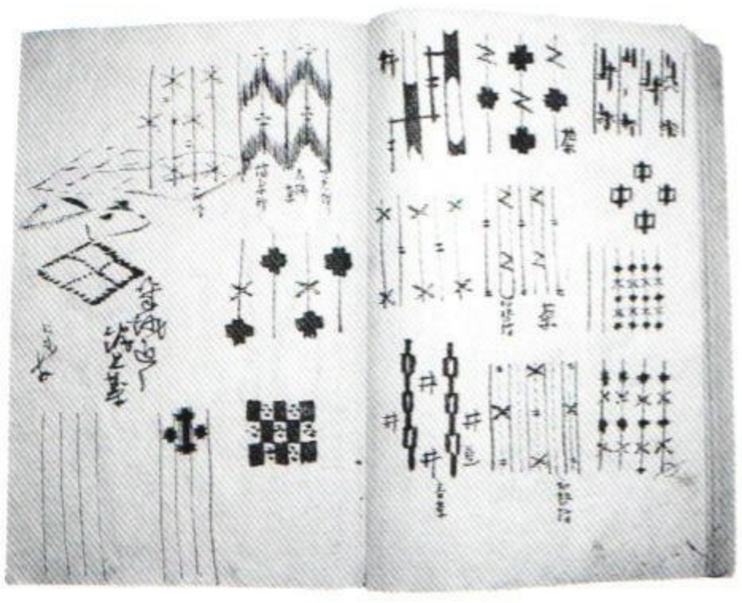


441　新潟県指定有形民俗文化財　越後雛形

－新潟県小千谷市－

小千谷市教育委員会蔵

文化5（1808）年ごろのもので，江戸での商い用である。

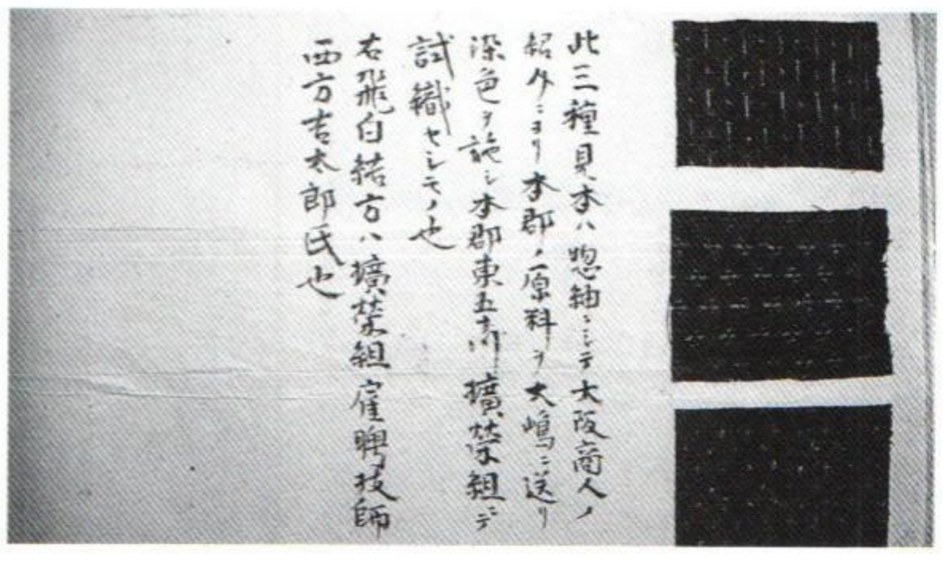


442　新潟県指定有形民俗文化財　縮雛形

－新潟県小千谷市－

小千谷市教育委員会蔵

文化3（1804）年に製作されたものである。もともとは十日町の中山家のものと思われる。



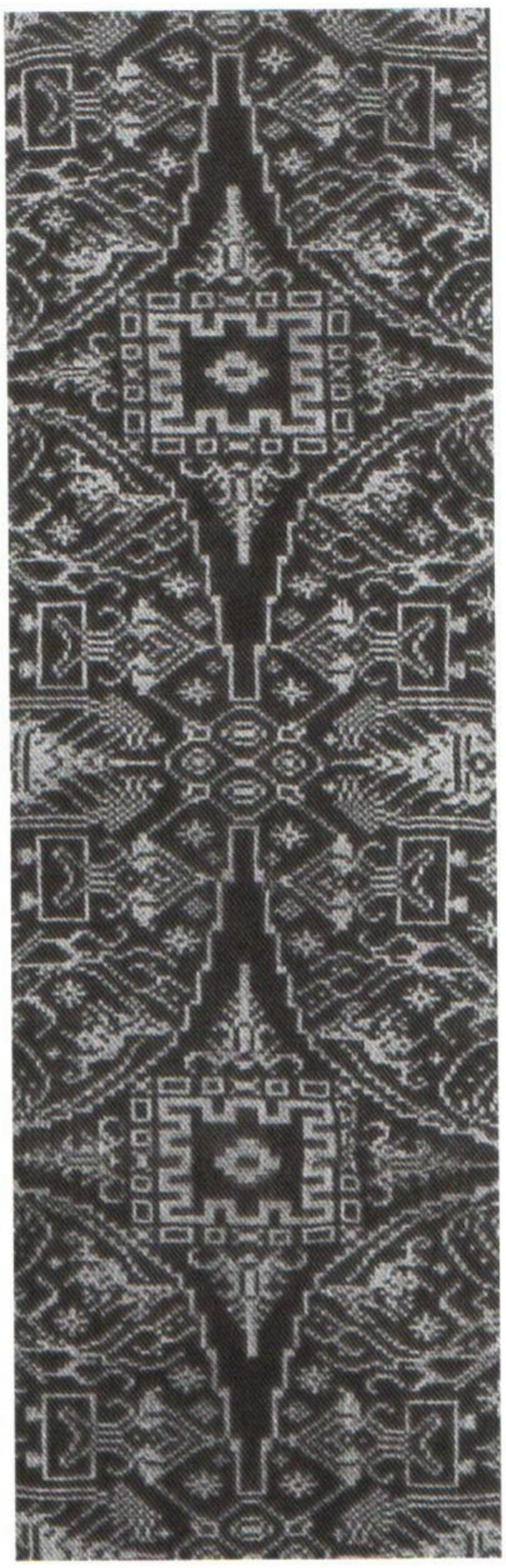
443　長井紬票本（写真）　－山形県長井市－

やませ藏蔵

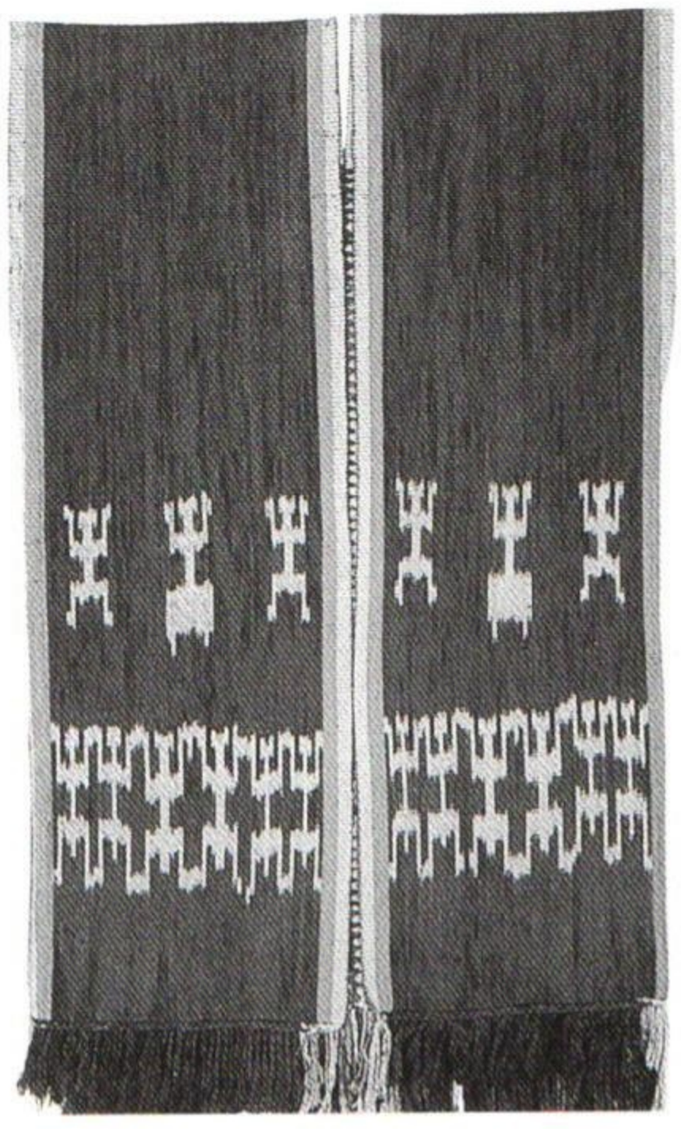
明治19年から同23年までの見本帳である。奄美に染めを依頼していたことがわかる。

(3) 絣

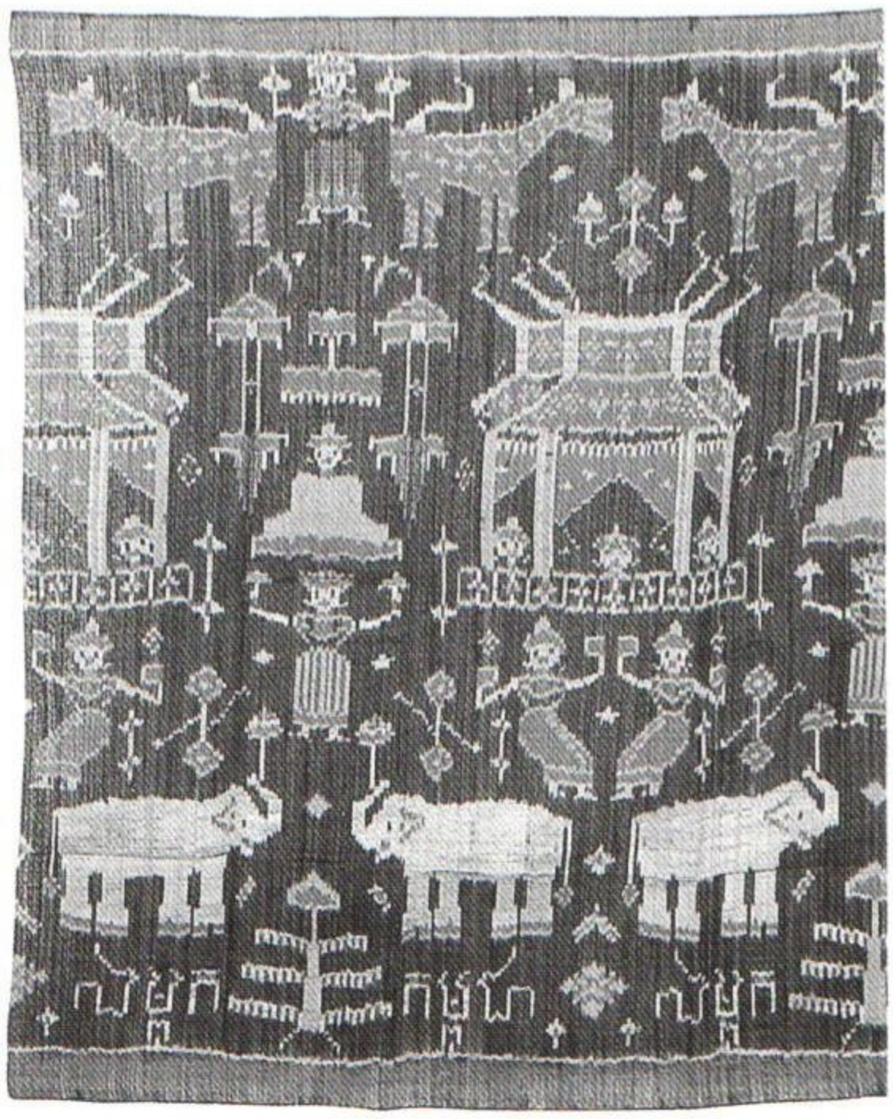
織糸を括って防染加工をして染めて絣糸を作り，織ることによって紋様を出す織物である。絣模様糸を経糸だけに施した経絣，緯糸だけに施した経絣，経・緯糸双方に施した経緯絣とがある。特に，経緯絣は，インドとインドネシアの一部と日本だけにある。絣の起源はインドや東南アジアであるといわれ，沖縄，奄美，鹿児島を経て18世紀以降日本各地に広まっていった。



444　経緯絣胸当
　－インドネシア・バリ島テンガナン・パミンギル族－
　アジア民族造形文化研究所蔵
　経緯絣は，インドのグジャラート州とテニガナンと日本だけで作られている絣である。
　（写真撮影　同研究所）



445　衣服・男　－フィリピン・イゴロット族－
　アジア民族造形文化研究所蔵
　男性の貫頭衣である。
　（写真撮影　同研究所）



446　宮廷文絹絵絣
　－カンボジア－
　アジア民族造形文化研究所蔵
　（写真撮影　同研究所）

448　シンミー　－ラオス・ポンサリー県・ソプファン村・タイダム族－

女性のスカートに用いる緯絣である。縞の中に人形の絣が織られている。

449　マツミー　－ラオス・ルアンパバーン市内－

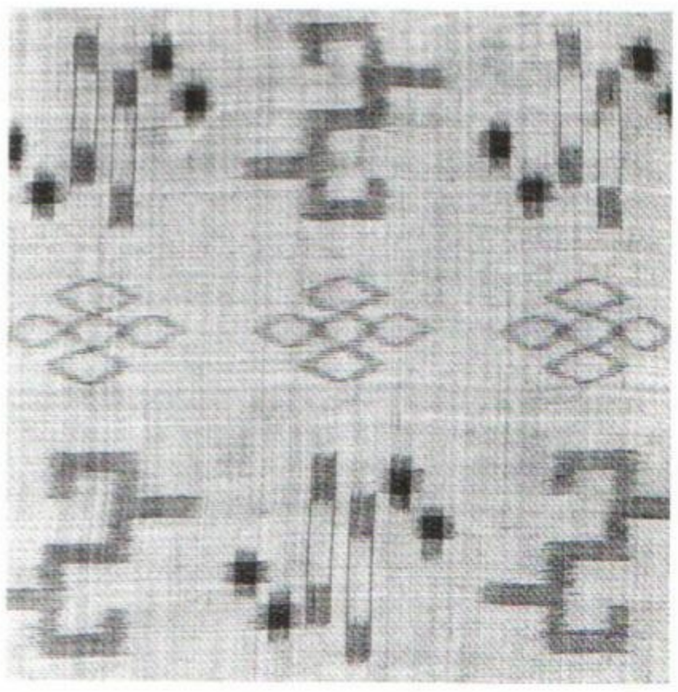
女性のスカート用の藍染めの緯絣である。絣の模様は人形を思わせる。

450　苧麻浅地クヂリ格子

－沖縄県石垣市－

石垣市立八重山博物館蔵八重山上布である。御絵図に描かれた絣の模様が織られている。

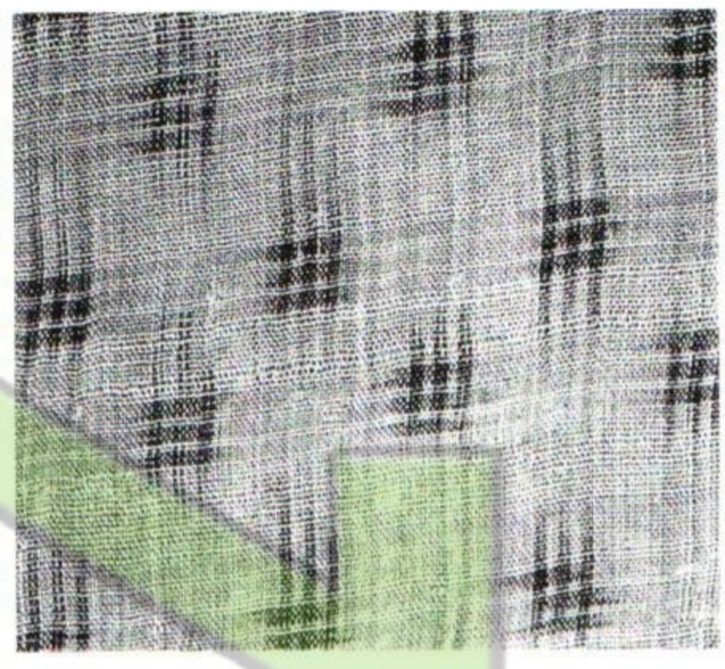
（写真撮影　同博物館）



456　芭蕉布経緯絣　－沖縄県名護市－

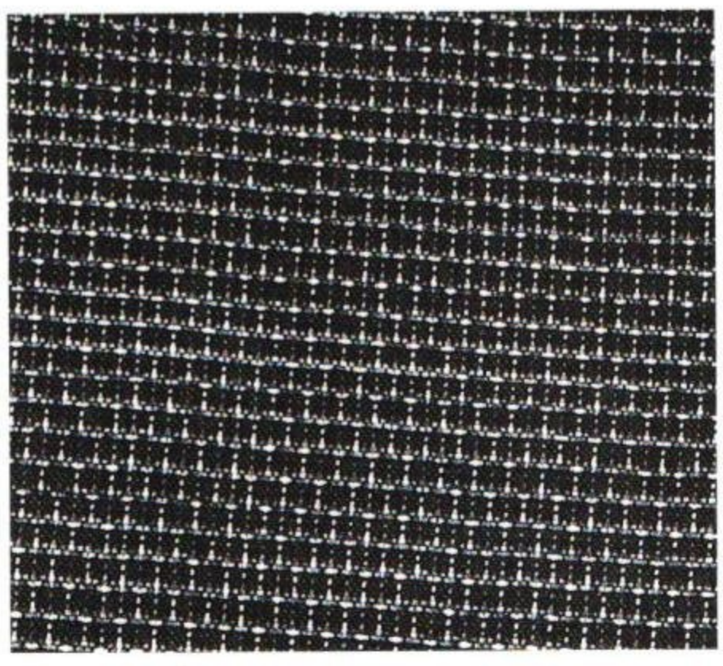
名護市名護博物館蔵

経緯３列の絣紋が格子状に組み合わされている。



459　大島紬　－鹿児島県名瀬市－

明治時代に織られた泥染めの絣である。絣の模様は，極小の四角が連続したもので，１列ごとに半角ずつずらしてある。



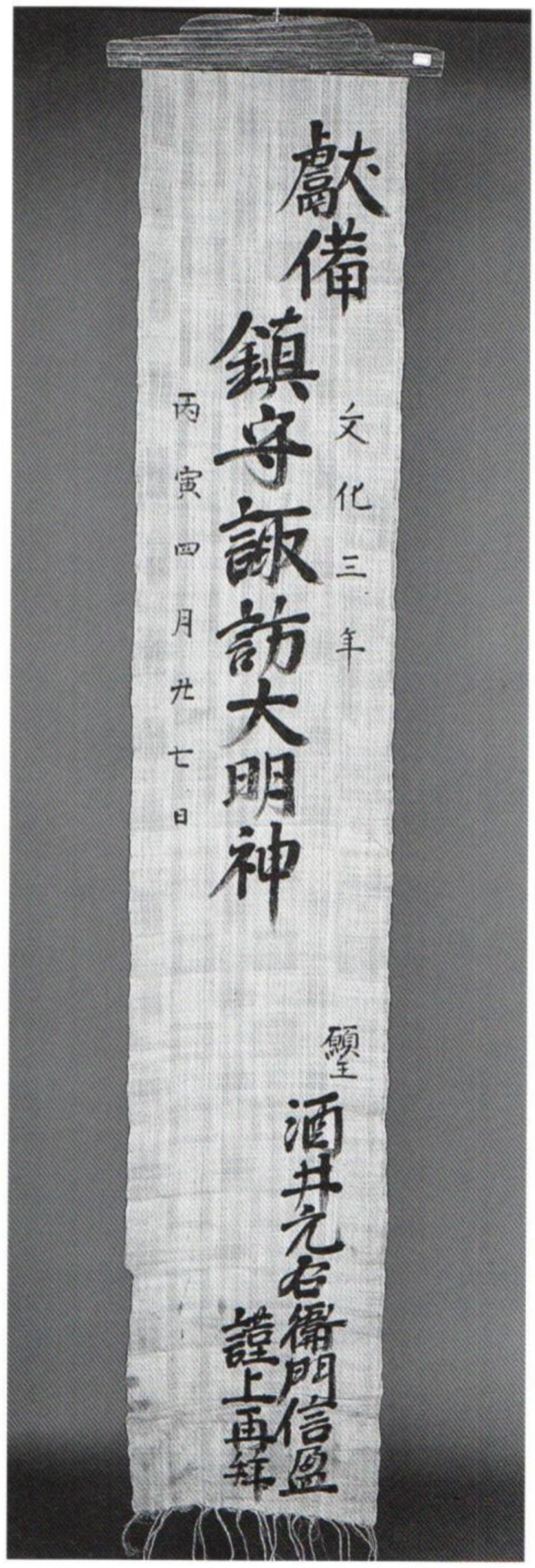
461　国指定重要有形民俗文化財

カタビラ　－新潟県十日町市－

十日町市博物館蔵

明治20年代に塩沢町で織られた越後縮・上布である。緯絣が主であるが経絣も入っている。材料はカラムシ（苧麻）で藍染めしてある。女性が夏のよそ行きに着たものである。

（写真撮影　同博物館）



464　国指定重要有形民俗文化財

奉納幡　－新潟県十日町市－

十日町市博物館蔵

布が織り上がったときに神社に奉納したものである。文化3（1806）年に奉納されたものであることがわかる。大小の井桁の絣文が織られている。

（写真撮影　同博物館）

(4) 花織

文様部分の経糸を一斉に引き上げて，緯糸が経糸に組み合わないようにして紋を織り出した織物である。その他にも平織地に文様糸が織り込まれ，文様に出て来ない部分は裏地に浮いて遊んでいるものや，文様部分だけに色糸を織り込んだものなどがある。こうした花織は，奄美大島までみられ，その起源はタイやラオスであるといわれる。

◀
465　パーフォン
ーラオス・ルアンパバーン県・パノン村・タイルー族ー

花織，縫取織などの浮織の技法で織られている。龍と蝶の文様か上下対照に織られ，華やかである。脇の藍染めの布は，壁掛け用にするために縫い付けたものである。

466　プーア　▶
ーラオス・ホーパァン県ナノンブワ村・モン族ー

女性が頭に巻く布である。両端が浮織になっている。片側には，三角の布がついており，これを背中に垂らすように被る。奄美のホゾン，ハブラと呼ばれるものによく似ている。

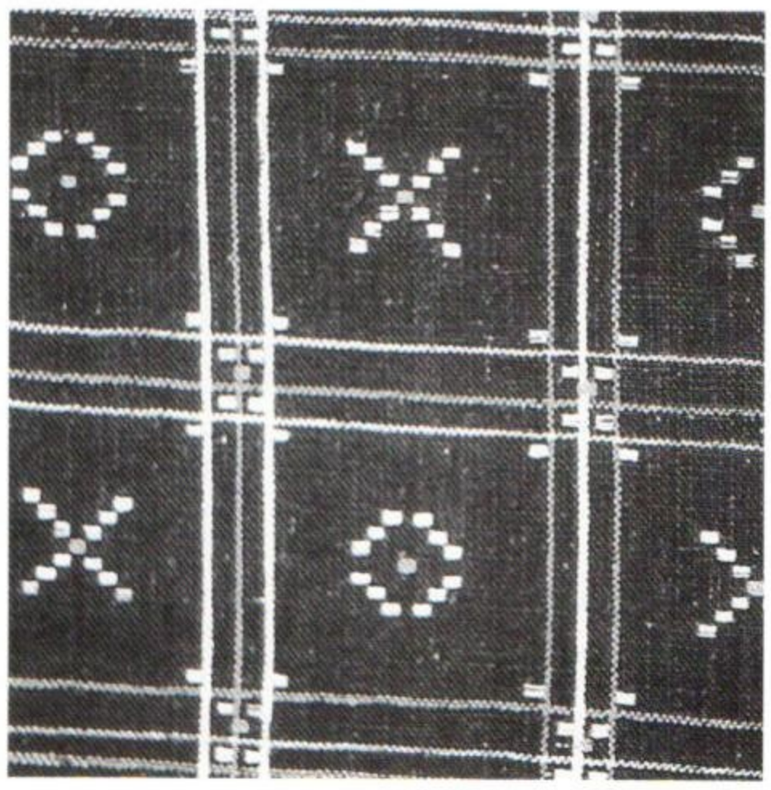
467　霊船文浮織布　ーインドネシア・スマトラ島・パミンギル族ー

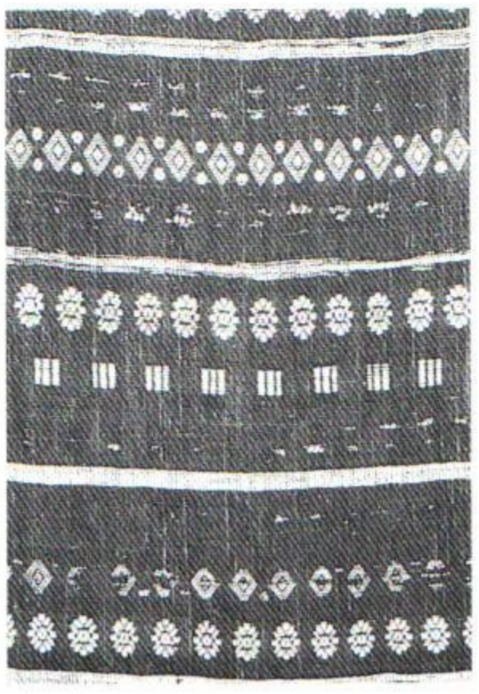
アジア民族造形文化研究所蔵
（写真撮影　同研究所）

469　シダディ
－沖縄県与那国町－
与那国民俗資料館蔵
与那国花織の手巾で，女性から男性へと贈られるウムイ（思い）のシダディである。

471　読谷山花織ウッチャキ
－沖縄県読谷村－
読谷村立歴史民俗資料館蔵
袖なしの掛けである。浮き文様は，カム・ビーマ（甕）と呼ばれる絣の文様に似ている。（写真撮影　同資料館）

470　読谷山花織綿衣　－沖縄県読谷村－
読谷村立歴史民俗資料館蔵
浮き文様は極小で，経緯糸ともに浮いている。
（写真撮影　同資料館）





472　シュパ
－鹿児島県与論町－
徳田泰三氏蔵
与論十五夜踊りの一番組の一人として被るものである。江戸末期のもの。

シュパを被った様子　－鹿児島県与論町－
顔全面を覆うようにして被り，片側の端を背中に垂らすようにして被る。端の花織の文様には魔除けの意味があるといわれていた。

▲
474　ハナウキ　－鹿児島県笠利町－
笠利町歴史民俗資料館蔵
明治20年に織られた緯浮きの布である。地糸は経緯ともに藍染めで，浮き糸は白色である。

473　テサージ　－鹿児島県名瀬市－
名瀬市立奄美博物館蔵
花織の布で，ノロが祭りの時顔に被ったものである。与論のシュパと同じものであろう。

(5) 民族衣裳

中国南部や東南アジアでは，着ている衣裳によって民族がわかる，といわれるほどに民族ごとに特徴がある。その衣装の紋様はもとより，鹿児島のコダナシとモモヒキ，メダレの組み合わせ，モモヒキのマチの入れ方，脚絆など共通するものがあり，興味がひかれる。

475　アカ族女性の衣裳（ペーホン）
ーラオス・ルアンナムタ県タホム村ー
上着である。肩や脇に銀ボタンや宝貝が配され，袖や裾，襟に鋸歯紋や×紋がある。

476　アカ族女性の衣裳（ラシャ）
ーラオス・ルアンナムタ県フォアラ村ー
胸をおおう布である。裾の部分に糸の房とビーズ玉の房が付けてある。

476　アカ族女性の衣裳（クッボーン）
ーラオス・ルアンナムタ県フォバッ村ー
脚絆である。鋸歯紋や×状の縫い取りや刺繍（ししゅう）が施してある。

477　ヤオ族の女性の衣裳（ホー）
ーラオス・ルアンナムタ県ウドムシン村ー
ズボンである。両脇から裾にかけて見事な刺繍（ししゅう）がみられる。股には大きなマチが入っている。地は藍染めである。

477　ヤオ族女性の衣裳（ルイ）
ーラオス・ルアンナムタ県ウドムシン村ー
上着である。襟には刺繍と赤のボンボン，袖には銀細工が施されている。

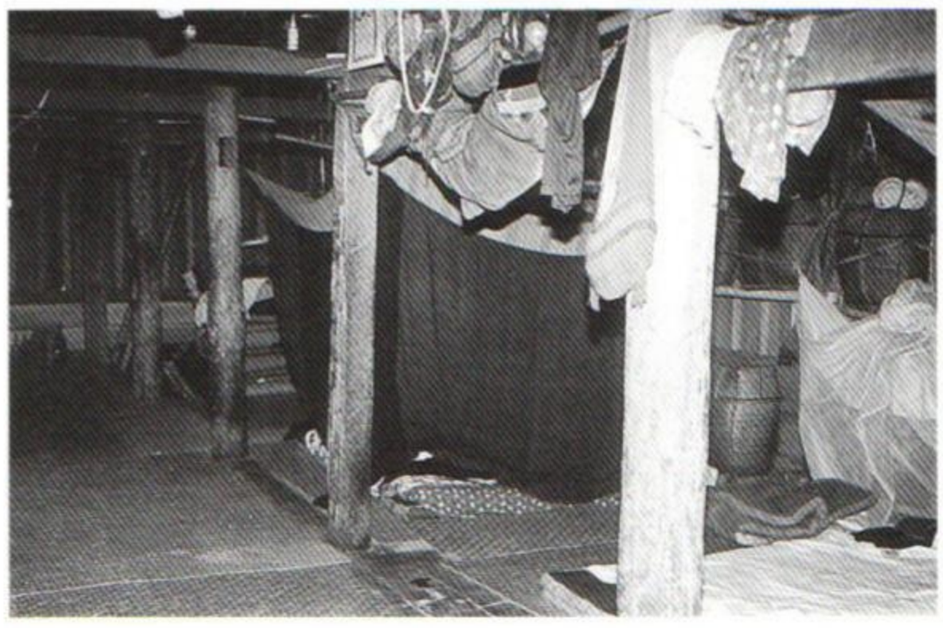
478　ランテン族の女性の上着（グイ）
－ラオス・ルアンナムタ県ナムルー村－
上着である。襟には，銀製品と白絹糸の長い房が施されている。また，袖には白布の縫い取りもみられる。藍染めである。

479　ランテン族の男性のズボン（クワ）
－ラオス・ルアンナムタ県ナムルー村－
大きなマチが裾まで入れてあるのが特徴である。藍染めである。

(6)衣服籠

竹籠の上から漆を塗った籃胎の衣服籠がみられる。モン族やタイダム族などが使用しており，衣服だけでなく，貴重品入れとしても用いられ，鍵を掛けた形のものが各人のベッドの脇などにみられる。

482　衣服籠　－ラオス・ルアンナムタ市内－



衣服籠の並ぶ寝室－ラオス・ポンサリー県ナムカム村・タイダム族－
籠には，それぞれ鍵が掛けられており，貴重品が入っていることを物語っている。

8　祈る

信仰の面でも多くの共通点をみることができる。村に悪いものを入れないためのアカ族の鳥居やカム族の門は，防災意識の強い鹿児島から奄美・沖縄にかけての信仰や行事を理解する鍵が隠されていると考えられる。さらに，アカ族のニゴニッショロという聖なる森は，鹿児島のモイドン信仰とつながる。

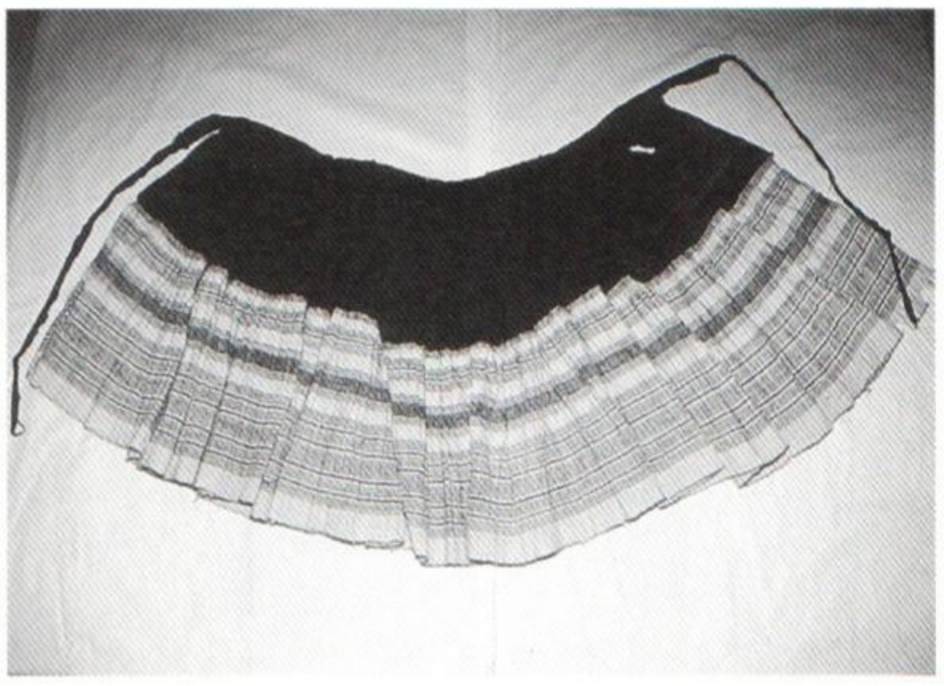
また，モン族やアカ族などの民族衣裳や装身具などにも，奄美のノロの神衣や防災儀礼とつながるものがみられる。

(1)　神衣

奄美のノロが祭祀のときに身につける，カカンというひだ付きのスカートやハブラ（蝶）の紋を縫い合わせたハブラギンという上着などには，少数民族の衣裳の中に同様のものをみることができ，その関連性が考えられる。

483　モン族のスカート
－ラオス・ルアンナムタ県カンマイ村－
原野農芸博物館蔵

ヒダ付の巻きスカートで，白木綿で作られており，焼畑の種まきの祭の時に女性が着る。7箇所でヒダが取ってある。



484　モン族のスカート
－ラオス・ホーパァン県ビェンホン村－
原野農芸博物館蔵

上段は麻糸の藍染め，下段は藍染めの縦縞になっている。モン族は専業の染織の職人が各集落にいる。

485　モン族のスカート
－ラオス・ホーパァン県－

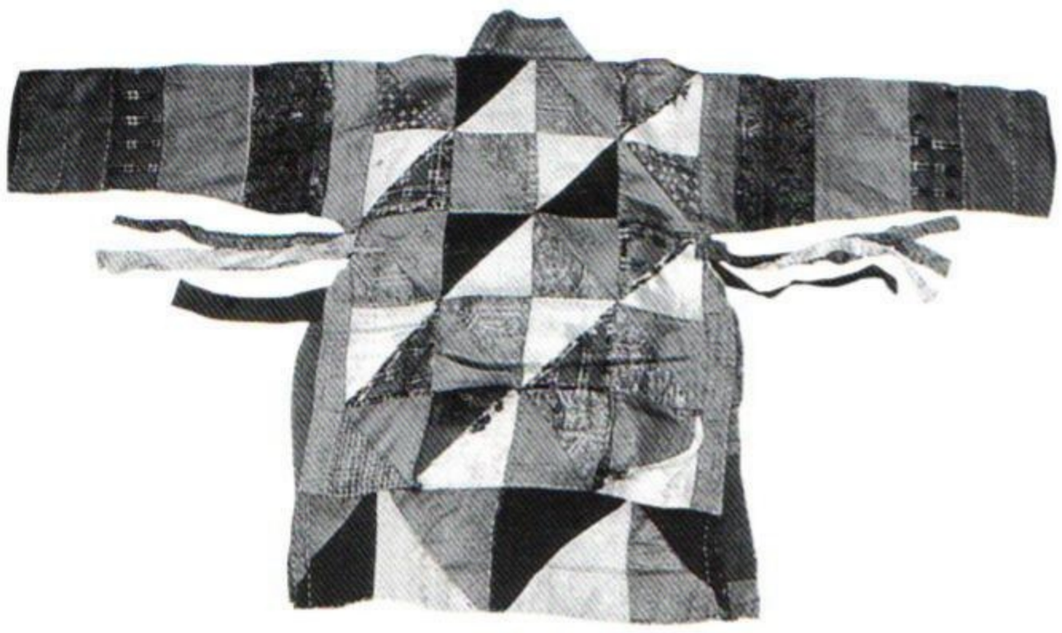
上段は，縦・横の鋸歯紋が縫い取りがみられる。下段は刺繍（ししゅう）である。

486　アカ族のスカート
－ラオス・ルアンナムタ県タホム村－

ミニスカートで腰骨に引っ掛ける形にはく。後側だけにヒダが入れられている。見事な藍染めである。

488　カカン　－鹿児島県名瀬市－

ノロが祭祀のときに着用していたものである。藍染めでヒダ付きの巻きスカートである。



490　ハブラギン　－鹿児島県宇検村－

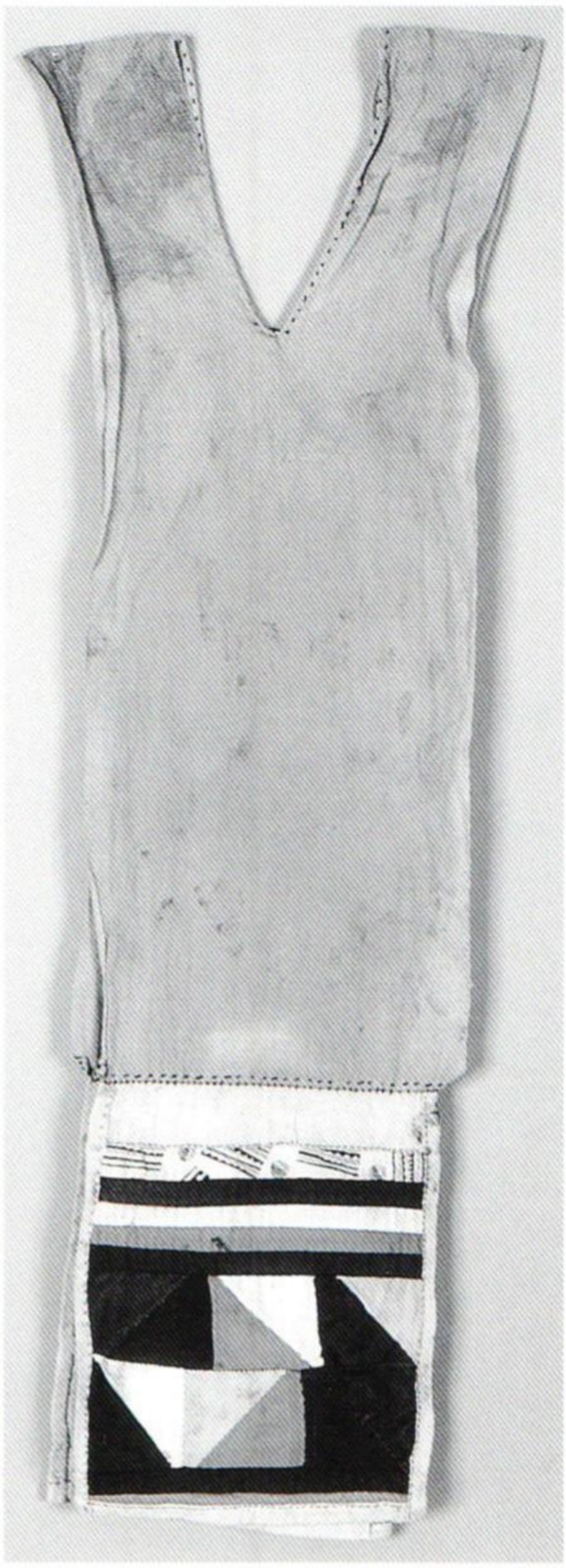
宇検村公民館蔵

ノロが神事のときに身に着ける着物で，三角布が縫い継がれている。

491　ハブラギン　－鹿児島県龍郷町－

益田フクエ氏蔵

ノロが祭りのときに身につける着物で，背中から前面，腕まで赤の三角布を縫い継いである。三角文が二つ合わさる形が，蝶（ハブラ）を表しているところから「ハブラギン」と呼ぶ。



489　パドゥ

－ラオス・ルアンナムタ県タホム村・アカ族－

結婚式の時に男性が着物の上からはおる貫頭衣の一種で，三角文様の組合わせが見事である。

(2) 背守り

奄美から鹿児島にかけてみられる，赤ちゃんに着せるウブギンや7才までの子供の着物の後襟に縫いつける背守りは，体内への悪霊の侵入を防ぐ機能を持っている。モン族の女性の上着や子守りの布にも渦巻紋や鋸歯紋がみられ，同じ働きを持つのではないかと思われる。

492　モン族の背縫い　－ラオス・ホーパァン県・ナノンブワ村・モン族－

上着の後襟に縫い付けて，背中に垂らす布である。渦巻と鋸歯紋が基調である。

493　モン族の上着　－ラオス・ホーパァン県・ナノンブワ村・モン族－

女性の上着である。後襟に折り返した背縫いが付いている。

494　子守り布　－ラオス・ホーパァン県ナノンブワ村・モン族－

子供を背負う布である。この布に施された文様も背負い布とほぼ一致する。

495　子守り布　－ラオス・ルアンパバーン県パーコン村・ヤオ族－

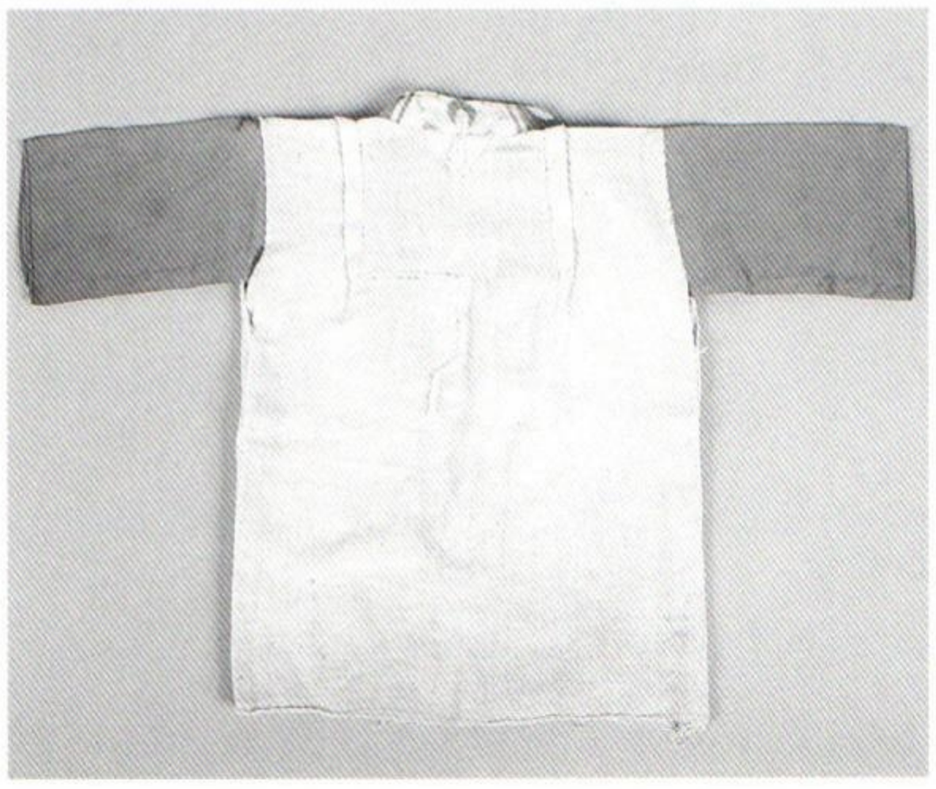
背面には，鋸歯紋とヤオ族独特の文様が刺繍されている。

子供を背負っている様子
－ラオス・ルアンナムタ県ウドムシン村・ヤオ族－

497　ワラギン　－鹿児島県天城町－
天城町ユイの館蔵
子供の着物である。四角の布が継ぎはいである。悪霊を防ぎ，元気に育つための呪術である。

498　ウブギン（男児）上　－鹿児島県十島村－
赤児の産着である。後襟には，縫い取り糸の玉結びや蝶の形の布が9個縫い付けてある。帯の付け根にも同様のものがみられる。襟は赤布である。悪霊の侵入を防ぎ，赤児が健康に育つことを願ったものである。

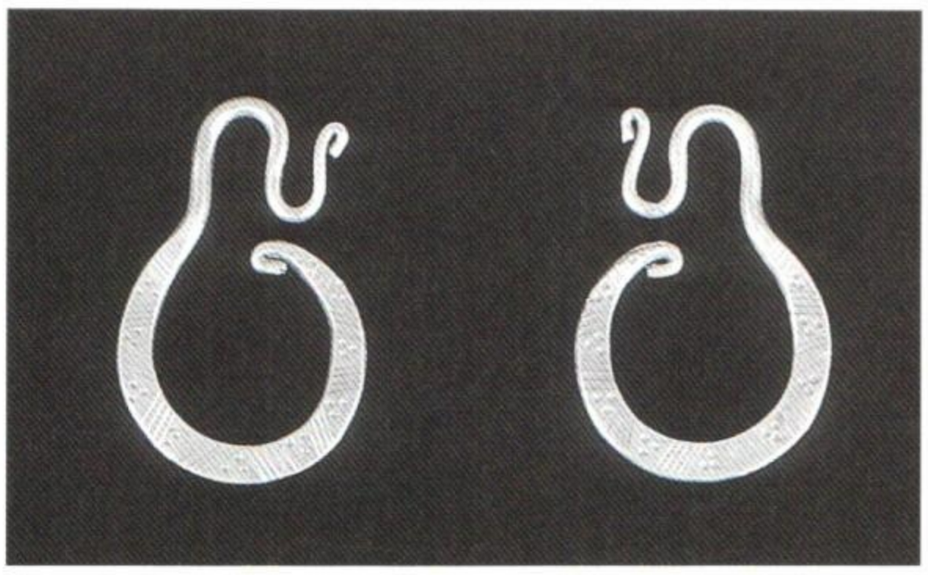
500　ウブギン（女児）上　－鹿児島県十島村－
男児のものとほぼ同じであるが，背中の縫取り糸の曲がりが逆向きになっている。



502　ウブギン　－鹿児島県十島村－
後襟に三角布が縫い付けられているのが特徴である。悪霊の侵入を防ぐ呪(まじな)いである。

(3) 耳輪

ラオスやタイの女性は，生まれるとすぐに耳たぶに孔を開ける。耳輪を下げるためのものである。耳輪の文様は，渦巻紋と鋸歯紋が基調となっている。こうした文様は鹿児島から沖縄にかけては，悪霊を払う文様としての働きを持っており，関連性があると思われる。



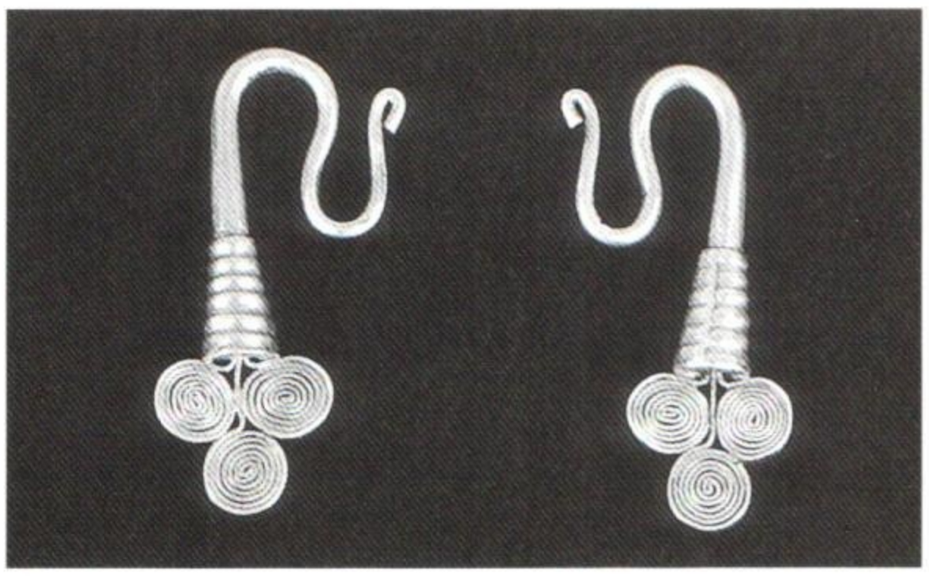
504　ギトゥ　－ラオス・ルアンナムタ県ナムル村・ランテン族－

耳たぶの孔に下げるピアスである。左右一対のものである。

耳輪をした女性

－ラオス・ボケオ県ナムチャン村・ランテン族－

ピアスの重みで耳たぶが長く垂れ下がっている。



506　クロウ　－ラオス・ルアンナムタ県ナムルー村・ランテン族－

下の部分は，3個の渦巻紋が付いている。ギトウクロウ，ニャンセンをセットでつける。

509　ニャンセン　－ラオス・ルアンナムタ県ナムルー村・ランテン族－

下の部分は，3個の渦巻紋と4本と5本の線の格子紋が付いている。三島村硫黄島のメンドンの文様の組み合わせと同じである。

512　ノムヒュム　－タイ・チェンライ県ホイチャンロッ村・ヤオ族－

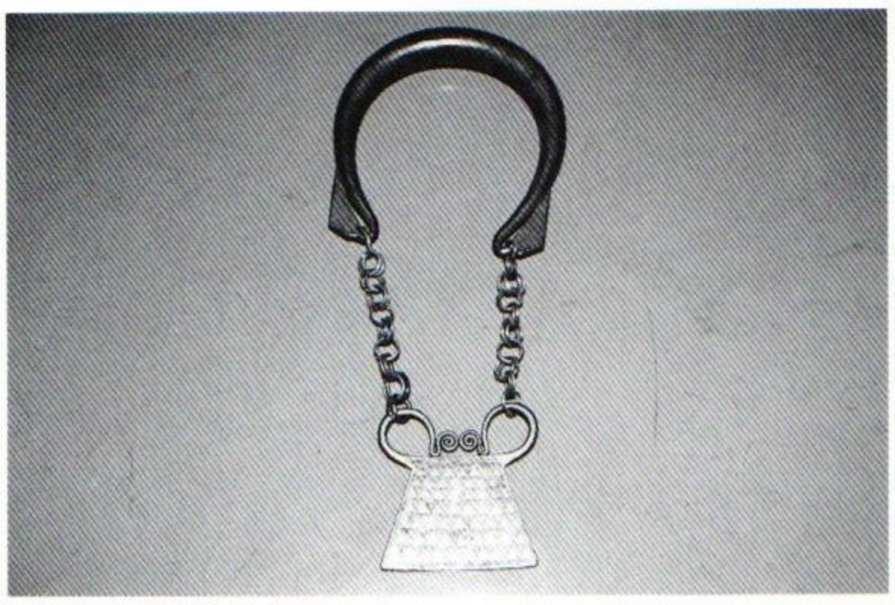
下の3個の渦巻から矢筈の形が突き出している。

514　コンジェ　－ラオス・ポンサリー県ホック村・モン族－

外側に渦巻紋，内側に鋸歯紋を配している。渦巻はタニシ，鋸歯紋は竹槍を形どっている。

(4) 首輪

ラオスの少数民族の女性や子供たちは，首に銀製の輪やビーズなどの首飾りをしている。病気の悪い霊を体に入れないためのものだという。奄美では，折目に女児たちが三角袋を数珠に吊ったホゾや，ノロのハブラ玉などとつながるものだと考えられる。



516　銀製頸輪　－ラオス・パコック村－
国立民族学博物館蔵

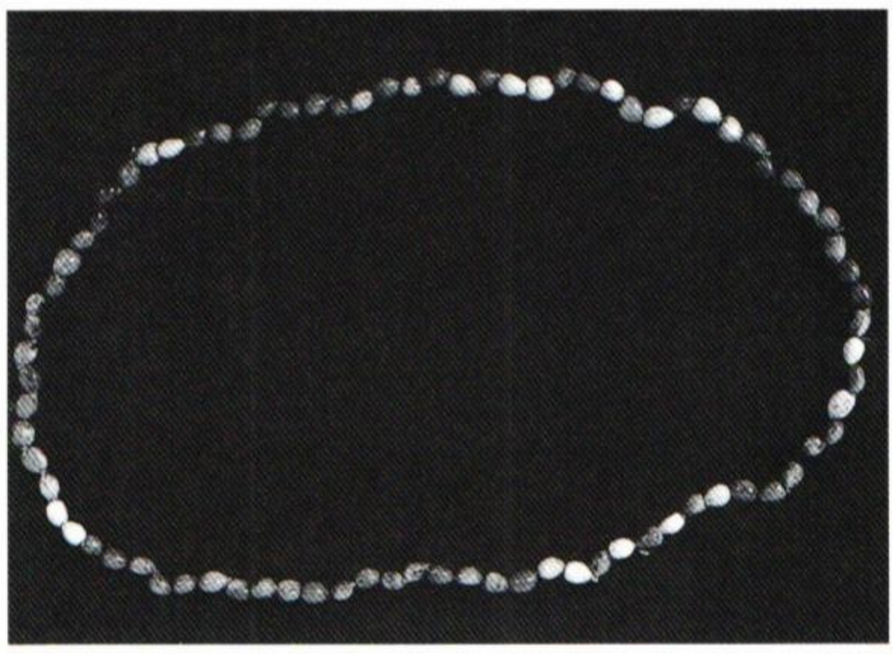
輪の先端には５本と４本の格子紋，下がりの部分には渦巻紋と鋸歯紋とが施されている。

首輪をした女性
－ラオス・シェイクアン県シンハイ村・モン族－

首輪は両端とも蛇の頭をしており，輪はら線状に巻かれている。手には糸で腕輪をしている。

518　首飾り　－ラオス・アカ族－
原野農芸博物館蔵

輪はスズ玉をつないで，先の方に小さなヒョウタンを付けてあり，振るとカラカラと種の音がする。熊本県五木村の山マユに大豆を入れた赤児の背守りを思わせる。



519　首飾り　－ラオス・シェイクアン県ポンサワン市内・モン族－

モン族の少女が庭に生えていたズズ玉を取って作ってくれた首飾り。これをすると，病気にならないという。

(5) 魔除け具

竹ヘギで六ツ目に編んだもので，鳥居などに張り付けられたり，家の入口に叩き付けたり，棒の先に付けて立てたりする。悪霊の入るのを防ぐためのものである。また，人の進入を禁止する目印としても用いられる。同様の働きをもつ日本のメカゴ（目籠）とつながるものである。

悪い者の進入禁止を示す魔除け

9　奏(かな)でる

楽器も系譜のたどれるものの一つである。例えば，奄美の島々にあるチヂンと呼ばれる楔(くさび)締めの太鼓は，中国南西部からタイやラオスにかけて住むヤオ族系統の民族だけが使用しているものである。また，神社の祭礼に使用される笙(しょう)も，中国南部や東南アジア山岳の少数民族の使用するものとつながるもので，竹の文化として結びつくものであると考えられる。

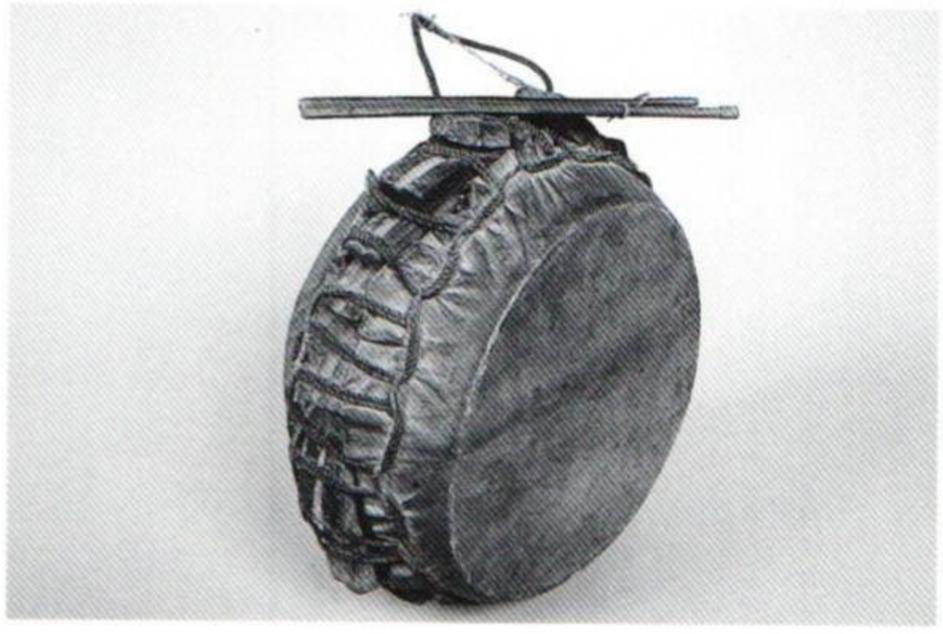
(1)　太鼓

奄美のチヂンと呼ばれる太鼓は，皮の張り具合を一列に並んだ楔で調節して音の高低を調律する。この種の太鼓は，中国南西部からタイやラオスの北部山岳に住むヤオ族の人々の間で用いられ，１列，２列，３列の楔のものがみられる。沖縄，房総半島の南端に近い千倉町などにも分布しており，海上の道をたどって広がった可能性のあるものである。

512　割礼儀礼用太鼓　－インドネシア・ロンボック島中部－
国立民族学博物館蔵

522　コーン　－タイ・ファン県ファン村・タイヤイ族－
象の足の形をした太鼓である。

523　デュー　－ラオス・ルアンナムタ県ナムルー村・ランテン族－
原野農芸博物館蔵
３列の楔締めの太鼓である。

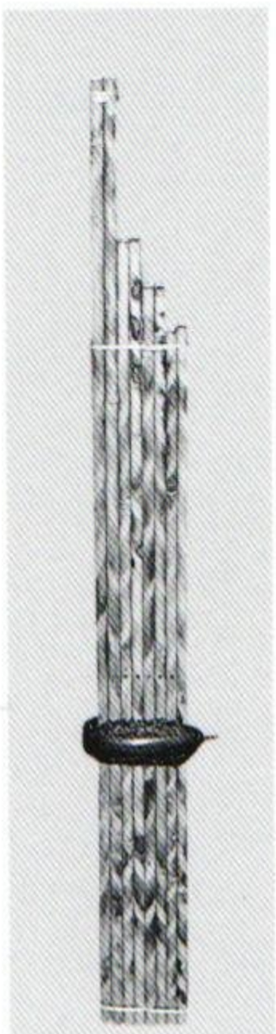


525　デュー　－ラオス・ルアンナムタ県ナムルー村・ランテン族－
１列の楔締め太鼓である。山羊の皮を用いている。ホーパァン県のヤオ族は２列締を使う。

526　テーコ　－鹿児島県天城町－
天城町ユイの館蔵
１列の楔締め太鼓で，径が48cmと大型である。皮には枠がなく，皮紐を直接掛けてある。

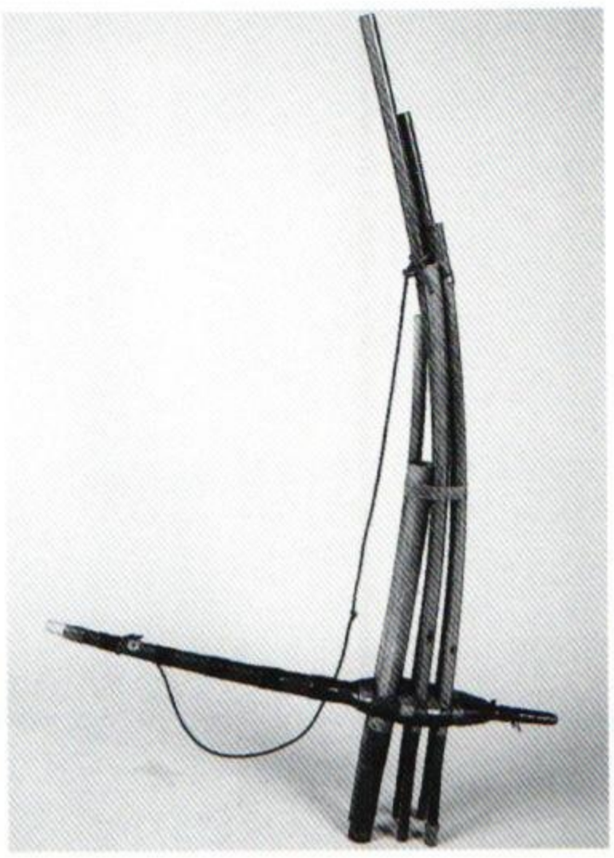
(2) 笛

竹管を用いた笛には，縦笛，横笛，笙などがあるが，これも中国南西部や東南アジア北部山岳地帯とつながっている。特に笙は，竹管にリードを付けて，吹いたり吸ったりしてハーモニーを出す楽器として，照葉樹林文化と結びついて分布するといわれている。



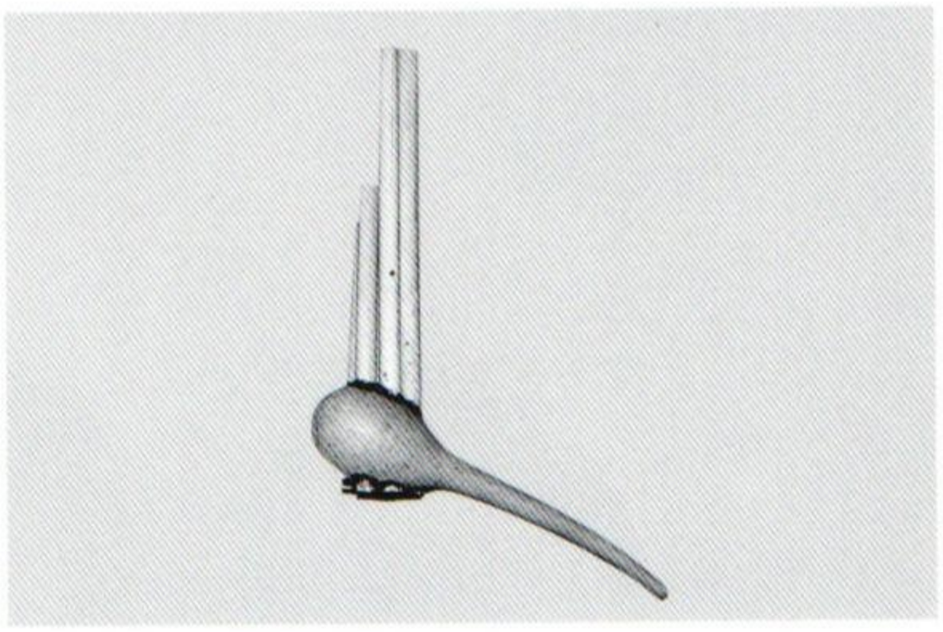
530　ケーン
－ラオス・ビエンチャン地方・ラオ族－
国立民族学博物館蔵

ラオ族が用いる笙である。管が2列に8本並び，下の方に木製の吹き口がある。竹管には指で押える孔があいている。



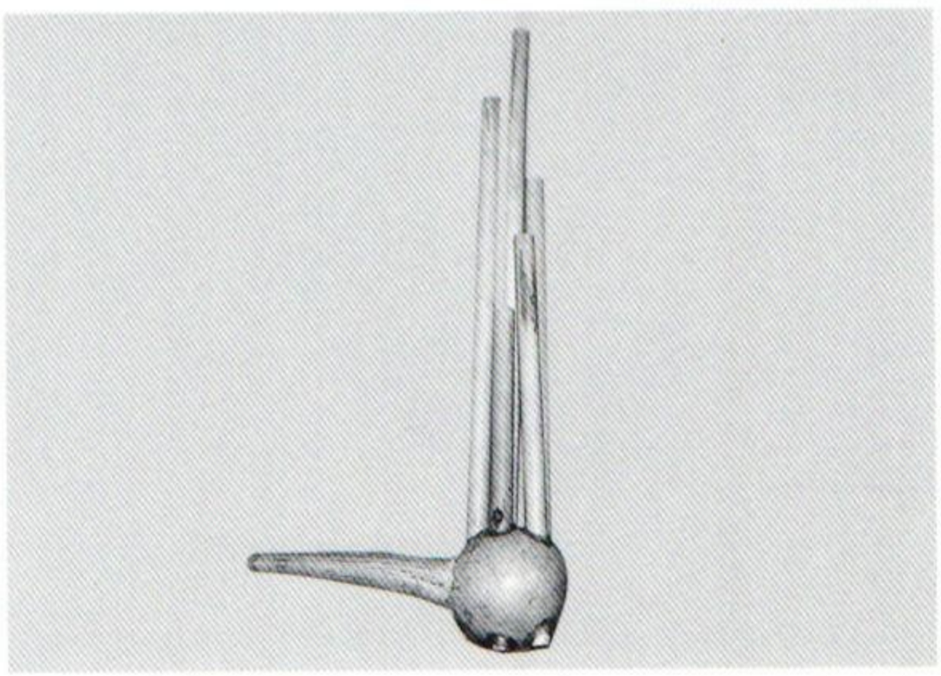
531　ケーン　－ラオス・ウドムサイ県パクベン村・モン族－

モン族が用いる笙である。吹き口は長くなっており，吹いたり吸ったりしながら，竹管の孔を指で開閉しながら演奏する。



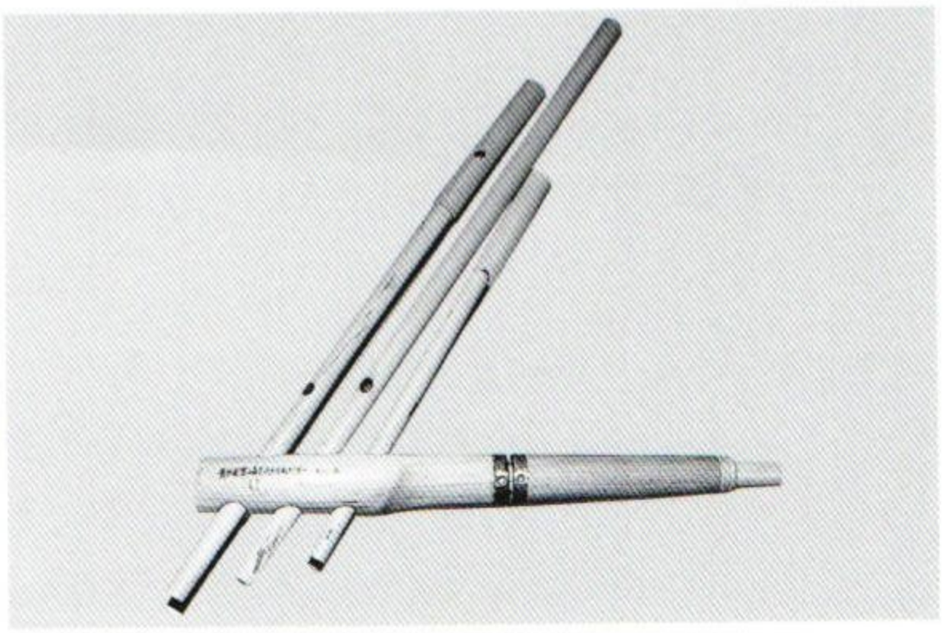
532　ケーン　－タイ－
アジア民族造形文化研究所蔵

ヒョウタンを吹き口に用いたものである。



なし

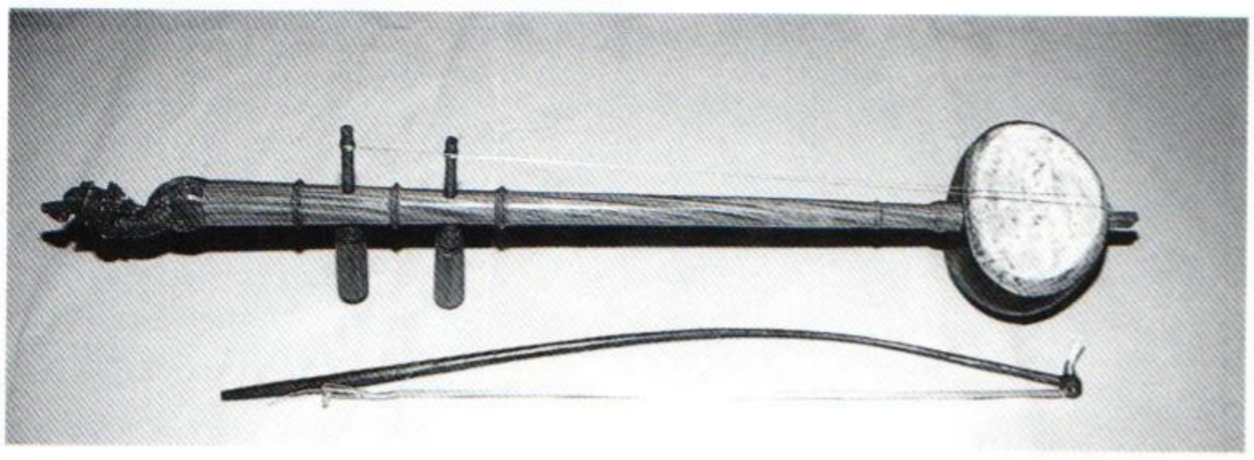
533　胡芦笙　－中国・雲南省・納西族－
アジア民族造形文化研究所蔵



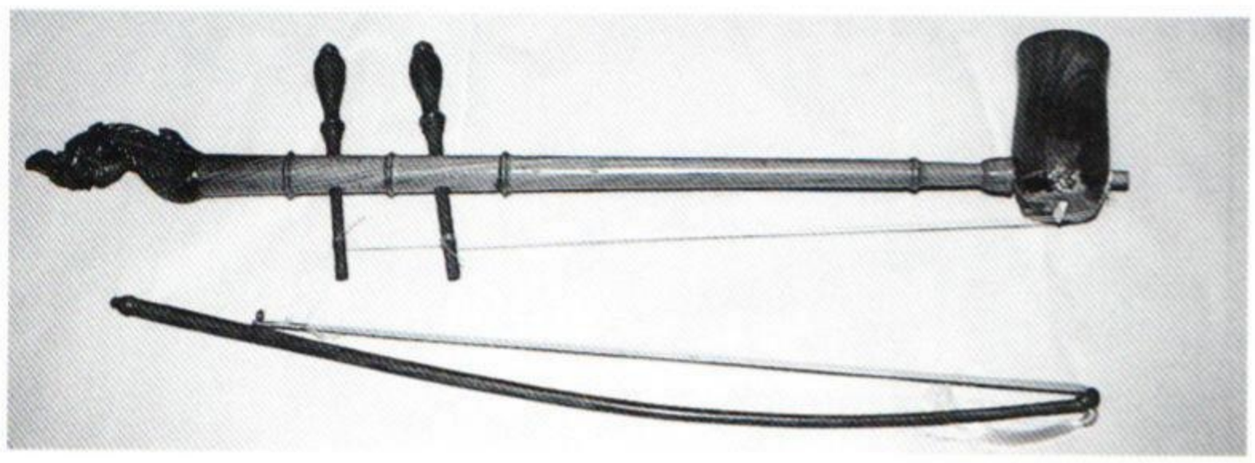
534　笙　－中国・貴州省－
アジア民族造形文化研究所蔵

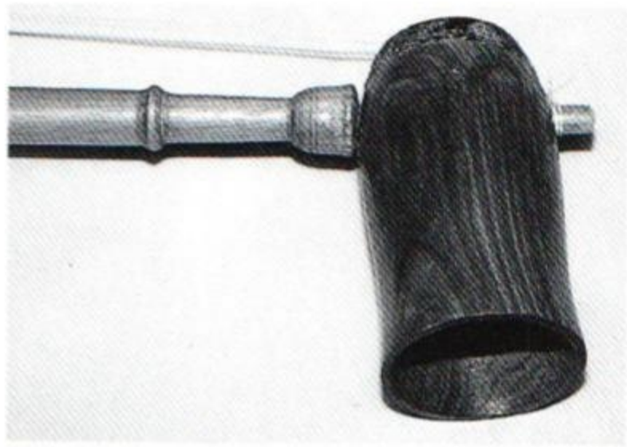
(3) 三味線

中国の三弦を沖縄で取り入れてサンシンが作られ，それを日本に導入して作られたものといわれる。また，胡弓類も，沖縄から日本に入り改造されたものと考えられているが，その原形は，中国の胡弓ではなく，タイやラオスの山岳地帯にみられるソーと呼ばれるものに求められるといわれている。

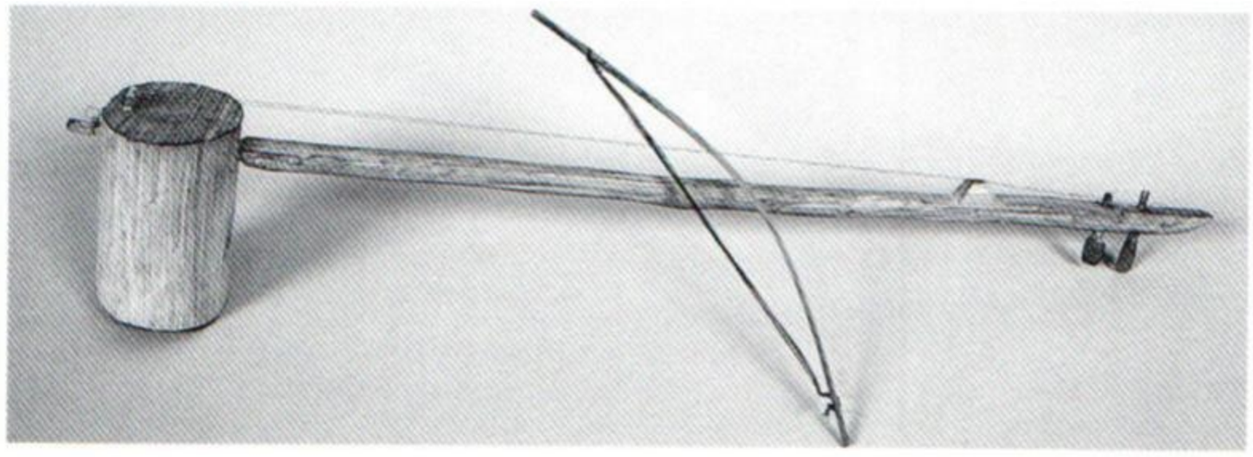


535　弦楽器　－ラオス・ビエンチャン県・ラオ族－
国立民族学博物館蔵
二弦の胡弓で，弓で弦をこすって演奏をする。

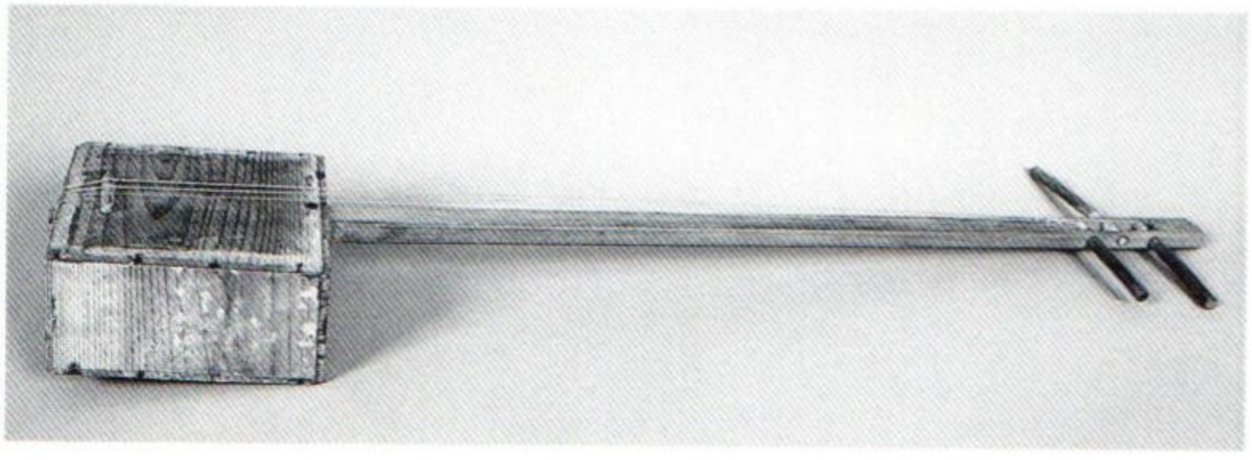




536　弦楽器　－ラオス・ビエンチャン県・ラオ族－
国立民族学博物館蔵
龍頭の二弦の胡弓である。胴は底が抜けた形である。



538　ソー　－ラオス・ホーパァン県フウサイ村・モン族－
青年宿で青年たちが弾いていた胡弓で，竹筒を用いて簡単に作られている。



539　ゴッタン　－鹿児島県－
杉材を用いて作った箱三味線である。素朴なもので三味線の原形を思わせる。

ラオスの少数民族の暮らしと文化

－南九州との比較から－

川　野　和　昭

1　はじめに

初めてラオスを訪れたのは平成８年３月であった。それは，前年度２月に担当した黎明館企画特別展「鹿児島・竹の世界－環シナ海文化の視座から－」の延長として，竹の民具の調査を行うことが主たる目的であった。３月９日から23日までの２週間，関西国際空港からバンコク経由でラオスの首都ビェンチャンに入り，そこを起点にしてビェンチャンの近郊およびシェイクアン県，ルアンパバーン県のいくつかの少数民族の村を訪ねて歩いた。鹿児島の民俗との比較という「偏見の視点」で，それこそ「目を皿のようにして」見て歩いた。

そこで目にしたものは，それまで鹿児島民俗学会が蓄積し，抽出してきた南九州から奄美諸島にかけての地域の民俗文化と深いつながりを持つ少数民族の暮らしであった。竹をめぐる文化はもちろん，衣，食，住，焼畑，河川漁業など生活全般にわたって極めて強い共通性を認めることができた。その驚きと深い感動が，平成８年の年末から平成９年の年始にかけての約３週間，さらに，平成９年10月末から11月にかけての16日間のラオスの少数民族を訪ねる旅に駆り立てていくことになった。

第２回目は，ベトナム国境に近いホーパァン県のサムヌアー，ビェンサイ地方，中国国境に近いルアンナムタ県ルアンナムタ，ムアンシン地域，さらに，ウドムサイ県のウドムサイからパクベンに至る地域，ボケオ県のホイサイからメコン河をルアンパバーンまで400km近く下る船の旅，さらに，ルアンパバーン近郊の村の調査であった。

第３回目の旅は，タイのチェンマイを経由し，ラオス最北部でベトナムとの国境，ポンサリー県のホック村まで行き，そこから逆に引き返してミャンマーの国境まで横断する旅であった。アカ，モン，カム，ヤオ，タイルー，クイ族などの村を訪ねることができたのである。

以下その旅で得ることのできた情報の中から，南九州および南西諸島の民俗とつながりが認められるものを拾いあげ，比較民俗学への道を探ってみたい。

モン族の村
－ポンサリー県・アリヤ村－

タラー(市場)に村から筍を積んできた車
－シェイクアン県・ポンサワンタラー－

2　焼畑文化

ラオスの少数民俗の文化の中でもっとも注目すべきは，何といっても焼畑の問題であろう。

まず，焼畑の作業を見ていくことにする。山は２月頃薙ぎ倒して３月末から４月末にかけて焼いている。薙ぎ倒す道具は山刀である。山刀には刃先がそり上がった形や鎌の形状をしたものなどが見られる。トカラ列島で焼畑を薙ぐのに用いられるヤマキイや鹿児島のナタガマとほとんど同じである。焼け残った木は，薪として利用している。

初めてラオスを訪ねた平成８年３月17日早朝，シェイクアン県ホンサワンのホテルの谷向かいの斜面に，焼畑を焼いている現場を見ることが

山の斜面を焼く焼畑
－シェイクアン県・ポンサワン－

竹の焼畑
－ラオス・ポンサリー県－
（山崎久勇氏撮影）

竹の焼畑
－宮崎県椎葉村－

できた。まず，男二人が斜面の上側の横の線の中央部分に火を入れ，左右に別れながら火を付け回し，縦の線の真中ぐらいまで火を付け，さらに横に中央部まで付け回して上半分を焼き尽くす。その後，縦の線沿いに下側の横の線の中央部分まで火を入れて下半分を焼く。周囲には幅３メートルぐらいの火断（ギャンプー）が設けられていた。いずれも周囲の山に飛び火して火事になるのを防ぐ技術である。また，火入れは少し薄暗くなる夕方か，日が昇る前の早朝に行われている。これも火がきちんと見えないと山火事を引き起こすからであるという。同月11日にビェンチャン県ホンホン村近くで見た焼畑では，竹のたいまつを用いて火を付け回していた。こうした焼畑の技術は，ほとんどの点で南九州の焼畑と共通するといってよい。

もう一つ注目すべきことを取りあげておきたい。それは，木の山よりも竹の山を好んで焼畑に切り開く竹の焼畑の存在である。日本では，現在のところ鹿児島県のトカラ列島の十島村や三島村から大隅半島を経由して，熊本県五木村，泉村，さらに，宮崎県椎葉村の地域まで分布していることがわかっている。たとえば，十島村の悪石島では，アワヤマといって琉球竹の山を薙ぎ倒して焼畑にし，粟を栽培していた。旧暦２月の半ば頃，アワヤマキイといって琉球竹の山をヤマキイという山刀で薙ぎ倒す。次に，ヤマホサギといって，周囲２メートル幅の草や枯れ葉やゴミなどを全て取り除き，土だけにする。これは焼くときに周囲の山に飛び火しないための防火線作りである。その後，１カ月ぐらい乾燥させてから火を付けて焼く。これをヤマヤキという。次に粟の種子を蒔く。これをヤキマキといって，焼いた土がまだ熱いうちに蒔く。そうするとよく芽が出て活着するものだという。旧暦の７月ごろに穂摘みをする。粟は１年だけ作り，後の１年は，打ち返しもせずにそのままカライモかサトイモを植える。その後は10年間そのまま放置する。５，６年もすれば大きなタケノコが取れるようになる。10年ぐらいたったらまたアワヤマに薙ぐ。また，同村の中之島では「アワヤマは，竹山でないと焼けが悪いのでいけない」といい，木の山よりも竹の山の方が焼畑に適しているという。五木村下梶原でも同様のことをいい，木のコバは深さ６寸焼けるが，タカコバ（竹の焼畑）は１尺焼けるという。その他にも，竹山を焼畑にする利点として，根が張っているので斜面の土が流れないとか，作業が楽で効率がよい，ヤボに焼いてもすぐに再生してくる，捨てた後もタケノコが取れることなどをあげる。椎葉村向山では，竹の焼畑をタッコーラと呼び，特にヒエを植えるのに最適で，竹の焼畑で取れたヒエのことをタッコーラビエといっておいしいものであったという。また，鹿児島県の大隅半島の肝属郡高山町や同郡田代町半ケ石などでは，タカバイ（竹灰）といって，メダケを切って焼いて灰にして，それを肥料として水田に撒いたという伝承を持っており，竹の焼畑の技術につながるものである。

こうした竹の山の焼畑は，ラオスでも盛んに行われている。平成８年３月11日にビェンチャン県ホワイコン村（ラオ族）の村外れで見た焼畑

は印象的であった。それは，湿地に水芋が植えられ，その上に続く斜面には，竹を薙ぎ倒して乾燥させている焼畑が広がっていた。さらに，その上には照葉樹の森が続いていた。その風景はそのままトカラの島々の竹の焼畑に重なるものであった。また，平成９年１月２日に訪れたウドムサイ県ムンラー村のカム族は，木の山よりも竹の山の方が焼畑によいといって，焼いて陸稲を植える。竹の山は薙ぎ易く，焼き易いし，灰がたくさん出て肥料になるので陸稲がよくできる。２月に薙ぎ倒し，４月に焼き，６月に蒔いて，10月に収穫する。陸稲の種を蒔くときは，ルンという先端を尖らせた木の棒で地面に穴を開け，そこに種子粒を蒔く。蒔く前に，畑の中に小さな小屋を建てて，いろいろなものをお供えして豊作をお願いする。その日には鶏を殺してその血を種子籾にかけて蒔く。また，ウドムサイ県ドンサーク村のカム族も一面竹の焼畑をしている。同じく，木より竹の方が，作業が簡単でよく燃えて雑草が早く生えないので焼畑によいという。メコン河沿いのウドムサイ県フワィランペン村のモン族も全く同様の伝承を持っている。特に，ボケオ県ホイサイからルアンパバーンまでのメコン河の両岸は，山の頂まで竹の山が続き，盛んに竹の焼畑が行われている。

陸稲の焼畑の中に生える竹株
－タイ北部－
（山崎久勇氏撮影）

メコン川左岸の竹の焼畑
－ウドムサイ県・パクベンの下流－

こうしてみると，南西諸島から大隅半島を通り九州山地の椎葉村へと続く竹の焼畑は，ラオスの少数民族の竹の焼畑と極めて正確な一致をみせる。したがって，両者はただ単に竹が多いという自然環境のもとに独立発生的に生まれた文化であるとは考えにくく，発生を共にした「つながる文化」といって間違いないと思われる。むしろ，竹を半栽培ないしは半管理しながら行われる，半栽培の農業であるといった方が正確であると考えられる。竹は北緯20度から南緯20度までの範囲に成育するといわれるが，この点日本が異常なほどに北に竹の群生が見られる特別な地域であるのも，こうした事情を物語るものであると考えた方が正しい理解であろう。「照葉樹林文化」の底に「竹林文化」をみる思いがする。

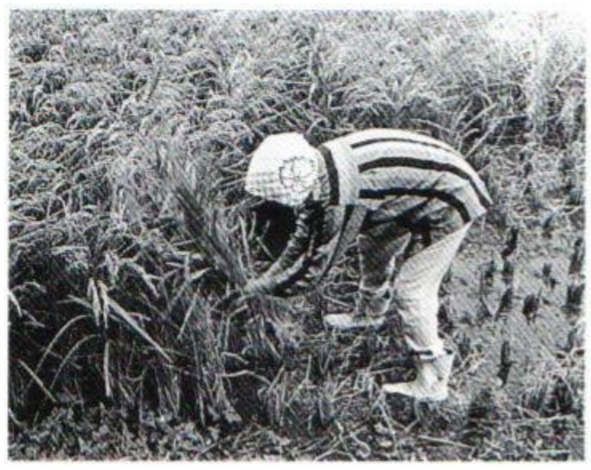
次に，焼畑の文化が「つながる文化」であることをさらに強く示唆すると思われる，焼畑で収穫した陸稲の焼米の食習俗に触れてみたい。

3　焼米の食習俗

柳田國男は，昭和19年，「火の文化」と題する文章の中で，焼米は，苗代始めと八朔の穂掛刈掛の日の年２回行うものであること，その材料は，水に浸しておいた種籾の播き残りと，穂掛刈掛をした十分に実の入っていない未完熟の籾であること，製法は，焙烙（ほうらく）や炒鍋を用いて炒って臼で搗く方法，さらに，道具のなかった頃の方法として，直火で焼く方法と石焼の２つの方法が想定できるとした。これらのもととなった焼米伝承は，昭和４年，柳田が「白米域の伝説」で述べた「供物の米を祭終って焼いたか，若くは今日の田神祭のように，焼米にして供へていたのではないか」という焼米に関する発言をした以降，各地から報告された事例であった。この柳田の示した焼米の定義は，昭和26年の『民俗学辞典』（東京堂）でもほとんど変化は見られない。

ただ，昭和47年に出された『民俗の事典』（岩崎美術社）では，「焼米

が，常食として保存されるという例は，東北地方から報告された。麦の穂を焼いて籾殻をとるのとあわせて，古い米の食べ方を暗示するようである。」と述べているが，これも，柳田の「直火で焼く方法」の考え方に影響を受けた発言といえる。いずれにしても，従来の研究は，苗代作りと収穫祝（八朔）の儀礼的な供物と考えられてきた。しかし，鹿児島の焼米の伝承は，それとはいささか趣を異にする。



日陰の水口近くの青い稲を刈る
－鹿児島県菱刈町－

鹿児島の焼米の伝承は，作り方は全国の事例と同じく大鍋で「炒る」・「煎る」方法と「蒸す」の２つの方法がある。作る時期は，「カイニハハエシ　カランニャ　タランジ（稲を刈り取るには実が完全に熟していないので時期的に早いし，刈り取らなければ飯米が足りずに困る）」という時期，つまり，飯米の端境期で，自家米の足りない人達が作るものである。従って，作る目的も，常食を得ることであって，神様などに供えるのが目的ではない。食べ方も，飯米として用いられる。特に粟，麦，カライモ，サトイモ，大根，カボチャなどの雑穀，根栽，瓜類と混ぜ合わせて焼いて食べられている。

たとえば，日置郡郡山町本嶽大中では，ヤッゴメは，ハンメ（飯米）が足りなくなったとき作るものであった。粳米（うるちごめ）なら何でもよいが，ヨメジョイネという香りのとてもよい稲をヤッゴメにした。早稲の稲で，実ってくると立っているうちから周囲に香りが漂い，ごはんに炊いてもよい香りがした。稲に少し色がついてきたころ青刈りをした。刈るのは畦際の株で，そこが早く色付くからである。刈った稲を持ち帰り，穂をカナクダ（千歯）で脱穀して，箕で簸（ひ）って藁屑を取り除く。１回に籾１斗２升ぐらいを作る。次に，カマナベ（釜鍋）をとろ火で熱して，そこの中に籾６升ぐらいを入れて炒りながら乾燥させる。籾は湿り気を持っており，最初は手のひらに付くが，炒っているうちに手に付かなくなる。手で一掴み握って，それを開いて手のひらに籾が残らずさらっと落ちるようになれば炒りあがったことになる。次に，蓆を敷いて１，２時間の間天日に干す。それを臼に入れて横杵で搗いて籾殻を落とした。籾の半分の６升ぐらいのヤッゴメが取れる。ヤッゴメ作りは，ヒシテシゴッ（一日仕事）であるといい，朝刈り取った稲がその晩の飯に間にあうものであった。最初にヤッゴメを炊いたときは，「キョウハ，ニカコメ（新米）ガデケタ」といって先祖にあげた。このヤッゴメ作りを３回ぐらいすると，田の稲がよく熟れて本格的な新米の収穫ができるものであった。また，同町仕明では，稲の収穫前「ゴヒトツノコメガナカ（２合５勺枡一つの米もない）」というときにイゼボシというのを作った。イゼボシにしたのは，アカワセという品種の稲で，籾殻も米粒も赤く，５センチぐらいの長い芒の付いた細長い籾であった。作り方は，アカワセがまだ熟れない頃，青刈りをして１週間ぐらい掛け干しをして乾燥させる。それをカナクダで脱穀して箕で簸る。次に，籾をツボゴシッ（壷甑）で蒸す。１時間ぐらい蒸して，指先で摘んでくるっと籾殻がむけるぐらいになったときがちょうどよい。その後，バラに広げて天日に１時間ぐらい干して臼で搗いて精米する。イゼボシは，朝と夜の食事に炊いて食べた。こ

青米をカマナベで炒る
－同上－

のように炒る方法と蒸す方法があったのである。水流郁郎氏が報告された，鹿屋市光同寺の，一度蒸し器で蒸して，さらに天日で乾燥させて臼で搗いて，炊いて食べていたという陸稲の「トボシ」（赤米）の食べ方は，「イデボシ」という郡山町仕明の焼米と同じである。

奄美大島における焼米の食習俗の伝承も鹿児島とほぼ同じである。住用村市やスタル地方の集落，加計呂麻島の西阿室や瀬相で確認できる。特に，市集落では，青い米を食べるため，周辺の集落の人々から「市のアオガッタ（青バッタ）」といわれることもあったという。

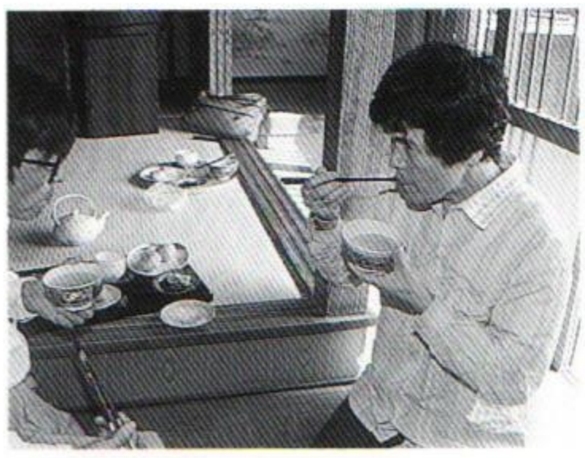
次に，ここ3回のラオスの旅で確認できた少数民族の焼米の事例をあげてみたい。第2回目に訪れたラオス北部ボケオ県ホイサイからウドムサイ県パクベン，さらにルアンパバーンに至るメコン河沿いのラオトン族（カム族）は，焼畑で陸稲を作っている。彼らの間では，「カオハーン」といって，10月頃米の切れた人々の家では，まだ青く，指でつまむと白い汁が出るぐらいのときに，稲を朝刈り取ってきて，大釜で炒って，臼と手杵で精白をしてカオニャン（蒸した御飯）にして食べる。炒るのは中の実を固くするためであるという。米のたくさんある人や水田地帯の人々は，カオハーンを作るようなことはしない。また，同地域に住むラオスーン族（モン族）も焼畑で陸稲を作っているが，彼らは，カオハーンを作ってスープ（おじや風）にして食べる。たまには，塩水に混ぜて食べたりする。

3回目の旅では，さらに詳しい焼米の食習俗に関する伝承を見，聞くことができた。たとえば，ラオス・ボケオ県ナンユン村のタイルー族は，実る前の青い米を刈り取ってきて，蒸し器で蒸して天日に干して，踏み臼で搗いて，さらにもう一度蒸して食べる。これをカオハーンと呼び，普通のこととして初穂刈りのような特別の祭りはしない。これは，柔らかくておいしいから食べる。特に，妊婦は好んで食べる。カム族はンゴプラウプ（焼米）と呼んでいる。

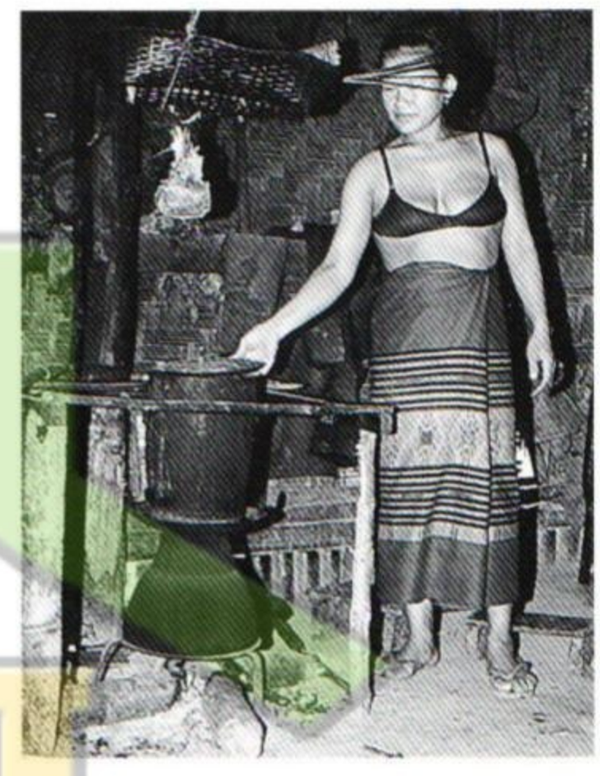
さらに，ラオス・ポンサリー県ソプアッ村（ラオ族）は，米が足りなくなったときに，まだ青い米を手で摘んで，そのままでは搗くことができないので，中身を固まらせるために蒸し器で蒸して，天日に干すと固くなり，臼で搗くことができる。再び蒸してカオニャンにして食べる。これをカオハーンという。カオネン（糯米）はカオハーンにするが，カオチャオ（粳米）はカオハーンにすることはない。

同じく，ラオス・ポンサリー県ピィア村のカム族は，米が底を突き，次の新しい米ができるまでのつなぎとしてロンコブルウップ（焼米）を作って食べる。カオピー（緑米）カオカン（赤米）の青いフンガ（籾）を指で抜き取ってきて，蒸し器で蒸して天日に干して，さらに，蒸して食べる。本格的に熟れた米の収穫のときは，稲籠の底に7枚の木の葉を挟んで，山の神，水の神，風の神，天の神など全部の神を呼んでいっぱい取れますようにと祈るソンフルブーという祭りをするが，ロンコブルウップを作るときはそういう儀礼的なことはしない。

また，ラオス・ポンサリー県モッチャラー村のカム族は，その年の焼



湯をかけ塩味で食べる
－鹿児島県菱刈町－



焼米を蒸す女性
－ポンサリー県・クンルック村・カム族－

天日に干された焼米
－ポンサリー県・ナムリー村・カム族－

畑にカオドーという早稲の陸稲と，カオピーという晩稲の陸稲を半分ずつ作る。焼米にするのは，カオドーの方である。米がなくなったら青いカオドーの穂を刈り取ってきて，鍋で炒って，臼で搗いて，蒸してカオニャンにして食べる。これをカオマオと呼ぶ。次の時期に作るのがカオハーンである。やはりまだ米を刈り取るには時期が早過ぎる時期に，青い米を刈り取ってきて蒸し器で蒸して，天日に干して臼で搗いて，再度蒸してカオチャンにして食べる。

同じく，ラオス・ポンサリー県パックカー村のアカバラ族は，米が足りなくなったとき，青い米をしごき取ってきて，鍋で炒って10分ぐらい冷まして，トチェー（踏み臼）でウトー（搗く）して，そのまま食べる。これをカウマウと呼ぶ。これとは別に，この村では，完全に実った稲を本格的に刈り取ったときに食べ始める儀式をホシシェという。神様の前に，お茶，ラオラオ（焼酎），プー（蟹）３匹，スクウー（瓜の玉切り）３切れ，カウマイ（新米）を供えて，家族も食べ始める。

焼米を炒る
－ポンサリー県・ナムカム村・タイダム族－

ラオス・ポンサリー県ナムカム村のタイダム族は，青い米を刈り取ってきてモーカーン（鍋）で10分ほど炒って指で摘まんで固くなったらドン（バラ）で簸って冷まして臼で搗く。これを蒸して食べる。この焼米をカオマオと呼び，キンチュアンノイという新しい米を食べる儀式のときに作る。両親が死んだ年には祖先に供える。

焼米を搗く
－同上－

また，ラオス・ポンサリー県ホック村のモン族は，タンピティー（稲の神を祭った棚）に供えるときに，青い米を取ってきて鍋で炒って，臼で搗いて蒸して食べる。この焼米をモブレイチャと呼ぶ。

こうした状況は，隣国タイの少数民族の間でも同様であるらしい。第３回目の旅で訪れたタイ北部，チェンライ県クンボン村のヤオ族は，焼米のように炒ったり蒸したりはしないが，米の少ない貧しい人は，熟れる前の青い稲を刈り取ってきて数日天日に干して，臼でついて精米して御飯に炊いて食べると聞いた。これも，未完熟の青米を食べるという意味では焼米に近い伝承である。同じタイ北部のチェンマイ周辺の急傾斜地の焼畑稲作民の焼米の習俗について，稲の研究者である高谷好一氏は，「早生の稲が実り出すと，しばしば，人々は完熟していない穂を刈り，食べる。籾のまま，まず鍋で煎って，それを臼で搗いて脱穀し，偏平になった一種の焼米をそのまま食べるのである。これはおやつのようなものである。貧乏人はこの時，もっと多量に刈り取って，普通に精米して食べることも多い。この頃はすでに米の端境期になっていて，貯えの少ない貧乏人の米倉は空になっていることが多いからである。」と報告している。

焼米の御飯を食べる女性
－ポンサリー県・モンマイ村・タイデン族－

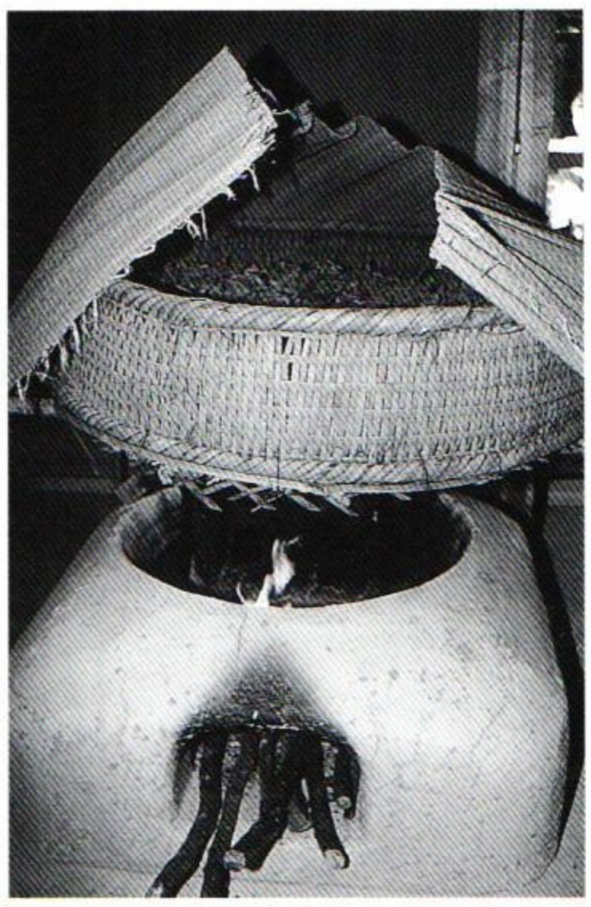
こうしたラオスの少数民族の焼米の伝承を見たり，聞いたりしながら，鹿児島で抱いていたなぜ常食なのかという疑問がものの見事に氷解していくのはすばらしく心地よいことであった。

それではまず，「焼く」・「蒸す」という目的が何であったかについて考えてみたい。柳田は，「火の文化」で籾を直接火で焼き，灰やごみを払いのけて米を取る方法と，石を焼いてその上に籾を置いて焼く方法

を示し，籾殻を燃焼させる方法を推定している。

しかし，その後の日本民俗学の研究の中では，焙烙（ほうろく）や鍋を用いずに穀物の穂に火を当てて穀殻が取れ易くする調整法の存在が明らかにされてきた。それが焼畑における「アマ」を使った稗や粟の乾燥技術である。岩手山地の「ムロ」と呼ばれる乾燥小屋，白山地方の「アマ」や「アマ小屋」，九州山地の「アマ」による火力乾燥法である。いずれも，竹簀を敷いた籠や箱の下から火を焚いて乾燥させる方法である。九州山地の五木村では「ヒエコーカシ」，「アワコーカシ」と呼ばれ，「焦す」という認識である。こうした方法は，カチグリ（搗ち栗）にも用いられ，釜で煎り乾燥させ，囲炉裏の上のツシ（天井）に上げておくと乾燥が効き，踏み臼で搗くと本皮も渋皮もよく取れたという。鹿児島においても粟は湿気があると殻がむけにくいといって，囲炉裏の上のツシにあげておいたという。奄美では，焼米の伝承の聞けない地域でも，シイガイ（椎の実の粥）の伝承を聞くことができる。椎の実を山から拾ってきて大鍋で炒って臼で搗いてサンバラでひって粥に炊くものであり，椎の実を籾に替えればまるで焼米である。このように，火力による乾燥は焼畑，畑作地帯に普遍的にみられる脱穀調整の技術である。宮崎県椎葉村向山では，アマで乾燥させたヒエをコーカシビエ，大釜で炒ったヒエをイリビエ，大釜で蒸したヒエをイデビエと呼びわけている。考えてみると，「焼米」の製法は，こうした技術そのものなのである。つまり，苗代に播いた後に残った種籾は，水気をたっぷりと含んだ籾であり，八朔の穂掛刈掛の穂も未完熟で指でつまむと白い汁の出る籾である。「炒る」，「煎る」という方法で強制的に火力で乾燥させるのは，籾の中を固くして搗くことを可能にし脱穀を取り除き易くし，「コメ」を取り出すのが目的であって，「苗代作り」「穂掛刈掛」という稲作の大切な儀礼の供物を神聖にするために焼く（炒る・煎る）のではないのである。供物として新しい米粒を取り出して供えなければならないから焼米にするしかないのである。「蒸す」方法も全く同じだといわねばならない。それは，ラオスのピィヤ村のカム族やパッカー村のアカ族の事例がそのことを如実に物語っている。完熟した米があれば炒ったり蒸したりするようなことは必要ないのである。ナムカム村のタイダム族やホック村のモン族の事例も，「新しい米を食べるため」に，炒っていることは明白なのである。こうした脱穀調整の方法は，水田稲作以前の古い技術であろうと考えられる。つまり，焼米の技術が稲作の技術ではなく，焼畑ないしは畑作の技術であるとする所以である。ラオスやタイの焼米が陸稲焼畑耕作民の間で行われているということも，そのことを強く示唆するものである。

さらに，作る時期と目的も鹿児島や奄美とラオスの少数民族との間ではぴったりと一致する。鹿児島では，焼米は端境期の熟れていない青い米，山蔭や日蔭，あるいは水口の稲，さらにはニロク（２番生え）など，そのままにしておいては熟れることのない青い米を対象にするのが特徴である。熊本県境の伊佐郡菱刈町に住む大正15年生まれの女性は，昭和18年学徒動員で福岡県筑紫郡に行ったとき，地元の人が種子籾の残りを



ヒエコーカシ
―宮崎県椎葉村―

焼米にして職場に持ってきたので，「自分たちのところでは秋に作るものなのに不思議なときに作るものだ」と驚いたと話す。この体験談は鹿児島とその他の地域との焼米作りの時期の違いを端的に示す実に象徴的な話である。

また，作る目的が飯米として用いることにある点も，日本の他の地域が水田稲作の儀礼に伴って作られるのと比較して大きな違いである。むしろ，ラオスやタイの事例との方が見事な一致をみせるのである。その炊き方も稗や粟などの焼畑ないしは畑作穀物を炊く湯取りに近い方法であることに特徴がある。このことも焼米の技術が焼畑文化としてとらえることのできる根拠になると考えられる。

また，鹿児島の焼米食習俗には，焼米を神聖視する考え方がないどころか，周囲の人々から低く見られる傾向があったと思われる節がある。例えば樋脇町では，焼米をしない人々の間では「赤子の小便のカザがする」というように，焼米を普通の米に対して低く見ようとする意識があった。姶良町では，「庭に干したりすると人が笑う」といい，奄美の「アオガッタ」というのも同様の意識であると思われる。しかし，それは焼米の材料とする米が，赤い色と香りという2つの要素の強い米であり，それはまさしく近代の稲作から排除されていった米たちであることと無関係ではないと思われる。カバシサや香り米のカザ（香り）においしさがあるという，もともと持っていた味の価値観を否定した結果生まれた意識であると考えられる。しかし，食べている人々は焼米のカバシサ（香ばしさ）がたまらなくおいしいという。年寄りが，稲刈りの時期にミナクチ（水口）のあたりのまだ熟しきっていない青い稲を見て「ヤッゴメンシテ　クェバ　ウンメカロドン（焼米にして食べたらおいしかろうけれども）」と話していたという曽於郡志布志町の伝承は，焼米がこの地域の人々の食生活の中にいかに深く根づいていたかを教えてくれる。

ただ，こうした焼米を低くみみる報告がかつてもなされていたが，日本民俗学会のなかではほとんど無視され，取りあげられることはなかった。日本とは，日本人とは何かを追究することを研究の目的としてきた日本民俗学会が，多様な日本の実状を描きだす方向に背を向けていた一つの例であると言いたい。

このように，鹿児島の焼米の食習俗の伝承と，ラオスやタイの北部の焼畑民の間に見られる焼米の習俗とを比較することによって，はじめてその文化的なつながりと，その意味が明らかになってくるのである。

次に，脱穀調整の技術について触れてみたい。脱穀具や脱穀したあと食べるまでの穀物の調整のための道具や技術もつながる文化として理解できるものである。先ず，麦の脱穀具であるムギウチダイ（麦打ち台）とマッボ（巻棒）から考えてみたい。

4　ムギウチダイとマッボ

麦の脱穀は，穂先から脱粒しにくいので，穂先を他のものに叩きつけて落すという方法が採られた。麦の脱穀は，穂先から脱粒しにくいので，穂先を他のものに叩きつけて落すという方法が採られた。鹿児島で育っ

木臼と石の分析
（小野重朗・「麦打ち道具」）

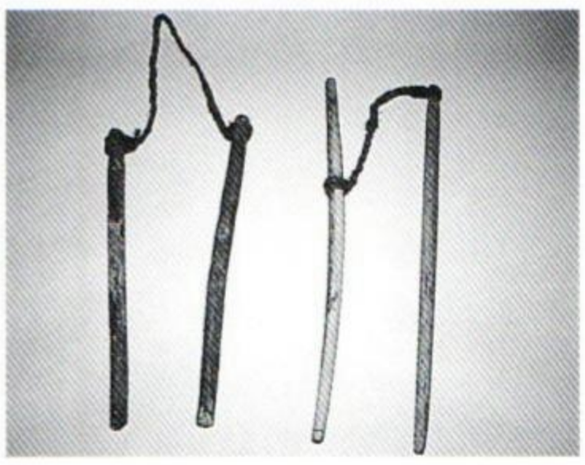
た60代以上の人ならば，五月晴れの暑い日に，コの字形に雨戸や蓆を立て回し，木の臼を寝かせたり簀の子の台を置いたりして麦の穂を叩き付けて落とした記憶は，あのたまらなくかゆかった思いとともに，それほど遠いものでもなく，ごく普通のものとして鮮明である筈である。そのとき叩きつける台がムギウチダイで，叩きつける麦わらの束をしっかりと掴むために巻締めるのがマッボである。このムギウチダイとマッボを鹿児島の基本民具としていち早く取上げ，形態的な分類と分布状態を明らかにし，その系譜論じたのは小野重朗氏である。

小野氏は，麦の穂先を叩きつけるものとして，横に寝せた木臼，平たい四角な石の板，縁台の上面を簀の子状にした台，弧状の木の枝や根の部分を二つに割り，その局面に木や竹の棒を横に簀の子状に張った台，平たく四角な木の板に斜めに２本の足を付け傾斜させた打ち板の５つに分類している。そして，木臼が大隅半島や甑島，種子島，屋久島などの島々に分布し，弧状の足に簀の子状に張った台は，木臼の分布圏に包まれるように志布志湾を囲む地域に分布するとし，木臼の影響を受けて弧状の簀の子の台が作り出されたとした。また，石の板は，出水郡，薩摩郡，川内市，日置郡，川辺郡など薩摩半島の西海岸沿いに広く分布し，木の打ち板は，その中心部である川内市や薩摩郡に分布するとして，石の板から打ち板へという系譜を考えた。しかも，木臼の分布がそれらを大きく包み込むことから木臼を寝かせて脱穀する形がもっとも古いと結論した。しかし，鹿児島湾岸沿いにだけ分布する縁台型については，「歴史的には相当古い民具であると思われるのに，木臼の圏の上をずっと被うに至らなかったのは何故だろうか。木臼を用いれば一応事たりる程度の麦作であったのだろうか。」と，理論家小野重朗氏にしては珍しくぼかしてしまっている。

スの分析
（小野重朗・「麦打ち道具」）

ムギウチイタの分析
（小野重朗・「麦打ち道具」）

さらに，小野氏はマッボについて，棒の端と端とを縄で連ねるものと，片方の棒だけは端から15センチほどの所に縄をつけたものと２つの形があり，前者が，薩摩・大隅半島の先端部を除いて全県下的に見られるのに対して，後者は薩摩郡や姶良郡一帯に分布するところから，新しく工夫した形であるとした。ただ，小野氏は触れていないが，薩摩郡薩摩町では２本の棒の中央部同士を縄で連結したマッボを使用していたということが筆者の調査で分かってきた。また，小野氏は「マキボウは東南アジアと共通した民具で，あまり新しいものとは思えない」と述べて，その関連性を指摘しているが，それとセットで使用されているはずのムギウチダイについては何も触れていない。以上が小野重朗氏の結論であると同時に，鹿児島のムギウチダイとマッボについての現在までの認識であるといってよい。



鹿児島の二種類のマッボ

それでは，こうした小野氏の研究成果をもとに，筆者が見聞きしたラオス，タイ，ミャンマーの穀物を打ちつける台と穀物の束を巻締める道具について比較検討を試みてみたい。

まず，打ちつける台について述べてみたい。東南アジアのものに初めて接したのは，鹿児島県大島郡住用村山間にある（財）原野農芸博物館

（館長　原野喜一郎氏）が，平成８年12月１日から開催した特別展「照葉樹林文化地帯の民族と民具－タイの暮らしと民具－」であった。そこで見たものは，大木を割って中を刳り抜いて，それに２本の足をつけて斜めに傾けたものであった。それを見て直感したのは鹿児島のタタキイタであった。マッボも１本の棒の先端から少し下と片方の棒の先端とを縄で結んだものであった。

横に板を並べたムギウチダイ
－ルアンナムタ県・ウドムシン村・ヤオ族－

筆者が，ラオスで最初見たものも紛れもなく鹿児島のタタキイタそのものであった。それは，平成８年12月27日，第２回目の旅で訪ねたホーパァン県リヤク村（ラオロン族）が使用していたものであった。少し小型ではあったが，平たく四角な木の横長の１枚板に２本の足をつけ，斜めに傾けたものであった。ペンティーカオと呼ばれ，名称の示すとおり稲（カオ）を打ちつける（ペンティー）脱穀具である。また，同日訪れたパテトラオの本拠地の近く，フウサイ村のモン族ブンサイさんの家でも同じ形のものを見ることができた。

さらに，12月30日に訪れたルアンナムタ県ラッハーシエッ村（プノイ族）のサイさんの家で見たものは，四角の板を縦方向に２枚並べて，両側に壁になるように板を立てて，足を付けて斜めにした台であった。やはり，稲を打ちつけて脱穀するものであった。この形の台は，その後最も多く見かけた形であった。ルアンナムタ県ウドムシン村（ヤオ族），チェンチャイ村（タイルー族），ボケオ県ラオ村（ラオ族），ラオ村の隣のタイルー族の村などで見ることができた。

この形の台を用いた稲の脱穀作業を実際に見ることができたのは，平成９年11月３日，第３回目の旅で訪れたポンサリー県ボンタイ村（タイルー族）であった。タイルー族は，この台のことをケッと呼んでいる。その作業の様子を解説するとおおよそ次のようになる。水田の中に積み上げた稲積みの側に，網代編みの竹製のマットを敷いてそのうえにケッを置く。マイディンカオと呼ぶ巻棒を広げ，２本の棒をつないだ縄の上に束ねていない稲を稲積みから下して置き，マイディンカオを両手で握り，先端から少し下側に縄を結んだ方の棒の先端を前に押し出すようにして巻いて締め，頭上高く振り上げてケッに穂先を叩き付ける。叩き付けられた穂先からケッの前方に籾が落ちていく。何回か叩き付けると，束ねていた稲の束を前方のマットに抛り投げる。前方には３人の女性がコンティアーと呼ぶ叩き棒を２本持って立っており，投げられてきた稲の穂先に残る籾を叩き落す。そして，籾を足でけ散らしながら，ビーンと呼ぶ網代編みの竹製の大型の団扇で煽いで風を起こし，わら屑を飛ばして精選する。こうして稲積みごとに脱穀していくのである。この稲の脱穀作業と，小野重朗氏が報告している昭和の初めまでの鹿児島市中山町の麦の脱穀作業とを比較してみたい。小野氏は「麦刈り直前に，家ごとに風のよく通る田にムッドコ（麦床）の十畳敷ほどのものを作る。麦の株を除き，鍬で平らにならし，水をまき蓆を敷いてその上からよく踏み固めてゆき，土間のように土の面を作る。天気のよい日を選んで刈麦を地面に広げてほしておき，11時頃から３時頃までの日盛りに麦打ちを

巻棒で藁束を締めた様子
－ボケオ県・ラオ村・ラオ族－

する。トボシダナ（ムギウチダイのこと……川野註）はほとんどの家にあったが，ない人は木臼を麦床に運ぶ。石を用いる人はいなかった。風上から風下に向かって２，３人で並んで，よく乾いた麦を束にして持って台に打ちつける。風向きが変わると台の向きをかえる。落ちたものはカッサ（殻，ノギ）のとれたものが多いが，穂のままのものもあるので，さらに数人でその上からウチボウ（カラサオでなく長い少々曲がった打ち棒）で打ち，モンツシ（籾通し，籾ふるい）で風選する」と報告している。この報告では，マッボの使用は見られないが，ラオスのボンタイ村のタイルー族とほとんど同様の作業をしていることがわかる。ちなみに，トボシダイのトボシというのは，東南アジア系と思われる赤米のことである。したがって，トボシダイという名称も，小野氏がいうようにもともとトボシゴメを叩き落していたところから付けられたものであろう。しかし，このトボシダイは縁台型であり，斜めの板ではないのである。

稲の脱穀風景
ールアンナムタ県・チェンコック村・タイルー族ー

つぎに，弧状の簀の子の台について触れておきたい。残念ながらこの形のものはまだ実際に目にしてはいない。しかし，平成９年１月８日に訪れたルアンパバーン県ロンラオ村（モン族）では使用しているとのことであった。ただ，そのときの確認の仕方がスケッチでの確認であったので，どの程度一致するかははっきりしないが，竹を簀の子状に渡していることだけははっきりと聞いている。単に斜めのものである可能性も否定はできない。タイやラオス，ミャンマーなどの山岳少数民族の村をフィールドにしている民族写真家の山崎久勇氏によれば，ミャンマーのシャン州のシャン族は，割り竹を簀の子に渡した斜めの叩き台を使用しているのである。

こうしてみると，ラオスには臼を寝かせる形，石の板，縁台型はないが，斜め板，割り竹を簀の子に渡した弧状ないしは斜めの叩き台があることが明らかになってきたのである。ここで確認しておきたいのは，小野重朗氏が鹿児島のムギウチダイの系譜関係の中で，「歴史的には相当古い民具」としながらも唯一孤立無縁とした縁台型は，鹿児島及び熊本や大分など北の方にしか分布せず，鹿児島より南には分布しないということである。しかも，周圏論（中心より遠い所のものが古いとする考え方）的な分布から弧状の簀の子の台や斜め板の古形と考えた臼を寝かせる形や石の板は，鹿児島にだけしか分布しないのである。ラオスにも臼はありながらそれを用いることをしていないのである。実は，周圏論にとらわれることなくその分布を考えて見ると，弧状の簀の子の台が大隅の肝属川周辺，斜め板が薩摩の川内川の流域に分布していることに重要な意味があるのではないかと考えられる。小野氏は，臼や石の板の影響を受けて二つの地域で新しく作り出されたとしたが，そうではなくて，この二つの川の地域に弧状の簀の子の台と斜め板が，それぞれ入ってきて形態的に類似した臼や石の板を用いるようになっていったと考える方が妥当である。それは，ムギウチダイだけで考えるとおかしく思われるかもしれないが，これとマッボとをセットとして考えるとそのことはよ

り明確になる。そのため，ラオスの巻棒について見てみたい。

先にあげたホーパァン県リヤク村（ラオロン族）の斜め板のペンティーカオとセットで使用されていた巻棒は，リャンと呼ばれ，1本の棒の先端から少し下と片方の棒の先端とを縄で結んだものであった。ポンサリー県ボンタイ村のタイルー族がケッとセットで使用していたマイディンカオも同じ形であった。原野農芸博物館の特別展示会で見たタイの資料も同様であった。この形以外の巻棒は見ることはできない。

鹿児島にあるマッボの3種類のうちラオスのものと一致するのは，鹿児島県境を越えて北側には分布しない1本の棒の先端から少し下と片方の棒の先端とを縄で結んだものである。しかも，それらは，2本の棒を結んだ縄の長さと片方の棒の縄を結んだ先端からの距離とが，ほぼ等しいという点まで一致するのである。2本の棒の先端同士を縄で結んだ形のものは，逆に鹿児島県境を越えて熊本，宮崎，高知に分布する。しかも，縁台型の台とセットになって使用されているのである。このことは，ムギウチダイとマッボの系譜が，小野重朗氏が提示した系譜とは逆の歴史をたどったということを語っているのである。縁台型のムギウチダイもマッボも2本の棒の先端同士を縄で結んだマッボも，ラオスやタイを含めた地域の少数民族のものと深いつながりを持つものが，鹿児島に伝わった後新たに工夫され，さらに北に伝播したものに違いない。あえて付け加えるならば，鹿児島への伝播はトボシという赤米系統の稲の伝播と一緒ではないかと考えられる。鹿児島湾岸でムギウチダイをトボシダイと呼んでいることもそのことを強く示唆しており，かつては麦だけでなくトボシゴメも脱穀していたのである。南から日本列島に文化が流入するときの道筋をきわめて端的に物語る民俗資料の一つである。ただ，不思議なことにムギウチダイもマッボも，奄美から沖縄の先島までの地域には分布していない。しかし，そうした事例は何もこれだけに限らない。むしろ，それらが欠落しているところに，先島から鹿児島に至る地域の文化の成立ちのなぞが隠されているのかもしれない。

次に，脱穀した穀物の籾の精選や精白の段階の調整作業に用いられ，バラとかトオシ・ユリと呼ばれる竹で網代編みに編んだ浅底の平笊（ざる）について述べてみたい。

バラで籾を精選している様子
－鹿児島県瀬戸内町－

5　バラとトオシ

鹿児島や奄美の女性たちが，脱穀した穀物の実をバラやトオシに入れて，頭上高くに掲げて揺り動かし，「ヒューッ，ヒューッ」と口笛を吹いたり，「ホーッ，ホーッ」と声をあげながら風を呼び，わら屑を飛ばしている風景も懐かしい記憶である。本誌の表紙の写真を見てそのことを思い起こした人は少なくないに違いない。バラとトオシもムギウチダイやマッボと同じように，ラオスやタイと「つながる文化」なのである。

この2つの民具については，すでに平成6年度に担当した黎明館企画特別展「鹿児島・竹の世界－環シナ海文化の視座から－」でも大きく取りあげたので，ここではそれ以降明らかになった点を中心に簡単に触れておきたい。

バラの網代編みの種類には，大きく２種類の編み方がある。１つは，二つ越し，二つくぐりの編みにしたもの，他の１つは，三つ越し，三つくぐりの編みにしたものである。この２つのうちの三つ越し，三つくぐりのバラは，ほとんど奄美・沖縄にだけに分布し，脱穀調整に使われるのはもちろんであるが，それ以外にも物を入れて運んだり，干したり，食べ物の調理や食べ物を入れたりするのに使われる。

しかし，二つ越し，二つくぐりのバラは，一部沖縄本島の北部と鹿児島を中心にトカラ列島から九州の北端，高知県のあたりまで分布する。しかも，鹿児島県境を越えるとバラは，鹿児島の職人の作るものであるという認識が出てくる。特に，高知では薩摩籠と呼んでいる。また，この地域では脱穀調整の機能は失われ，物を入れて運んだり，干したり，食べ物の調理や食べ物を入れたりする機能だけが残るようになる。

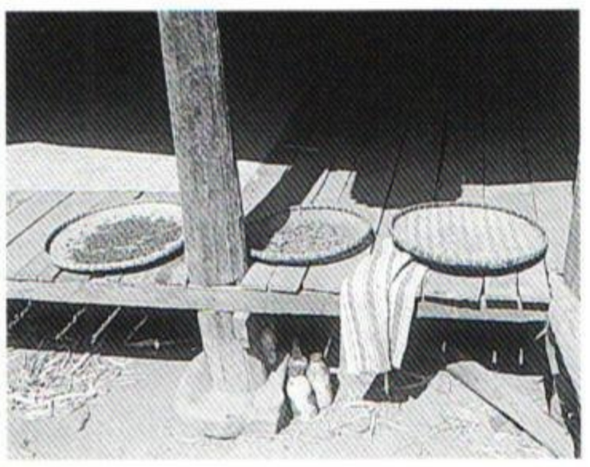
ところが，ラオスでは，二つ越し，二つくぐりの編みにしたものも，三つ越し，三つくぐりのものも両方ともに用いられている。しかも，機能的には，奄美や沖縄と同じく脱穀調整と物入れ，あるいは食器としての機能を兼ね備えている。平成９年１月４日に訪れたウドムサイ県ドンサーク村（カム族）で見たものは，ピアルーと呼ばれる二つ越し，二つくぐりのバラで，ちょうど竪臼と竪杵とで搗いた米の糠を飛ばしていたものであった。平成８年３月18日に訪れたシェイクアン県サン村（ラオ族）で見たものは，ガドーンと呼ばれ，三つ越し，三つくぐりのバラで直径が１メートル33センチ，深さ７センチの大きさであった。籾を天日に干すときに用いるものである。鹿児島でみそ作りなどに使われるウバラ（大バラ）そのものであった。また，平成８年３月13日に訪れたルアンパバーン県サンハイ村（ラオ族）では，縁側に唐辛子などを干した３枚並びのバラとコックティーン（踏み臼）で搗いた米を簸っているのを見かけた。このようにラオスのバラの状況を見ると，鹿児島のバラも奄美や沖縄のバラも共通の出自であることが良く理解できる。

こうした形態と機能を持つバラは，台湾，フィリッピン，インドネシア，マレーシア，タイ，ミャンマー，ラオス，カンボジア，ベトナム，中国南西部というように，東中国海や南中国海を取り巻くように分布し，西は，ネパールまで広がっている。

一方，トオシには，バラと同じ形の浅底の平笊と胴部が立ち上がった籠型のものとがある。ここでは，前者をバラ型トオシ，後者を籠型トオシと呼ぶことにする。その分布を見ると，バラ型トオシは鹿児島以南を中心に広がって分布し，たとえ，県境を越えて北にあっても，バラと同じく鹿児島の職人が作るものであるという。これに対して，籠型トオシは，鹿児島県の川内川から北の方に広がり，全国的に分布している。しかも，形態的にさらに大きな違いがある。それは，バラ型トオシは，平底の中央部の透し編みが正方形で，四方の脇が密な編みであり，籠型トオシは，底が全面透し編みであるという違いである。

さらに，重要なことは，バラ型トオシがバラとセットとなって，東シナ海や南シナ海を取り巻くように分布しているという事実である。しか

バラで米の糠を飛ばしている様子
－シェイクアン県・ナソッ村・タイプーン族－



唐辛子などが干してあるバラ
－ルアンパバーン県・サンハイ村－

ユリで籾を精選している様子
－鹿児島県・龍郷町－

も，沖縄では，バラ型トオシでありながら全面透し編みのものがほとんど全域に分布するが，本島北部の国頭地方にのみ四方脇の密編みの形が存在する。おもしろいことにこの国頭地方は，沖縄では例外的に二つ越し，二つくぐりのバラが分布する地域でもある。

それでは，ラオスの状況を述べてみたい。シェイクアン県サン村（ラオ族）のものは，中央部の透し編みも四方脇の密編みも二つ越し，二つくぐりであった。名称も，バラをガドーンと呼ぶのに対して，トオシのことをドオーンと呼んでいた。また，ウドムサイ県ドンサーク村（カム族）で見たトオシは，サン村（ラオ族）のものと同じで，名称もバラのことをピアルーと呼ぶのに対して，トオシをギャルーと呼んでいた。

実は，前回の黎明館企画特別展「鹿児島・竹の世界－環シナ海文化の視座から－」の準備段階で，小野重朗氏との間で話題になったのは，バラとトオシは同類のものか，同類であるとすればどちらが先に生まれたものなのかという，両者の出自関係の問題であった。そのときは，中央部の透し編みも四方脇の密編みも二つ越し，二つくぐりであるところから，トオシはバラの四方脇の密編みだけを残し中央だけを透し編みにしたもので，バラから工夫されたものであると考えておいた。これまでの3回の旅をとおして，ラオスのバラとトオシの名称を知ることによってその考えはまず間違いないと確信するにいたった。両者がセットで広く分布するのもそのことを物語っている。バラとトオシもまた，鹿児島の文化の源流を考えるときの大きな文化指標の一つなのである。

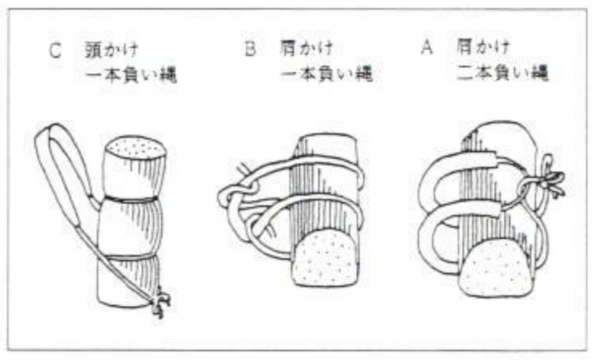
これらの他にも踏み臼や竪臼，手杵，横臼，横杵，叩き棒など多くの比較文化の資料があるが，これらについては機会を改めて論じてみたい。

次に，運搬の技術について述べて見たい。ここでは，特に，背負い籠と無爪のカリコ（背負い板）について触れてみたい。

6　背負い籠と無爪のカリコ

現在では，人がものを担いで運搬する姿を見ることもなくなったが，自動車が普及するまではどこでも普通に見かける姿であった。人が担ぐ運搬の方法と道具もまた，東南アジアの少数民族と比較文化の対象になるものの1つである。

鹿児島から沖縄にかけての背負い運搬について，背負い縄に焦点を当てて研究したのも，小野重朗氏であった。小野氏は，そこに見られる背負い方を次の3つに分類した。それは，A　2本負い縄，肩かけ，横負い2本回し，B　1本負い縄，肩かけ，横負い2本回し，C　1本負い縄，頭かけ，縦負い1本回しというものである。そして，その歴史的変遷をCの形からBのかたちへ，さらにAの形へと変化していったという仮説を提示した。この考え方をもとに背負い籠を中心にして見てみるとどうなるであろうか。まず，Aの形にあたるのが，種子島，屋久島を含めて鹿児島以北に見られる，2本の縄のそれぞれの先端を籠の縁輪の部分に結びつけ，籠の底をくぐらせ背面で結び合わせて留めて，肩で背負う籠である。次に，Bの形に近いのが鹿児島に見られる金山テゴである。1本の負い縄を籠の胴体に回し，籠の全面に通し，さらに籠の底をくぐ



（小野重朗「南西日本の負い縄の分布と系譜」）

らせて背面で結び留めて肩で背負う形である。しかし，この籠は，小野氏の分類でいくと，B型に近いが，「横負い1本回し」であると同時に「縦負い1本回し」でもあるのが大きな特徴である。次に，トカラ列島の十島村や三島村にあるシタミと呼ばれる籠を見てみたい。これは，1本の負い縄で籠の胴部を巻いて，縄の先端を籠の前面の真中より少し下ぐらいの位置に結び留めており，C型に近いが肩で担ぐ形である。最後がC型で，1本の負い縄で籠の胴部を巻き籠の背面で結び合わせて，額に掛けて背負う形である。奄美諸島や沖縄本島北部に分布するティルという背負い籠がそれである。背負い籠に焦点を当てて見てみると以上のようになり，小野氏が負い縄で考えたC型とA型との間に，さらに細かい形が存在することがわかる。しかも，驚くことにそれらと同じ背負い方の背負い籠がラオスの少数民族の間で使われていることがわかってきた。

額で背負った籠
－ポーファン県・サマキサイ村－

平成8年3月訪れたシェイクアン県サン村（ラオ族）では，奄美のティルとおなじヘッドバンド式の背負い籠を見ることができた。小野氏の言うC型である。また，平成8年12月29日訪れたルアンナムタ県ドッムン村（カム族）のテーという背負い籠や平成9年1月4日に訪れたウドムサイ県ドンサーク村（カム族）のテーとかヤンなどという背負い籠も，籠の編み方は異なっていてもすべてヘッドバンド式であった。また，シェイクアン県サン村（ラオ族）で見たペーや平成9年10月30日に訪れたポンサリー県ソプファン村（タイダム族）で見た背負い籠は，いずれもトカラ列島のシタミと奄美のティルとを合体させた形であった。

シタミを背負った女性
－鹿児島県十島村・ロシ島－

さらに，平成9年10月26日に訪れたタイのチェンライ県クンポン村やホイチャンロッ村のヤオ族が使っているチュイサーと呼ばれる籠は，鹿児島の金山テゴと同じであった。この形の籠は，ルアンナムタ県ナムルー村（ランテン族）でも使用している。一方，ランドセルの形をしたA型は，モン族の人々しか用いていず，モン族以外の少数民族が背負っている姿を見かけたことはない。

合体型の籠を背負う女性
－シェイクアン県サン村－

このように，我々がこれまで鹿児島から沖縄までの地域差として理解してきた背負い籠が，ラオスやタイでは民族の差として存在することがわかる。小野氏が言うようにこの地域の中で変化してきたものなのか，あるいはそれとは別に，それぞれの籠が少数民族の文化と単独につながるものなのか，現在のところ，どうも後者の方が正しい理解につながるのではないかと考えている。小野氏は，生前に，背負い籠よりも負い縄の方が古い背負い運搬を考えるのには大切であると言われていた。その理由として，鹿児島全体に背負い籠を背負う地域が少ないことをあげられていた。しかし，それは，鹿児島がラオスなどとつながる背負い籠の文化圏の北限に位置すると考えた方がいいのではないだろうか。

無爪カリコで薪を担ぐ母子
－ウドムサイ県・フワイランペン村－

次に，無爪のカリコについて述べてみたい。ラオスで最初に無爪のカリコを見たのは，平成8年3月14日に訪れたルアンパバーン県ロンラオ村（モン族）であった。背板が縄でなくの網代編みの竹であることを除けば，荷物を締めるのにつけてある股木まで共通であった。同月18日シェ

イクアン県ポンサリー市内でも女性が薪を背負っているのを見かけた。また，平成９年１月５日に訪れたメコン河沿いのウドムサイ県フワイランペン村（モン族）でも，川岸から薪を担ぎあげる母子を見かけた。また，平成８年12月27日に訪れたホーパァン県フウサイ村（モン族）ではヂーキと呼んでおり，まったく同じ形のものであった。ラオスでは，無爪のカリコを背負っているのはモン族しか見かけないが，平成９年10月26日に訪れたタイのチェンライ県クンボン村（ヤオ族）でも担いでいた。考えて見ると，モン族もヤオも肩で担ぐ背負い籠を用いる民族であるのがおもしろい。鹿児島で無爪のカリコを「シマガレ」といって，有爪のカリコが新しくはいってきたというのに対して，もともとからあったという伝承もこうした文脈で考えてみる必要がありそうだ。

ここまで，有形の民俗について見てきたが，最後に精神的な世界とつながる鳥居と聖なる森について述べることにする。

7　ロッコーン（鳥居）とニゴニッショロ（聖なる森）

ラオスではアカ族の村を訪れると，どの村にも入り口と出口の両方にロッコーンとよぶ門が作られている。ロッコーンを最初に目にしたのは，平成８年12月30日に訪れたルアンナムタ県ナムレツ村（アカ族）であった。この村には，その後，平成９年11月５日にももう１回尋ねていった。ロッコーンは，陸稲の種子を蒔く日に建てる。両側の柱（ホズ）の上に二本の横木（ピァードン）を渡してある。横木には，雌雄一対のツバメの木彫，水筒，日輪，月輪，木製の刀，鉄炮，左巻きの模様を入れた棒，ダレッ（竹の六つ目編み）などが取り付けられている。柱の足元にも横木が置かれ，９個の鋸歯紋が描かれている。悪いお化けが入らないようにしたものであるという。これが建った日は集落内に入ることも，集落から出ることもできない。柱の外側には，近親相関して村中を病気にしたという兄と妹の性交をしている木像が立てられている。村人を戒めているのだという。ただこの日，豚を１頭，鶏を４羽殺して食べる。その血を種子籾にまぶして神に供えてから焼畑に蒔き始める。ロッコーンを建てたらその日のうちにもう一頭豚を殺す。さらに，13日後に豚と犬を一頭ずつ，鶏を２羽殺して供える。さらにその13日後にも，豚，犬を一頭ずつ，鶏を一羽殺す。これらの動物を殺す（供犠する）場所が，ニゴニッショロという森で，ロッコーンの脇を入っていったところにある。４本柱の上に小さな祠が作られている。小さな木でも切ってはならず，女性や子供は立ち入ることが厳しく禁じられている。もし，その禁を犯した者は，豚一頭を村にさし出さなければならない。かつて小野重朗氏が取り上げて論じた鹿児島の「モイドン信仰」につながるものではないかと思われる。さらに，多くの事例を調査していけば，なお深いつながりが明らかになっていくことが期待される。

ロッコーン
ールアンナムタ県ナムレツ村ー

ロッコーンの鳥
ールアンナムタ県ナムレツ村ー

ニゴニッショロの森
ールアンナムタ県タホム村ー

8　終わりに

以上取りあげた以外にも，炊事棟と居住棟の２つの棟を持つラオ族の住居，河川漁業の筌や鹿児島でカタギイテゴと呼ぶ方形首くびれ広口型のビク，焼酎造りの技術，調理用の小臼の文化，砂糖きびやカライモ

(さつま芋)の文化，ニガウリ，イトウリ（へちま）など瓜を食べる文化，筍を食べる文化，藍染めや絣や浮織などの染織文化などあげれば際限がない。これらの比較研究を進めていくことは，鹿児島の歴史や文化の解明につながる，極めて有効な方法であると思われる。今回の企画特別展がそうした契機になれば幸いである。

（調査史料課学芸専門員）

－ラ　オ　ス　略　図－

出　品　目　録

1　耕す・採る

(1)　鍬

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
1	鍬	中国雲南省	15.0×27.5×96.9	国立民族学博物館
2	土切グワ	喜界町	14.0×30.0×72.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
3	トングェ	徳之島町	13.4×38.2×87.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
4	ヴェク	ラオス	8.8×34.5×7.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
5	ワンコー	ラオス	8.5×39.0×5.2	鹿児島県歴史資料センター黎明館
6	ニャオサット	ラオス	14.7×36.0×4.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
7	草刈用ナイフ	ラオス	12.0×41.5×13.5	国立民族学博物館
8	草刈用ナイフ	ラオス	5.2×41.5×11.0	国立民族学博物館
9	草とり鎌	タイ	3.8×34.8×11.7	原野農芸博物館
10	小鍬	台湾	2.3×47.9×3.3	国立民族学博物館
11	フェラ	大和村	4.3×22.5×	鹿児島県歴史資料センター黎明館
12	トゲベラ	住用村	4.5×32.0×34.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
13	テグワ	十島村	7.4×10.0×39.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
14	テグワ	東町	11.5×37.0×4.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(2)　掘り棒

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
15	掘り棒	タイ	／×252.0×2.0	原野農芸博物館
16	掘り棒	ラオス	14.0×116.0×6.0	原野農芸博物館
17	穴掘棒	台湾	4.1×87.9×4.2	国立民族学博物館
18	田イモ掘棒	知名町	3.5×124.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
19	掘り棒	タイ	6.0×206.0×2.0	原野農芸博物館
20	土掘り具	タイ	137.5×6.5×162.0	国立民族学博物館
21	土ほり具	カンボジア	6.0×107.0×／	国立民族学博物館
22	シャベル	フィリピン	55.5×6.1×4.1	国立民族学博物館
23	シーアン	ラオス	3.5×92.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
24	キンツッ	志布志町	9.0×206.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(3)　穂摘み具

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
25	ヴォー	ラオス	0.5×9.7×5.9	鹿児島県歴史資料センター黎明館
26	ヴォー	ラオス	0.5×9.4×5.9	鹿児島県歴史資料センター黎明館
27	タープ	ラオス	0.4×9.6×5.2	鹿児島県歴史資料センター黎明館
28	穂摘み具	タイ	0.4×15.7×7.0	原野農芸博物館
29	ヴゥー	ラオス	10.4×12.2×6.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
30	ヴゥー	ラオス	8.2×10.2×6.2	鹿児島県歴史資料センター黎明館
31	ブーブロンレン	ラオス	0.7×16.5×5.2	鹿児島県歴史資料センター黎明館
32	爪鎌	タイ	9.2×11.3×5.2	国立民族学博物館
33	ウー	ラオス	8.4×14.4×3.4	鹿児島県歴史資料センター黎明館
34	ウー	ラオス	7.4×11.7×4.2	鹿児島県歴史資料センター黎明館
35	穂摘み具	タイ	16.5×10.5×4.5	原野農芸博物館
36	テッカオ	ラオス	15.9×9.8×4.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
37	デップ	ラオス	14.5×9.85×3.6	鹿児島県歴史資料センター黎明館
38	穂づみ具	マレーシア	11.2×15.7×6.3	国立民族学博物館
39	ヘラ	十島村	1.8×16.6×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
40	石包丁（薬師堂遺跡）	大口市	3.7×9.8×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館（寺師見国コレクション）
41	石包丁（釘田遺跡）	鹿児島市	5.0×10.2×／	鹿児島大学埋蔵文化財調査室
42	石包丁（鹿児島大学郡元団地内遺跡）	鹿児島市	3.4×10.2×／	鹿児島大学埋蔵文化財調査室
43	石包丁（複製）	川内市	6.4×15.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(4) 穂刈り具

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
44	鎌	フィリピン	66.5×10.7×4.3	国立民族学博物館
45	鎌	フィリピン	41.2×8.7×2.7	国立民族学博物館
46	刈鎌	タイ	36.0×14.2×4.0	国立民族学博物館
47	稲刈り用鎌	ラオス	3.0×36.5×16.0	国立民族学博物館
48	稲刈り用鎌	ラオス	2.0×35.0×10.0	原野農芸博物館
49	鎌	ラオス	3.0×31.0×12.0	原野農芸博物館
50	カマ	住用村	2.6×34.5×15.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
51	カマ	西之表市	3.0×39.3×18.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(5) 巻棒

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
52	稲束挟み	タイ	3.5×2.2×87.1	国立民族学博物館
53	稲束挟み	カンボジア	3.2×7.4×50.9（42.0）	国立民族学博物館
54	マイカン	ラオス	3.0×13.0×49.5（39.5）	原野農芸博物館
55	コーンクリー	ラオス	2.5×34.5×47.5（46.0）	原野農芸博物館
56	リャンカオ	ラオス	3.0×27.0×52.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
57	リャン	ラオス	2.5×18.0×68.0（56.5）	鹿児島県歴史資料センター黎明館
58	マッボ	隼人町	2.5×23.0×55.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
59	マッボ	東串良町	2.0×18.0×45.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
60	マッボ	鹿児島県	2.5×51.0×46.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
61	シメギ	宮崎県	2.5×／×38.0	国立民族学博物館
62	ゴクミョウ	熊本県	3.5×47.0×44.0	熊本市熊本博物館

(6) タタキダイ

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
63	ペンティーカオ	ラオス	39.0×76.5×25.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
64	ケッ	ラオス	66.0×110.0×76.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
65	ケッ	ラオス	64.0×94.0×64.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
66	タタキ台	ラオス	39.0×83.0×58.0	原野農芸博物館
67	タタキ台	ラオス	38.5×88.0×66.0	原野農芸博物館
68	ムギウチダイ	蒲生町	44.0×120.0×54.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
69	ス	串良町	73.0×106.5×46.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
70	タタキイタ	東郷町	35.0×108.0×49.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
71	麦打台	熊本県	68.0×149.5×52.5	熊本市熊本博物館
72	ムギウチダイ	大分県	77.0×176.0×52.0	国東町歴史民俗資料館

(7) タタキ棒

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
73	コンクーリー	ラオス	18.0×86.0×2.3	原野農芸博物館
74	トウンノック	ラオス	21.0×86.0×2.3	鹿児島県歴史資料センター黎明館
75	コンクーリー	ラオス	18.7×78.0×3.8	原野農芸博物館
76	タックホーン	ラオス	22.3×59.0×2.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
77	クアンカオ	ラオス	21.0×86.0×2.3	鹿児島県歴史資料センター黎明館
78	脱穀棒	ラオス	28.0×98.0×2.0	原野農芸博物館
78	コンファッカオ	ラオス	20.0×89.0×1.3	鹿児島県歴史資料センター黎明館
80	クアク	ラオス	28.0×92.5×3.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
81	ドンヂ	松山町	22.5×76.0×6.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
82	ナタネタタキ	串良町	31.0×74.3×2.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
83	コアンティーカオ	ラオス	／×157.0×2.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
84	脱穀用具	タイ	19.0×155.0×3.0	国立民族学博物館
85	豆打棒	東串良町	／×132.0×2.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
86	フタマタ	福山町	／×133.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
87	タタキ棒	姶良町	／×115.0×7.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
88	ガドーン	ラオス	50.0×／×6.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
89	ピアルー	ラオス	63.0×／×6.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
90	パラ	与論町	62.0×／×11.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
91	バラ	川辺町	61.0×／×8.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(9)　トオシ

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
92	クーン	ラオス	49.5×／×8.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
93	フミユイ	知名町	47.0×／×8.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
94	コメモラシ	垂水市	48.0×／×6.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(10)　ウチワ

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
95	うちわ	タイ	49.8×／×63.5	国立民族学博物館
96	ビーン	ラオス	51.0×／×78.3	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(11)　草かき

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
97	ワアンサン	ラオス	24.0×114.5×11.0	原野農芸博物館
98	草かき	タイ	42.0×154.0×16.0	原野農芸博物館
99	マイサッター	ラオス	25.0×76.0×9.0	原野農芸博物館
100	マイサンカオ	ラオス	28.5×108.0×13.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
101	ワンサン	ラオス	27.5×129.0×12.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
102	クサカッ	有明町	28.5×128.0×11.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館

2　伐る・捕る

(1)　斧

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
103	伐木用斧	ラオス	7.5×57.0×25.0	国立民族学博物館
104	伐木用斧	ラオス	7.5×86.0×61.0	国立民族学博物館
105	クワンターフン	ラオス	6.0×68.0×55.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
106	斧	中国雲南省	36.4×99.0×22.8	国立民族学博物館
107	斧	フィリピン	65.8×17.0×3.6	国立民族学博物館
108	手斧	沖縄県石垣市	9.0×62.0×37.0	石垣市立八重山博物館
109	ウーヌ	沖縄県久米島	8.0×73.5×38.8	久米島博物館建設委員会
110	ユキ	徳之島町	17.6×46.0×2.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(2)　山刀

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
111	山刀	ラオス	6.5×56.5×／	国立民族学博物館
112	ミチェ	ラオス	6.0×75.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
113	パー	ラオス	6.0×73.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
114	パー	ラオス	10.5×66.5×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
115	パータンハイ	ラオス	5.5×56.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
116	パー	ラオス	6.5×45.5×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
117	ヤマキリ	十島村	5.0×47.2×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
118	ホウチョウ	十島村	4.0×42.1×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
119	ヤンボウチョウ	上屋久町	3.5×41.8×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
120	ナタ	三島村	12.5×48.4×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
121	ゾウリンガマ	十島村	5.0×78.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
122	ナタガマ	大口市	18.8×67.5×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
123	ヤボハレ	国分市	28.0×119.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
124	ナタ	三島村	20.0×71.5×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
125	刀	カンボジア	44.2×3.9×2.9	国立民族学博物館

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
126	ミトホッ	ラオス	4.0×56.5日／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
127	ミヤ	ラオス	3.0×55.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(3)　鋸

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
128	ルイ（二人挽き）	ラオス	35.5×190.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
129	ルイ（一人挽き）	ラオス	30.0×83.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
130	ノコ	沖縄県	71.0×147.0×／	石垣市立八重山博物館
131	フタイビキ	阿久根市	9.5×103.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(4)　デッキュ

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
132	石弓	ラオス	20.0×／×118.0	国立民族学博物館
133	ナアー	ラオス	77.0×54.0×5.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
134	カ	ラオス	63.0×49.0×4.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
135	デッキュ	志布志町	95.0×88.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
136	石弓	台湾	32.3×44.6×14.4	国立民族学博物館

(5)　ワナ

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
137	ネズミ取ワナ	タイ	13.2×32.2×27.7	原野農芸博物館
138	ネズミ取ワナ	ラオス	5.5×10.5×82.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
139	ネズミ取ワナ	ラオス	5.5×／×149.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
140	イタチノワナ	大崎町	5.8×11.7×13.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
141	小鳥のワナ	タイ	18.5×36.5×27.0	原野農芸博物館
142	小鳥のワナ	ラオス	2.0×17.5×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
143	小鳥のワナ	ラオス	2.0×15.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館

3　漁る

(1)　ウケ

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
144	サイソンパー	ラオス	49.0×76.0×／	原野農芸博物館
145	サカテゴ	宮之城町	39.0×75.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
146	サイ	ラオス	41.0×60.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
147	アネク	奄美大島	31.0×65.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
148	スーン	ラオス	32.5×77.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
149	エビテゴ	宮之城町	15.0×73.5×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
150	サイクーン	タイ	10.0×50.0×／	原野農芸博物館
151	筌	タイ	12.0×61.0×／	原野農芸博物館
152	スーン	ラオス	16.0×73.3×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
153	トン	ラオス	14.5×38.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
154	スーン	ラオス	12.0×85.5×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
155	スーン	ラオス	18.0×56.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
156	トン	タイ	25.0×106.0×／	原野農芸博物館
157	サイリンガー	ラオス	33.0×113.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
158	トン	タイ	42.0×41.0×42.5	原野農芸博物館
159	トン	タイ	23.0×56.0×／	原野農芸博物館
160	改良ヒビ	大口市	33.0×70.0×28.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
161	ソンスンパー	ラオス	45.0×120.0×73.0	原野農芸博物館
162	トン	タイ	33.0×64.0×38.0	原野農芸博物館
163	淡水魚用筌	ラオス	13.0×46.0×46.5	国立民族学博物館
164	筌	ラオス	21.5×／×40.0	日原野農芸博物館
165	トン	ラオス	19.5×／×39.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
166	サエ	ラオス	19.0×／×35.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
167	サイトン	ラオス	21.0×／×34.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
168	サイイァン	ラオス	17.5×／×17.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
169	ガニテゴ	宮之城町	18.0×18.0×39.6	鹿児島県歴史資料センター黎明館
170	エビテゴ	宮之城町	25.0×23.0×19.8	鹿児島県歴史資料センター黎明館
171	エビカゴ	串木野市	30.0×31.0×23.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
172	カニテゴ	鹿児島市	32.0×24.0×25.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
173	筌	ミャンマー	24.0×28.0×22.5	原野農芸博物館
174	サイトン	ラオス	50.0×／×57.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
175	バンラン	タイ	5.5×141.0×／	原野農芸博物館
176	ウナギカゴ	西之表市	11.0×52.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
177	ウナギテゴ	宮之城町	6.4×77.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(2)　釣り

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
178	置き針	タイ	／×／×71.0	原野農芸博物館
179	ペー	タイ	／×／×31.0	原野農芸博物館
180	ベッ	ラオス	／×88.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
181	ベッチャパー	ラオス	3.9×48.0×2.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
182	ハエナワ	宮之城町	49.4×49.4×5.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
183	ヨツケバイ	松山町	3.0×／×4.9（針部）	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(3)　突き刺し具

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
184	レムタンプラー	タイ	6.0×／×118.0	原野農芸博物館
185	レムイエン	タイ	12.0×／×92.0	原野農芸博物館
186	ヤス	カンボジア	5.6×110.0×／	国立民族学博物館
187	特殊漁具	カンボジア	6.5×145.0×／	国立民族学博物館
188	ウナギカギ	里村	4.5×36.5×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
189	ブーン	ラオス	／×76.5×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
190	トゥアン	ラオス	／×47.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
191	パチンコ	宮之城町	／×65.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(4)　網針

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
192	網針	タイ	1.0×16.7×／	国立民族学博物館
193	網針	カンボジア	1.2×20.0×／	国立民族学博物館
194	チンム	ラオス	3.8×21.0×1.8	鹿児島県歴史資料センター黎明館
195	アグリ	里村	3.7×28.2×0.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
196	網針	上屋久町	3.1×22.2×0.8	鹿児島県歴史資料センター黎明館
197	網針	西之表市	0.9×12.2×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
198	イオゴ	西之表市	4.1×5.7×0.6	鹿児島県歴史資料センター黎明館
199	イオゴ	西之表市	3.9×5.9×1.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(5)　ビク

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
200	魚籠	インドネシア	13.5×21.0×14.2	国立民族学博物館
201	魚籠	中国海南省	30.0×15.9×31.7	国立民族学博物館
202	竹製かご	台湾	9.0×19.9××18.0	国立民族学博物館
203	魚籠	中国湖北省	34.1×18.4×30.0	国立民族学博物館
204	モアン	ラオス	23.5×33.5×35.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
205	モン	ラオス	16.0×24.5×29.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
206	ビク	吉田町	16.0×26.0×30.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
207	ウナギカゴ	鹿児島市	17.0×34.0×31.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
208	ビク	タイ	／×22.0×32.0	原野農芸博物館
209	魚籠	タイ	23.7×22.8×24.4	国立民族学博物館
210	籠	カンボジア	19.5×22.3×28.2	国立民族学博物館

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
211	コーン	ラオス	30.0×30.0×33.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
212	ムアン	ラオス	17.0×21.5×30.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
213	魚籠	台湾	16.8×13.6×23.2	国立民族学博物館
214	ティル	和泊町	19.0×／×26.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
215	アマメカゴ	三島村	27.5×／×30.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

4　運ぶ

(1)　背負い籠

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
216	背負い籠	タイ	／×35.0×62.0	原野農芸博物館
217	テー	ラオス	41.5×44.0×41.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
218	ベム	ラオス	46.0×52.5×52.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
219	テー	ラオス	44.5×46.5×42.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
220	ヤン	ラオス	32.0×33.5×37.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
221	カヤン	ラオス	30.5×34.5×38.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
222	カーカー	ラオス	34.5×43.5×47.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
223	テル	奄美大島	41.0×41.0×48.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
224	カチャ	ラオス	35.0×43.0×45.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
225	カコ	ラオス	27.0×38.0×46.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
226	ペー	タイ	／×48.5×90.0	原野農芸博物館
227	ペー	タイ	／×11.0×36.0	原野農芸博物館
228	ペー	ラオス	40.0×42.5×55.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
229	シタミ	十島村	37.0×37.0×47.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
230	米運搬用背負い籠	ラオス	45.0×／×49.0	国立民族学博物館
231	背負い籠	タイ	44.5×35.0×44.0	原野農芸博物館
232	チュイサー	ラオス	44.5×47.0×44.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
233	金山テゴ	薩摩町	40.5×45.0×42.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
234	ペー	ラオス	35.0×37.0×41.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
235	ヤマカゴ	出水市	47.0×50.0×41.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(2)　カリコ

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
236	背負梯子	台湾	52.2×70.7×66.6	国立民族学博物館
237	カイコ	上屋久町	36.0×41.0×115.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
238	ヂーキ	ラオス	26.0×／×92.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
239	カリコ	中種子町	31.0×／×97.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(3)　天秤棒

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
240	ヤンルー	タイ	4.0×175.0×／	原野農芸博物館
241	カーンハップカー	ラオス	4.8×157.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
242	オコ	大隅町	4.0×174.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
243	ヤマオコ	輝北町	5.0×155.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
244	天秤棒	ラオス	39.5×95.5×／	国立民族学博物館
245	メーカーン	ラオス	4.8×119.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
246	クヤシボコ	住用村	3.5×17.7×4.7	鹿児島県歴史資料センター黎明館
247	サシ	枕崎市	5.5×146.5×3.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
248	ダクデェー	ラオス	4.3×103.5×34.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
249	天秤棒	中国海南省	4.5×114.0×15.0	国立民族学博物館
250	ニノゲ	屋久町	3.5×115.5×2.3	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(4)　カタゲマタ

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
251	柴運搬用具	中国海南省	32.0×107.0×93.0	国立民族学博物館
252	カタゲマタ	市来町	48.0×65.5×146.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(5) 水筒

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
253	オムディーン	ラオス	7.3×94.5×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
254	筒（水汲み用）	台湾	69.6×14.6×16.5	国立民族学博物館
255	スイヅツ	指宿市	11.0×／×62.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
256	タカヅツ	東郷町	12.5×／×48.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
257	水桶	中国貴州省	39.6×34.4×46.6	国立民族学博物館
258	水桶	中国貴州省	40.3×37.4×47.2	国立民族学博物館
259	ミズタンゴ	鶴田町	34.0×／×55.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(6) オモゲ

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
260	ケーンムアー	ラオス	／×／×13.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
261	ケンマー	ラオス	／×／×15.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
262	ケマ	ラオス	／×／×20.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
263	ムウケー	沖縄県与那国島	／×／×33.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
264	ウムゲー	徳之島町	／×／×32.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
265	オモゲ	喜界町	／×／×31.0	喜界町中央公民館
266	オモゲー	十島村	／×／×29.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
267	イタオモテ	栗野町	／×／×34.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
268	イタオモテ	田代町	／×／×20.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
269	ビバ	名瀬市	／×12.2×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館

5 住む

(1) 一本ハシゴ

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
270	ダーイ	ラオス	93.0×／×207.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
271	ハチ	沖縄県与那国島	8.0×／×259.0	与那国民俗資料館
272	クラハシ	与論町	8.0×／×222.5	与論町民俗村
273	高倉のハシゴ	名瀬市	10.0×／×265.0	名瀬市立奄美博物館
274	クラハシゴ	笠利町	11.5×／×256.0	笠利町歴史民俗資料館
275	クラハシゴ	喜界町	10.0×／×216.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(2) 枕

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
276	モーン	ラオス	11.5×25.0×10.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
277	枕	中国内蒙古自治区	37.3×10.8×13.7	国立民族学博物館
278	腰掛け	中国海南省	13.5×27.8×10.0	国立民族学博物館
279	マクラ	与論町	10.0×21.5×10.0	与論町民俗村
280	マクラ	瀬戸内町	10.4×23.0×10.0	瀬戸内町立郷土館

(3) 椅子

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
281	腰掛け	タイ	38.5×／×19.5	国立民族学博物館
282	腰かけ	フィリピン	32.0×24.9×7.9	国立民族学博物館
283	腰掛け	中国海南省	31.2×15.5×13.1	国立民族学博物館

(4) ゴザ

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
284	ござ	ラオス	106.0×145.0×／	国立民族学博物館
285	莫蓙	タイ	89.0×168.0×／	国立民族学博物館
286	花莫蓙	カンボジア	80.5×170.0×／	国立民族学博物館
287	花莫蓙	カンボジア	151.0×196.0×／	国立民族学博物館
288	花ござ	ラオス	114.0×203.0×／	国立民族学博物館
289	花莫蓙	ラオス	77.0×170.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
290	ゴザ	大口市	59.0×60.5×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
291	ござ製作用具	ラオス	14.0×127.0×／	国立民族学博物館

(5)　明かり台

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
292	松明置き台	ラオス	17.5×53.0×31.0	国立民族学博物館
293	ヒゴラケ	大根占町	36.0×34.0×21.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
294	アカシ	串木野市	6.0×24.0×3.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
295	アカシ	佐多町	10.0×38.0×5.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
296	タイマツ	鹿児島市	5.5×46.5×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館

6　食べる

(1)　蒸し器

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
297	もち米蒸し籠	ラオス	24.5×／×29.0	国立民族学博物館
298	チャベロ	川内市	37.0×／×21.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
299	ホーサバン	ラオス	15.0×／×19.0	原野農芸博物館
300	シャコ	ラオス	21.5×／×26.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
301	カヤゴセイロ	三島村	37.0×／×17.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
302	もち米蒸し器	ラオス	26.5×／×28.0	国立民族学博物館
303	ルーチェ	ラオス	26.5×／×43.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
304	カシキオケ	大和村	34.5×／×46.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
305	クシキ	奄美大島	30.0×／×53.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
306	セロ	東串良町	29.0×／×30.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
307	セイロ	上屋久町	29.0×／×21.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
308	セイロ	吹上町	36.0×42.5×66.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
309	ティーヌン	タイ	28.0×／×19.9	アジア民族造形文化研究所
310	セイロウ	南種子町	29.0×／×26.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(2)　焼酎造り

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
311	トムラオ	ラオス	25.4×／×28.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
312	トムラオ	ラオス	37.3×／×37.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
313	カイゴンブルッ	ラオス	24.0×／×31.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
314	ハイ	ラオス	24.3×／×35.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
315	ハイセウラオ	ラオス	25.3×／×41.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
316	チュウーチャウ	ラオス	40.0×／×62.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
317	焼酎蒸溜器	鹿屋市	35.0×／×46.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
318	モトム	ラオス	24.5×／×13.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
319	モーセン	ラオス	25.4×／×13.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
320	モーセントンヤイ	ラオス	48.5×／×22.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
321	ツブロ	串良町	31.5×／×21.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
322	ファムリン	ラオス	14.8×27.9×2.6	鹿児島県歴史資料センター黎明館
323	チィーチャウ	ラオス	22.0×49.5×2.2	鹿児島県歴史資料センター黎明館
324	パファ	ラオス	18.5×25.0×2.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
325	蒸溜皿	住用村	20.5×37.0×3.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
326	コーン	ラオス	3.1×68.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
327	クイラオ	ラオス	2.8×61.5×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
328	五徳	ラオス	18.0×25.0×／	国立民族学博物館
329	五徳	中国貴州省	27.0×28.2×19.7	国立民族学博物館

(3)　臼

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
330	クンジュー	タイ	50.0×／×68.0	原野農芸博物館
331	クンジュー	タイ	40.0×／×62.0	原野農芸博物館

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
332	チェコー	ラオス	40.5×／×38.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
333	ウス	十島村	40.0×／×51.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
334	ウス	里村	45.0×／×63.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
335	木臼	吉田町	46.0×／×55.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
336	木臼と杵	タイ	32.0×49.0×22.5	原野農芸博物館
337	臼	フィリピン	49.8×20.9×15.6	国立民族学博物館
338	タンポスアン	ラオス	17.0×50.0×15.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
339	ブタの餌入れ	フィリピン	23.0×100.0×12.0	国立民族学博物館
340	豚用えさ箱	中国江南省	9.5×126.5×9.5	国立民族学博物館
341	トーネ	伊仙町	30.0×65.0×20.0	伊仙町歴史民俗資料館
342	杵	フィリピン	4.7×97.9×5.7	国立民族学博物館
343	杵	フィリピン	7.0×131.5×7.5	国立民族学博物館
344	杵	中国海南省	7.0×106.0×7.5	国立民族学博物館
345	テギネ	西之表市	10.0×74.0×10.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
346	シマアジーン	与論町	7.0×133.0×7.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
347	コメツッギネ	川内市	13.0×84.0×39.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(4)　小臼

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
348	ホック	ラオス	18.7×26.5×13.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
349	サックヒン	ラオス	6.0×20.5×4.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
350	臼	ネパール	10.1×9.9×12.4	国立民族学博物館
351	杵	ネパール	40.9×6.2×5.5	国立民族学博物館
352	ホック	ラオス	15.5×15.0×18.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
353	サーク	ラオス	4.5×18.0×4.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
354	小型木臼	タイ	13.0×17.0×19.0	原野農芸博物館
355	センデッチャウ	ラオス	16.0×19.5×21.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
356	グランル	ラオス	3.5×29.8×3.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
357	センデッチャウ	ラオス	17.0×22.0×24.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
358	グランル	ラオス	3.0×32.0×3.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
359	小臼	台湾	21.8×20.0×21.2	国立民族学博物館
360	ウスとキネ	知名町	29.2×27.7×19.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
361	ジマメワリウス	伊仙町	22.0×22.0×31.0	伊仙町歴史民俗資料館
362	杵	伊仙町	7.5×50.0×7.5	伊仙町歴史民俗資料館
363	ウシ	瀬戸内町	21.0×21.0×25.0	原野農芸博物館
364	臼	喜界町	26.5×26.5×35.3	喜界町中央公民館
365	すり鉢	タイ	22.2×22.2×16.0	アジア民族造形文化研究所
366	パロン	ミャンマー	16.0×32.0×9.0	原野農芸博物館
367	チョーク	ラオス	12.8×31.0×12.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
368	サ	ラオス	4.0×43.5×4.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
369	チョーク	ラオス	23.0×33.0×23.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
370	サ	ラオス	6.0×59.0×6.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
371	ホロ	タイ	14.2×40.0×13.5	原野農芸博物館
372	鉢	タイ	17.6×15.8×10.8	国立民族学博物館
373	杵	タイ	5.2×19.8×5.1	国立民族学博物館
374	石臼	伊仙町	13.0×26.0×5.0	伊仙町歴史民俗資料館
375	石杵	伊仙町	10.0×25.0×7.5	伊仙町歴史民俗資料館
376	石臼	笠利町	24.5×26.4×14.8	笠利町歴史民俗資料館
377	石杵	笠利町	／×12.5×4.7	笠利町歴史民俗資料館

(5)　笊

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
378	ポーチュ	ラオス	30.0×32.0×8.0	原野農芸博物館
379	ソウケ	十島村	44.0×42.0×7.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
380	ソウケ	十島村	32.0×／×7.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
381	シャーキー	ラオス	43.0×53.0×12.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
382	米洗い用ざる	中国貴州省	47.0×60.9×16.1	国立民族学博物館
383	三角ジョケ	出水市	／×39.0×11.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
384	ケチ	ラオス	36.0×40.0×16.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
385	ブンギイジョケ	串木野市	30.0×40.0×10.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
386	ソバスクイ	タイ	10.0×38.0×6.0	原野農芸博物館
387	塩辛すくい用しゃもじ	ラオス	16.0×52.0×10.0	国立民族学博物館
388	ダゴアゲ	川辺町	11.5×54.5×5.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
389	ソバアゲ	出水市	16.0×56.5×5.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(6)　飯切り台

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
390	ボムヴィーカオ	ラオス	41.0×48.0×5.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
391	ルルムッ	ラオス	55.0×68.5×9.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
392	プムヴィーカオ	ラオス	54.0×76.5×6.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(7)　めしげ

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
393	マエダム	ラオス	5.5×32.2×1.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
394	ソオン	ラオス	6.5×29.0×0.8	鹿児島県歴史資料センター黎明館
395	マイスワンカオ	ラオス	5.5×36.5×10.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
396	粟飯用撹拌棒	台湾	5.2×54.5×／	国立民族学博物館
397	ミシゲ	笠利町	5.4×36.3×0.6	笠利町歴史民俗資料館
398	ミシゲ	笠利町	6.7×28.0×0.6	笠利町歴史民俗資料館
399	味噌しゃもじ	指宿市	16.5×117.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(8)　テーブル

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
400	藤製膳	ラオス	47.8×46.6×18.5	国立民族学博物館
401	藤製腰かけ	ラオス	29.6×27.9×14.0	国立民族学博物館

(9)　キッタテ

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
402	ボクトゥ	ラオス	8.0×／×111.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
403	キイタテ	枕崎市	6.5×6.5×114.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
404	キッタテ	有明町	9.5×／×63.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
405	カマフタカケ	宮之城町	5.0×11.0×76.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(10)　二重口緑壷

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
406	魚醤壷	ラオス	／×／×24.0	アジア民族造形文化研究所
407	オン	ラオス	23.0×／×28.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
408	漬物壷	中国四川省	18.5×／×28.0	アジア民族造形文化研究所
409	砂糖壷	中国山東省	32.5×／×28.5	アジア民族造形文化研究所

7　着る

(1)　紡織

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
410	サネクリ	吉田町	42.5×54.0×30.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
411	綿弓（ばち付）	ラオス	16.0×86.0×2.5	国立民族学博物館
412	マインティファー	ラオス	／×79.0×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
413	綿うち	ラオス	18.7×37.0×2.3	原野農芸博物館
414	ヤアン	ラオス	4.9×／×22.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
415	ヌサークボーン	ラオス	12.0×12.0×18.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
416	ザグイ	宮之城町	13.6×43.3×40.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
417	緒桶	喜入町	24.0×24.0×23.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
418	糸車	ラオス	27.0×52.0×62.0	国立民族学博物館
419	糸車	ラオス	27.0×75.0×50.0	国立民族学博物館
420	糸車	輝北町	59.5×82.0×71.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
421	織機枠組み	タイ	24.0×25.0×71.0	国立民族学博物館
422	糸巻	ラオス	40.9×29.3×2.9	国立民族学博物館
423	糸巻き器	ラオス	31.5×41.0×32.0	国立民族学博物館
424	糸巻き器	ラオス	25.0×25.0×50.0	国立民族学博物館
425	織機	タイ	71.0×100.0×／	国立民族学博物館
426	後帯機	ラオス	102.0×90.0×／	国立民族学博物館
427	織り機	フィリピン	71.5×217.0×／	国立民族学博物館
428	マキトリ	大和村	3.0×50.0×4.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
429	カスワイ	ラオス	4.5×40.0×3.2	鹿児島県歴史資料センター黎明館
430	カスワイ	ラオス	3.2×44.0×2.6	鹿児島県歴史資料センター黎明館
431	ヒ	大和村	4.0×60.0×3.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
432	ヒ	大和村	4.0×60.0×3.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
433	地機のヒ	有明町	4.0×58.5×3.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(2)　絣見本帳

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
434	御絵図黄地ムルドウッチリ	沖縄県	39.4×／×27.4	沖縄県立博物館
435	御絵図黄地ムルドウッチリ	沖縄県	37.5×／×25.4	沖縄県立博物館
436	御絵図黄地ムルドウッチリ	沖縄県	38.7×／×27.2	沖縄県立博物館
437	御絵図栗茶地ムルドウッチリ	沖縄県	39.4×／×27.4	沖縄県立博物館
438	御絵図紺地ムルドウッチリ	沖縄県	37.3×／×28.0	沖縄県立博物館
439	御絵図黄地綾の中	沖縄県	37.8×／×27.8	沖縄県立博物館
440	縮功本扣	新潟県小千谷市	21.0×／×31.0	小千谷織物同業協同組合
441	越後雛形	新潟県小千谷市	20.0×／×29.8	小千谷織物同業協同組合
442	縮雛形	新潟県小千谷市	20.5×／×29.0	小千谷織物同業協同組合
443	長井紬票本（写真）	山形県		やませ蔵

(3)　絣

番号	資　料　名	使　用　地	法　量（w×１×hcm）	所　蔵　先
444	経緯絣胸当	インドネシア	43.0×／×196.0	アジア民族造形文化研究所
445	衣服・男	フィリピン	／×／×71.0	アジア民族造形文化研究所
446	宮廷文絹絵絣	カンボジア	92.5×／×162.5	アジア民族造形文化研究所
447	チェスー	タイ	／×／×152.0	アジア民族造形文化研究所
448	シンミー	ラオス	120.0×／×85.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
449	マツミー	ラオス	340.0×／×70.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
450	苧麻浅地クヂリ格子	沖縄県石垣市	132.8×／×140.5	石垣市立八重山博物館
451	苧麻白地ウシヌヤマ文衣裳	沖縄県石垣市	126.0×／×138.0	石垣市立八重山博物館
452	木綿経緯絣スディナ衣裳	沖縄県石垣市	112.0×／×123.0	石垣市立八重山博物館
453	経縞経緯絣衣裳	沖縄県名護市	117.0×／×118.5	名護博物館
454	木綿地絣地つぎ縫衣裳	沖縄県名護市	104.0×／×102.0	名護博物館
455	絹紺地緯絣衣裳	沖縄県名護市	116.0×／×123.5	名護博物館
456	芭蕉布経緯絣	沖縄県名護市	107.0×／×109.0	名護博物館
457	大島紬着物	金峰町	125.0×／×140.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
458	スミチ	和泊町	112.0×／×123.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
459	大島紬	名瀬市	126.0×／×110.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
460	袴（薩摩絣）	隼人町	50.0×／×117.0	隼人町立歴史民俗資料館
461	カタビラ	十日町市	126.0×／×132.0	十日町市博物館
462	カタビラ	十日町市	126.5×／×141.0	十日町市博物館
463	カタビラ	十日町市	122.0×／×134.0	十日町市博物館
464	奉納幡	十日町市	34.5×／×190.0	十日町市博物館

(4) 花織

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
465	パーフォン	ラオス	72.0×197.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
466	プーア	ラオス	59.0×／×148.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
467	霊船文浮織布	インドネシア	112.0×／×41.0	アジア民族造形文化研究所
468	クッタンヌ	沖縄県与那国島	／×／×／	与那国民俗資料館
469	シダディ	沖縄県与那国島	／×／×／	与那国民俗資料館
470	読谷村花織綿衣	沖縄県読谷村	118.0×／×112.0	読谷村立歴史民俗資料館
471	読谷村花織ウッチャキ	沖縄県読谷村	36.0×／×68.0	読谷村立歴史民俗資料館
472	シュパ	与論町	32.5×181.0×／	徳田泰三
473	テサージ	名瀬市		名瀬市立奄美博物館
474	ハナウキ	笠利町	29.7×60.5×／	笠利町歴史民俗資料館

(5) 民族衣裳

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
475	アカ族の女性の衣裳	ラオス	／×／×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
476	アカ族の女性の衣裳	ラオス	／×／×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
477	ヤオ族の女性の衣裳	ラオス	121.0×／×150.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
478	ランテン族の女性の上着	ラオス	124.0×／×113.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
479	ランテン族の男性の上着	ラオス	138.5×／×58.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
480	ランテン族の男性のズボン	ラオス	43.0×／×95.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(6) 衣裳籠

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
481	籃胎衣服籠	タイ	／×／×95.0	アジア民族造形文化研究所
482	衣服籠	ラオス	33.0×45.5×44.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

8 祈る

(1) 神衣

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
483	モン族のスカート	ラオス	／×81.0×65.0	原野農芸博物館
484	モン族のスカート	ラオス	／×76.0×60.0	原野農芸博物館
485	モン族のスカート	ラオス	／×98.0×61.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
486	アカ族のスカート	ラオス	／×64.0×31.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
487	カカン	宇検村	／×68.4×72.0	宇検村公民館
488	カカン	名瀬市	／×95.0×90.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
489	パドゥ	ラオス	20.0×／×82.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
490	ハブラギン	宇検村	／×128.0×67.0	宇検村公民館
491	ハブラギン（写真）	龍郷町	178.0×／×89.0	益田フクエ

(2) 背守り

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
492	モン族の背縫い	ラオス	14.0×22.5×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館
493	モン族の上着	ラオス	／×132.0×50.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
494	子守り布	ラオス	33.0×／×51.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
495	子守り布	ラオス	94.0×／×73.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
496	トウンロー	ラオス	17.0×／×40.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
497	ワラギン	天城町	57.0×／×57.0	ユイの館
498	ウブギン（男児）上	十島村	30.5×／×34.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
499	ウブギン（男児）下	十島村	54.0×／×45.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
500	ウブギン（女児）上	十島村	33.0×／×33.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
501	ウブギン（女児）下	十島村	62.0×／×43.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
502	ウブギン	十島村	54.0×／×35.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
503	隼人の楯		40.0×／×140.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(3) 耳輪

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
504	ギトゥ	ラオス	2.7×／×4.1	鹿児島県歴史資料センター黎明館
505	ギトゥ	ラオス	2.7×／×4.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
506	クロウ	ラオス	2.5×／×4.2	鹿児島県歴史資料センター黎明館
507	クロウ	ラオス	2.2×／×4.2	鹿児島県歴史資料センター黎明館
508	ニャンセン	ラオス	2.4×／×3.9	鹿児島県歴史資料センター黎明館
509	ニャンセン	ラオス	2.3×／×3.8	鹿児島県歴史資料センター黎明館
510	ニャンセン	ラオス	3.1×／×4.7	鹿児島県歴史資料センター黎明館
511	ニャンセン	ラオス	3.0×／×4.9	鹿児島県歴史資料センター黎明館
512	ノムヒュム	ラオス	1.8×／×2.4	鹿児島県歴史資料センター黎明館
513	ノムヒュム	ラオス	1.9×／×2.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
514	コンジェ	ラオス	5.6×／×5.4	鹿児島県歴史資料センター黎明館
515	コンジェ	ラオス	5.6×／×5.2	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(4) 首輪

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
516	銀製頸輪	ラオス	14.0×／×33.5	国立民族学博物館
517	銀製首飾り	ラオス	／×40.5日／	アジア民族造形文化研究所
518	首飾り	ラオス	／×40.0×／	原野農芸博物館
519	首飾り	ラオス	／×30.2×／	鹿児島県歴史資料センター黎明館

(5) 魔除け具

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
520	儀礼用魔除け具	ラオス	65.0×／×143.0	国立民族学博物館

9 奏でる

(1) 太鼓

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
521	割礼儀礼用太鼓	インドネシア	36.0×／×23.0	国立民族学博物館
522	コーン	タイ	20.0×／×54.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
523	デュー	ラオス	19.0×／×41.0	原野農芸博物館
524	太鼓	タイ	12.5×／×32.0	原野農芸博物館
525	デュー	ラオス	17.0×／×34.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館
526	テーコ	天城町	20.0×／×41.0	天城町ユイの館

(2) 笛

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
527	たて笛	ラオス	2.0×62.0×／	国立民族学博物館
528	横笛	ラオス	2.0×43.0×／	国立民族学博物館
529	笙	タイ	41.0×／×70.5	国立民族学博物館
530	ケーン	ラオス	10.5×／×111.0	国立民族学博物館
531	ケーン	ラオス	64.0×／×95.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
532	ケーン	タイ	28.5×／×33.5	アジア民族造形文化研究所
533	胡芦笙	中国雲南省	23.5×／×49.5	アジア民族造形文化研究所
534	笙	中国貴州省	20.5×／×32.0	アジア民族造形文化研究所

(3) 三味線

番号	資料名	使用地	法量（w×1×hcm）	所蔵先
535	弦楽器	ラオス	12.0×87.0×13.0	国立民族学博物館
536	弦楽器	ラオス	20.0×82.0×15.0	国立民族学博物館
537	三味線	ラオス	11.5×51.3×7.0	原野農芸博物館
538	ソー	ラオス	8.0×72.0×12.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
539	ゴッタン	鹿児島県	18.0×90.0×8.5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
540	三味線	指宿市	10.0×98.0×20.0	鹿児島県歴史資料センター黎明館

参 考 文 献

『定本　柳田國男集　第一巻』　柳田國男　筑摩書房：昭和43年

『定本　柳田國男集　第二十一巻』　柳田國男　筑摩書房：昭和45年

『南九州の民具』　小野重朗　慶友社：昭和44年

『かごしまの民具』　鹿児島民具学会編　慶友社：1991年

『民具の伝承－有形文化の系譜（下）』　小野重朗　慶友社：昭和60年

『奄美民俗文化の研究』　小野重朗　法政大学出版局：1982年

『小野重朗著作集　南日本の民俗文化１　生活と儀礼』　小野重朗　第一書房：1992年

『小野重朗著作集　南日本の民俗文化２　神々と信仰』　小野重朗　第一書房：1992年

『小野重朗著作集　南日本の民俗文化３　生活と民具』　小野重朗　第一書房：1993年

『小野重朗著作集　南日本の民俗文化５　薩隅民俗誌』　小野重朗　第一書房：1994年

『小野重朗著作集　南日本の民俗文化６　南島の祭り』　小野重朗　第一書房：1994年

『南西諸島の民俗Ｉ』　下野敏見　法政大学出版局：1980年

『ヤマト・琉球民俗の比較研究』　下野敏見　法政大学出版局：1989年

『奄美生活誌』　恵原義盛　木耳社：昭和48年

『沖縄の民具』　上江洲均　慶友社：昭和48年

『沖縄の民具と暮らし』　上江洲均　慶友社：昭和57年

『琉球諸島の民具』　上江洲均・神埼宣武・工藤員功　未来社　1983年

『東南アジア大陸部の稲作』　高谷好一

『稲のアジア史　アジア稲作文化の展開－多様と統一－』　小学館：昭和62年

『米琉伝統文様の分析』　山形県工業技術センター置賜試験場：平成７年

「概説　日本の絣」　岡村吉右衛門　『染織の美11』　京都書院：昭和56年

「日本染織紀行第十六回　越後上布」　文・堀内紀子　写真・藤森武

『染織の美25』　京都書院：昭和58年

『沖縄県史研究叢書１　奄美のノロ遺品調査報告書－宇検村内のノロ衣裳・神扇を中心に－』

沖縄県立図書館史料編集室：1996年

『染織の美11　特集　沖縄の織物』　京都書院：昭和57年

『開館20周年記念企画展　読谷山花織展』　読谷村立歴史民俗資料館　平成７年

『名護博物館の染織資料目録』　名護博物館：平成７年

『久米島総合調査報告書』　沖縄県立博物館：1994年

『久米島紬の歴史と技法』　久米島紬事業協同組合：昭和57年

『石垣市立八重山博物館所蔵目録～第二集～　染織Ｉ』　石垣市立八重山博物館：1994年

『八重山上布』　石垣市織物事業協同組合：平成４年

「与那国の織物の歴史」　与那嶺一子　『与那国織』　与那国町伝統織物協同組合：平成３年

『東南アジアの民族造形』　金子量重　茨城県立歴史館：1994年

『染織の美５　特集　インドネシアの絣』　京都書院：昭和55年

『アジアの染織展』　広島県立美術館：1996年

『岡田コレクション　イカット－絣に見るインドネシアの色とかたち－』　吉本忍編　平凡社：1996年

『企画展　弾・吹・打－日本の楽器とその系譜－』　国立歴史民俗博物館：平成４年

『黎明館企画特別展　鹿児島・竹の世界－環シナ海の視座から－』

鹿児島県歴史資料センター黎明館：平成４年

「鹿児島県の農林業」　水流郁郎　『九州の生業１農林業』明玄書房：昭和55年
「東アジアひょうし図譜」 小島摩文 『民具マンスリー』第29巻１号　神奈川大学常民文化研究所：1996年
「カタゲウマ点描」　小島瓔禮　『比較民俗学会報』第10巻６号　比較民俗学会：平成元年
「小正月祭具考－ケズリカケ・ハラメンボーをめぐって－」　川野和昭
『陵雲』第６号　鹿児島県立甲陵高等学校：昭和60年
「門松考－年神依代説への疑問－」　川野和昭　『陵雲』第８号　鹿児島県立甲陵高等学校：昭和62年
「正月儀礼食考（２）－豚骨料理食習俗をめぐって－」　川野和昭
『陵雲』第９号　鹿児島県立甲陵高等学校：昭和63年
「焼米の系譜－稗米・粟米から稲米へ－」　川野和昭
『小野重朗先生傘寿記念論文集　南西日本の歴史と民俗』　第一書房：1990年
「竹と焼畑をめぐる問題」　川野和昭
『黎明館調査研究報告』第９集　鹿児島県歴史資料センター黎明館：1995年

協力機関・関係者一覧

今回の特別展開催及図録作成に際しましては，関係機関や多くの方々に多大なご指導・ご協力をいただきました。ここにご芳名を記し，深謝の意を表します。（敬称略）

国立民族学博物館，㈶原野農芸博物館，アジア民族造形文化研究所，㈶アジア民族造形館，小千谷市教育委員会，小千谷織物同業協同組合，十日町市立博物館，沖縄県立博物館，名護博物館，石垣市立八重山博物館，読谷村歴史民俗資料館，与那国民俗資料館，久米島博物館建設委員会，国東町歴史民俗資料館，熊本市立熊本博物館，隼人町立歴史民俗資料館，名瀬市立奄美博物館，伊仙町歴史民俗資料館，笠利町歴史民俗資料館，瀬戸内町立郷土館，天城町ユイの館，与論町民俗村，喜界町中央公民館，宇検村公民館，鹿児島大学埋蔵文化調査室，徳田泰三，益田フクエ，金子量重，渡辺兼庸，山城勇人，平良美恵子，久野雅照，與那嶺一子，義憲和，四本延宏，茂村真男，元田信有，佐藤博光，竹内俊道，戸田清一，中川喜市，竹田義一郎，川越俊作，金田信子，坂本経昌，原野耕三，山崎久勇，澤田聖名子

黎明館企画特別展

海上の道

―鹿児島の文化の源流をさぐる―

発　行　日　　平成10年２月６日

企画・編集　　鹿児島県歴史資料センター　黎明館

〒890-0853　鹿児島市城山町５－１

☎（099）222－５１００

印　　刷　　渕上印刷株式会社

〒892-0845　鹿児島市樋之口町６－６

☎（099）225－２７２７

開催にあたって

日本民俗学の父といわれる柳田國男は、大正9年末大隅半島の先端の佐多岬に立ち、南に続く薩南の島々を眺めながら「顧みて薩州の山を望むよりは猶親しい」という感慨を漏らし、日本人の先祖が黒潮の流れに乗り、南から続く島々を伝って北上したことを想定しました。柳田は晩年その道筋を「海上の道」と名付け、宝貝を求め、稲種子を携え、稲作の適地を求めて渡ってきたという日本民族の起源論を展開しました。佐多岬に限らず、鹿児島は南方から日本列島への人及び文化の流れを実感できる最適の場所だったのです。

この度の企画特別展は、鹿児島と東南アジアの山岳地帯や黒潮流域の島々に生きる少数民族との基本的な生活道具の比較展示をとおして、鹿児島の民俗文化の基層を「南とつながる文化」として位置付けてみようとする試みです。柳田國男が「やゝ奇矯に失した私の民族起源論」と卑下しながらも、「比較の学問の夜明け」と自負した「海上の道」を、鹿児島から新たなまなざしでご案内いたします。

黎明館企画特別展

海上の道

鹿児島の文化の源流をさぐる

北部ラオス・アカ族の鳥居

平成10年2月6日(金)～3月8日(日)

【休館日2/9・16・23・25・3/2】

鹿児島県歴史資料センター黎明館

展示の概要

展示は、「耕す・採る」、「伐る・捕る」、「漁る」、「運ぶ」、「住む」、「食べる」、「着る」、「祈る」、「奏でる」の9つのテーマで構成されています。展示する資料は、絣や浮織などの布で作った民族衣裳や祭りに用いた民族楽器などをはじめとして、人々が日常的に使用した農具、漁具、食器など身近な生活道具です。東南アジアの少数民族が使用している生活道具と、鹿児島から南西諸島にかけてみられるものとを比較すると、国内のどこのものと比較するよりもはるかに正確な一致を示します。以下、展示資料の中から代表的な資料を紹介します。

穂摘み具

タイやラオスのモン族やヤオ族では、
現在でも弥生時代の石庖丁に似た穂摘み具がみられます。

タイ北部(ヤオ族)

ヴォー(ラオス・モン族)
黎明館蔵

ターブ(ラオス・モン族)
黎明館蔵

テッカオ(ラオス・モン族)
黎明館蔵

デップ(ラオス・ランテン族)
黎明館蔵

タイ北部(ヤオ族)

ウー(ラオス・モン族)
黎明館蔵

ヘラ(鹿児島・十島村)
黎明館蔵

石庖丁(鹿児島・大口市)
個人蔵

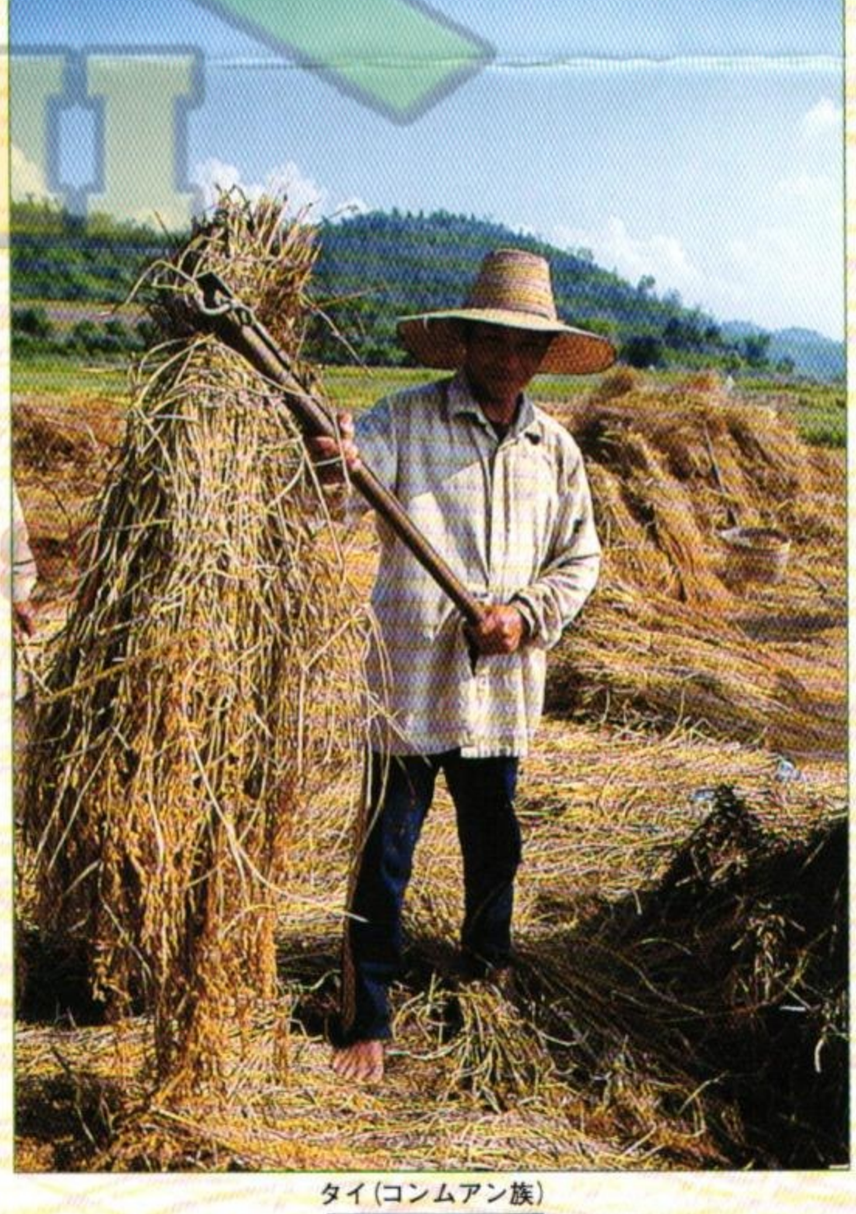
巻棒とタタキダイ

巻棒は、穀物の束を巻き締め、タタキダイは、それを叩き付けて脱穀する道具です。鹿児島のものとタイやラオスのものとは、形態・機能ともに酷似しており密接な系譜関係をもつと思われます。打ち棒やバラ・トオシなども共通しています。

ラオス(タイルー族)

ペンティー カオ(ラオス・ラオロン族)
黎明館蔵

タタキイタ(鹿児島・東郷町)
黎明館蔵


タイ(コンムアン族)
撮影：山崎久勇氏

リヤンカオ(ラオス・タイダム族)
黎明館蔵

マッボ(鹿児島・隼人町)
黎明館蔵

マッボ(鹿児島県)
黎明館蔵

ケッ(ラオス・タイルー族)
黎明館蔵

ケッ(ラオス・カム族)
黎明館蔵

ス(鹿児島・串良町)
黎明館蔵

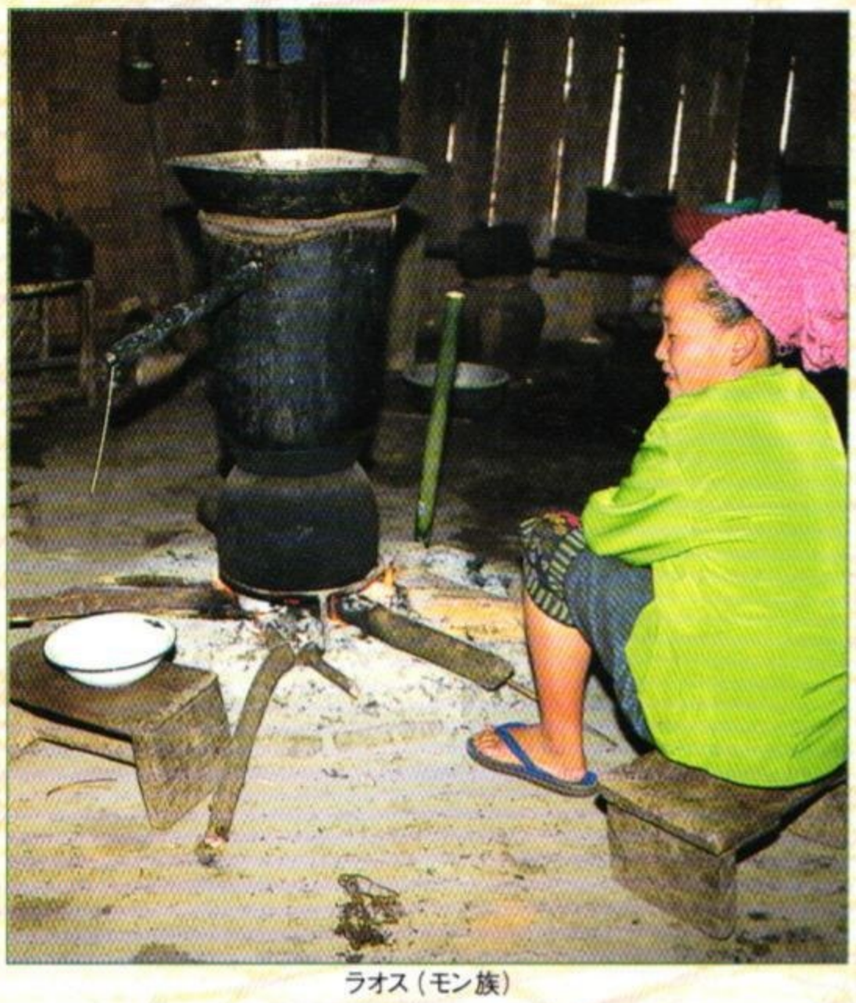
ムギウチダイ(鹿児島・蒲生町)
黎明館蔵

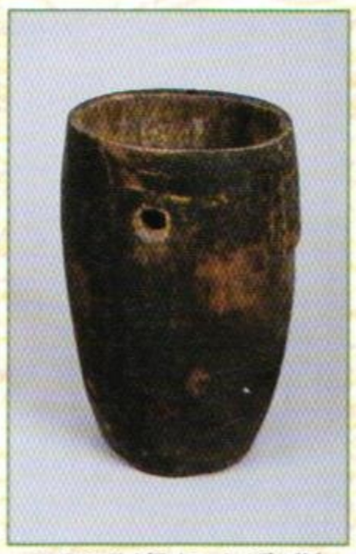
焼酎造り道具

焼酎の道具もラオスと鹿児島は共通するものがあります。モロミには液状と固形のものとがありますが、蒸し器や冷却器などは、類似性が高く系譜関係があると思われます。

籾のモロミ(ラオス・モン族)

火の側の麹(ラオス・タイダム族)


ラオス(モン族)


ハイセンラオ(ラオス・タイデン族)
黎明館蔵

チュウーチャウ(ラオス・モン族)
黎明館蔵

焼酎蒸留器(鹿児島・鹿屋市)
黎明館蔵

トムラオ(ラオス・ラオ族)
黎明館蔵

モトム(ラオス・タイデン族)
黎明館蔵

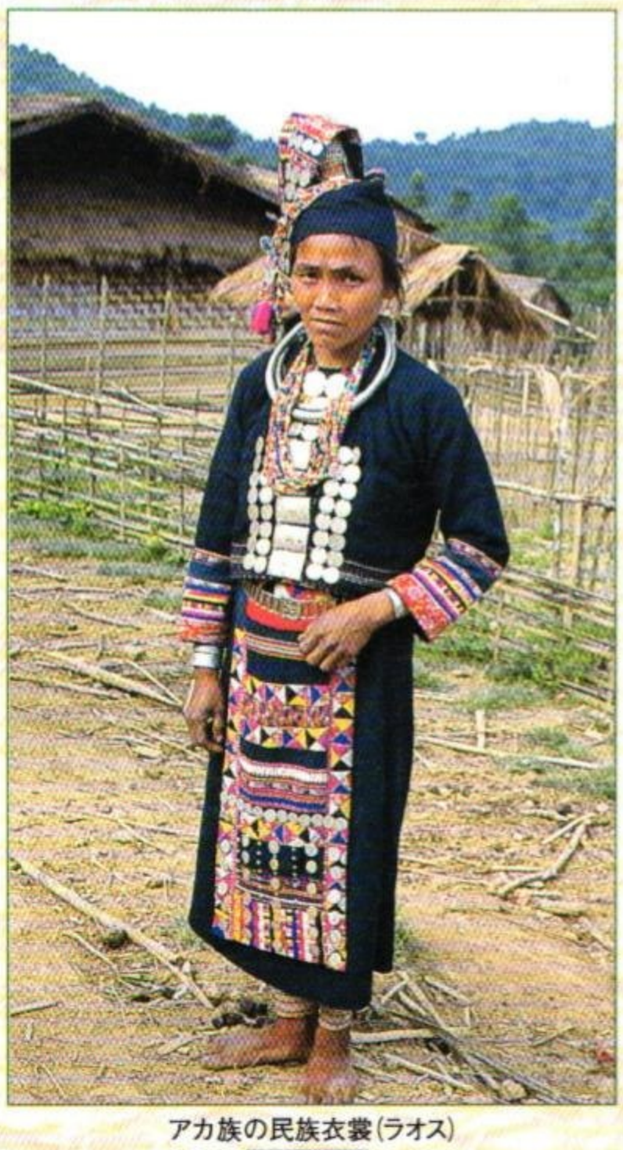
ツブロ(鹿児島・串良町)
黎明館蔵

チィーチャウ(ラオス・モン族)
黎明館蔵

染め物・織物

藍染め・絣・浮織などの染織文化も「つながる文化」です。また、少数民族の民族衣裳には、渦巻紋や鋸歯紋、ハブラ(蝶) 紋など奄美のノロの神衣や子供の産着と共通した文様が見られます。

ハブラギン(鹿児島・宇検村)
宇検村中央公民館蔵


アカ族の民族衣裳(ラオス)
黎明館蔵

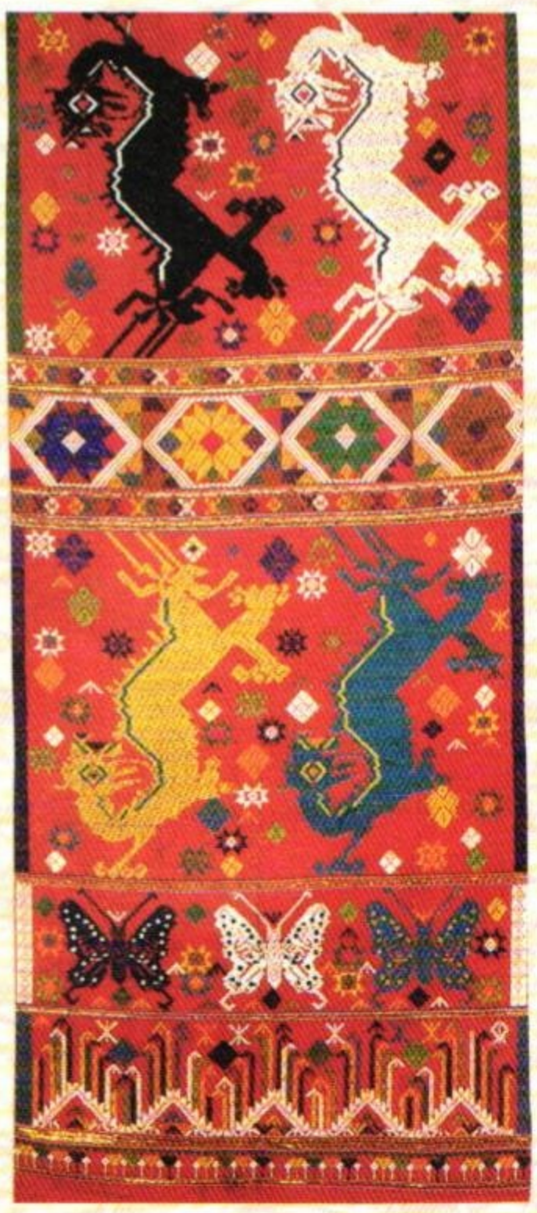
チョー(女性の上着)(ラオス・モン族)
黎明館蔵

背布(ラオス・モン族)
黎明館蔵

部分拡大

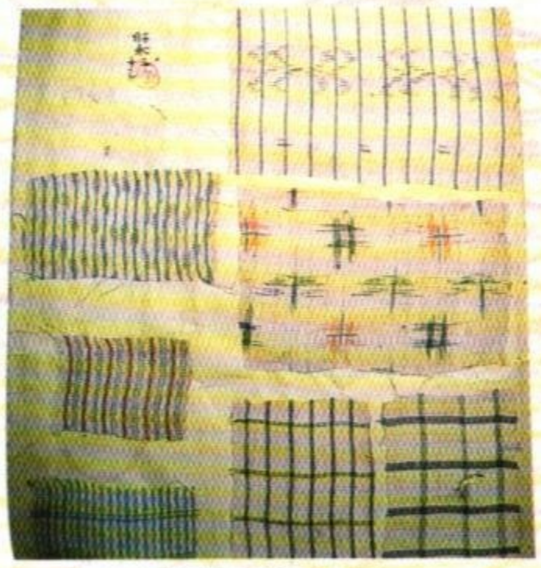
ウブギン(鹿児島・十島村)
黎明館蔵

十五夜踊りのシュバ(浮織)
(鹿児島・与論町)
個人蔵

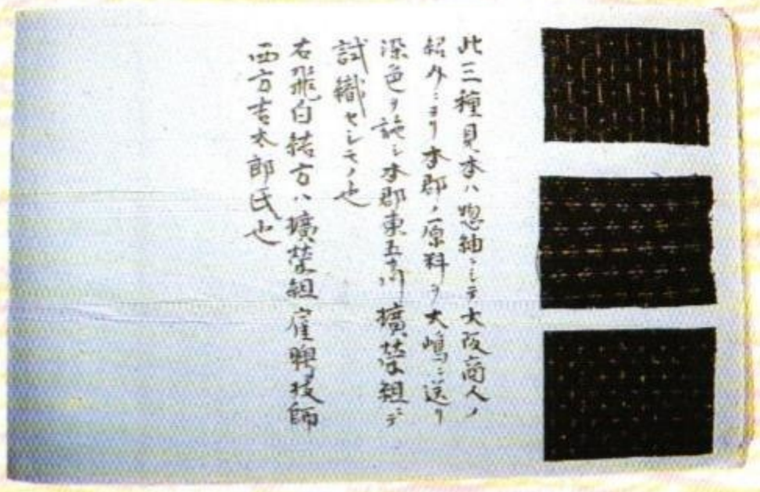

壁飾り(浮織)
(ラオス・タイルー族)
黎明館蔵

絣の見本帳

新潟県小千谷市に残る絣の見本帳は、18世紀後半頃にはすでに琉球の絣と強いつながりを持つ織物が作られていたことを物語っています。また、山形県長井市には奄美大島の泥染めの技術を取り入れようとしたことを記す見本帳があり、絣が南から伝わっていったことを教えてくれます。



「縮功本扣」(1782年)
新潟県・小千谷織物同業協同組合蔵



「長井紬票本」(明治19～23年)
山形県長井市・やませ蔵蔵

首輪・耳輪

東南アジアの少数民族の女性たちは、ほとんどが耳輪や首輪をしています。これらにも渦巻紋、鋸歯紋、格子紋などがみられ、鹿児島から沖縄にかけてみられる魔除けの習俗とのつながりがうかがえます。

ビン(ラオス・ランテン族)
黎明館蔵

銀製頸輪

部分拡大(ラオス・モン族)
国立民族学博物館蔵

太鼓

奄美群島に分布するチヂンという楔(くさび)締めの太鼓は、ヤオ族のデューと一致します。

デュー(ラオス・ランテン族)
黎明館蔵

テーコ(鹿児島・天城町)
天城町ユイの館

記念講演会

- ●日　時……2月21日（土）14：00～15：30
- ●講　師……アジア民族造形文化研究所　金子量重 所長
- ●演　題……「アジアの民族造形文化と日本文化」
- ●会　場……黎明館講堂
- ●入場料……無料

スライドトーク

- ●日　時……2月14日（土）14：00～16：00
- ●講　師……黎明館　川野和昭　学芸専門員
- ●演　題……「ラオスの山岳少数民族の暮らしと南九州」
- ●会　場……黎明館講座室
- ●入場料……無料

展示解説　展示担当の学芸専門員が、毎週日曜日10時と14時の2回展示会場にて展示解説。

観覧料

一　　般	……310円
高校・大学生	……200円
小学・中学生	……100円

※団体(20名以上)は50円引き

●教育課程に基づく学習活動として入館する県内の小・中・高校・盲学校・聾学校又は養護学校の児童・生徒とその引率者については、観覧料免除の制度があります。

鹿児島県歴史資料センター黎明館
〒892-0853 鹿児島市城山町5-1 TEL099-222-5100 FAX099-222-5143